

697-39



1200504581487



上海事件に於ける
福井縣吉田郡出身

戦死者列傳

吉田郡教育會編纂

Kodak Gray Scale

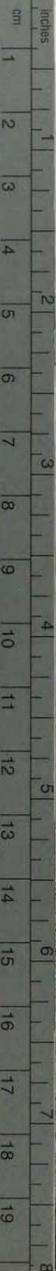
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



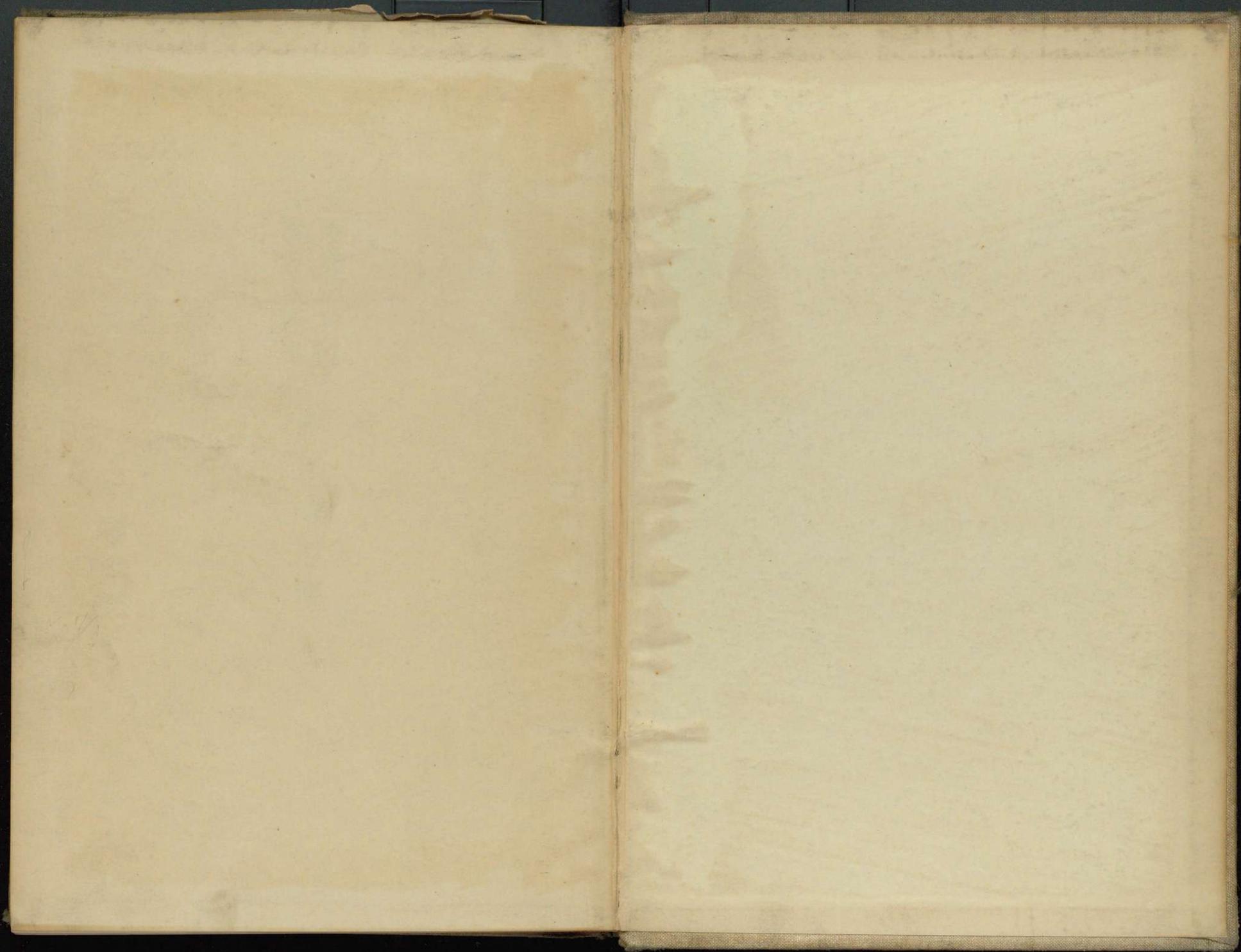
© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



© Kodak, 2007 TM: Kodak



上海事件に於ける 戦死者列傳 正 誤 表

| 頁數 | 行 | 誤 | 正 |
|--------|-------------|---|---|
| 例言 2 | 八行 | | |
| 本文 4 | 六行 | | |
| 本文 9 | 十三行 | | |
| 附圖第三 | 小南翔ノ西(隊標) | | |
| 本文 13 | 十五行 | | |
| 本文 19 | 十六行 | | |
| 附圖第五 | 登家宅東方陣地 | | |
| 同 23 | 十五行 | | |
| 同 25 | 十五行 | | |
| 同 33 | 十行 | | |
| 同 35 | 十一行 | | |
| 同 40 | 十二行 | | |
| 同 48 | 四行 | | |
| 同 48ノ次 | 昭和七年の欄七行 | | |
| 同 51 | 同 八行 | | |
| 同 53 | 大澤大隊攻撃戰經過要圖 | | |
| 同 55 | 一行 | | |
| 同 56 | 一行 | | |
| 同 57 | 一行 | | |
| 同 58 | 七行 | | |
| 同 59 | 十行末 | | |
| 同 61 | 十八行 | | |
| 同 64 | 十六行 | | |
| 同 65 | 三行 | | |
| 同 67 | 一行 | | |
| 同 68 | 大正六年ノ欄二、三行 | | |
| 同 69 | 大正十一年ノ欄四行 | | |
| 同 70 | 大正十三年ノ欄下段二行 | | |
| 同 71 | 昭和七年ノ欄五行 | | |
| 同 72 | 同 同 | | |
| 同 73 | 同 同 | | |
| 同 74 | 同 同 | | |
| 同 75 | 同 同 | | |
| 同 76 | 同 同 | | |
| 同 77 | 同 同 | | |
| 同 78 | 同 同 | | |
| 同 79 | 同 同 | | |
| 同 80 | 同 同 | | |
| 同 81 | 同 同 | | |
| 同 82 | 同 同 | | |
| 同 83 | 同 同 | | |
| 同 84 | 同 同 | | |
| 同 85 | 同 同 | | |
| 同 86 | 同 同 | | |
| 同 87 | 同 同 | | |
| 同 88 | 同 同 | | |
| 同 89 | 同 同 | | |
| 同 90 | 同 同 | | |
| 同 91 | 同 同 | | |
| 同 92 | 同 同 | | |
| 同 93 | 同 同 | | |
| 同 94 | 同 同 | | |
| 同 95 | 同 同 | | |
| 同 96 | 同 同 | | |
| 同 97 | 同 同 | | |
| 同 98 | 同 同 | | |
| 同 99 | 同 同 | | |
| 同 100 | 同 同 | | |
| 同 101 | 同 同 | | |
| 同 102 | 同 同 | | |
| 同 103 | 同 同 | | |
| 同 104 | 同 同 | | |
| 同 105 | 同 同 | | |
| 同 106 | 同 同 | | |
| 同 107 | 同 同 | | |
| 同 108 | 同 同 | | |
| 同 109 | 同 同 | | |
| 同 110 | 同 同 | | |
| 同 111 | 同 同 | | |
| 同 112 | 同 同 | | |
| 同 113 | 同 同 | | |
| 同 114 | 同 同 | | |
| 同 115 | 同 同 | | |
| 同 116 | 同 同 | | |
| 同 117 | 同 同 | | |
| 同 118 | 同 同 | | |
| 同 119 | 同 同 | | |
| 同 120 | 同 同 | | |
| 同 121 | 同 同 | | |
| 同 122 | 同 同 | | |
| 同 123 | 同 同 | | |
| 同 124 | 同 同 | | |
| 同 125 | 同 同 | | |
| 同 126 | 同 同 | | |
| 同 127 | 同 同 | | |
| 同 128 | 同 同 | | |
| 同 129 | 同 同 | | |
| 同 130 | 同 同 | | |
| 同 131 | 同 同 | | |
| 同 132 | 同 同 | | |
| 同 133 | 同 同 | | |
| 同 134 | 同 同 | | |
| 同 135 | 同 同 | | |
| 同 136 | 同 同 | | |
| 同 137 | 同 同 | | |
| 同 138 | 同 同 | | |
| 同 139 | 同 同 | | |
| 同 140 | 同 同 | | |
| 同 141 | 同 同 | | |
| 同 142 | 同 同 | | |
| 同 143 | 同 同 | | |
| 同 144 | 同 同 | | |
| 同 145 | 同 同 | | |
| 同 146 | 同 同 | | |
| 同 147 | 同 同 | | |
| 同 148 | 同 同 | | |
| 同 149 | 同 同 | | |
| 同 150 | 同 同 | | |
| 同 151 | 同 同 | | |
| 同 152 | 同 同 | | |
| 同 153 | 同 同 | | |
| 同 154 | 同 同 | | |
| 同 155 | 同 同 | | |
| 同 156 | 同 同 | | |
| 同 157 | 同 同 | | |
| 同 158 | 同 同 | | |
| 同 159 | 同 同 | | |
| 同 160 | 同 同 | | |
| 同 161 | 同 同 | | |
| 同 162 | 同 同 | | |
| 同 163 | 同 同 | | |
| 同 164 | 同 同 | | |
| 同 165 | 同 同 | | |
| 同 166 | 同 同 | | |
| 同 167 | 同 同 | | |
| 同 168 | 同 同 | | |
| 同 169 | 同 同 | | |
| 同 170 | 同 同 | | |
| 同 171 | 同 同 | | |
| 同 172 | 同 同 | | |
| 同 173 | 同 同 | | |
| 同 174 | 同 同 | | |
| 同 175 | 同 同 | | |
| 同 176 | 同 同 | | |
| 同 177 | 同 同 | | |
| 同 178 | 同 同 | | |
| 同 179 | 同 同 | | |
| 同 180 | 同 同 | | |
| 同 181 | 同 同 | | |
| 同 182 | 同 同 | | |
| 同 183 | 同 同 | | |
| 同 184 | 同 同 | | |
| 同 185 | 同 同 | | |
| 同 186 | 同 同 | | |
| 同 187 | 同 同 | | |
| 同 188 | 同 同 | | |
| 同 189 | 同 同 | | |
| 同 190 | 同 同 | | |
| 同 191 | 同 同 | | |
| 同 192 | 同 同 | | |
| 同 193 | 同 同 | | |
| 同 194 | 同 同 | | |
| 同 195 | 同 同 | | |
| 同 196 | 同 同 | | |
| 同 197 | 同 同 | | |
| 同 198 | 同 同 | | |
| 同 199 | 同 同 | | |
| 同 200 | 同 同 | | |

瀧洲事變忠勇美譚集 本書に載せた 攻撃開始前

宿營、警備、戦闘 入らなかつた 二月二十日 大隊の右第一線 咽バザルハナカッタ。 『君は』ノ二字不要

郭家宅 右ニ同ジ 希望 此の新らしい兵隊さん達 他の人達

と右の記事 縣民一同の 館舎宅 背かざる 最後

功績威大ト碑文ニ刻シアルモ功績偉大ノ誤ナリ 歩兵第三十六聯隊附第十二中隊附同 百七拾五圓 二轉籍 盲管 翌二十九日 全治後再出征 知ることが 小事に離脱せず 拘らず ながらうが 三月二十七日

清左衛門 中々 末尾ニ括弧『』ヲ附スルコト すなはなる 次右衛門 三郎丸 機関銃隊 徒らに 簡潔 碑前ニ 安心したい。と 奮ひ 居ります

末尾ニ括弧『』ヲ附スルコト 末尾ニ括弧『』ヲ附スルコト 末尾ニ括弧『』ヲ附スルコト 末尾ニ括弧『』ヲ附スルコト



上海事件に於ける
福井縣立吉田郡出身

戦死者列傳

吉田郡教育會編纂





是は故歩兵少佐酒井豊志君が上海附近の會戦の前日乃ち二月十九日最愛の
二子に宛てたる遺書！又最後のものは其の封筒の表書きである。

「父ニ會ヒタクバ靖國神社ニ來レ」

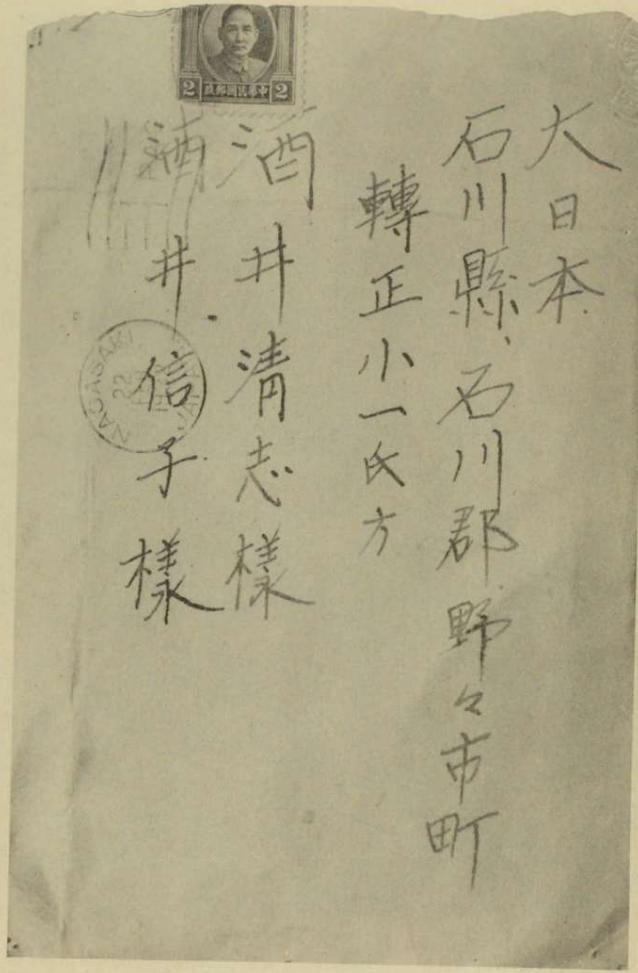
の悲壯なる一語は全國民の胸を打ち、滿天下の士女をして感泣せしめた。



是は故歩兵少佐酒井豊志君が上海附近の會戦の前日乃ち二月十九日最愛の
二子に宛てたる遺書！又最後のものは其の封筒の表書きである。

「父ニ會ヒタクバ 踏國神社ニ來レ」

の悲壯なる一語は全國民の胸を打ち、滿天下の士女をして感泣せしめた。



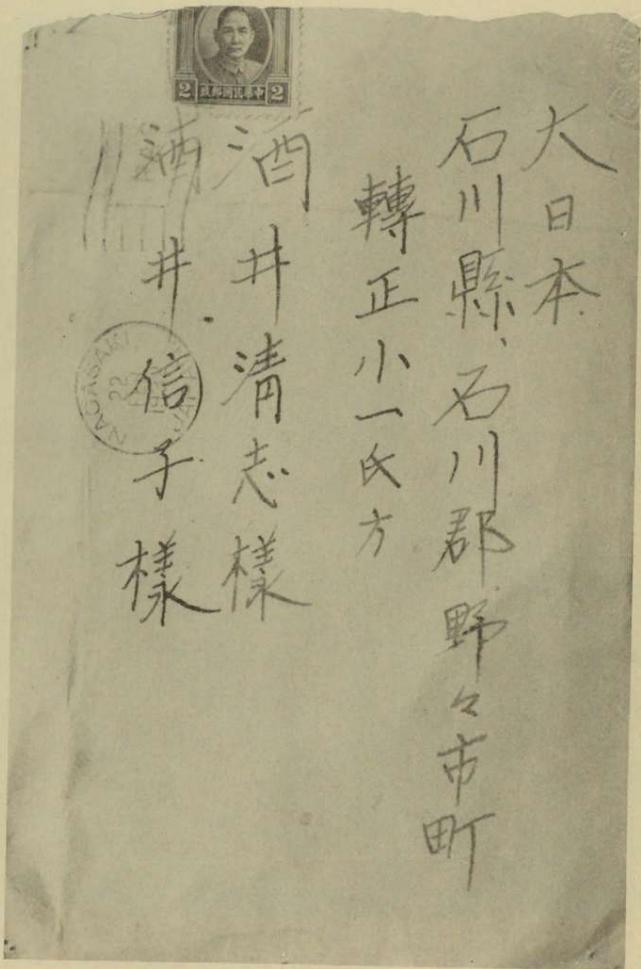
是は歩兵第三十六聯隊將校集會所にある繪畫にして同聯隊に屬して上海に出征した某兵士の描
畫せるもの、一見眞に通り當時の狀況をまのあたりに見る心地せらる、縁側に左の註記あり

安心シロ、仇は屹度、

前面ノ敵陣地ハ午前十時四十分頃ヨリ友軍砲兵ノ射撃ニ因リ稍々動搖ノ微アルヲ認メ第一線
中隊ハ最後ノ彈着ヲ待ツコトナク突撃ニ移リシモ西南六角堂方面ヨリスル敵掩蓋機關銃四坐
ヨリスル側射ハ大暴風雨ノ如ク砂塵濛々トシテ咫尺辨ゼズ

時ニ第十一中隊ハ中隊長代理山田少尉之ヲ指揮シ頑強ニ死守セル團敦ノ敵陣地ノ側背ニ迂回
シ突撃セントスル利那、恰モ一彈來ツテ長谷川智上等兵ノ口中ヲ貫キ頸動脈ヲ切斷ス、爲ニ
鮮血淋漓纏帯ノ術モ無カリシモ尙ホ前進ヲ繼續セントシテ最後ノ努力ヲ爲セリ、戰友之ヲ抱
キ「安心シロ、仇ハキツト」ノ一瞬時（昭和七年三月）

即ち下志比村東古市出身上等兵長谷川智君の戦死當時の光景を描いたものである。



是は歩兵第三十六聯隊將校集會所にある繪畫にして同聯隊に屬して上海に出征した某兵士の描
畫せるもの、一見眞に逼り當時の狀況をまのあたりに見る心地せらる、縁側に左の註記あり

安心シロ、仇は屹度、

前面ノ敵陣地ハ午前十時四十分頃ヨリ友軍砲兵ノ射撃ニ因リ稍々動搖ノ微アルヲ認メ第一線
中隊ハ最後ノ彈着ヲ待ツコトナク突撃ニ移リシモ西南六角堂方面ヨリスル敵掩蓋機關銃四坐
ヨリスル側射ハ大暴風雨ノ如ク砂塵濛々トシテ咫尺辨ゼズ

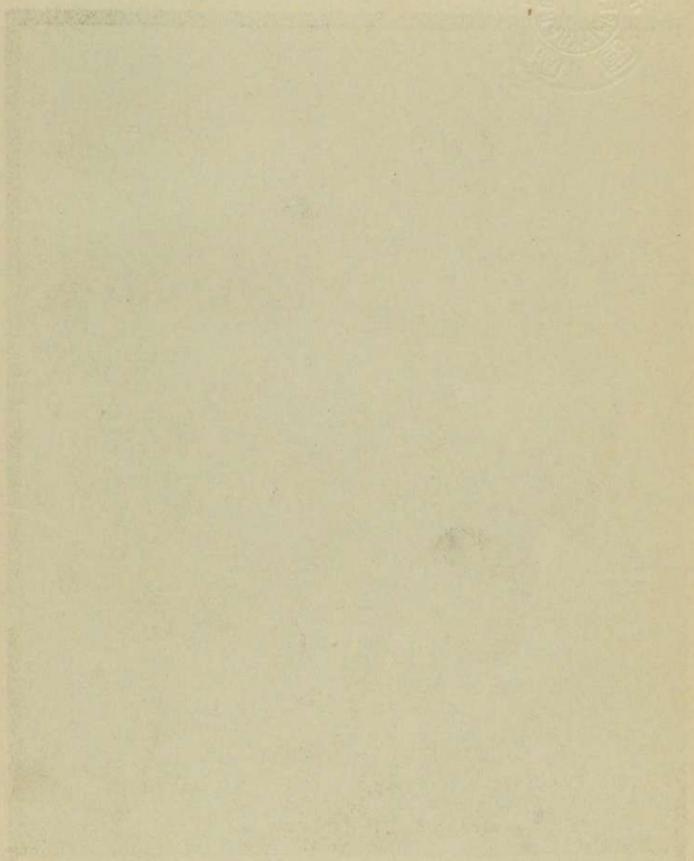
時ニ第十一中隊ハ中隊長代理山田少尉之ヲ指揮シ頑強ニ死守セル團敦ノ敵陣地ノ側背ニ迂回
シ突撃セントスル利那、恰モ一彈來ツテ長谷川智上等兵ノ口中ヲ貫キ頸動脈ヲ切斷ス、爲ニ
鮮血淋漓縋帶ノ術モ無カリシモ尙ホ前進ヲ繼續セントシテ最後ノ努力ヲ爲セリ、戰友之ヲ抱
キ「安心シロ、仇ハキツト」ノ一瞬時（昭和七年三月）

即ち下志比村東古市出身上等兵長谷川智君の戦死當時の光景を描いたものである。

精忠
美善



法日錄



精忠
步一
輝



龍
引
頌



子載
遠芳

昭和十年春
外山



茶志





子載

遺芳

昭和十年春 外山



留成

駿

介題

魂仁

留成

駿

介
題

魂仁

697-39

頁: 51

序

昭和六年東亞ノ風雲ハ黃砂ヲ捲キテ日支漸ク事多ク、仲秋九月滿洲ノ一角戰塵ニ敵ハルルニ至リテ所謂滿洲事變トナル。之ヨリ先支那ノ對日態度ハ甚シク排日毎日ノ非ヲ重ネ、更ニ滿洲事變ヲ契機トシテ抗日ノ非違全ク其ノ極ニ達シ、遂ニ七年一月上海事變ノ勃發ヲ招來セリ。同年二月我が第九師團ハ、動員ノ下令ニ接シテ、勇躍敵地ニ進發シ、皇軍ノ主力トシテ海軍陸戰隊並ニ友軍トノ共同作戰ニ依リ、早春三月疾クモ敵ヲ完膚無キノ状態ニ膺懲シテ其ノ任務ヲ完ウセリ。然リト雖モ上海一帶ノ地、街衢、江灣、溝渠等頗ル多岐複雜ニシテ、軍ノ行動著シク困難ナリシノミナラズ、精銳ヲ以テ誇リシ敵軍ノ主力第十九路軍ノ頑強ナル抵抗ヲ果敢ニ排撃セルノ結果皇軍ノ死傷甚ダ多ク、各地出身者ニシテ名譽ノ戰死ヲ遂グルモノ實ニ枚舉ニ遑ナキノ状態ナリキ。管内吉田郡出身故陸軍歩兵少佐酒井豐志君外將兵多數モ亦齊シク護國ノ神ト化セリ、

翌昭和八年福井ニ於テ陸軍特別大演習ノ舉行セラルルヤ、吉田郡教育會ハ、此盛儀ヲ永久ニ記念スル爲、右戰死者列傳ヲ上梓シテ其ノ忠勇義烈ヲ不朽ニ傳ヘントシ、頃日稿完ク成リ、畏友郡教育會長陸軍歩兵大佐小木津氏親シク余ニ序ヲ求メラル。採録セラルル所大綱ヲ明ニシテ然モ纖細ノ記録ヲ逸セズ、言々句々、威勇士ノ威武ヲ顯揚シ、忠誠ノ全生涯ヲ躍如タラシム。同氏執筆苦心ノ跡歴然タルモノアリト謂フベシ

今ヤ我が國內外非常ノ期ニ際シ軍民相率キテ、皇國ノ興隆、日本精神ノ顯現ニ邁進スベキノ秋、幸

ニ本誌ノ成ルアリ、一讀以テ懦夫ヲ起タシムヘク、再讀以テ戦死者竝ニ遺族ヲ慰ムルニ足ラン。乃チ
燕辭ヲ列ネテ序トナス。

昭和十年三月二十七日

福井縣學務部長 奥田久七郎
福井縣教育會長

例言

一、昭和八年秋施行せらるべき陸軍特別大演習は主として福井縣下に於て行はるゝ旨、同七年十二月御沙汰あり。次で翌八年二月確定發表せらるゝや、歡喜全縣下に滿ち、縣民舉て之が準備に取掛り、萬遺憾無きを期した。

我郡教育會に於ては、此光榮ある大演習を永遠に記念する爲、意義ある事業を致したいと、協議した結果、昭和七年春上海附近の會戰に於て、名譽の戦死を遂げられたる本郡出身者歩兵少佐酒井豊志君以下十名の人々の傳記を編纂することに決定した。時に昭和八年六月であつた。

二、右の決議により、直に資料の蒐集に着手したが、先づ戦死者諸君の出生町村の各小學校長に、左の如く、主として軍隊生活以外の資料蒐集を依頼した。

| | | | |
|----------|---------|-----------|----------|
| 故陸軍歩兵少佐 | 酒井 豊 志君 | 東藤島村上小學校長 | 高山 音 吉君 |
| 故陸軍歩兵曹長 | 秋本 武 夫君 | 森田町第一小學校長 | 牧野 豊 治君 |
| 故陸軍歩兵少尉 | 野中外 吉君 | 森田町第二小學校長 | 毛利佐五右衛門君 |
| 故陸軍歩兵上等兵 | 中島 覺君 | 西藤島村小學校長 | 田島 周 次君 |
| 故陸軍歩兵上等兵 | 小藤外 松君 | 圓山東村小學校長 | 北島 茂 樹君 |
| 故陸軍歩兵軍曹 | 中村 清 治君 | 下志比村小學校長 | 伊吹 一 市君 |
| 故陸軍歩兵上等兵 | 吉村喜代 治君 | 松岡町小學校長 | 荒川 忠 次君 |
| 故陸軍歩兵伍長 | 山下 政 雄君 | | |
| 故陸軍歩兵上等兵 | 長谷川 智君 | | |
| 故陸軍歩兵上等兵 | 水野 利 雄君 | | |

三、右の資料は、昭和八年十、十一月の頃、大概郡教育會に提出せられたが、遅きものは、翌九年三月に至つた。此等の資料は精粗繁簡必ずしも一様ではなかつたけれども、孰も、皆熱心に本事業の爲に力を致されたことは、感謝措く能はざる所である。

一方戦死者各位の軍隊生活に關する經歷、就中戰場に於ける活動並其の功績等に就ては、酒井少佐の分は、富山歩兵第三十五聯隊、其の他の諸君の分は、鯖江歩兵第三十六聯隊より、夫々資料の提供を受け、其の後數次照會して調査を依頼したが、常に懇切周到なる回答を得。特に酒井少佐の遺族よりは幾多の貴重なる資料を提供せられ、本書の編纂に多大の便益を與へられたことは、是又深く感謝する次第である。

尙教育總監部編纂の『滿洲事變忠勇美譚』、陸軍特別大演習總監部發行の『上海戦に輝く皇軍の面目』等も参照した。

又上海派遣軍作戦行動の概要は、其の當時陸軍省新聞班發表のものに據り、歩兵第三十六聯隊行動の概要は、同聯隊より其の資料を與へられた。

四、斯くして得たる資料により、愈々編纂に着手したが、中々簡單には進捗しない。矛盾あり、撞着あり、誤謬も亦少なからず認められたので、戦死者諸君の生年月日、經歷、戦功、家庭並に家族の關係等を、今一應精査するの必要を認め、先づ、各町村の戸籍簿に據り、更に福井聯隊區司令部保管の兵籍、戦時名簿を参照し、遺族並に従軍者に就き必要事項を聴取し、書翰其他の書類を精査し、墓碑の如きも一々現地につき實見し、且戦死者各位の寫眞及墓碑の撮影等を整理接榊し、以て其の完璧を期した。

五、狀況右の如くなるに拘らず、予雜務に累せられて、力を本事業に專にする能はず、従つて其の進捗容易ならず。此間野中外吉君の資料の如きは、いろいろの事情よりして、更に中藤島村小學校長多田藤五郎君に再調を煩はすに至つた。

又同君の墓碑の寫眞は漸く昭和九年九月に至つて遺族より送附を得たが、それが只墓石だけで、何となく物足らぬ感じがしたので、更に宇野印刷所主をして現地に就き撮影せしめた。尙碑陰に刻してある略歴及戦功は、刻記に際し文章を適宜抄略したが爲に、甚だ拙き文章となつてゐる。

六、福井聯隊區司令部保管の兵籍戦時名簿によれば、野中外吉君は『昭和七年二月二十五日負傷』『同月二十九日傷死』となつてゐるが、墓碑には『略歴』の部に『二月二十五日金家墻附近ニ於テ敵彈ヲ爲ニ腹部首貫銃創ヲ負ヒ護國ノ鬼トナル、同日歩兵少尉ニ任ゼラル』とあるも、其の他面には、『昭和七年二月二十九日戦死、陣中院釋常忠』と刻してある。又『上海戦に輝く皇軍の面目』には、二月二十五日負傷、同二十六日傷死のやうになつてゐる。此等相違の原因は、事實二月二十五日戦死したのであるけれども、進級其の他の取扱上二月二十九日傷死と云ふことになつたのであらう。

七、中村清治君の墓碑には、碑陰に經歷及戦功を録することになつてゐたが、昭和九年九月頃、墓碑の寫眞を受領し、更に現地に就き實査すると、未だ刻記されてなかつたから、遺族に面談の上近く刻記されるものとして、之を本書に記載した。

八、碑文並に經歷、戦功等の碑陰に刻せられたるものを見るに、屢々誤字を發見し、又字句の妥當を缺くもの、或ひは事實を誤りて記述せるもの等がある。本書には誤字中單に字畫の誤れるもの、如きは之を正しき字に改めたるも、なほ如何ともしがたきもの及字句の妥當を缺くもの等、例せば、『功績威大』(偉大)『首貫』(首管)『銃創』(銃創)『敵兵遺遺』(遺迷)『遺道』の如きは之を其儘になし置きたり。

又小藤外松君の碑文に、同君が千葉教導學校に派遣せられたるが如き記事あるも、右は千葉陸軍歩兵學校教導隊に派遣せられたるを誤つて記述せるものにして、事實を誤記せるものゝ一例である。

なほ此場合一寸附け加へて置きたいのは、上海事變後間もなく編纂せられたる『滿洲上海事變忠勇美譚』は、人によ

り精粗甚しく且誤謬も少くない。例せば、吉村喜代治君の傳記の如きは、出身地、戦死年月日及場所を示してあるのみで、僅に二行に足らざる簡單なものであり、又中島覺君を中島春吉の長男とし、秋本武夫君を秋本清松の長男と記してあるが如き、ほんの一例に過ぎぬが共に誤りである。其の他の誤謬杜撰に至つては推して知るべしである。之は匆卒の際に於ける事業であるが故に勢斯くの如くなつたこと、思はれるが、併し誠に遺憾の次第である。

九、酒井少佐の寫眞は遺族より早く送附を受けたのであつたが、取扱上あまりに破損したので、上中小學校にあるものを別に複寫して書に載せた。

又同君が昭和七年二月十九日即ち戦闘開始の前日、最愛の二子に宛てたる遺訓は、言々切々、句々熱涙、忠愛の念に充ち、正氣凜然炳焉として乾坤を照らし、實に涙なくして讀む能はざる國民的の一大教訓である。本書の編纂に方り遺族より特に其の寫眞版を贈られたるを以て、之を卷首に載せることにした。

十、上海附近の會戦後、歩兵第三十六聯隊が同地附近に守備駐屯中、某兵士が長谷川上等兵戦死利那の光景を描きたる繪畫が、今同聯隊將校集會所に保管されてある。それが如何にも善く出来てゐるので、同聯隊に請ふて之を寫眞版となし、卷首に掲げることとした。

十一、本書は以上述ぶる如き經過を以て編纂され、事實の正確と、文章の平易にして讀み易きとを主とし、本年春に至り漸く完成した。之に對し陸軍大臣林銑十郎閣下、第九師團長外山豊造閣下、福井縣知事近藤駿介閣下は、特に題字を賜はり、福井縣學務部長奥田久七郎殿は序文を寄せられ、本書に一段の光彩を添ゆるに至つたことは、本會の頗る光榮とし、感謝措く能はざる所である。

昭和十年六月二十七日藤井部隊渡滿出發の日

吉田郡教育會長 小木 津識

上海事件に於ける 福井縣吉田郡出身 戦死者列傳

寫眞版

故酒井少佐の二子に與へたる遺書

故長谷川上等兵戦死利那の光景(繪畫)

題字

陸軍大臣 林銑十郎閣下

第九師團長 外山豊造閣下

福井縣知事 近藤駿介閣下

序文

福井縣學務部長 奥田久七郎殿

例言

目次

緒言

第一章 上海派遣軍作戦行動の概要……………三

第二章 上海出征歩兵第三十六聯隊行動の概要

第三章 戦死者列傳

其一 故陸軍歩兵少佐正六位勳四等功四級 酒井豊志君……………一七

其二 故陸軍歩兵少尉正八位勳六等功七級 野中外吉君……………一四

其三 故陸軍歩兵曹長勳七等功七級 秋本武夫君……………一六

其四 故陸軍歩兵軍曹勳七等功七級 中村清治君……………一八

其五 故陸軍歩兵伍長勳七等功七級 山下政雄君……………一九

其六 故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 吉村喜代治君……………二一

其七 故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中島 覺君……………二七

其八 故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 長谷川智君……………二四

其九 故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 小藤外松君……………一五

其十 故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 水野利雄君……………一六

遺族概要……………一八一

緒言

昭和六年九月十八日滿洲に於ける支那正規兵が、奉天北方柳樹溝附近に於て、我が南滿鐵道線路の爆破を敢てしたことが契機となり、滿洲事變は勃發した。之に於てか支那各地、殊に上海地方に於ける排日運動は益々熾盛となり、遂に上海事件を惹起するに至つた。

抑支那の排外思想は近年に至り始めて起つたものではなく、昔から外國人を賤視した東夷西戎南蠻北狄流の思想であつて彼の辛亥革命後特に濃厚になつた、即ち孫文が日清戰爭當時布哇に「興中會」なる秘密結社を起した際、「我が中國は阿片戰爭以來外國の壓迫を蒙つてゐる、此壓迫から免れるには對外的に無力な滿洲朝廷を倒さねばならぬ」と、倒滿排外といふ指導原理を採用して以來、更に面目を一新して來たのである。而して此排外の最終目的は外國と對等の地位にまで支那を昂揚し、大に支那が世界に覇權を振はんとする、所謂中華的思想が基調をなしてゐるのであるから、辛亥革命に依りて國權興復の第一目的を達成した後には、彼等の政策は單に排外に局限せられる譯で、其の後は一意此目的に向て邁進して來たのである。そうして支那の排外の目標は歐洲大戰後露獨の勢力が一掃せられてからは、支那と交渉最も深き日英に選定せられたが、排英成功後は其の銳鋒は専ら日本に指向せらるゝに至つた。

其對日本政策は排日から侮日、抗日、挑戰行爲と進展し、感情的から理智的に、非組織的から組織的に、局地的から全國的の運動となり、國民黨の指導によりて國家的の背景を持つものとなつた。此等排日行爲に對し、我國はなるべく事態をあら立てることを避けて、隱忍以て事を處し、時には讓歩をさへも敢てしたのであつたが、由來支那人は強剛なるものには羊の如く従順に、弱者に對しては暴君の如く強き國民性を有してゐる。之に加ふるにワントン、ロンドン兩會議に於ける我國の妥協退讓の態度は、益、支那を増長せしめ、戰爭によらざる國策遂行の一手段として、積極的攻

勢に出で来り、私の譲歩は徒らに彼の侮蔑を招きしのみにて、何等の効果なく、排日は終熄するどころか益々擴大激化するばかりであつた。

元來中支、南支方面は排日運動の根源地であつたが、滿洲事變勃發するや、各地の排日運動は愈々熾烈を加へ、國民黨々指導の下に「抗日救國會」の統制ある運動實施せられ、邦人に對する暴行は日を逐ふて盛となり、「救國會」は日本商品の賣買、運輸禁止は勿論、既存契約の破棄其他日本人との各種取引の禁止、雇傭關係の禁止等、文字通りの對日經濟絶交を決定し、且検査、抑留、脅迫、暴行等種々の手段を以て之を強制し、肯ぜざる者に對しては制裁を科するのみならず、甚しきは死刑に處すべきを決議する等、在留邦人の居住營業の自由は固より、生活權の一切を封ぜんとする非人道的な、武力によらざる戰爭行爲、即ち國交斷絶と異ならざる事態を誘致したのである。即ち重慶、鄭州、成都、杭州等の帝國領事館等は何れも安全に事務を執行し得ざる爲、遂に居留民と共に引揚を決行するの外なき情勢となつたのみでなく、上海、漢口、天津、廣東、香港等南北支の重要都市に於ても暴虐なる支那民衆が邦人の生命財産に對し頻々として危害を加ふるに至つた。

そこで帝國政府は再三支那中央及地方官憲に對し、排日運動取締に關する要求を繰返したが、國民政府は此要求に應ずるの誠意なく、却て支那官民の不法行爲を以て愛國心の發露として、寧ろ之を獎勵するが如き態度であつたので、排日運動は愈々深刻となり廣東、青島、福州等に於ける邦人殺害事件、帝國官吏侮辱事件、各地新聞の不敬記事々件續續發した。就中上海に於ては抗日會を始め排日團體の跳梁甚しく、昭和七年一月十八日日蓮宗僧侶傷害致死事件は在留邦人を極度に憤激せしめ、我が陸軍隊に對する支那軍の挑戰的攻勢は遂に上海事件を惹起し、陸軍の出動を見るに至つた。

第一章 上海派遣軍作戰行動の概要

一、上海へ陸軍の派遣

上海事件發生以來我が海軍陸軍隊は、在留邦人約三萬の生命財産の保護に専念し、約十數倍の支那軍と相對峙して、連日連夜不眠不休の奮戰苦闘を續けて來たが、上海の事態は刻一刻と危殆に瀕し、我が居留民は極度の不安に驅らるゝに至つた。然るに海軍兵力の陸上派遣には自ら一定の限度あるを以て、二月初頭遂に廟議一決し、允裁を経て、陸軍を上海に派遣し居留民保護の萬全を期し、併せて租界防備に關する國際義務を全ふせしむることとなつた。

於茲第九師團を主體とする部隊を派遣すると共に、現下の急迫せる情況に應ぜしめんが爲、別に第十二師團より混成約一旅團の兵力を上海に急派せられた。右混成旅團（第九師團長上陸迄第三艦隊司令長官の指揮を受けしめらる）は、二月六日午前十一時第二艦隊の艦艇に搭乘して佐世保を出發し、七日午後吳淞鎮南方約三軒に上陸を開始し、午後五時三十分頃より其第一線を以て吳淞鎮南側に進出し、溝渠を隔て、吳淞砲臺守備部隊に對せしめ、主力を逐次停車場附近に集結して諸偵察を行つたが、用兵の原則上、暫く之が攻撃を控へ、單に監視に止むることとなつた。

第九師團は九日より宇品港に於て乗船し、其の第一梯團は十三日夕、掩護艦隊の制壓射撃の下に、吳淞砲臺前を通過し一部を以て吳淞鎮南方鐵道棧橋に、主力を以て上海埠頭に到着して碇泊した。

第九師團長は上海埠頭に碇泊するや、直に左の聲明を發した。

予は上海地方に在留する帝國臣民を保護すべき任務を帯び本日到着せり。我が海軍陸軍隊に對する支那軍の挑戰に依り、上海租界は忽ち不安恐怖の巷と化し、帝國在留民の窮狀眞に痛心に堪へざるものあり、本職は師團の任務に鑑み海軍と協力し、速に我が在留民を此窮地より救出せん事を期す。

之が爲には無益の交戰を避け、平和的に其の目的を達成せん事に努むべしと雖、苟も師團の任務遂行を妨害するこ

とあらば、斷乎たる處置を取るに躊躇せざるべし。關係列國とは専ら協調を旨とし、租界の不安を除去する事に努力すべし。又我が師團の任務遂行を妨害せざる支那一般の民衆に對しては眞に同情に堪へざるものあり。我が師團は飽く迄彼等の平和的生活を尊重すべし。

右聲明す。

第九師團は十四日午前七時より第一梯團の上陸を開始し、其の一部を以て江灣鎮東方約六軒の支那部落に、主力を以て楊樹浦（租界東部）日本諸工場に兵力を集結し、又十五日より其の一部を以て海軍陸戰隊と交代し、北四川路方面の守備に任じ、第二梯團は十六日朝上海埠頭に到着し同日中に上陸を終了した。

かくて第九師團は十六日迄に上海集中を完了したが、同地の特種事情に鑑み、勉めて事態を平和的に解決せんとし、十八日より支那側と數次の交渉を重ねたが無効であつた。第十九路軍を基幹とする約五師の支那軍は、二十日午前七時を期して回答すべき、公正妥當なる我が要求をも一蹴し、對敵行爲を示せる爲、茲に戰端は開かれた。

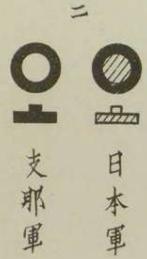
二、上海附近の地形及敵情の概要

(イ) 地形、上海附近は揚子江の吐出せる砂質粘土より成る平原であつて、江南運河、吳淞江及黃浦江並大小各湖水間を連絡する溝渠の縱横に通ずる運河地帯である。従て水運の便は頗る大であるが、陸上の交通路至つて少く、殊に遠距離を連絡する交通路の如きは、主水路に沿ふ曳船道を除く外、絶無である。又支水路には辛うじて家畜を通ずる程度の橋梁があるのみで、此等水路は徒歩兵と雖、徒渉不可能である。従て軍隊の行動は多大の制肘を受け、戰鬪の進捗亦迅速を期し難い。

次に上海附近の都市は煉瓦より成る城壁を有し、攀登不可能なると共に野砲彈に對する抵抗力甚大である。又村落は殆ど圍壁を有して居ないが、往々水濠を廻らして居るものがある、一般に村落全部を圍繞する防禦物はないが、村落内に

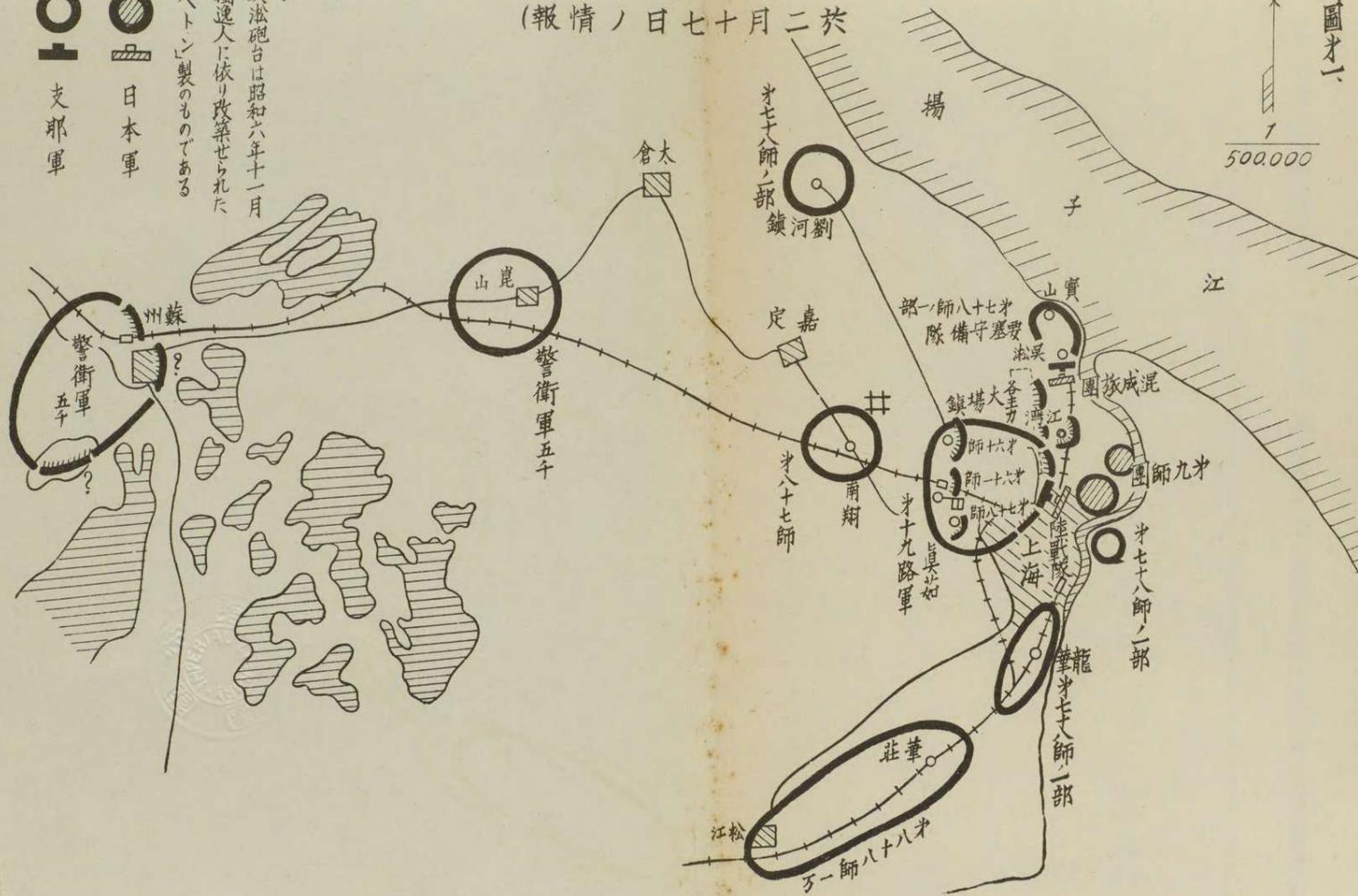
上海附近敵情要圖

(報情) 日七十月二於

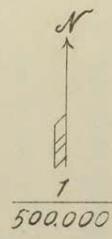


支那軍
日本軍

註
一 兵滋砲台は昭和六年十一月
獨逸人に依り改築せられた
「ベトナム」製のものである



附圖才一



(イ) 地形、上海附近は揚子江の吐出せる砂質粘土より成る平原であつて、江南運河、吳淞江及黃浦江並大小各湖水間を連絡する溝渠の縦横に通ずる運河地帯である。従て水運の便は頗る大であるが、陸上の交通路至つて少く、殊に遠距離を連絡する交通路の如きは、主水路に沿ふ曳船道を除く外、絶無である。又支水路には幸うじて家畜を通ずる程度の橋梁があるのみで、此等水路は徒歩兵と雖、徒渉不可能である。従て軍隊の行動は多大の制肘を受け、戦闘の進捗亦迅速を期し難い。

次に上海附近の都市は煉瓦より成る城壁を有し、攀登不可能なると共に野砲彈に對する抵抗力甚大である。又村落は殆ど圍壁を有して居ないが、往々水濠を廻らして居るものがある、一般に村落全部を圍繞する防禦物はなないが、村落内に

在りては同族（數家族）相集團して圍壁を設け自衛の手段を講じて居るものがあるので、防者に對し大なる抵抗力を附與する特徴がある。

(ロ) 敵情、第九師團上陸當時前面に在つた支那軍は、第十九路軍にして蔡廷楷之を指揮し、其の兵力は大體次の如くであつた。

| 區分 | 第六十師 | 第六十一師 | 第七十八師 | 計 |
|-----|--------|--------|--------|--------|
| 兵數 | 一一、〇〇〇 | 一一、五〇〇 | 一〇、〇〇〇 | 三三、五〇〇 |
| 銃數 | 九、〇〇〇 | 一〇、五〇〇 | 八、〇〇〇 | 二七、五〇〇 |
| 機關銃 | 二四 | 二八 | 二〇 | 七二 |
| 山砲 | 八 | 一〇 | 六 | 二四 |
| 追擊砲 | 一〇 | 二〇 | 一〇 | 四〇 |

備考 一、各師は六團（團は我が聯隊に相當す）より成る。

尙當時は南京及杭州に在りし警衛軍の大部は未だ松江、南翔及崑山其の以西に在るもの、如くであつた。其配備の概要は附圖第一の通りである。

而して戰鬪の結果知り得たる敵陣地の状況は左の通りである。

上海附近敵陣地は二月十二日以前より構築を開始せられ、當初より江灣鎮、廟巷鎮は第一線陣地として計畫せられたもの、如くで、江灣鎮及其の北方敵陣地は各村落を據點として、堅固なる機關銃座を以て有効に側防せられた堅固なる野戰陣地であつて、其の状況を細述すれば左の如くである。

- 1、散兵壕、横溝を有する立射散兵壕又は掘壕散兵壕にして強度は一樣でないが、一般に壕幅狭く深さ大なるもの多く、時として木板、戸板又は鐵板を以て、輕易なる掩蓋を造つたものがあつた。
- 2、機關銃掩體、機關銃を置く所で防護の設備をしたるもの、一般に掩蓋機關銃座にして、掩蓋は薄き鐵板、煉瓦を以て相當堅固に構築せられ、又所在の土饅頭（支那人墓地）或はベトン製又は煉瓦製家屋を利用し、銃眼を設けたるものも少くなかつた。
- 3、外壕（陣地前に設けたる障礙物たる壕）、一般に自然水濠を外濠に利用してあるが、陣地の支撐點には時として上幅四米深さ二米程度の外壕を特設せるものがあつた。
- 4、障礙物、各據點には輕易なる鐵條網を構築し、樹木、家屋の柱等を利用し、之を有刺鐵線を以て網狀に連結したる深さ四米内外のもの最も多く、移動性のものもあり（隨時狀況に應じて持ち運び適當の處に据附けるもの）又時として鹿砦をも利用してゐた。
- 5、掩蔽部（陣地内に砲彈に對し掩護する如き設備をしたるもの）、指揮官用として輕易なる掩蔽部を構築してあつた外特別なものはなかつた。

三、第一次總攻撃

二月二十日朝、第九師團は吳淞支隊（歩兵二中隊基幹）をして海軍と協力して、吳淞の敵に對し、師團の右側を掩護せしめ、海軍陸戰隊は左翼隊とし、現陣地に在りて當面の敵を監視せしめ、師團主力は、混成第二十四旅團を以て最右翼に、歩兵第六旅團を右翼隊に、歩兵第十八旅團主力を中央隊とし、廟巷鎮東方及江灣鎮附近の敵陣地を攻撃し、夕刻混成旅團を以て金馮宅、天主堂の線に、師團主力を以て白楊村西南端廟家宅、江灣鎮東端方濱の線に進出した。

この夜師團は、中央隊の主力を、右翼隊と混成旅團との中間白楊村、孫家宅の線に轉用し、改めて右翼隊とし、舊右翼隊の一部を中央隊となし、二十一日拂曉と共に重點を、江灣北側地區に保持して攻撃を再興し、逐次敵を壓迫したが、江灣鎮の市街の敵は、堅固なる家屋を利用し頑強に抗戦し、戰鬪の進捗容易でなかつた、所謂空閑大隊の苦戦はこの日からのことである。

二月二十二日、混成第二十四旅團は、拂曉東部廟巷鎮の敵陣地を夜襲し之を奪取した。所謂三十六勇士の出現はこの時であつて、肉彈三勇士として諺はれた、作江、北川、江下の三伍長は、師團長より感状を授與された。

右翼隊は夕刻迄に吳家宅、普西の線に進出したが、左翼隊は、前後郭家宅の敵陣地に近迫して夜に入つた。

この夜混成旅團右側背及閘北方面に於ては、優勢なる敵が逆襲して來たが、悉く之を撃退した。
廟巷鎮附近の戰鬪の結果、蔣介石の直系たる警衛軍第八十八師が、第一線に進出しあるを知つたが、これが上海派遣軍を新に編成せんとする有力なる動因となつた。

四、第二次總攻撃

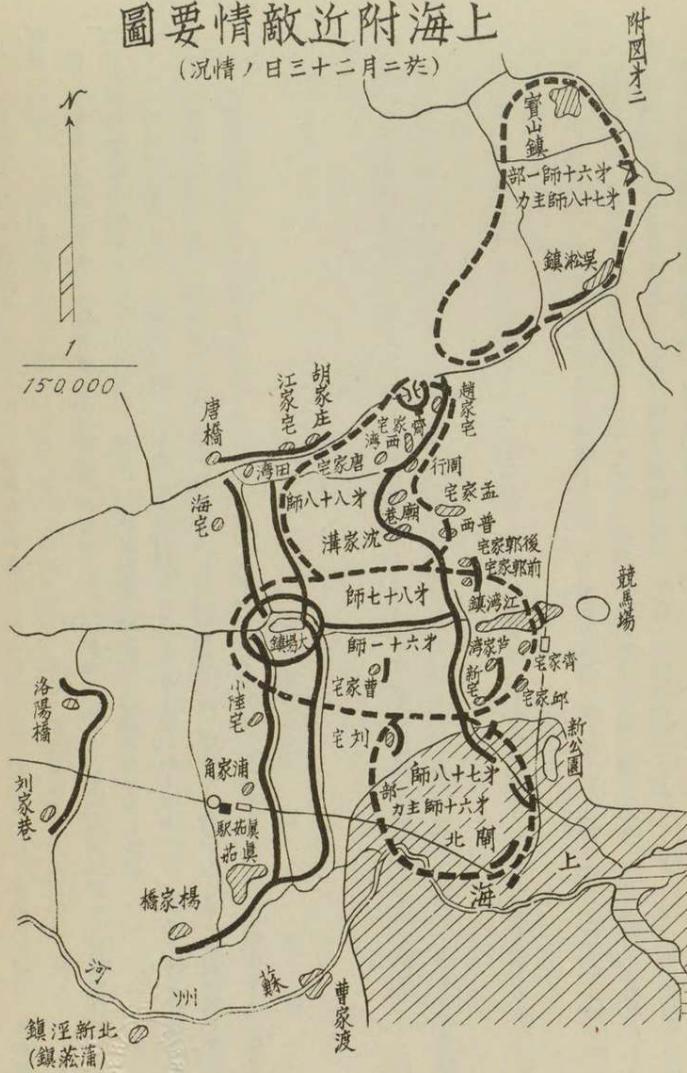
二十三、四の兩日は、師團は當面の敵に對し第二次の總攻撃を準備しつゝ過し、二十五日には混成旅團は現狀を維持せしめ、師團主力は當面の敵陣地に對し、陸、海兩軍飛行機の爆撃及砲撃を行つた後前進を起した。敵は西方に向ひ退却し、我第一線部隊は、先づ金家壩西北方陣地及金家壩陣地を、又日沒迄には、前後郭家宅陣地を確實に占領し、夜間局部的小夜襲をも悉く撃退した。正面の敵は、第六十一師で甚大なる損害を受けた。

二月二十六日、前日の戦果を擴張すべく師團豫備隊を左翼隊に増加し、江灣鎮西北方嚴家厝の陣地を占領するや、江灣鎮内部及其の南方一帯の敵は、逐次西方に退却した。

二月二十七日午後二時、左翼隊の一部は、江灣鎮西端を確實に占領した。茲に於て、廟巷鎮、江灣鎮、閘北を連ぬる線に、堅固に構築された敵の第一線陣地は、完全に占領して了つたわけで、師團は兩後、大場鎮を中心とする、敵第二

上海附近敵情要圖

(廿二月三十日ノ情況)



上海派遣軍を指揮し、帝國海軍と協力し、上海附近に在留する帝國臣民を保護せんが爲、本日茲に到着せり。

聲明

軍司令官は三月一日午後一時上海に上陸し、直に左の如き聲明を發した。
 夏馬灘（江灣鎮西南方約二軒）附近に亘る線に進出する如く攻撃せしめ、新に到着したる第十一師團主力をして、三月一日早朝より劉河鎮西北方揚子江本流沿岸に上陸し、且成るべく速に劉河鎮を占據して、大場、眞茹方面に對する攻撃を準備する如く部署した。

六、第三次總攻撃

軍司令官は、二月二十七日所要の幕僚と共に内地港灣を出發し、二月二十九日揚子江口に到着して、軍の揚陸に關し陸海軍の協定を遂げた。軍司令官は諸般の狀況に鑑み、迅速なる攻撃實行を必要なりとし、三月一日を期し總攻撃を再興するに決し、第九師團をして、其準備せる所に從ひ、廟巷鎮西方張家橋附近より、大行橋（江灣鎮西方約二軒）を経て、夏馬灘（江灣鎮西南方約二軒）附近に亘る線に進出する如く攻撃せしめ、新に到着したる第十一師團主力をして、三月一日早朝より劉河鎮西北方揚子江本流沿岸に上陸し、且成るべく速に劉河鎮を占據して、大場、眞茹方面に對する攻撃を準備する如く部署した。

五、上海派遣軍の編成派遣

線陣地に對し、攻撃を準備することになった。

惟ふに帝國は曩に平和的手段を以て事を處理せんと欲し、凡ゆる努力を盡したるも、其の甲斐なく遂に第九師團の武力行使となるや、支那側は更に大兵を集めて戦備を嚴にし、飽く迄我に抗せんとしつゝあり、此に於て帝國は當初の目的達成上、必要なる兵力を増派するの已むなきに至れり。然れども好んで交戦を求め、事態の紛糾を欲するものに非ず、若し支那側に於て誠意を以て我が要求を容れ、速に其軍を撤退するに於ては、我が軍も適時軍事行動を停止するに躊躇せざるべし。

又支那一般民衆に對しては隣邦人たるの友情を盡すべく、關係列國とは協調を保持し其の權益を尊重すべきこと素より其の所たり。

茲に皇軍を率ゐて新に淞滬の地に臨むに當り、我が軍派遣の目的に鑑み努めて時局の擴大を避け、戦局を最小限度に制限し速に事態を收拾して以て、帝國臣民の保護を全うすると共に、東亞の秩序を回復せんことを期す。

右聲明す。

昭和七年三月一日

上海派遣軍司令官 白 川 義 則

(イ) 攻勢開始前に於ける支那軍の状況、扱愈々本攻撃の状況を述ぶるに當り、更に支那軍の状況を記述するの要がある。支那軍の配置は概して附圖第二と大なる差異なきも、蔡廷楷は第六十、第六十一師の主力を大場鎮附近に集結しありて、該地に設備せる第二練陣地に據つて頑強なる抵抗を試みんとするものゝ如くであつた。而して閩北方面第一線には多數の義勇軍を配置し、第八十九師は、嘉定、南翔等の後方地帯に分散配置せられてゐた。

第十九路軍は敵愾心旺盛で戦闘能力も亦比較的優れて居たが、死傷漸く加はるに従ひ志氣沮喪し、警衛軍に至りては歴戦の経験少く、而も参戦以來我が猛攻にあひて多大の損害を受け、著しく戦意を銷磨するに至つた。加之二月二十五日二十三圓附近に於ける警衛軍に對する第十九路軍の督戰事件は兩軍幹部の間に内訌を生じ、且第十九路軍が獨り戦捷

の榮冠を占めたかの如く振舞ふ等に依り、内部の結束は既に弛解するに至つた。又支那軍は二十八日以来、其の所在地附近に於て掠奪を開始し、大場鎮及吳淞鎮は全部落し亘り大掠奪を行つた模様である。

右の如く彼等は我が軍の強壓に加ふるに、内部的紛争をも生じ、且我が軍の増兵を知り結局自滅の外なきを覺りて、第十九路軍參謀長及顧維鈞は二十八日英國海軍司令官を通じて「日本軍にして共同租界内に撤退せば、支那軍は二十軒以外に撤退するの用意ある」ことを申込み、同日上海市長吳鐵城も殷汝耕をして右と同意見を申込み來らしめたが、支那軍第一線は、自發的撤退を行ふことなく、抗戰を續けてゐた。

尙二十九日汪精衛の使者は、兩軍の撤退を申込んで來たが、顧維鈞の唱ふる自發的撤退は國民政府の意志にあらず、國民政府の意志は兩軍對等條件の下に於ける撤退なる旨を強調して去つた。

(ロ) 三月一日の狀況、第九師團（混成第二十四旅團を含み二月二十九日上陸せる第十一師團の歩兵三大隊を加ふ）は新銃の部隊を師團兩聯隊の中間に加入し、三月一日早朝より主として廟巷、江灣間の正面に於て攻撃を再興した。戰況有利に進捗し、正面約四軒、縱深約二軒に亘る敵陣地を奪取し、第九師團主力は夕刻其の第一線を以て西部廟巷鎮、田園、周家宅各西端、二十三圓東端、楊家宅、張三橋の線に進出し、混成旅團は夕刻、胡家灣、朱家宅の線を占領した。

本日この方面の戰鬪に於て、歩兵第七聯隊第九中隊、獨立戰車第二中隊第二小隊、及同中隊荒山上等兵、平野一等兵は殊動あり、軍司令官より感状を授與された。又歩兵第七聯隊長林大佐は壯烈なる戰死を遂げた。

第十一師團主力は、この日午前海軍の緊密なる協力下に天佑を保有し、平素訓練の成果を發揚して、壯烈なる敵前上陸を七了口附近に敢行し、之に成功した。午後直ちに南進、茜涇營の敵を破つて、夕刻之を占據した。工兵第十一大隊附上田中尉は、この上陸戰鬪に殊動あつて軍司令官より感状を授與された。

(ハ) 三月二日の戰況、三月二日早朝より第九師團は、潰亂狀態を以て敗走する當面の敵に對し、奉天大會戰を彷彿せしむる壯快なる追撃に移り、午後四時頃に灣宅、老人橋、鐘港、三七里の線に、次で夕關迫る頃、第一線部隊は小南翔

及眞茹に達した。

關北方面の我海軍陸戰隊も、亦追撃に移つた。

第十一師團主力は、早朝茜涇附近を出發して、劉河鎮を屠り、爾後一瀉千里の勢もて嘉定へ進撃した。

以上の行動間、我が陸、海軍航空部隊は、地上部隊に協力し、隨所敵を攻撃し、成果を收むるに努めた。

七、戰鬪行動の中止

三月三日、第九師團は主力を南翔に、一部を眞茹に集結して、態勢の整理を行ひ、第十一師團は主力を以て婁塘方面より、一部（第九師團に屬しありし松山部隊）を以て南翔より嘉定の敵を挾撃し午後五時過同地を占據した。

我海軍陸戰隊（歩兵の一部を屬す）は、吳淞砲臺の正面に上陸、之を攻略した。恰かも此の日吳淞に上陸した第十一師團の高知部隊は、寶山城、獅子林砲臺を占據した。

三月三日午後軍司令官は左記の如く支那軍にして敵對行動を爲さざる限り、暫く軍を現在地に駐め、戰鬪行動を中止する旨を聲明した。

聲 明

帝國陸軍は上海附近に派遣せられたる以來帝國海軍と共に、平和的手段を以て帝國居留民保護の任務を達成せむことに努力したるも、此見地に依れる我が軍の要望不幸にして支那第十九路軍の容るゝ所とならず、遂に戰鬪行爲を惹起するに至れり、今や支那軍は帝國陸軍の當初要求したる距離以外に退却し帝國臣民の安全と、上海租界の平和とは茲に回復の徵を認めらるゝに至れるを以て、本職は支那軍にして對敵行爲を採らざる限り、暫く軍を現在地に止めて戰鬪行動を中止せむとす。

右聲明す。

八、戦闘中止直後の状況

(イ) 我が軍の状況、三月四日軍は大體に於て七丁口、嘉定、南翔、眞茹の線に於て態勢を整理し、第十一師團は一部を以てハツコン(嘉定西北十軒)に、第九師團は一部を以て黄渡(南翔西方十軒)に前進し、警戒に任せしめた。上海事件發生以來三月五日迄に於ける陸軍の損害は次の如くである。

戦死 二四〇
戦傷 一、五九一

計 一、八三一

(ロ) 支那軍の状況、支那軍は主力を以て蘇州方面に、一部を以て松江方面に退却せるが如く、其の損害は著大にして開戦以來の死傷及失踪者を合すれば、其數四萬内外に達するの報あり、而して支那軍の小なる一部は太倉及崑山附近に残存せるも、主力は蘇州以東に存在せざるに至つた。

(ハ) 上海の状況、上海市内に於ては、我が戦勝と軍司令官の聲明發表を見たる爲、四日虹口一帶の日本人商店全部閉店し、歡喜の聲漲り、又居留民中男は自ら進んで戦線後方に出で後方補給を援助してゐる。尙租界内支那人店舗も大部閉店し、我が警備區域内楊樹浦方面の避難民も續々歸宅してゐるが、軍は此等の住民に對し、更に意を安んじて業に服すべき布告を發した。

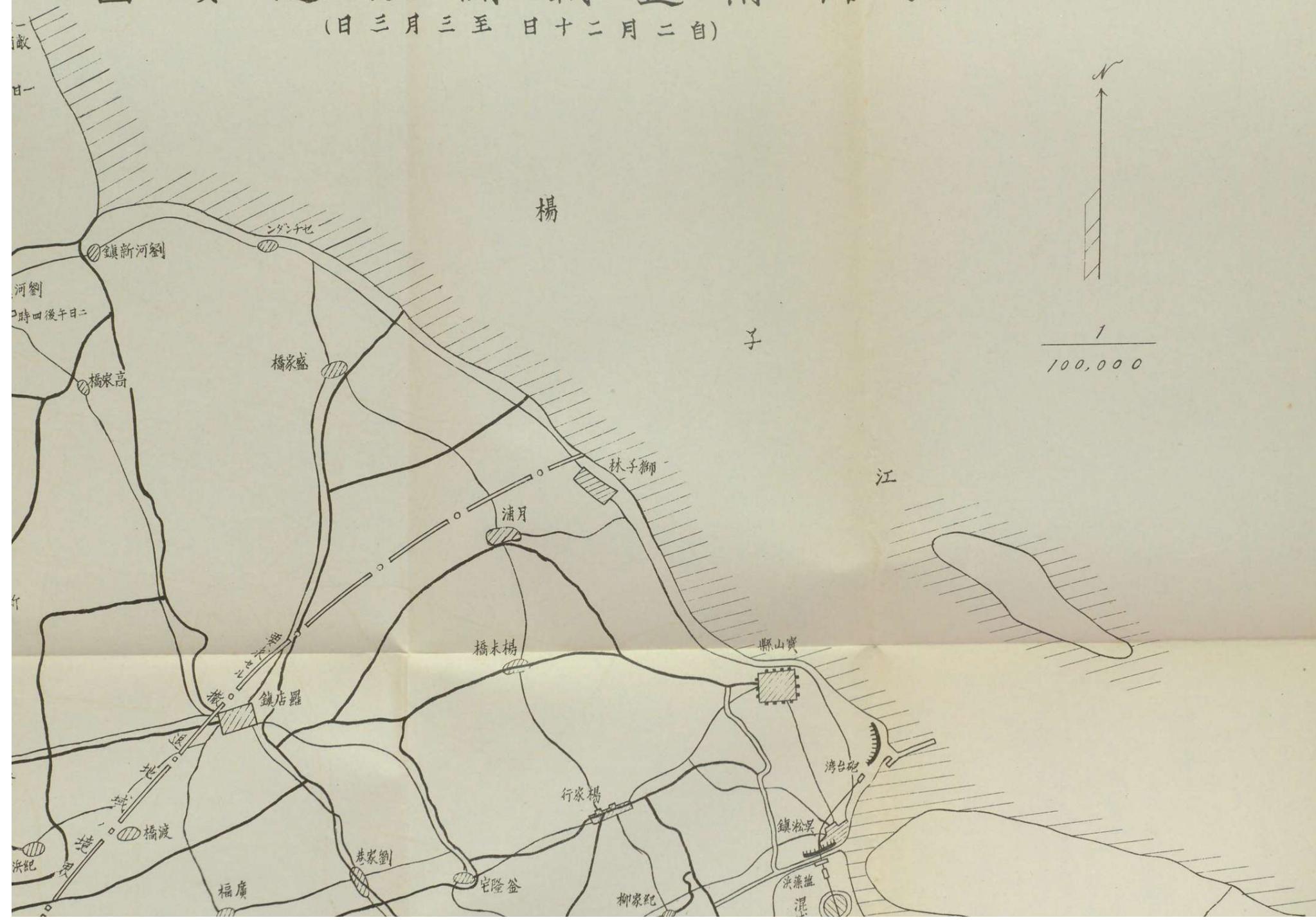
(ニ) 支那側の宣傳、當時支那各地の新聞等の傳ふる所を見れば、これは又不思議千萬、或は劉河、南翔、眞茹の回復、日本軍全滅、日本敗兵は歸國、白川大將戦死、領事館半旗を掲げて表弔、日本軍艦二隻撃沈等々噴飯に堪へぬものがあつた。此等は皆國民黨が戦敗を匿す爲の虚偽の宣傳であつて、彼等は自軍の敗退を以て、側背脅威、援軍未來、裝備劣等、兵力衰弱に依る戦略的必要に基く隨意退却なりとなして、斯くて爆竹騒ぎやつて居る所さえある。因に一月末か



上海附近戰鬪經過要圖

(自二月十二日至三月三日)

附圖第三



つた、此等は皆國民黨が罪取を匿
等、兵力衰弱に依る戰略的必要に

ら三月三日迄に於て支那側の宣傳したる日本軍の損害を通計すると兵員三萬三千四百七十、飛行機二十九、軍艦六、戦車十五といふ多數に上り其虚傳振りは驚いたものであつた。

而して無智なる各地の支那人は之を信じあるが如く、一般支那人の第十九路軍非難の聲は少く、事變當初より第十九路軍の背後にありて之を使喚した廣東派の策動に依り、却て第十九路軍を十分に支援しなかつた南京政府を咎めんとするの空氣があつた。

一年以上を経て尙支那の各地官民、將兵の間には曩日の虚偽宣傳を信じてゐるものさへあつた、實に支那は何處迄も宣傳の國である。

九、第十四師團の到着と第十一師團及混成旅團の内地歸還

第十四師團は數船團となり、逐次内地港灣出發、三月六日より十四日に亘り吳淞附近に上陸、直ちに劉河鎮、嘉定、南翔の線に前進し、第一線の守備を交代し、混成第二十四旅團、第十一師團は吳淞及上海附近に兵力を集結した。我が軍は作戰の結果、支那軍隊の實力に對し、豫想以上の確信を得たること、竝支那軍は近き將來に於て大々的に攻勢に出づる公算少きを認め、統帥上の見地より、大半の減兵をなすも、敢て支障なしと判斷し、茲に混成第二十四旅團及第十一師團は内地に歸還せしめらるゝこととなり、允裁の上發せられた。

十、停戰會議の進捗と派遣軍一部の整理

三月二十四日より、日支兩軍の委員、停戰を議する爲に、正式に會見し、英、米、佛、伊四國の武官も之に參與した。爾後支那軍現駐地點、日本軍の第一次撤收地點協定の爲めには、別に日支兩國武官を以て小委員會を作つた。委員會は屢次會見を重ねて、協定案の逐條につき審議を重ね、討論を續けた。當初は日支兩國の意見に多大の扞格があつて、會

議は決裂すべしと噂せられ、到底続行は困難なりと認められたが、四國公使殊に英國公使の斡旋調停に依り、會議は逐次進捗することを得た。

派遣軍は混成旅團と第十一師團の内地歸還後、第一線に第十四師團を配置し、第九師團は之を上海附近に集結して、治安の維持に當つてゐたが、停戦交渉の進捗如何に關せず、自主的立場より、一部の改編整理を實施することになり、特殊並後方勤務部隊の一部及第十四師團の古年次應召兵の内地歸還を命じ、該歸還部隊は三月二十五日、乗船出發部隊を第一次とし、爾後三次に亘り之を實施した。

十一、停戦協定成立と第十四師團滿洲轉用

停戦協定は一時停頓開催を見ず、國際聯盟に迄持ち出されたが、この間、非公式會見はれ、所謂「ランブソン」公使の妥協案を得るに至つたが、四月二十九日天長の佳節に於ける爆彈事件に依り我代表傷つき、會議の前途一時暗雲に閉されたが、爆彈事件と停戦交渉とを全部切離し、會議の進捗を圖つた爲、一方四月三十日聯盟總會の決議採擇の次第もあり、さしもに紛糾と停頓とを重ねた停戦會議も、五月五日男子の節句、軍國尙武の吉日に、圓滿調印を見るに至つた。

これより先、北滿の方面には、反滿反日の兵匪跳梁を極め、高粱繁茂期を前にして速に武力を以て之を徹底的に鎮壓するにあらざれば、治安の維持は求めて得られざるに至り、駐兵地域の擴大に伴ひ兵力不足を感じつゝありし矢先、上海方面の情勢、和平の曙光を認め、軍の改編整理をなすを利用し、第十四師團を抽出して、滿洲に轉用することとなり、同師團は五月上旬より逐次上海附近乗船出發、大連に上陸、任地に赴いた。

十二、上海派遣軍全兵力の撤去

帝國陸軍は、如上成立せる停戦協定の運用及上海地方平靜確立に關する關係友好國代表の活動に信頼し、其の全兵力を内地に歸還待機せしめ、上海附近今後の形勢推移を靜觀することとなり、十一日上奏御裁可を仰ぎ、之に關する發令を見た。

斯くの如くにして上海派遣軍は、其の出兵目的を達成し、振旅凱旋の途に就くことになつた。

當初我が軍の戰鬪迅速なるを得なかつたのは主として上海附近に於ける地形が障碍多く、守るに易く攻むるに難き特殊のものであつたと共に、我が軍は始めより攻者の利益とする時間、場所等を全く度外に置きたる本戰鬪の特異性に、加ふるに、彼我の兵力の懸隔甚しく、且我が軍が勉めて損傷を少くして其の目的を達せんとしたからである。此間連日連夜の困難なる戰鬪の外、飲料水の缺乏、現地物資及人夫利用の不可能、便衣隊の跳梁、其の他後方連絡の困難等有ゆる困苦を嘗めたに拘らず、堅忍不拔志氣益々振ひ、奮闘克く目的を達成し列國環視の巻にあつて大に威武を宇内に宣揚した。

十三、結 言

抑々今次の上海事件は其裏面に、支那軍閥政治家の醜惡なる鬪争が織込まれてゐる。即ち廣東派が蔣介石に一蹴せられた當時から計畫し、第十九路軍を使喚して事態を紛糾せしめ、蔣の立場を進退兩難に陥らせて、自ら天下を取らんとする魂膽であつた。而も有ゆる虚偽の宣傳を行ひ、我が威武に對して疑惑を抱かしめ、國民の抗戰意識を醜穢せしめてゐた。

然るに事實は優勢なる兵力を擁しながら、我が軍の攻撃を受ければ、毎戦多大の損害を受けて敗退に次ぐに敗退を以てした。而も彼等は各敗退の責任を回避し、互に暗闘明闘を續け、其の結果は福建省獨立問題に迄及んだのである。

かくの如くにして上海事件は終りを告げたが、支那最強を以て誇りし第十九路軍及裝備の優秀を以て聞へたる警衛師は、所謂國民の輿望を擔ひ奮戦大に努めたけれども、著しく弱勢なる皇軍の猛攻に敵する能はず、戰鬪十三日にして其

の兵力の過半を失ひ、みじめなる敗退をしたのである。併しながら其の戦闘の跡を見るに陣地の編成、設備の巧妙、抵抗の頑強等推賞に値するものがないではない。若し夫れ數倍の敵に對し、困難なる状態並地形に於て赫々たる戦勝を博したる我が上海派遣軍の榮譽は、
上、大元帥陛下の大御稜威の賜ものではあるが又我が陸海軍將兵の渾然一體となり、赤誠以て國に殉ずる精神に依り、敵を壓倒したる結果に外ならない。而して全國民の派遣軍に對する後援が熾烈を極めたることも、與て大なる力があつたことは勿論である。

五月九日迄の戦死者は六三四名で、負傷者は一、七九一名であつた、



第二章 上海出征歩兵第三十六聯隊行動の概要

一、動員及出征

第九師團は昭和七年二月二日應急動員の令下り、同五日編成完結、同六日上海派遣の天命を拜し、同七日以降逐次廣島に輸送せられ同地及門司に於て臨時配屬の部隊を乗船せしめ、二船團となり上海に向ひ急行した。

歩兵第三十六聯隊にあつては、動員の令下るや、聯隊長大佐大賀一男は、將校同相當官を集め、所要の訓示をなし、命令を下し、かねての計畫に基き、著々諸準備にかゝつた。

二月四日より召集者入隊し、同五日午後三時より軍裝検査を行ひ、動員完結した。

二月七日午前九時五分、第二、第三大隊（各大隊行季員缺）同十時二十分聯隊本部及第一大隊（第二、第三大隊行李員共）各歸江驛出發、鐵道輸送を以て八日廣島に着し、合營す。此地に於て兵器材料等を受領し、同十日師團長の閱兵を受け同日聯隊（第三大隊缺）は第一船團に屬し、佛蘭西丸（聯隊本部及第二大隊）八雲丸（第一大隊）に乗船、第三大隊は第二船團に屬して十一日宇品丸に乗船、宇品港出發、第一船團は二月十四日、第二船團は同十六日、各上海に上陸した。

二、上海附近の警備及支那軍の状況

師團は上海附近上陸と共に、混成第二十四旅團及海軍陸戰隊を其の隸下に入れ、所在の帝國海軍及外交官憲と協力し居留民保護の任務に服した。

之より先、海軍陸戰隊は暴戻なる支那軍の挑戰に餘儀なくせられて、閩北方面に於て既に交戦状態にあつた。先着の

混成第二十四旅團も亦吳淞停車場附近に於て、吳淞クリークを隔て、支那軍と相對してゐる、而して租界内は支那軍便衣隊が跳梁するので、人心恟々として在留邦人の諸事業は停頓し、婦女子は難を避けて内地に歸還する者が多かつた。

聯隊は上陸と共に西部會營區として、楊樹浦以西公平路に亘る間の警備を擔任し、支那軍特に列國官憲に皇軍出動の目的を正解せしめ、友邦諸國との關係を親密にし、以て一面努めて事態の悪化擴大を避け隠忍自重和平の間に解決せんとする師團長の企圖を奉じ、他面には支那軍民當時の狀勢に照らし、隱密の間に戰鬪準備を促進し和戰兩様の準備を整へてゐた。

師團は二月十七日當面の支那軍たる第十九路軍に對し交渉を開始し、翌十八日には上海租界外部より二十千の線に撤兵、其の他を含む最後通牒を交付し、二十日午前七時を以て其期限とした。

當時支那軍の兵力は第十九路軍の三師團約三萬三千の外、警衛軍二師團其他義勇軍憲兵團を合し約六萬を算し、主力を以て上海及其の附近に、一部を以て南翔、崑山、蘇州の間に兵力を集中し、吳淞鎮附近、吳淞クリーク北岸より廟巷鎮、江灣鎮附近を経て、南北方面に亘る間、蜿蜒四里に亘り、堅固に陣地を占領し、國民の支持を得て、其の戰意堅く士氣亦頗る熾なるものがあつた。

三、上海附近會戰に於ける戰鬪經過概要

二月二十日 師團は當面にある第十九路軍が我が通告に服従せざる場合、直に起ちて之を攻撃する目的を以て、二月十九日夜より之が配置に就き、翌二十日午前七時支那軍我が要求を入れざるを確認するや、愈々攻撃を開始した。

當時に於ける敵情及師團の攻撃部署は附圖第四の如くである。

當時聯隊(第二大隊缺)は師團の豫備隊となり脾肉の敷に堪へず、將兵互に腕を扼して第一線に進出すべき命令の一刻も早く下らんことを待つてゐた。

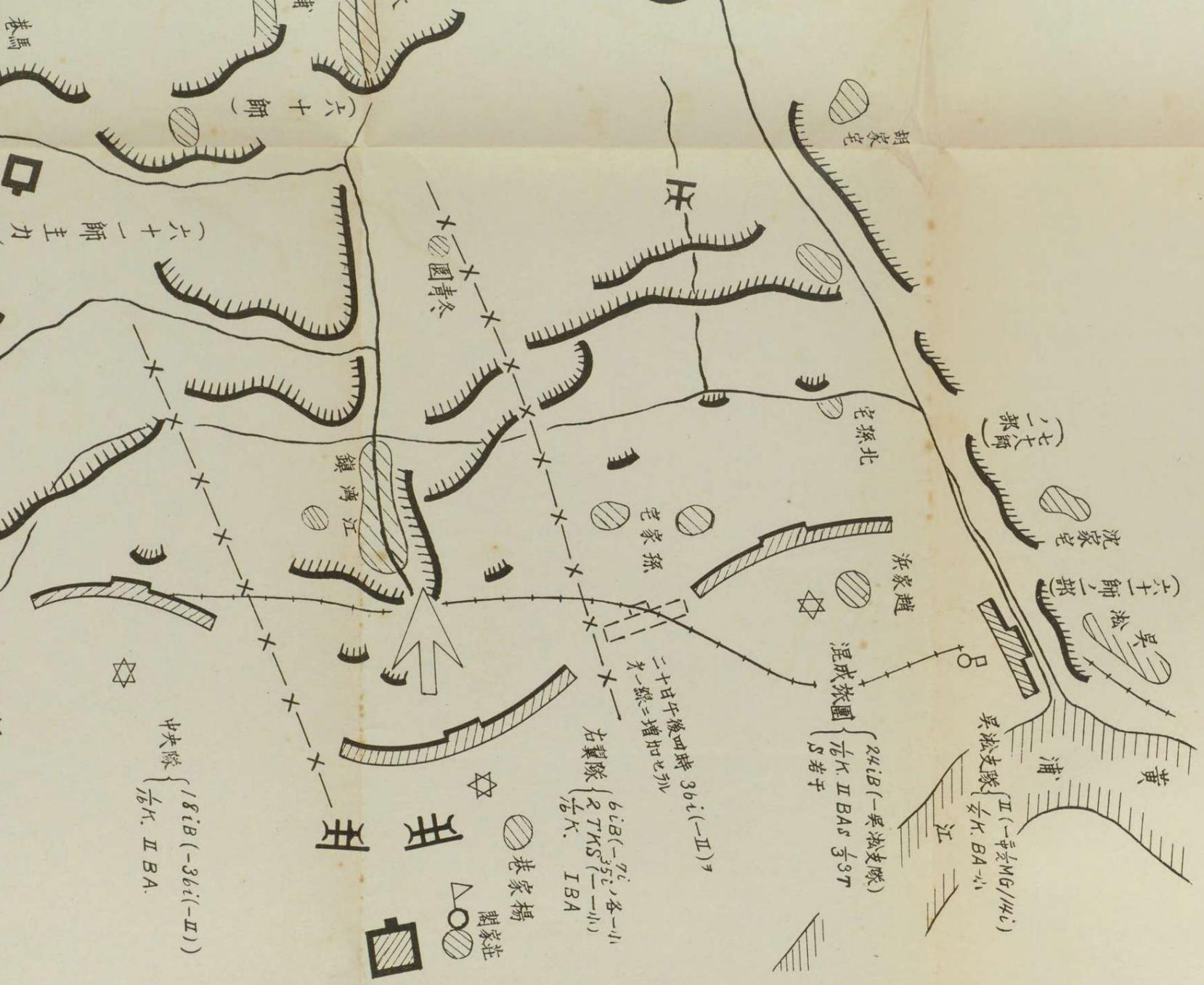


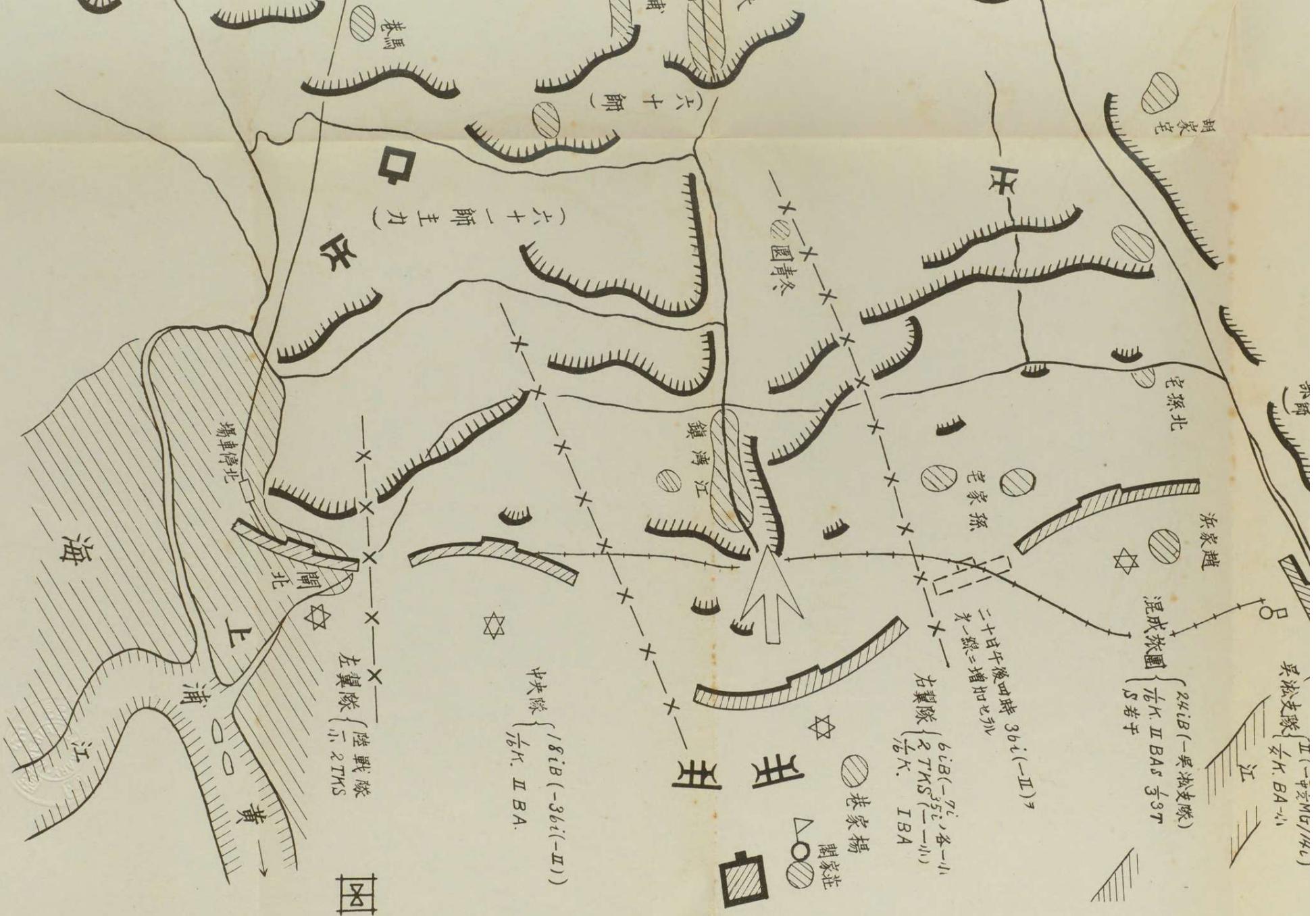
當時に於ける敵情及師團の攻撃部署は附圖第四の如くである。
 當時離隊（第二大隊）は師團の豫備隊となり脾肉の敵に堪へず、將兵互に腕を扼して第一線に進出すべき命令の一
 刻も早く下らんことを待つてゐた。

敵情及第九師團攻撃部署要圖

(二 月 十二 日)

附圖第四





吳淞支隊 { 1/2 K. BA 2/1 }

混成旅團 { 24iB (-吳淞支隊) 1/6 K. II BAS 3/3 T S 若干 }

二十日午夜四時 36i (-II) 2 才一線 = 增加 70%

右翼隊 { 6iB (-35i) 各一 2 TKS (2-11) 1/6 K. IBA }

中央隊 { 18iB (-36i (-II)) 1/6 K. II BA. }

左翼隊 { 陸戰隊 示 2 TKS }

楊家橋
關家莊



楊家宅
宅孫北
宅家孫
趙家莊
冬青園
馬巷
六十師
六十一師主力

海

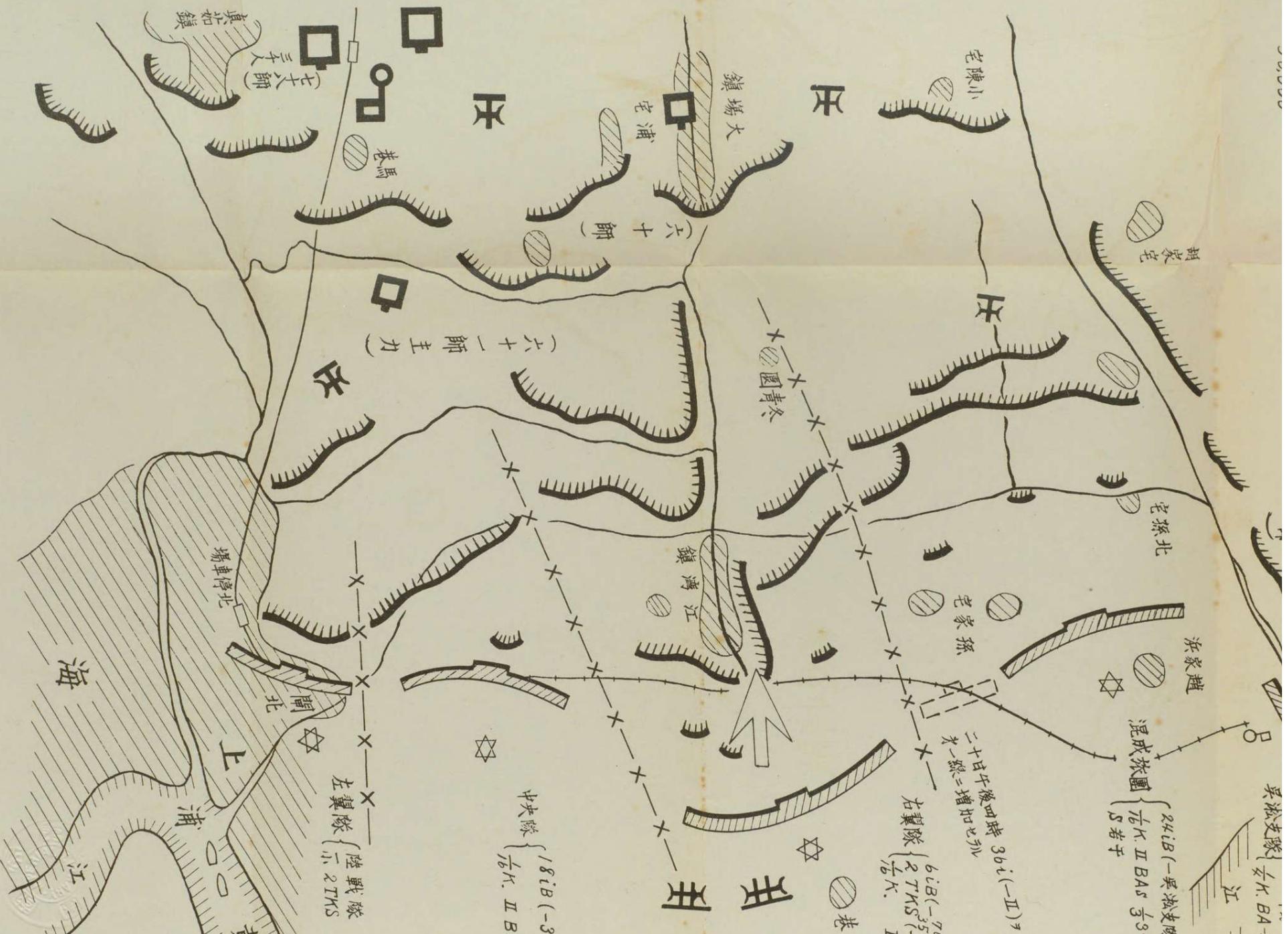
浦上

黃

場車灣北

關北

丑丑



此間第一線の諸隊は、午前七時三十分より勇躍攻撃を敢行したが、敵の陣地意外に堅固で、特に江灣鎮は堅牢なる家屋、圍壁を利用して守兵能く遮蔽し、爆撃や砲撃を加へても、中々頑強に抵抗し、我が兵死傷續出攻撃意の如く進捗しない。之に於て師團長は更に右翼即ち北方に重點を指向するを適當と認め、午後四時三十分聯隊(第二大隊缺)に右翼第一線を命ぜられた。第二大隊は既に中央隊に屬して今朝來第一線に活躍してをつたのである。(以下附圖第五參照)聯隊の主力は欣喜奮躍いでや我が南越男兒の意氣を見せやうと、勢込んで展開線に就いた。

二月二十一日 師團の攻撃部署が變更されたので、聯隊は右翼隊に屬し、旅團長小野少將の指揮下に入つて、第二大隊を併せ完全なる聯隊となり、全員揃つて名譽ある軍旗の下に於て勇戦することゝなつた。そこで右より第二、第三、第一大隊の順序に第一線となり、進んで吳家宅、普西、唐家舍の線に在る敵の警戒陣地を攻撃して之を奪取し、更に主陣地に對する攻撃を準備した。

此日戦闘の結果、敵は第十九路軍のみならず警衛軍も參戰してをることを知つた。
二月二十二日 聯隊は更に攻撃を續行して、敵主陣地の近距離に進出した。

此日午後以來混成第二十四旅團方面の敵活氣を呈し、優勢なる兵力を同方面に迂回轉位せしめつゝあつた。聯隊は之を牽制する目的を以て各大隊に命じて、約一中隊を基幹とする部隊を以て、各其の前面の敵の側背に向ひ夜襲せしめられた。第十一、第五、第二の三箇中隊が各其の任に當り克く其の目的を達成した。

師團は二十六日以來本日に至る三日間の戦績に鑑み、敵陣地の強度と、師團現下の兵力とを顧慮して、陣地の要部を逐次攻略し歩々地歩を獲得するを適當と認め、二十三、二十四の兩日を以て攻撃を準備し、二十五日右翼隊正面の敵陣地中、登家宅東方陣地(ロ)及金家塙東方陣地(イ)を攻略することに決した。此に於て聯隊は師團の主攻撃正面を擔任することゝなつた。

二月二十三、二十四日 聯隊は二十二日夜以來不眠不休銳意全力を注いで近迫作業を續行し、突撃陣地を構築して突撃

の準備を整へた。

二月二十五日 前日來敵の銃砲火の下に於て奮闘努力以て諸準備を整完し、只管突撃の機を來るのを待つてゐたが、午前六時三十分我が飛行隊の（イ）及（ロ）陣地に對する爆彈投下に依り、愈々總攻撃は開始せられ、今迄の靜肅は忽ち破れて、戰場は俄に阿鼻叫喚の巷と化し、爆撃に引續き師團砲兵主力の集中射撃となり、銃砲聲は殷々轟々天地を揺がし、爆煙は濛々として敵陣を覆ふた。

かくて最後の砲兵の集中射撃に隨從して午前九時四十三分第一大隊は（イ）陣地に突入した。續て午前十時（ロ）陣地に對する集中射撃の了るや、第二、第三大隊は直に突入した。之に於て聯隊は師團の攻撃目標たる敵陣地を完全に奪取し、師團爾後の攻撃に有利なる態勢を占むるに至らしめた。

自二月二十六日

至同二十九日 上述の如く聯隊は連日の戰鬥に依つて多數の死傷者を生じ、人員彈藥の缺乏を來したけれども、士氣益々旺盛敵の銃砲火の下にありて、連日不眠不休作業の續行、陣地の構築に従事し、以て次の攻撃を準備した。

此間二十九日第一回補充員到着し、將兵の元氣は愈々熾となつた。

三月一日 師團は軍司令官白川大將の統率の下に攻撃の重點を江灣鎮西方陣地に指向し、早朝より總攻撃を開始した。

聯隊は登家宅、團敦、沈家附近の敵陣地に對し、前回の二十五日に於ける總攻撃と同様に砲兵の集中射撃を待ちて、午前十一時突撃を開始し、引續き金家碼頭の陣地を奪取して、周家宅、四車頭、二十三團の線に進出し、遂に敵をして敗退の止むを得ざるに至らしめた。

三月二日 聯隊は敵を追撃して大場鎮を経て陸軍畜牛馬衝、張家衝の線に進出したが、旅團長の命令により楊子涇に兵力を集結し此處に宿營した。

三月三日 聯隊は殘敵を驅逐しつゝ、追撃を續行し、主力を以て眞茹附近に、一部（第一大隊）を以て師團豫備として南翔附近に進出し、遠く敵を驅逐して茲に本戰鬥の目的を達成した。

三月四日 本日以後は遠く敗走した敵を監視し、警備の態勢に就いた。

三月五日 小西大尉以下一三三名、第二回補充員として到着

三月六日 眞茹に於て戦死者の慰靈祭を行ふ

四、戦闘の成果

本戦闘に於ける敵の損害は死傷概算三萬に達すべく、失踪者を合すれば概四萬を數ふるならん。また兵器、彈藥、糧秣等の鹵獲品は多數であつた。

聯隊の損害は戦死、將校准士官以下一二二名、負傷、將校一四名、准士官以下二八九名、馬匹戦死一頭であつた。

五、上海附近の警備

第十四師團の進出に伴ひ、師團は之と警備を交代した。

聯隊は三月九日上海に後退して同地の警備に任した。次で同十八日第十一師團並に其の他部隊の内地歸還の爲、警備區域の分擔を變更され、聯隊は中部守備地區警備の任に就いた、仍て第一大隊をして江灣鎮及大場鎮の警備に任せしめ、主力を以て軍(師團)司令部其の他の警戒を擔任し、同時に宿營地を移轉した。

六、内地歸還

五月五日停戦協定成立し、同日以降第十四師團の滿洲轉進と共に、師團は上海附近の警備を擔任したが、五月十一日復員の命を拜して、内地歸還の途に就き、左の如く上海出發歸還した。

聯隊主力

五月十七日上海出發、阿蘇丸に乗船
五月二十四日似ノ島に於て檢疫を受く
五月二十一日宇品上陸、廣島に舍營
五月二十二日廣島出發
五月二十三日鯖江着
第二大隊

五月二十一日上海出發、概ね主力の行動に準じ五月二十四日宇品上陸、廣島に舍營
五月二十六日鯖江着

七、經理、衛生

(イ) 給養、給養品の大部は倉庫より追送品を受け、一部は現地にて調弄し、一般に円滑に給養を實施することが出来た。但し宿營中上海の外は水道の設備無く、井水は水質概して良好でないので、給水車に依つて給水する等若干不便を感じたこともあつた。

(ロ) 宿營、上海宿營間は主として邦人經營の紡績工場等を利用し、其の他に於ては民家及休業中の學校等を利用して假設備を施し出来るだけ集團して宿營した。

(ハ) 衛生、上海附近一帯が不健康地であり、且連日困難なる戰鬪に従事したのに關らず、衛生一般の状態は駐軍間も戰鬪間も共に良好であつた。特に派遣地の狀勢に鑑み出動以來、種痘、各種豫防接種、豫防劑の内服等を勵行し、衛生思想の向上を圖つた爲、戰鬪並勤務に累する様なことは毫もなかつた。

馬の保育並衛生状態も亦長途の輸送後引き続き戰鬪に参加し、諸般の施設また不完全であつたに拘らず、概ね良好であつた。

八、陸海の協同居留民の活動國民の後援其の他

(イ) 陸海軍の協同、本戰鬪間陸海軍の協同は殆んど完全に實施せられ、眞に陸海一致の實を擧げて目的の貫徹に努力した。海軍陸戰隊が師團の軍隊區分内に在りて行動したのみならず、飛行隊を以てする陸上の爆撃、搜索、艦隊を以てする援護、陽動、銃砲彈藥の補給等海軍の協力は實に大なるものがあつた。

(ロ) 居留民の活動、上海在留邦人は宿營警備、戰鬪等あらゆる行動に多大の援助をなし、特に在郷軍人は彈藥、糧秣等軍需品の前送、通譯、部隊の誘導等に彈丸雨飛の戰場を馳驅し、眞に獻身的努力を爲し、其效果大なるものがあつた。

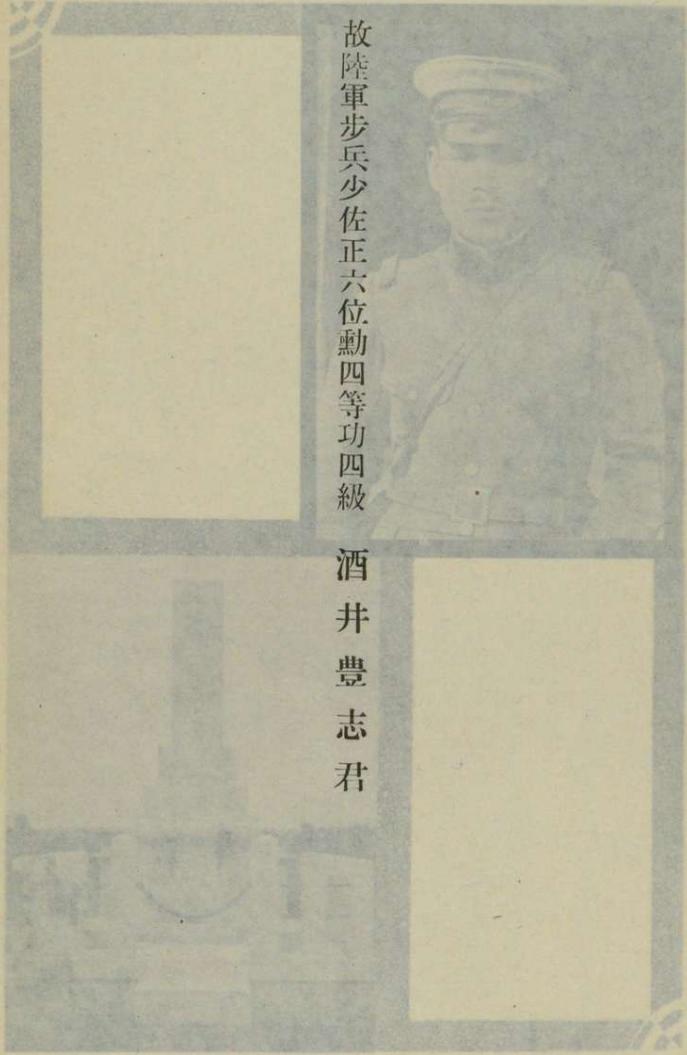
(ハ) 國民の後援 動員下令以來一般國民の熱烈なる後援は、將兵の士氣を著しく振興し一段と奉公義勇の念を堅からしめた。

(ニ) 其他 本事變間軍人精神の發露せる所將兵一般を通じ陣中に於ける美談は枚擧に遑なく又居留民の獻身的努力並國民一般の緊張せる後援に關する佳話亦尠くない。眞に軍民一致の實舉り士氣大に見覺ましきものがあつた。

第三章 戰死者列傳

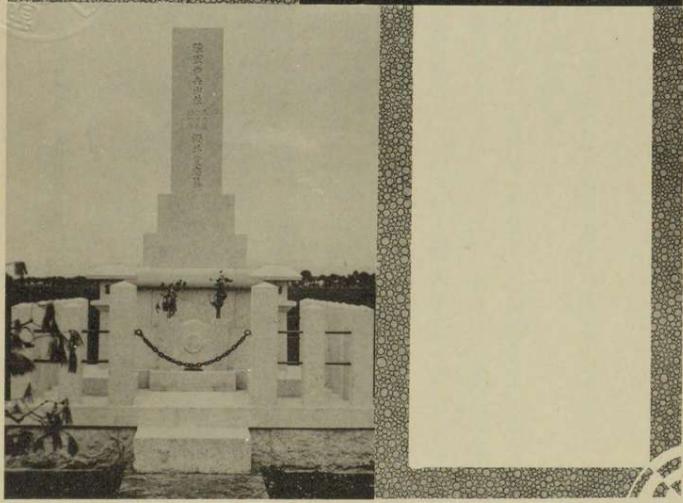
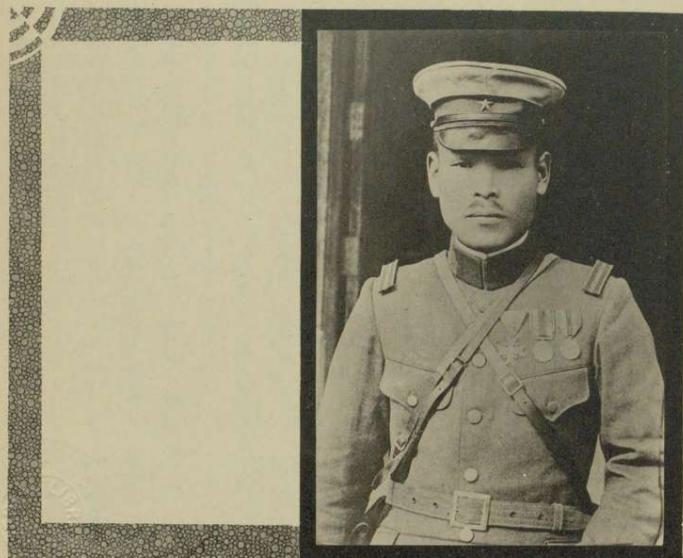
故陸軍歩兵少佐正六位勳四等功四級

酒井豊志君



第三章 戰死者列傳

故陸軍歩兵少佐正六位勳四等功四級 酒井豊志君



姑刺鐘表淚心
戰五死奇無四
幸世四歸
酉共豐志
昔

其一 故陸軍歩兵少佐正六位勳四等功四級 酒井豊志君

(イ) 君の出生と其一家

悲壯なる遺言を其愛息令嬢にのこし、上海附近横卒宅に奮戦して、遂に壯烈なる最後を遂げ、滿天下の士女をして其の忠烈義勇に泣かしめたる、我が酒井少佐は、歴史に名高き東藤島村林の人である。

明治二十五年十一月十二日酒井忠左衛門の二男として呱呱の聲をあげた。家は世々農を業とし母はせきと云ふ。兄は新次郎と云ひ、家を繼ぎ君より十二歳の年長である。外に二姉一妹があるが、長姉たつは同區酒井忠三郎長男久藏に、次姉てりは同區桶志計治に、妹末尾は同村重立杉本淺右衛門長男淺男に嫁し(大正九年死亡す)一族皆圓滿幸福に暮してゐる。

母せきは君が十一歳の春年五十にして世を去り、父は君が三十七歳の秋七十一歳にて物故されたのであるが、母の死後は慈父の暖いしかも注意深い撫育と、兄夫婦の深きいつくしみとの下に人となつた。

(ロ) 小學校—中學校時代

君が幼年時代は至つて温厚で誠に物靜であつた。村の上中小學校に入つてからも、其性格にはあまり變りがなく、萬事に極めて着實であつたが、長ずるに従ひ剛氣で忍耐力に富み、好んで人と議論を戦はすやうになつた、しかし又一面にはあつさりとした淡泊なところもあつた。

小學校在校間は非常な勉強家で、休日や、學校から歸つた午後など、友達が楽しさうに遊んでゐても、容易に其仲間に入らなかつた。従つて其の成績は常に上位であつた。

當時は尋常小學校は四年であつて、普通の村落には高等科の設けがなかつたから、君は上中小學校卒業後明治三十六年四月より、隣村松岡の高等小學校に入學した。此の頃日露の關係は日を逐ふて險惡となり、國論沸騰し、翌三十七年の春遂に開戦となつた。國民は擧て義勇奉公の誠を捧げ、銃後の後援に全力を注ぎ、我軍は陸に海に戦ふ毎に勝ち、同

三十八年三月陸軍は奉天會戰に於て大に露軍を破り、長驅開原、昌圖、法庫門の線に進み、五月には日本海々戰に於て海軍は敵のバルチック艦隊を粉砕して曠古の大勝を博し十月謙和成り戰爭は茲に終りを告げた。此當時より君の軍人となるべき志望は芽生へたのであつた。

日露戰爭終結の翌年乃ち、三十九年の初頭、我が忠勇なる軍隊の逐次凱旋する間に、君は高等小學校第三學年を修了し、四月縣立福井中學校に入學した。

君は小學校時代から運動を好み、殊に麻球は其の最得意とする所で、自分の先生の相手として夕方近く迄、上中小學校の校庭で戰つたことも度々であつた。中學校時代には更に武道を練習し、陸軍出身後も逐次其伎倆は進歩して少尉任官後聯隊から選抜されて、陸軍戸山學校へ派遣さるゝまでに至つた。従つて中々の骨太でがっちりした良い體格の持主であつた。

(ハ) 陸軍出身少尉任官

かくて明治四十四年三月福井中學校を卒業し、陸軍士官候補生召募試験に合格して、君が年來の宿志成り、十二月には陸軍士官候補生として金澤歩兵第三十五聯隊に入隊した。聯隊に在ること滿一年、大正元年十二月一日陸軍士官學校に派遣を命ぜられ、同三年五月同校卒業、原隊に復歸し見習士官たること約六ヶ月たして、十二月二十五日歩兵少尉に任ぜらるゝ、時に年二十三

(ニ) 中少尉時代

曩に君が士官學校を卒業して歸隊するや、時恰も聯隊が朝鮮守備の任に服することとなりし爲、六月見習士官のまゝ、聯隊に屬して神戸港出發、小隊長として守備警戒の任に服すること約二年、功勞少くなかつた。さうして此間少尉に任官したのである。

大正七年、君年二十七、學生として陸軍戸山學校に派遣せられ、劍術體操の研究をなし、七月歸隊した、爾後其の修

得したる技能を以て聯隊の劍術體操の進歩向上に力を致し、功績また少くなかつた。

七月二十九日歩兵中尉に進み、隊附將校として諸般の教育に、各種の勤務に、熱心恪勤能く優良の成績を擧げた。

大正十年、君年三十、聯隊が西伯利派遣軍に屬して該地に赴くこととなるや、君また之に従ひて五月浦潮上陸、各地の守備勤務に服し、居ること一年有餘、功勞あり、翌十一年九月聯隊と共に歸還した。

(ホ) 大尉時代

大正十四年、君年三十四、三月歩兵大尉に進み、歩兵第三十五聯隊附となり、五月大隊副官、八月中隊長に補せられ翌十五年三月臺灣歩兵第一聯隊第一中隊長に轉じ、二十六日神戸港出發、三十日基隆港に着し、中隊長の劇職にあること二年半餘、着々實績を揚げた、此間君の郷里にあつては慈父忠左衛門七十一歳を以て病死し、孝心深き君は天涯萬里遙に故郷の空を望むで斷腸の懐に堪へなかつた。

昭和三年十一月臺灣公立宜蘭農林學校配屬將校に轉じ、二年弱にして同五年八月歩兵第三十五聯隊大隊副官となり、富山の原隊に復歸し、同六年三月更にまた同聯隊中隊長に補せられ、第九中隊長となつた。

君が大隊副官となり、中隊長となり、又學校服務將校となるや、常に忠實熱心職務に勵精し、深く部下を愛撫し、指導統御寬嚴其宜しきを得、其人格と勤務振りととは、頗る上下の信頼敬服する所となり、成績常に優良であつた。

君が中隊長として如何に獻身的に努力奮闘されたは、歩兵第三十五聯隊第九中隊長より寄せられたる、左の文章により其一端を知ることゝ出来る。

『吾等ガ熱ノ中隊長

故歩兵少佐 酒井 豊志

吾等が中隊長に昨年（昭和六年）初頭御迎へスルヤ『何事モ一番ニ強ク正シク』ノ方針ヲ示サレ、以テ中隊長ノ嚮フ所ヲ明ニサレタ。

爾來黙々トシテ率先垂範、晨ニ星ヲ戴キテ出勤セラレ、夕ニ月影ヲ踏シテ歸ラレタ事モ尠クナカッタ。

此間自ラ防具ニ身ヲ固メ劍術ノ指導ニ當ラレ、或ハ銃ヲ執リテ適切ナル射撃教育ニ専心セラルル等、活教育ハ一同ノ心根ニ徹シテ忘レ得ザル生々シキ憶ヒ出デアル。

又旅團劍術競技會ノ催シアルヤ、聯隊選手トシテ少壯將校ニ伍シ何等遜色ナク試合セラルル如キ、其熱、其意氣ノ現ハレノ一端デアラウ。果シテ昨年營門ニ木ノ香新シキ『劍術優秀』『射撃優秀』『第九中隊』ノ標柱ノ植立セラレタル又宜ナル哉ト云フベキデアル(以下略ス)

嗚呼君は寡言實行、かくして平常の職務に盡瘁し、到る處着々好成果を揚げられたのである。

(へ) 家庭

君の夫人、名は玉喜、石川縣石川郡野々市町轉正小太郎の四女、明治三十七年の生れで、君とは十二の年少である。大正十二年十一月十一日君年三十二、夫人年二十で華燭の典をあげ、家庭極めて圓滿であつた、當時君はまだ中尉であつたが、其翌々年大尉に進み、同十五年三月臺灣歩兵第一聯隊に赴任する爲め二十六日神戸港出發の日長男清志君が生れた。

昭和五年臺灣公立宜蘭農林學校服務中、八月七日長女信子生る。

君の戦死當時は清志君七歳、信子嬢三歳の幼年であつた。

前述の如く君は寡言實行の人であつて平素黙々として職務に盡瘁して居られたが、しかし部下に對する情愛はまた格別であつて宛ら慈父の幼兒に於けるが如くであつた、従て部下の信服敬慕頗る深きものがあつた。同様に其の家庭に於ける兒女教養の躰に就ても亦眞に至れり盡せりであつて、吾人の範とすべきものが少くなかつた。

君が歩兵第三十五聯隊在職中は、聯隊の所在地により始めは金澤市に、後には富山市に居住されたが、君が出征されてからは留守宅は金澤市の近郊で夫人の實家石川郡野々市町二六一番地轉正小太郎方に移り、二月二十七日君の生家たる酒井家より分家し、野々市町に轉籍した。

(ト) 上海出征

昭和六年九月に勃發したる滿洲事變は更に上海に波及し、支那正規軍の暴戻非道なる行動は、遂に我陸軍の出勤となり、昭和七年二月二日夜第九師團に應急動員の令が下つた。聯隊の上下は士氣頗る緊張し、在郷軍人の召集により師團内各地方亦敵愾の氣横溢して山村陋巷に及び、連日不眠不休奮勵努力の結果五日午後には諸準備全く完了し、七日には愈々兵營を出發して征途に上つた。

此日君は午前六時起床、身を清め、佛壇に祖先の靈を拜して出征を報告し、妻子に永訣の辭を述べ、今後に關する注意訓誡を與へ、夫人の心づくしになれる門出の酒肴を祝ひつゝ午前七時三十分家を出で、途中五福神社に詣で、武運長久を祈願して、登營した。

時に中隊は既に舍前に整列して居た。直ちに武裝を檢査し、諸注意を與へ、午前八時三十分威風堂々營門を出た。

君の日記の一節に

『營門ヨリ富山驛迄沿道兩側ニ生徒並縣市民塔列シ老若男女ノ別無ク、手ニ々々國旗ヲ打振り、喉モ潤ルルバカリ歡送ス、午前十時三十五分萬歳ノ熱狂裡ニ征途ニ就ク』

とある如く。市民縣民の眞劍なる涙ぐまじき見送りの下に富山驛を出發し、沿道各地の熱誠なる歡送を受け、愈々奉公の精神に燃えつゝ、八日廣島に着し市内に宿泊した。君の宿舎は南竹屋町松本重五郎方であつた。

かくて、九日君は其の受けたる任務により、午前九時宇品に至り夥多の材料を運送船に積込んだ。

十一日君の大隊は高射砲二、高射機關銃二、自動車數十、衛生隊三分の一等と共に、アイタ丸(四、五〇〇噸)に乗込み、他の十數隻の運送船と共に驅逐艦掩護の下に出帆した、實に皇紀二千五百九十二年の目出度紀元節の日であつた。

日記の一節に、

『皇紀二千五百九十二年二月十一日紀元節

本日ハ午前八時半宿舎出發、宇品西側廣場ニテ宮城ニ對シ崇嚴ナル遙拜式ヲ舉ゲ、正午ヨリ乗船ス
午後四時半宇品出港』

とあり、又當日發の留守宅への通信には

『愈々祖國ヲ離レテ征途ニ就ク

小生七日以來心身極メテ壯健、國權擁護ノ大任ニ就クベク、皇恩玄遠、祖國ノ無窮ヲ祈願致シ居候』

一讀以て悦んで死地に赴かんとする、皇道精神の躍如たるを見る、尙其の後の状況を君の日記によつて記述して見よ

う。

『十二日

十一日ハ良夜、風稍々寒ケレドモ波靜ナリ、船ハ油ノ上ヲ滑ルガ如ク、臺灣ニ往復セシ時ト何等ノ差無シ、ヨク喰ヒ
ヨク眠ル、只差アルハ武裝嚴タル多數ノ將兵驍然トシテ右往左行スルノミ

上陸後ハ別命アル迄私信ヲ取扱ハザル旨命令アリ

十三日ハ海稍々荒レタレドモ十四、十五日ハ波靜ナリ、師團ノ主力ハ第一船團トナリ、十三日敵砲火ヲ受ケシモ無事
上陸セリトノ報アリ、我等ハ第二船團トナリ驅逐艦吹雪、神通、初瀬ニ掩護セラレ、威風堂々、今吳淞砲臺ヲ距ル北
方約一里ヲ運航シアリ

揚子江ハ濁流漫々トシテ右岸ニハ既ニ支那大陸ヲ望ム、我が海軍飛行機ハ空中ニ飛ビ廻リツツアリ、今暫クニシテ阿
修羅ノ巷ニ上陸ヲ敢行セントス、快又快

我海軍ノ砲聲手ニ取ル如シ、制海權並制空權ヲ我ニ掌握セラレタル支那コソ憐ナレ、十五日午前十時十分上海大阪商

船會社ノ棧橋ニ上陸ス

上海ハ四十數ヶ國ノ國際都市、各國ノ汽船、軍艦、港ニ充滿ス

我方居留民約三萬ニシテ婦女子ハ大部分引揚ゲタリ、事變以來營業ヲ停止シ、ソノ窮狀見ルニ忍ビザルモノアリ、無
心ノ兒童國旗ヲ打振リ、萬歳聲裡ニ我等ヲ迎フ、涙ヲ催スコト切ナリ、直ニ第一線ニ就クト思ヒシニ會社ニ就合シ、
豫想外ノ想ヲナス(楊樹浦大康紗廠入舎)

十六日快晴

十九日家庭へ遺言狀ヲ書き、近親ニモ永別ノ手紙ヲ出ス、

以上の記述により、決死戰陣に望む我等の勇士達が航海中並上陸當時の状況及感想は手に取る如く明瞭である。

(チ) 子女に與へたる熱血の遺書

かくて愈々二月二十日より攻撃を開始することとなつたので、十九日には、明日は最後と思ひ定めて、前記の如く家
庭へ遺言狀を書き、近親にも永訣の手紙を出したのである。

彼の『父ニ會ヒタクバ靖國神社ニ來レ』なる、遺兒に對してなされたる悲壯なる遺書は此時に書かれたのであつた。

遺書は陣中倥傯の際とて、通信紙に鉛筆もて書かれたのであるが、字體謹嚴、句々熱涙、如何にも誠心をこめて、か
ゝれたものなることが推しはかれて、涙なくては讀まれない鐵心石腸の文字である。

遺書

酒井清志殿

清志ニ告グ

酒井豊志

父ハ異國ニ在リテ、敵ト戦ヒ、再ビ生還ヲ期セズ、清志未ダ小兒ナリト雖モ、既ニ七歳ニ達シ、本年四月ヨリハ小學
校ニ入學ス、

平素父ノ言ヒシ事ハヨモ忘レザルベシ、特ニ昭和七年二月七日出征ニ當リ、篤ト言ヒシコトハ終生志ルル勿レ、再言

ス

常ニ母ノ命ヲ守リ、勉強シテ偉イ者ニナレヨ、清志ハ身體健康ナルモ、齒ノミハ弱シ、將來齒ニ注意セヨ、

清志ハ天性聰明ニシテ特ニ記憶力ニ富ムモ、稍々神經質ニシテ感情ニ激シ易シ、修養シテ有爲ノ人物トナレ、

弱キ女ノ身一人ニテ清志、信子等ヲ養育シ、一家ヲ立ツル母ノ苦心ハ絶大ナリ、

清志ヨ、心身共ニ健全ニ成長シ、妹ヲ愛シ、一家ノ柱石トナリ、母ヲ安ンゼヨ、

清志ヨ、父ヲ記憶シアリヤ、清志ノ祖父モ汝ヲ愛セシコト絶大ナリシゾ、清志ハ如何ニシテ之ニ報イントスルヤ、

生死ヲ賭シ決戦ニ向フニ望ミ、父三言ス、

『常ニ母ノ命ヲ守リ、勉強シテ偉イ者ニナレヨ』

之レ父ノ清志ニ與フル最後ノ言ニシテ且ツ無二ノ念願ナリ、

父ニ會ヒタクバ靖國神社ニ來レ

父ノ靈常ニ清志ヲ守ラン

酒井信子殿

信子ニ告グ

父ハ異郷ニ在リテ敵ト戦ヒ、又信子ヲ見ザルベシ、信子ハ未ダ二歳ニシテ東西モ分タザル幼兒ナリシガ、可愛ラシキ

モノナリキ、將來モ女ハ心ヤサシク、容姿端麗ニシテ人ヨリ愛セララルルヲ望ム、

ヨク母ノ命ヲ守リ、兄ヲ敬ヒ、兄妹一致シテ母ヲ大切ニセヨ、

學校ニ入ラバ、ヨク勉強シ又一ノ職ヲ覺ユルヲ可トス、

酒井豊志

結婚セバ、ヨク夫ニ仕ヘ、後顧ノ患ナカランメヨ、我儘ハ身ヲ亡ス基ナリ、

父縱令戰場ノ露ト消ユルトモ、靈ハ常ニ信子ノ成人ヲ樂マン、

上海附近の會戦後此遺書一たび出で、新聞に雜誌に喧傳せられ、果ては活動映畫となりて、君が崇高にして、悲壯なる皇道精神の心髓を全國民の眼前に展開し、天下の士女をして今尙涙を絞らしめつある。

然るに愛嬢信子さんは昭和八年二月十五日發病、慈母の手厚き看護も其甲斐なく、同十八日金澤市小兒科川瀬病院に於て死亡された。病名は疫利である。

夫のかたみとして、たつた二人の遺兒、その一人を失ひたる未亡人の悲みや實に察するに餘りがある。吾人は當時未亡人に對し深く同情の涙を濺ぐと共に、少佐の英靈に對してもまた涙と共に哀弔の詞を呈したのである。

(リ) 上海附近の會戦に於ける勇戦

二月十日愈々攻撃が開始せらるゝや、君の聯隊は、師團の右翼隊に屬し、第二線となつて江灣北方地區より顧家宅から後郭家宅に亘る敵を攻撃し、第三大隊は聯隊の右第一線、第九中隊は更にまた大隊の右一線であつた。

君は常に卒先陣頭に立ちて、部下を指揮し、以て將兵の士氣を鼓舞した。續て同夜大隊が第七聯隊空閑大隊の苦戦を應援する爲、後郭家宅に向ひ夜襲することゝなるや、君の中隊は途中孫家宅、顧家宅の敵陣地に對し依然第一線として夜襲を決行し、能く大隊の目的達成の爲に努力した。

翌二十一日更に後郭家宅の攻撃を行ふに當り、地形上、君の大隊の正面は敵の十字火の掃射を受け、前進困難にして攻撃稍々頓挫せるが如き狀況となつた。此間君は常に不屈不撓部下を督勵して大に奮闘し、逐次攻撃陣地を推進されたのである。併し二十二日第一次の總攻撃は敵陣堅固で、聯隊は遂に豫期の成果を收め得ず、加ふるに死傷相踵ぎ同僚たる中隊長高田大尉、河合大尉を始め幾多の勇士が瘞れた。此狀況を目撃したる君は心竊かに決する所があつた。

爾後連日連夜、第一線陣地の構築並掘擴、交通壕の築設、突撃陣地の構築等、敵の銃砲火の下にあつて不眠不休以て

攻撃作業を進め、逐次敵陣地に肉薄した。かくて二十五日には第二次總攻撃を決定したのであるが、其前日乃ち二十四日は愈々總攻撃の前日なれば中隊の將兵一同は、一層緊張して諸般の作業や諸準備に働いてゐた。此時君は後郭家宅の攻撃陣地壕内に於て、名刺に鉛筆もて左の如く各上官への訣別を書き、所屬大隊長板津少佐に托し、獨り莞爾として微笑んで居つた。君の心事は實に必勝にあらずんば必死にあつたのである。

名 刺

永クオ世話ニナリマシタ御禮申シ上ケマス

歩兵第三十五聯隊

陸軍歩兵大尉 酒井 豊 志

板津 大隊長殿
徳野 聯隊長殿
前原 旅團長閣下

中隊より寄せられたる『吾等カ熟ノ中隊長』の一節に次の様な記事がある。

『二月二十日戰鬪開始以來、常ニ率先陣頭ニ立タレ中隊志氣ノ振起ニ努メラレタコトハ此處ニ多言ヲ要シナイ
同二十四日夜半ニ、翌二十五日ノ横卒宅北側敵陣地突撃の爲小隊長ヲ集メ、突撃陣地ノ推進ニ關シ現地ニ就キ指示セラレタ。當時敵前約三百米ニナル地形平坦開豁ナル爲、眞ニ彈丸雨飛モ喬ナラズ、加フルニ夜暗ノ爲懐慘一入ニシテ小隊長ノ眉宇ニ困惑ノ狀アルヲ察知セラルルヤ「アノ中隊殿方」ト思ハルル如キ秋霜烈日ノ嚴命ガ下サレタ。小隊

長ノ獸々トシテ決死、部署ニツキタルコトハ言フ迄モナイ』

斯の如く砲煙彈雨の中、從容自若、事に當り、而かも任務の爲には一步も假借せず、義烈勇奮部下を督し、自ら範を示して行動されたのである。かゝる決死の勇將猛士ありて始めて、戦へば常に勝ち、攻むれば必ず取り、赫々たる勝利の榮冠を荷ふことが出来るのである。

愈々二十五日は來た。第二次總攻撃の日である。午前十時攻撃の諸準備は完了した。

『吾等ガ熟ノ中隊長』に當時の様様を

『翌二十五日愈々第二次總攻撃ノ時機ガ刻々ト迫ツタ、中隊ノ準備ハ已ニ終ル、突如中隊長ノ「全員集合」ノ命令アリ、一同何事ナラント、中隊長ヲ核心トシテ壕内ニ蹲ルヤ、中隊長ハ徐ロニ「愈々突撃ダ、煙草ヲ持ツテ居ルモノハオ五ニ喫メ」忽チ十數本ノ煙草ハ點火セラレ、次カラ次ニ渡サレタ、一吸ノ煙草ハドンナニ彼等ヲ悦バセタカ、吐キ出ス煙ノ餘リニ僅カダツタニ徴シテモ明カデア、次ニ「一口ナルトモ水筒ノ水ヲ分ケ合ヒ、死水ノ準備ヲセヨ、云ヒ遣スベキ事モアラバ書ケ、突撃ニ當ツテハ小隊長ノ手裡ヲ離レズ、團結ノ威力ヲ發揮セヨ。」

噫 此中隊長ニシテ突撃直前迄此ノ言アリ、言々皆肺腑ヨリ出ツ、聞クモノ齊シク暗涙ニ咽バザルハナカツタ。

とかいてある、全員皆決死の覺悟である。此時君は更に、

『中隊の旗印である日頃の腕を發揮すべき時は愈々やつて來た、皆は軍人として、定めし本望であらう、自奮自重以て目的達成に邁進せよ』

と激勵の訓示を與へた。我が砲兵の破壊射撃了り、午後二時煙幕が構成された。第九中隊は大隊の左第一線となりて、猛烈に敵中に突入した。此時尙陣地に踏止りて抵抗する敵兵は少くなかつた、中には不意に我が中隊幹部めかけて突進して來たものもあつたが、我が兵機先を制して之を刺殺し、尙抵抗する敵兵を刺殺すること約三十名、流石頑強であつた後郭家宅の敵陣地も午後三時三十分全く之を占領した。



丁度此時前郭家宅の敵兵が動搖の狀あるを認め、中隊は更に此に突入して占領し、以て第一大隊の攻撃を援助した。此日の戦闘に於て、中隊の正面に遺棄してあつた敵の死體百五十、押收品として重機關銃二、小銃五十、彈藥一萬發青天白日旗一があつた。

君の中隊は、斯くの如く奮戰健闘以て赫々たる功勳を樹てが、此の偉大なる勳は實に平素に於ける君が教育薰陶の結果に因るものであつて、特に劍術射擊練磨の効果が、心神の教養と相俟つて其作用を十分に發揮したのである。戦闘後留守宅に致したる書信に

『二月二十五日午後三時敵ノ十字ノ銃砲火ノ下ニ高キ堡壘ニ突撃、生命アルガ不思議ニ思ハレ候、小生ノ大隊ハ聯隊ノ最初ニ、小生ノ中隊ハ大隊ノ最初ニ敵陣ニ突入占領仕り候、コ、ニ平素射擊劍術最優秀中隊ノ實ヲ表ハシ候、ソレダケ死傷モ多ク、目下出征當時ノ三分ノ二ト相成リ誠ニ不憫ノ至リニ候、然レドモ萬歳聲裡ニ敵陣ヲ占領仕り候妻や子や、親類知己を信じつゝ、

吾も行くなり心置なく

これによつて見るも、此日の戦闘は君が日頃努力の甲斐あつて、中隊が立派に御役に立つたことを悦び頗る満足であつたと共に、一死君國に殉じた部下の勇士に對し、萬斛の涙を潑いだのであつた。

又第一大隊長板津少佐が、本戦闘後君の留守宅への通信に

『前略……常に部下ヲ督勵大ニ努力セラレ、逐次攻撃陣地ヲ推進シテ、二十五日敵陣ニ突入、サシモ頑強ナリシ敵モ第九中隊ノ勇敢ナル突撃ニ抗シ兼テ、算ヲ亂シテ逃走仕候

茲ニ於て後郭家宅、前郭家宅ハ完全ニ第一大隊ノ占領スル所トナリ(中略)……此ノ間御良人ノ貽サレタ功績ハ甚大ニシテ、今度ノ戰勝ノ因ヲ成シタリト言フモ過言ニアラズト確信仕候』

と書いてある、以て當日君が中隊を率ゐて如何に奮戰したか、又其の功績が如何に偉大なものであつたかを察することが出来る。

(又) 第三次總攻撃と悲壯なる君の戦死

かくて二十六日より以後數日間は、戦闘後の整理や、次の攻撃準備に忙殺されつゝあつたが、君の中隊は前日迄の戰鬥に於て、死傷が頗る多かつたから、二十八日午前十時大隊長の命令により聯隊豫備となつた。

翌二十九日は第三次總攻撃の前日である。此日第一大隊長大澤中佐は、前郭家宅(江灣鎮西北五百米)に於て、師團左翼隊の右第一線として突撃陣地構成中、午前十時壯烈なる戦死を遂げた。

大隊長を失つた第一大隊は指揮の中樞を缺き、剩へ中、小隊長の殆んど大部を失ひ、戰鬥力の減耗著しく、非常なる苦境に立つに至つた。之に於て聯隊長徳田大佐は第九中隊長たる君に、第一大隊長代理を命じた。

當時第九中隊は中隊長以下六十四名に過ぎなかつた。右の命令を受けたる君は中隊全員を集め、

『予ハ第一大隊長代理トナリテ赴任ス。

中隊全員ハ克ク中隊長ヲ核心トシテ一致團結以テ任務達成ニ邁進セシハ、中隊長トシテ實ニ感激措ク能ハザル所ナリ今ヤ軍ノ目的達成モ目前ニ迫リアル時赴任スルコトハ惜別ノ情禁ズル能ハザルモノアリト雖、是レ大命ノ致ス所ナリ茲ニ諸士ノ自重ヲ望ミ中隊ヲ去ル』

と、告別の訓示をなし、深く名残を惜みつゝ午後第一大隊本部に至り其職に就き、鋭意攻撃の諸準備に力めた。此日家庭へ送られた左の通信は、實に簡明直截、而かも深き決意を示してゐる。

『本月二十九日午後ヨリ第一大隊長代理トナリ、明一日師團總攻撃に参加勇戦セン。

大澤少佐殿ハ本日正午名譽ノ戦死ヲ遂ゲラル。

汝等常ニ言ヒ置キシ事ヲ守レ。』

三月一日午前十時稍々前、我が砲兵の攻撃準備射擊間、滿を持して突撃時刻(午前十時に左翼隊全面一齊に突撃を行

ふ計畫であつた)の到るを待ちつゝあつた時、職責感に燃ゆる君は、塹壕内に立つて具さに敵情及隣接部隊の状況を視察中、横卒宅附近の敵地より狙撃を受け、不幸敵弾右頸部より貫通して左肩に達し、壯烈なる戦死を遂げた。

大澤中佐、酒井少佐は僅に数十米を聞き相前後して、同じ職に殉じたが共に士官学校の同期生で、平素親交の間柄であつたのも、奇しき因縁である。

君が戦死の報、第九中隊に傳はるや、一同此の信頼厚き慈父を失ひ、悲嘆の涙、征衣を濕すと共に、切齒扼腕誓て敵を粉齏すべく決心したのであつた。

『二月二十九日第一大隊長戦死サル、ヤ、之ガ代理を命ゼラレ、出發ニ方リ、ドンナニ部下ニ名残ヲ惜シマレタカ、憶ヒ出サレテ涙尙新ナルヲ覺ユ。』

三月一日横卒宅ノ突撃ニ方リ、各中隊長ヲ集メ、突撃命令下達ノ折モ折、無慘砲彈ノ破片ハ頸部ヲ貫通シ、無念ノ血涙ヲ吞マレテ壯絶ナル最後ヲ遂ゲラレタ。

傳ヘ聞キ一同慈父ヲ失ヒ悲嘆ノ涙ニクル、ト共ニ悲憤慷慨其ノ仇敵ヲ葬ルベク、固ク々々英靈ニ誓ツタ。』

と、『吾等ガ熟ノ中隊長』の一節に書いてある。昨日迄危険悲惨の巷に生死を共にした。慈しみ深き中隊長が別れて僅に一日、敵彈の爲に斃れ、護國の鬼と化せらる。生前恩顧を受けし部下の悲嘆と憤慨とは、思ひやるだに同情の極みである。

かくして我が郷土の生んだ、忠誠勇武の典型的軍人、酒井少佐は江南の花と散つて、皇國興隆の礎となつた。

君死するの日を以て歩兵少佐に進み、其偉勳殊功は、功四級金鷄勳章並年金五百圓及勳四等旭日小綬章を授けらるゝに至つた。君以て瞑すべき歟

(ル) 逸 話

典型的の武人として立派な人格者であつた君には、吾等が修養の規範とし、資料とすべき美談佳話等、決して少なくない

いこと、信するが、今知り得たる二三を左に蒐録する。

(一) 少年時代から非常に軍隊が好き

君は少年時代から頗る軍隊が好きで、暇さへあれば日清日露兩戦役の軍歌をうたつてゐた。中學へ入つてからも何時も軍歌を口遊んでをった。今は故人になつたが同じ郷里の楠由雄君は、君の姉婿の兄にあたる人で明治三十七八年の戦役に出征して旅順の攻撃や、奉天の會戦に参加した方であつた。君がまだ福井中學校二年の時であつたが、學校は冬休で大層雪の積つた時であつた。由雄君の宅を訪ね、日露戦役の實戦談を乞ふた。由雄君は嘗て受けた現役三年の軍隊生活の有様から、日露の風雲次第に急を告げ、遂に宣戦の大詔が下つて召集令を手にした時の自己の心境、國民の意氣、愈々征途に上つて故國の出發、柳樹屯上陸から旅順要塞に對する幾回かの總攻撃など、柳風沐雨死生の巷に出入せし實戦の状況を具さに話した。君は此の話に全く自己を奪はれしものゝ如く三日も四日も泊り込んで謹聽し頗る悦んで歸つたこともあつた。

(二) 牢固たる軍人志望

愈々軍人を志望して、陸軍士官候補生の召募試験を受けるとき、父兄親類等から

『どうだ、もう一つか二つ他の學校へも願書を出して置いたら』

と、言つたところ、君は

『なめに、此試験を受けて、出来ねば、百姓だ』

と、言つて、どうしても他の學校は受験せよとしなかつた。

(三) 無格好な三尺机

中學校時代君の姉婿である楠志計治君が君の家へ孟蘭盆入をした。すると君は西向の座敷の縁側に高い机を出して勉

強してをつた。其の机が手作で如何にも見苦しいものであつたから、志計治君が

『こんな机では、友達などの來られた時、恥しくはないか』

と、いふと、君は

『君はいや、手ごろな板や、木があつたから、自分で造つた、他人が見たならば笑ふかも知らんが、之で勉強は十分出来る、自分が中學校を終ると、こわして他に間に合はされるやうに、板も三尺に切つてあるのだ。』
と言はれたといふ

此の話は、若い時から一事一物も苟くもせず、しかも眞面目にして注意深き君の性格の一端が偲ばれて、眞に床しき心地せらるゝ。

そうしてまた、君は學校から歸ると、家人に言はれずとも、何時も熱心に家業を手傳ひ、尙學業の勉強も怠らなかつたと、いふことである。

(四) 忠誠にして潔白

又君の士官學校時代に、志計治君が上京して親類の家に泊つてをった時のことである。

『面會に往きたいけれど、道不案内で往けないから、宿に來てくれないか』

と、葉書を出したところ、次の日曜日の朝早くやつて來られた。そうして

『今日はゆつくり見物ませう』

と、志計治君を連れて先づ、宮城二重橋前に詣りて最敬禮をなし、次で楠公の銅像を拜して、其處に小憩した。

その時君は、陛下の御聖徳や、昔からの忠臣のことなど話し続け、

『自分がかうして軍人となり君國のために働かして戴ける身となり得たのは、總て是れ親、兄弟の御蔭である。此の高恩を空しくしてはならない。』

と、申してそこで二人はまたあらためて、恭しく宮城を拜したが、此時君の眼は涙にうるんでゐた。之を窺ひ知つた

志計治君もまた顔をそむけて、涙を拭ふたといふことである。

それから二人は、靖國神社に詣りて所々を見物してゐるうち、最早正午過となつたので、

『何處かで晝飯を喰べて、一杯やらうではないか、』

と、志計治君が無難作にいふと

『自分も先刻からさう考へぬでもないが、自分は軍人だから、あまり何處へでも、はいれないし』

と、稍困り顔で君が答へるから、志計治君は、なるほどこれは自分がわるかつた、氣がつかなつたと、心に詫びつゝ、

『萬事君に委すから』

と、いふと、暫くして、君は志計治君を、とある汁粉屋に誘ひ、二人は汁粉で其の場を凌いだ。

歸途電車の中で志計治君は、學生時代の境遇を察し、二人で一度飲むだ代りだと思つて、幾干かの金を君に渡さうとしたが、どうしても受取らない。止むを得ず君の隙を窺つて、其の時君の買つた書籍の中へ入れて置いたところ、後日遂にさとられて送り返された。

又或年(中尉時)君の實家に不幸があつて、君は郷里へ戻つて來た。そうして村の人々と通夜しながら葬儀の準備をしてゐると、葬儀買物の記帳をしてゐる一人が、何か書き損じて、それを捨て、新しい紙をとらうとするのを見て、君は

『物を粗末にするものでない。その紙を裏返して書いたらどうか』
と、たしなめた。

しかしながら、君は爲さねばならぬことを吝むやうな人では決して無い、親の墓もつくりに建てたし、金錢に就いては至つて潔白であつた。

(五) 毎日の仕事や命令は總て 陛下の御命令だ』

右の志計治君が昭和六年の十月半ば頃、富山市に於ける君の寓居を訪ねた。すると君はいと懇に志計治君を迎へ

「幸、今日は土曜日だし、明日の日曜も、よいあなばいに暇だから、是非今晚は御泊りなさい」

と、すゝめられたので、言はるゝ儘に一宿すると、翌日は志計治君を連れて、市内を隈なく見物せしめ、同夜復一宿を勤めて十一時過まで快談に耽つた。その時志計治君が

「軍隊といふところは、元氣な若い者ばかりで、中々教育に困ることも多からう、また規律も嚴格だから随分骨が折れるであらう」

と、言ふと、君は

「なめに 陛下に捧げてある身だから、自分の體で自分のもので無い。毎日の仕事や、命令は皆 陛下からの御命令だと考へてをるから、少しもつらくはない。そうして其の日の仕事は其の日の中に一生懸命にやつてのける。

自分が眞心こめて一生懸命にやつてをるから、部下の者も一生懸命にやつてくれる。外の人達も多分さうだらうと思ふ。お蔭で自分の中隊は銃剣術も射撃も聯隊で一番である」

と、會心の悦に満ちつゝ愉快に話したとのことである。

誠に貴い立派な、心掛である、此の美しい心掛を以て行はるゝ日々の教育訓練が實に日本軍をして忠勇無比の軍隊たらしむるのである。

(六) これでやつて来るぞ

昭和七年初頭、上海に於ける支那の侮日暴戻は其の極に達し、遂に第九師團の出勤となり、君は富山歩兵第三十五聯隊の中隊長として出征することゝなつた。

出征軍隊を乗せた軍用列車の通過する沿道は、到る所晝夜を別たす見送人が群集して、萬歳々に聲も洩れんばかりの有様であつた。其の熱誠なる見送は眞に涙ぐましく光景であり、送る者も、送らるゝ者も齊しく感激の涙に充ちてを

つた。

丁度君等の乗つてゐる軍用列車が、福井市志比口附近を通過する時、見送りの群集中に郷里林の人の居るのを見出し

た君は、車窓ら上半身を乗り出し、平素寡言沈黙の人なるに似ず、腰の軍刀を脱して打振りつゝ、

「おゝい、これでやつて来るぞ！」

と呼ばれたさうだ。以て當時の覺悟の程を推することが出来るではないか。

(フ) 墓碑

君が戦死の報に接するや、郷里東藤島村は村葬を以て之を禮することに決し、遺骨到着後四月三日、藤島區眞宗大谷派超勝寺に於て盛大なる葬儀を營んだ。續て嗣子清志君が君の墓碑を郷里林區の南端、越前電氣鐵道東藤島驛の傍に建てた。

陸軍歩兵少佐酒井君墓誌銘

君諱豐志、福井縣吉田郡東藤島村人父稱忠左衛門君其二男也、明治四十四年爲士官候補生入歩兵第三十五聯隊大正三年士官學校卒業其年任少尉補歩兵第三十五聯隊附尋叙正八位爾後參加朝鮮及西伯利派遣軍十四年累進大尉爲歩兵第三十五聯隊大隊副官、尋歷叙正七位爾後補同聯隊中隊長及臺灣歩兵第一聯隊中隊長昭和三年爲同聯隊附五年後補歩兵第三十五聯隊大隊副官尋叙從六位其翌年爲同聯隊中隊長九月滿洲事變之突發也其餘波及上海在支那正兵等之對我暴戻爲我陸海軍出動之所不得止、七年二月急我第九師團被派遣于上海、君爲其歩兵第三十五聯隊第九中隊長踴躍從軍上陸上海當時彼敵軍既築砲壘處々深塹濠備新銳銃砲等巧堅防禦攻之我軍亦稍有難色其月二十日夜襲擊孫家宅及顧家宅之敵也君立第一線率先指揮中隊勇戰苦闘少不撓作敵兵潰滅之因越而五日復攻擊敵本防禦陣地前後郭家宅也君猛然與部下將兵共拔劍突入敵陣、手斬數人劍銃相磨數刻使敵兵盡潰走既而遷師團之第三次攻擊也君受第一大隊長戰死之後指揮其大隊三月一日出于橫卒宅附近部署麾下將移突擊其利那敵砲彈破片貫君頸部敵兵雖爲麾下所擊退君終不能起此日進少佐叙正

六位勳四等功四級、君資性溫厚篤實信念堅固以毀譽褒貶不介意平素專爲部下訓育盡心力有專期與部下共捧一身報君國部下將兵亦誓期當事不惜身命於是乎前後數回之激戰皆能得奏其功亦當知非偶然又是可謂發揮我國武士道之本領垂龜鑑者且也君自上海與兒之尺書中有若欲面乃父則來于靖國神社之一語亦以足知其意君以明治二十五年五月生享年四十一配轉正氏名玉喜生一男一女曰清志曰信子男清志嗣余之於君同聯隊且在余部下能知悉君性格功績又痛惜其戰死諠不得不銘乃銘曰

滿腔赤誠。許國以身。每出戰線。卒先奮銳。其揮劍也。勢避鬼神。
身雖終斃。敵盡遺殘。與兒一語。以知君真。

昭和八年四月二十七日

陸軍歩兵少佐 板津直俊撰并書

(ワ) 年譜

| 曆年 | 年 | 齡 | 陸軍 | ノ | 經歴 | 學歴 | 其ノ他 |
|--------|---|----|--|---|----|----|-----|
| 明治二十五年 | | 一歲 | 五月十二日吉田郡東藤馬村林第四十八號十二番地ノ三酒井忠左衛門二男トシテ出生。 | | | | |
| 同二十六年 | | 二 | | | | | |
| 同二十七年 | | 三 | | | | | |
| 同二十八年 | | 四 | | | | | |

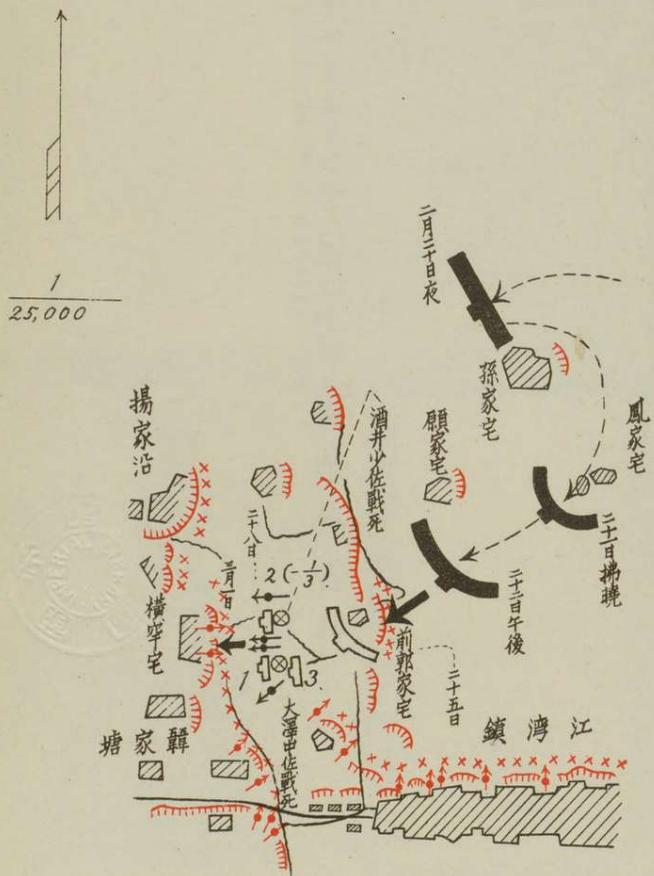
| | | | | | | | |
|-------|----|--|--|--|--|--|----------------------|
| 同二十九年 | 五 | | | | | | |
| 同三十年 | 六 | | | | | | |
| 同三十一年 | 七 | | | | | | |
| 同三十二年 | 八 | | | | | | 四月一日東藤馬村立上中尋常小學校へ入學。 |
| 同三十三年 | 九 | | | | | | |
| 同三十四年 | 十 | | | | | | |
| 同三十五年 | 十一 | | | | | | 四月八日母せき病死(年五十)。 |
| 同三十六年 | 十二 | | | | | | 三月上中尋常小學校卒業。 |
| 同三十七年 | 十三 | | | | | | 四月一日松岡高等小學校へ入學。 |
| 同三十八年 | 十四 | | | | | | |
| 同三十九年 | 十五 | | | | | | 三月高等小學校第三學年修了。 |
| 同四十年 | 十六 | | | | | | 四月一日福井縣立福井中學校へ入學。 |
| 同四十一年 | 十七 | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | |
|-----------------------|-----------------------|---|---|-------------|--|------------------------|--------------------------------|-------------|--|-------------|-------------|
| 同 四 十 二 年 | 同 四 十 三 年 | 同 四 十 四 年 | 同 四 十 五 年 大 正 元 年 | 同 二 年 | 同 三 年 | 同 四 年 | 同 五 年 | 同 六 年 | 同 七 年 | 同 八 年 | 同 九 年 |
| 十八 | 十九 | 二十 | 二十一 | 二十二 | 二十三 | 二十四 | 二十五 | 二十六 | 二十七 | 二十八 | 二十九 |
| | | 十二月一日陸軍士官候補生トシテ金澤歩兵第三十五聯隊へ入隊。 三月二十日福井縣立福井中學校卒業。 陸軍士官候補生召募試験ニ合格。 | 十二月一日陸軍士官學校へ入校。 | | 五月二十八日陸軍士官學校卒業。六月三日原隊へ復歸。兄習士官。 同十二月二日朝鮮守備隊爲神戸港出發。同十五日朝鮮釜山上陸。 同十二月二十五日任陸軍歩兵少尉。補歩兵第三十五聯隊附。 | 三月一日叙正八位。十一月十日大禮記念章授與。 | 四月二十六日交代歸還ノ爲朝鮮元山港出發。同二十九日大阪港着。 | | 三月一日陸軍戸山學校入校。七月八日同校退校。 七月二十九日任陸軍歩兵中尉。九月三十日叙從七位。 | | |

| | | | | | | | | |
|-------------|--|---|------------------|--|---|-------------|--|-------------|
| 同 十 年 | 同 十 一 年 | 同 十 二 年 | 同 十 三 年 | 同 十 四 年 | 同 十 五 年 昭 和 元 年 | 同 二 年 | 同 三 年 | 同 四 年 |
| 三十 | 三十一 | 三十二 | 三十三 | 三十四 | 三十五 | 三十六 | 三十七 | 三十八 |
| | 一月三日ヨリ南部島嶼里「スラウヤシカ」ニアリテ守備勤務。 五月二十三日五十二露里着。守備勤務。 八月十八日復員下令。 九月二十四日軍撤去ノ爲浦潮港出發。同二十八日七尾港歸着。 十一月二日復員完結。 十一月一日西伯利出兵事件ノ勳勞ニヨリ金三百圓ヲ賜フ。 | 十二月十日叙正七位。 | | 一月二十七日叙勳六等授勳章。 三月六日任陸軍歩兵大尉。免本職歩兵第三十五聯隊附被仰付。 五月一日歩兵第三十五聯隊附ヲ免シ補歩兵第三十五聯隊大隊副官。 八月七日免本職補歩兵第三十五聯隊中隊長。 | 三月十一日免本職補歩兵第一聯隊中隊長。同二十六日神戸港出發。同三十日基隆港着。 五月五日臺灣軍法會議判士ヲ命ズ。 | 一月十四日二等給。 | 十一月十五日免本職補歩兵第一聯隊附。同日臺灣公立宜蘭農林學校服務ヲ命ズ。 十一月十六日大禮記念章授與。 | 一月十五日叙從六位。 |
| | | 十一月十一日石川縣石川郡野々市町轉正 小太郎四女玉喜ト結婚。 五月二十九日右結婚入籍。 | | | 三月二十六日長男清志生ル。 | | 九月二十一日父忠左衛門病死(年七十二)。 | |

大澤大隊攻擊經過要圖

(自昭和七年二月十二日至三月一日)



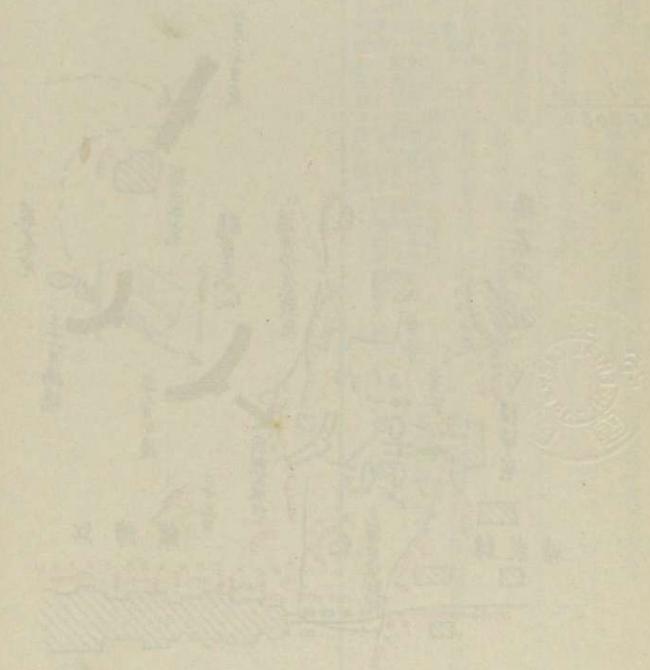
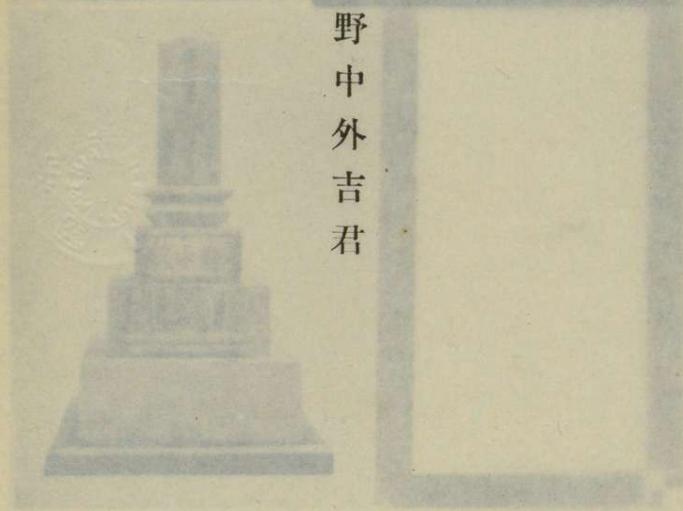
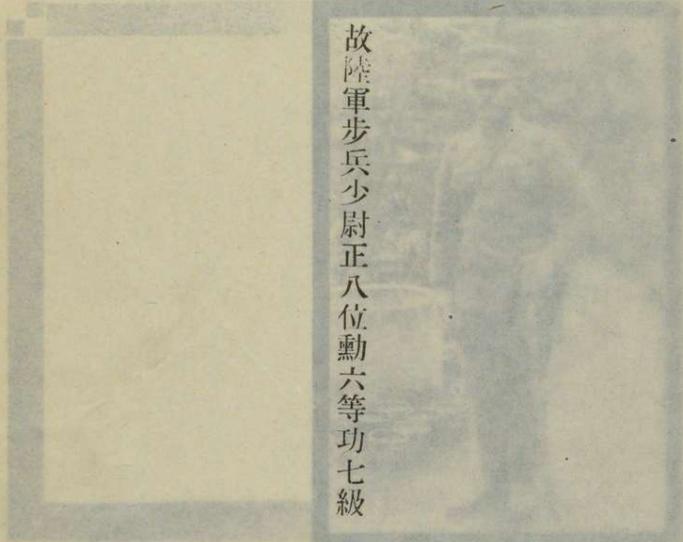
| | | |
|--|--|----------------------------|
| 同 七 年 四 十 一 | 同 六 年 四 十 | 同 五 年 三 十 九 |
| 一月十五日叙勳五等授瑞寶章。 二月二日第九師團勳員下令。同日步兵第三十五聯隊中隊長被仰付。 二月十一日宇品港出發。同十五日上海上陸。同二十日ヨリ上海附近ノ會戰ニ參加。 三月一日任陸軍歩兵少佐。同日叙正六位(陸軍)。 同日中華民國江蘇省寶山縣江灣鎮北方後郭家屯附近ノ戰闘ニ於テ頸部貫通銃創ヲ受ケテ戰死ス。 同日昭和大七年事變ニ於ケル功ヲ依リ功四級金鷄勳章並年金五百圓及勳四等旭日小綬章ヲ授ケ賜フ。 | 三月三十一日一等給。 八月一日免臺灣公立宜蘭農林學校服務。同日免本職補歩兵第三十五聯隊大隊副官。同九日基隆港出發。同十二日神戸上陸。 三月十一日免本職補歩兵第三十五聯隊中隊長。 | |
| 二月二十七日石川縣石川郡野々市町二六一番地甲號ニ轉籍 | | 八月七日長女信子生ル。 |

大正六年九月廿一日

野中外吉君

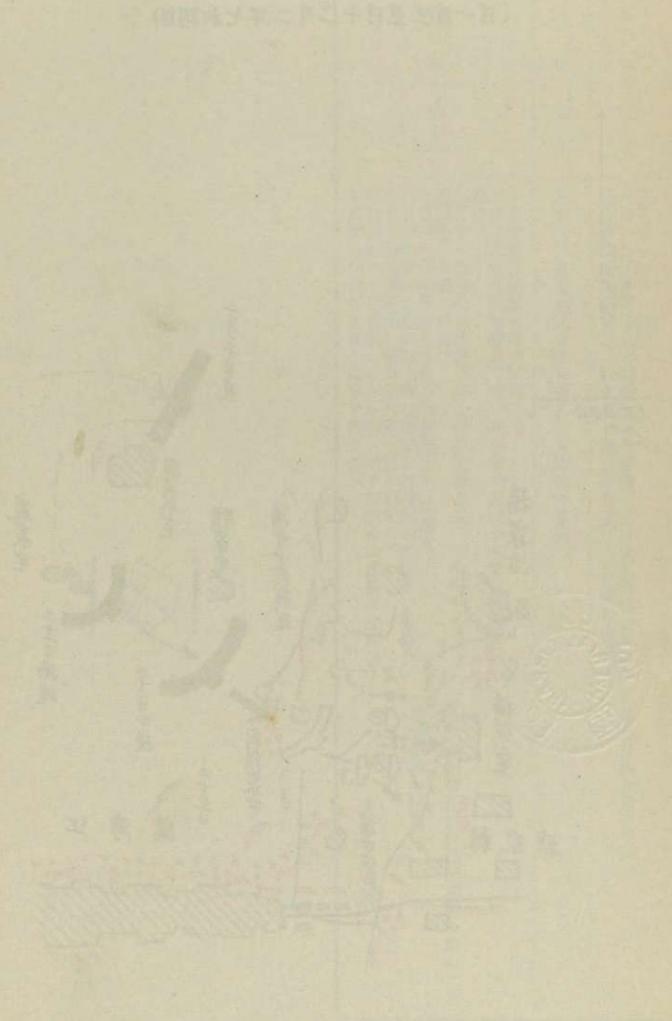
故陸軍歩兵少尉正八位勳六等功七級

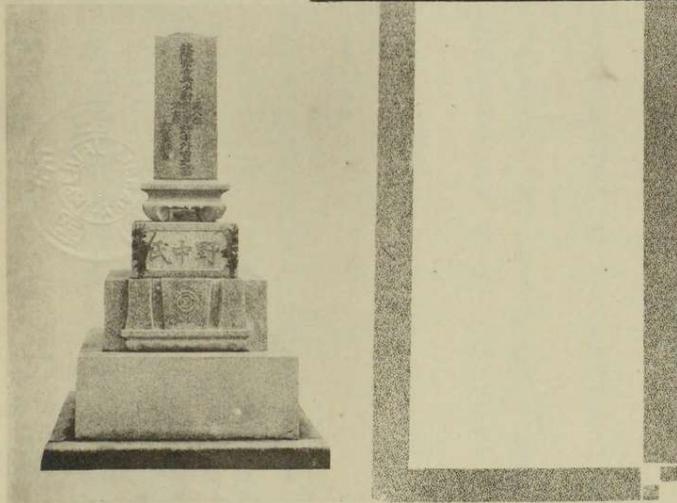
野中外吉君



故陸軍歩兵少尉正八位勳六等功七級 野中外吉君

大日本帝國陸軍少尉正八位勳六等功七級





靖國軍建元也 攝五八於燼六卷也 中野 中 中 吉 孫

其二 故陸軍歩兵少尉正八位勳六等功七級 野中外吉君

(イ) 君の出生と其一家

時恰明治二十八年日清戦役の媾和成りて二箇月目、六月七日吉田郡東藤島村泉田、農、野中勘右衛門の五人目の男子として、我が野中君は呱呱の聲をあげた。

そうして勤勉にして正直、常に村人から仰の如き人とたゞへられてゐた父と、慈しみ深く質素勤儉克く夫を輔け、苦しき家計の間に多くの子女を鞠育しつゝある、けなげな母との圓滿なる家庭の中に、往く年月を丸々と太つて育つて来たのであつた。

父勘右衛門は大正二年君が十九歳のとき、五十八歳にて死亡し、兄勘四郎家を継ぎ森田村八重巻に轉住した。母しづは當年(昭和八年)七十一歳、尙躰鏢として家事の手助けをしてゐる。

(ロ) 幼少年時代

生れつき頗る温順であつた君は、絶えず我儘な友達にをさへつけられてゐたが、兄弟とはいと仲睦く遊び戯れてゐた。それだけ両親にとつては迷惑をかける様なことは殆んど無く、いつも「おまへは、いゝ子だから我慢をせよ」と慰められながら、それはそれは、なごやかな空氣の中にはぐくまれてゐた。

いつしか星移り月變り、其のあたりの子供達と連れ立つて、風呂敷を背負つて小學校に通ふ頃となつた。學校は上中小學校である。學校から歸ると、日のうちは両親の手助けをして、田や畑をかけたまはるので、腕白盛りの童べ達が晝の遊びに疲れて眠に入れる時分、幼少の君はせつせと机に向つて、豫習復習に勉めたのであつた。それ故、同じ級の兒童に對し、先生から

『あれ程、家の手傳をしながら、宿題一つ忘れたことのない、野中さんを、みんな手本にしなさい』

と度々言はれたといふことである。それ程少年の頃から好學の志深く物事に眞面目であつたから、君は、學校では勿論村中での賞め者であつた。

習字は殊の外好きで、讀書に倦いてくると直に紙上に筆を走らせた。其のすまびの鮮かさは當時隣家に居つた學校の先生が之を見て、『うちの中學校へ通ふ子供より、うまい』と感心した程であつた。

かうした君の毎日勉強する室の中には壁や戸にどこもかも軍人の繪畫や、肖像が貼りつけられてあり、又時々軍歌を口遊んで

『長い劍をさげて、お馬に乗つた、えらい兵隊さんに、早くなりたいなあ』
と獨言をいつてゐたことも度々であつた。

(ハ) 青年時代

遠大な理想を抱いて、それへの突進の道程として、上級の學校へ進みたたくてたまらなかつた君は、小學校を四年で卒業すると、其の邊の青年達と同様に、村の機業工場に働かねばならなかつた。かゝる場合、子供ながらも家の事情を辨へてゐた君は、自分の持つてゐる理想や、希望など、母親にさへも申出さなかつた。總ては運命だ、之を開拓して行くのが、俺の力なのだ、一切をあきらめて、丁年になるまで、同じ工場に小言一つ言はず、只黙々として忠實に働いた。村の人からは模範青年だと稱へられ、工場主からは度々賞與金を貰つた。此等の金は工賃とあはせて、相當多額のものであつたが、君は決して無駄使をせず、總てを貯金した。

斯くの如く濡良著實でしかも無口で眞面目に働く個性を持つた君は、村の青年達が毎夜黄色な聲を絞り上げて、はしやまはまる間にも、そうした事を羨みもせず、與へられた小さき居間の片隅に、豆ランプを便りとして、黙々として思索に耽り、讀書を唯一の樂みとして、他日の成功を目ざし、夜のふけるのも知らなかつた位であつた。子煩悩の母は

心配して、時々

『風をひくから、もうお休み』

と、注意すると、孝心な君は言はるゝ儘に、おとなしく寢床に入り、兩親の寢靜まるを待つて、私かに起き出で、机の前に書を置き、まんじりともせず、東の空の白むのに驚いて、床の中にもぐり込んだことの幾度か。

かゝる有望に燃ゆる好學の青年をして、其の望むが如く學業に親ませたならば、必ずや、今一段と國家有用の材となつたであらう。思へばいと惜しき次第であつた。

兎角するうちに村の一部には早婚の風習があつたので、君もその渦巻の中に捲き込まれて、君の將來を思ふ父母のはからひで、近村の中藤島村寺前の某家に養子に往つた。かゝることは勿論理想にあこがれてゐた君の望みではなかつた。しかしながら父母并に養家の手前之を口に出すことが出来ないうで、懊惱の日が幾日となく續いた。されど何時までも斯うして居るべき身ではないと決心の躰を固め、或日遂に養家の人々の前に打明けて、その了解を求めた。かねて君の性格を知つてゐた養家の人達は、到底その決心をまげ得べくもないので、名残惜しくも之を承諾したのであつた。

爰に於て君は養家を出で、獨立獨歩の身となることが出来たから、青雲の意氣に燃えつゝ、仕事の暇々は勿論毎夜研學に勉めた。そのうち大正二年六月八日慈父勘右衛門は五十八歳を一期として、歸らぬ旅に赴いた。孝心深き君は悲歎の涙にくれつゝ、益々自修獨學に力を注ぎ、無き父の位牌の前に將來の出世を誓つたのである。

(ニ) 徴兵検査―入營

大正四年君年二十一、愈々丁年に達した。徴兵検査に出頭すべく令狀を受取つた君は、大に悦んで當日検査場へ出頭した。

子供の頃から頑丈な體軀であり、病氣一つかゝつたことのない君は、無論甲種合格であつた。幼少より軍人が好きで將來立身の途を是非此方面にと、志してゐた君は、かねて斯くあるものと信じてはゐるたものゝ、頗る満足して、鬼の首

でも取つた様に、悦び勇んで家に歸つた。然るに天公何等の譖謔ぞ、其の後の抽籤に於て相憎籤のがれとなつた。前夜來あこがれの軍隊に入營を夢みつゝ、悦び勇んでゐた君は、之を聞いて頗る落膽し、張り詰めてゐた勇氣も忽ち碎け、爾來青年らしい元氣に充ちた顔も血の氣は失せて蒼白くなり、頑丈な體も日に月に衰へ行き、はたの見る目にも痛ましき限りであつた。母や兄達が心配して色々と思つたが、君は只机に憑れて兩手で頭をかゝへて、男泣きに泣きながら、悶へ苦しむのみであつた。

かくて十一月の末が來た。他の若人達は、勢よく入營の門出をする

『さようなら、御機嫌よう。』

『しつかりやつて來ます、皆さん御體、御大事に、』

心持紅潮した顔で、元氣な青年達は、勇んで郷關を立出する。君は齒ざしりして残念があつた。併しがら天はかゝる若者を決して見棄はしない、其後十數日にして突然入營の令狀が野中家に舞込んだ。補缺として入營を命ぜられたのである。折しも家に居つた君は之を受取つて、夢かと思はれ悦び怪みつゝ、馳せて母や兄に示し、早速入營の準備に取りかゝつた。

愈々君の宿望が達せられたので、一家は急に明るくなつて、和氣霽々の裡に數日を過した。聽て十二月二十日と云ふ日に、折柄の吹雪を冒して、運ぶ足並みいと軽く、村人の歡呼の聲に送られて、目出度歩兵第三十六聯隊に入營した之よりして武人としての君の生涯が始つた。

(ホ) 現役兵時代

當時現役兵の入營期日は十二月一日であつたが、前述の如く、君は定期入營の際生じた缺員に對し、其補缺として入隊したのである。

時に歩兵第三十六聯隊は、朝鮮守備の爲該地に派遣されてゐたので、君は其の留守隊に入營した。そうして在營數日

の後、まだ全く様子のわからない、此の新しい兵隊さん達は、指揮官の引率の下に、兵營出發、二十八日神戸港出帆、朝鮮守備に赴いた。かくて波風荒き日本海上で、明くる大正五年の一月元旦を迎へ、二日元山に上陸し、君は第十二中隊に編入された。爾來元山守備の任に服しつゝ、初年兵として第一期の教育を受け、居ること四箇月餘、同地出發歸還した。恰も初年兵第一期教育を受ける爲に朝鮮まで出かけて行つたやうなものであつた。此入營初頭から守備派遣の勤務に服したことは、爾後君の生涯を通じて、此種勤務に服することの多かつた一種の豫識とも見らるべきであつた。

軍隊に入つた君は、忠實熱心克く働き。教練、學科、體操、劍術等何をやつても他の人に後れをとらなかつた。成績は勿論優秀であつた。從て十二月一日には歩兵一等卒申付られ更に上等兵を命ぜられた。

上等兵となつてからの君は、青年時代、自修勉學の底力が益々現れて。其伎倆愈々向上進歩し、著しく上官の注目する所となつた。加ふるに、軍人として身を立て、以て君國に御奉公しようとの宿志を抱いて、入つて來たのであるから其の働振りも亦他の入隊とは大に違つてゐた。聽て再服役の志願も許可せられ、伍長勤務を命ぜらるゝに至つた。

(ヘ) 伍長軍曹時代

大正六年十二月一日君年二十三、歩兵伍長に任じ、歩兵第三十六聯隊第十二中隊附を命ぜらる、爾來内務班長や、初年兵の教育、其の他諸般の勤務に盡瘁し、著々成果を揚げ、大正八年十二月一日更に歩兵軍曹に進んだ。

此間大正八年四月朝鮮に於ける騷擾事件の爲、聯隊の一部が該地に派遣せらるゝこととなるや、君は四月七日選ばれて第五中隊附に轉じ、再朝鮮に赴くことゝなつた。

かくて九日敦賀港出發、十一日釜山上陸、警備の爲黃海道沙里院の守備に任じ、十月轉じて載寧の守備に服した。翌九年四月選ばれて補助憲兵の教育を受け上官の信任も頗る厚く、また其の人格伎倆は深く部下の信頼する所となつた。

朝鮮に在ること一年有餘、大正九年四月末交代歸還、五月一日復第十二中隊附に轉じた。次で十一月に至り大正八年朝鮮守備の勤務に依り金貳拾五圓を賜り、大正三乃至九年戦役従軍記章を授けられた。時に年二十六。

大正十年三月露領派遣軍編成の令下り。歩兵第三十六聯隊は、四月七日七尾港を出發した。君また軍に従ひ、十二日浦潮港上陸。浦潮派遣軍に編入せられ、奮勵努力各地の守備に服したが、残念にも九月になつてから、病魔の冒す所となり、十八日遂に入院、翌月十七日漸く全治退院し、引續き奮勵勤務に執掌しつゝあつたが、教育、勤務其の他の關係上内地に歸還を命ぜられ、十一月五日浦潮港出發、八日敦賀港歸着。歩兵第三十六聯隊留守第三中隊に配屬。爾來初年兵の教育其の他留守隊の繁多なる諸勤務に奮勵すること約十箇月であつた。

大正十一年八月聯隊歸還し、復員完結後、諸般の整理が一と先づ片付くと、九月君は第六中隊附に轉じた。十一月一日西比利亞出兵事件の勤勞に依り金壹百七拾五圓を賜る。

大正十二年九月一日關東地方大震災あり、東京横濱被害激甚、死傷數萬に上り、頗る慘烈を極め、人心の動搖甚しく遂に戒嚴を令せられ、國內各地より軍隊を招致し警備に任せしめらる。我が歩兵第三十六聯隊も亦此命を受けた。此に於て君は臨時派遣部隊に屬して任に赴き、九月七日より十月二十三日に至る迄、京濱地方に於て戒嚴に關する諸般の勤務に盡瘁した。

斯の如く入營以來の成績優秀にして、功績頗る顯著であつたので、大正十三年七月二十六日勳八等に叙し、瑞寶章を授けられた。時に君年三十。

此の年八月六日第二大隊書記を命ぜられ、大隊本部に勤務することになつた。是れ固より君の人格伎倆に因るものにして、其青年時代に於ける勉學と、少時より書に巧なりし特有の技能とが、此選抜に與つて力あつたことは勿論である。

十月君は妻帯した。

(ト) 曹長特務曹長時代

大正十四年、君年三十一。八月六日歩兵曹長に進み、十三日聯隊書記を命ぜらる。元龍池中のものならず、君の人格

伎倆は愈々現れて來た。

此の年、長女チエ子生る。

大正十五年四月二十一日多年勤勞の成績優秀なるにより下士勳功章を附與せられ、昭和二年營外居住を許可された。

此に於て今立郡神明村に居を卜し、兵營に通勤した。

昭和四年八月二日歩兵特務曹長に進み、第一中隊附を命ぜらる、階級の進むに従ひ、君の青年時代に培はれたる底力は益々其光を現はし、人格伎倆共に圓熟大成の域に進み、聯隊内の准士官並下士官中最優秀なる人物として、上下信頼の的となつた。

中隊に於ける特務曹長の地位は、頗る重要であつて、其の人を得ると否とは、中隊の團結と成績とに影響する所甚大なるものがある。從て君の如き立派な特務曹長を得た中隊は實に上下共に頗る任せであつた。

今君と共に死生の巷に立ちたる第一中隊長菅原中尉の記述により、君の人格伎倆並平常の勤務振りを左に示さう。

一 性格

故少尉の人と爲りは温厚篤實、才能人に優れ、而かもたかぶらず、卑下せず、部下に臨むには寛嚴宜しきを得、上司に對しては義を盡し理を究めて、目的を貫徹せなければ止まぬといふ稀に見る立派な人格の持主であつた。

曹長となり、特務曹長となるに従ひ、人格は益々圓熟し活殺自在の領域に達し、軍人の模範として萬人景慕の的となつた。『體軀は左程偉大ではなかつたが、頑丈にして嘗て病氣した事なく、實に一個の鐵塊の如き、がつしりした人であつた。そうして如何なる艱苦も物ともせず、一難を経る毎に益々勇氣百倍し、喜んで之を迎へた。かくして君の人格は大成したのである。』

予は少尉とは昭和六年夏以來、中隊に於て起居を共にし、特に御世話になつたので一層感慨が深い。

二 執務振

黙々汝々として働く人と云へば、故少尉を惜いて他にないと思ふ。其の事務を執るや机上山積の書類も忽ちにして處理し又書類の作成に當つては暫くの間に數十枚を完成すると云ふ程であつた。殊に君は稀に見る能書達筆で、しかも練達の域に進み、其の才幹と相俟つて、事務家としての執務振は、故三反崎少尉(上海附近の會戰に於て名譽の戦死を遂げた故歩兵中尉三反崎乾君のことと共に、聯隊の雙壁と歌はれたのである。)又教練演習に際しては、卒先部隊の先頭に立つて、自ら範を示し、無言の裡に部下を信服せしめ、其指揮振も亦堂に入つたものであつた。

君の才幹は夙に聯隊に於て認められ、曹長に進級と同時に、本部書記として拔擢せられ、繁雜なる各般の庶務を一手に引受けて處理したのである。かゝることは君の如き人物でなければ出来ないことであつた。

特務曹長に進級と同時に、第一中隊附となり、中隊の人事は細大となく腦裏に收めて、諸般の勤務に盡瘁し、處理公平適切其の衡を失せず、晨に星を戴いて出で夕べに月影を踏むで歸ると云ふ、模範的勤務振であつた。しかし、かゝる精勵努力の間にも、尙友人のいろ／＼な世話をすると云ふ餘裕を持つて居つた。

三 情義

昭和三年の夏、君が聯隊本部に居る時、予は週番勤務として、君と同時に野營の殘留を命ぜられたことがあつた。或夜遅く予は一身上の事で、急に處理しなければならぬ事が出来た。相談する相手もなく止むなく傳令を以て君に我が意を通じた。すると君は取敢へず私服の儘、岡野の私宅から駆けつけて仕事をしてくれた。その情義の深い君の夏衣の姿が今でも目に見へる様で忘れられない印象を残してゐる。中隊附となつても、總て此の調子で部下を取扱つたので、君の恩義に心から感謝せぬものはない。

殊に中隊の將校と下士官以下との間に立つて慇懃斡旋に力め、中隊の團結を鞏固にし、和氣霽々の中に打つて一丸とした功績は偉大なものであつた。

右の記事は實に、我が特務曹長野中外吉君の人物を描き出して遺憾なきものである。

(チ) 家庭

君の生家は、長兄勘四郎の職業の關係から君の入營後森田村に居を移し、大正三年九月四日森田村八重巻第三十七號一番地に轉籍した。

此の年十月十日君は、中藤島村舟橋、中村久左衛門二女ステヲを娶り、兵營に近き今立郡神明村に下宿を置いた。翌十四年十一月十八日長女チエ子生る。昭和二年九月一日營外居住となるや、神明村水落第八十七號四番地に居をとし、爾來此處に居住した。翌三年五月三十日次女幸子、同六年六月四日長男利男が生れた。

君は中隊家庭に於て、よく下士官、兵をいたはり、情義の厚きものがあつたばかりでなく、其私的家庭に於ても雙愛の契り固く、人の見る目も羨ましき程であつた。また誠に子煩悩であつて、演習等で休憩の際、他の者が飲み食ひや、つまらぬ俗事の話など持ち出すときでも、巧に話題を子供のことに轉するのが常であつた。又宴會などの歸りに、子供への手みやげを提げて居るのを見受けたことが一再ではなかつた。出征後、家庭への通信中にも子供に關して特に書いて來たことは屢々であつた。

(リ) 上海出征

昭和七年二月二日第九師團に動員の令下るや、中隊は幹部の轉出入多く、しかも動員業務の爲、上下多忙、人心何となく落ち着かない。此間に在つて君は靜寂其の物の如く、例によつて自若として不眠不休の活動を續けた。

『何一つ遺漏なく立派に出征部隊として、第一中隊が出發出來たのは、全く君の御蔭だ』と第一中隊長は言つて居られる。

かくて二月五日には動員完結し、午後四時三十分聯隊長の軍裝檢査並訓示があつた。翌六日は出發の前日であり、先發する者もあつたので、何かと忙しがつたが、それでも、明朝は愈々出發せねばならぬから、夜の十時に、動員下令以

來、始めて家に歸り、集つて來た親戚知己と訣別をなし、眠に就くと間もなく、七日午前四時三十分起床、食事を了へ
『俺は十七年も軍人生活を續けて來たが、其の間これとて、御國の爲に盡すことが出來なかつた。然るに、此度は愈々
軍人の本分を全ふることが出來るかと思ふと、誠に本懐の至りである。』
と固き決心を夫人に語り、悦んで裝を整へ妻と三人の子供とに別を告げ、六時出勤した。あゝ、これが親子夫婦永遠の
訣れであつた。

君は出勤すると、直に中隊を整別させた。七時大隊は集合する。八時兵營出發、九時鯖江驛に着し、身動きもならぬ
やうな見送りの群集に圍まれ、熱狂的な感激の渦卷の裡に汽車に乗つた。かくて縣民一同熱誠を込めたる萬歳を浴び
つゝ出發し、更に沿道各驛の盛大なる歡送に一層深き衝動を受けつゝ、二月八日午前六時十二分廣島驛に着し、横川町
二丁目永田幾藏方に宿營した。中隊の業務を一身に背負ふて働いてゐた君には、二月二日以来寸分の暇もなかつたので
當日の君の日記を見ると、

『本日は内命以來一週間日ニシテ入浴スルコトヲ得、人間ラシクナッタ』
と書いてある。以て如何に業務多端の間に奮勵盡瘁したか、窺はれる。

九日には侍從武官の御差遣あり、聖旨の優渥なるに感激し、愈々獻身殉國の決心を固め、宿舍の人々と記念撮影をな
し、生家の母と兄とに左の書信をかいた。

『前略……出發時に、とてもあはれんと思つたのに、目の前に會つた時は嬉しかつたね。有り難く候。』

大阪では小生の名を書いた旗(コノ旗ハ支那ノ各地ヲ跋渉シテ持ツテ歸ルツモリ)を立て、出て居つた二人共に別れ
が出來た。握手もした。尙近所の人も澤山見送つて呉れた、結構でした。

八日午前六時廣島に着、八日九日宿營、十日の午後出帆の豫定。今少し暇があるので、内地からの音信も終りだらう
と思つて、書いたのです。尙宿舍の人が寫した寫真ですが送ります。こんど上海に上陸すると、手紙は出すつもりで

すが、敵と戰爭をやらねば氣が濟まん。一戰争濟んでから出す豫定で居ります。見附や竹内様方へよろしく、竹内の
舍弟も停車場で一寸あはれたが、涙で送つて呉れた、感謝す。

残りの妻子は只兄上たよりで、又兄上はよい人だと安心して残つて居るのですから、どうぞ力になつて、お世話を
願します。

云ふことはあまりありません、よろしく。

元氣旺盛、出帆が出來る

萬歳、々々、々々

二月九日

廣島にて野中外吉

母上様

兄上様

これで母や兄に言ふべきことは言ひ、頼むべきことは頼むだ。晴ればれした氣持で、十日運送船八雲丸に乗船し、午
後四時、市民の盛大なる歡送裡に出帆した。此間君は職務の關係上、萬事に周到なる注意を拂ひ、中隊を一身に荷ひ、
日夜奮勵したことは勿論である。

十一日は紀元節である、午前九時門司につき、一同甲板上に集合し、君が代合唱 天皇陛下の萬歳を三唱し奉り、午
後五時出帆した。船内で、不足の兵器や被服糧食の支給を受け、また、いろ／＼の準備訓練を行ひ、狀況急を要するの
で、船足を急ぎつゝ、十三日午後四時揚子江口に到着し、十四日海軍の掩護の下に、午前九時上陸を開始し、正午君の
大隊は一切の上陸を終り、上海公大第二工場内民家に宿營した。前方には時々銃砲聲が聞える。君は中隊長と同じ宿舍
で、傳令兵二名と共に同工場内第九五號館宅岡本清吾方に宿つた。』
愈々戦場に着いたのである。此日中隊全員は頭髮の一部を切り取り、一人づゝ封筒に入れて最後の形見となし、遺言を

書いて共に封入した。君も之を最後と通信紙の切片に、次の如く訣別の辭を書いて、頭髮の一部と共に包み込み、いよ／＼思ひ残すことなしと、元氣よく任務に就いた。

『本二月十四日午前九時上海に上陸致候に就ては、愈々戦線に立ち、御奉公する機會に遭遇す、實に本懐至極に存候何時戦死するも思ひ残す事無之、只片身として頭髮のみ残り置く可く候

野 中外 吉

野中ステヲ様

尙裏面に

『子供の養育頼む

二月十四日午後七時上海にて認む

南无阿彌陀佛

と書き封筒の表には

野中ステヲ

同 利 男 殿

とあり。一讀決心の程が、ほの見ゆるのみならず、之を夫人と共に、未だ頭是なき一子利男君に宛てたことを思ふとき、後繼者に對する精神的遺言であると、うなづかれて、忠誠の眞心を我子に傳へんとする、皇道精神の躍如たるを見覺えず感涙に咽ぶのである。

此遺言及頭髮は中隊に於て預り、凱旋の後中隊長から遺族に送られたのである。

十五日は中隊長と共に上海市街の巡察をなし、十六日少閑を得て留守宅及親族に宛て、左の手紙をかいた。

『無事十四日午前九時上海に上陸。當日は日本租界内に聯隊は宿營す。敵は既に上海市街の一里位の處にある。當分

の中は上海にて守備するならん。

郵便の取扱も目下未定に付、不取敢國に戻る御用船に托す。本十六日未だ上海日本家屋に宿營中なり。

子供に氣を付けること

夏服を通知次第送られる様準備し置かれたし

當地の氣候は内地とは暖い位、毎日天氣續なり

二月十六日

上海にて 野 中外 吉

野中ステヲ様

『上海は極めて平靜にして、二月十四日午前九時無事上陸致しました。當夜は上海の日本人宅に宿營致しました。上陸より本十六日まで未だ上海に宿營中です。

將來は第一線に出るものと思ひ候も未定、氣候は内地とはまだ暖い位です。御安心被下度

詳細は後便にて

堀川へも竹内へも出せなかつたから、よろしく申して下さい。

二月十六日

野 中外 吉

野中勘四郎様

『拜啓、今般支那派遣に際しては、多大なる御聲援と格別なる御懇情とに預り難有御厚禮申上候、依御蔭途中無事、十四日上海に上陸仕候間、御休心被下度候、此の上は誠心誠意奉公の一念を以て終始仕り御後援の御期待に背かざる様奮勵努力致度存候間、何卒御放念被下度候。尙出征中は萬事宜敷御願申上候。先は御禮旁御撈まで如斯に御座候葉書が品切で連名にて出します、悪しからず。氣候は内地とは暖かく、天氣も良し

久吉様の方へも、はがき不足で出せないから、よろしく申して下さい

二月十六日

野 中 外 吉

中村久左衛門殿

中村 文 作 殿

野中勘四郎は君の兄であり、中村久左衛門は夫人の父である。これで故國への音信は、一先づかたついたので、此後内地への通信は全く出してない。また事實多忙でもあつたらうし、君としては来るべき戦闘に於て、君國の爲に一意奮闘する外、最早言ふてやるやうなことは全然なかつたのであらう。

十七日君は大隊の兵員百名を引率して、午前七時より午後三時に至るまで、飛行大隊長鈴木中佐指示の下に飛行場の整備作業に盡瘁した。

十八日には愈々近日戰場へ出るかも知れないと云ふので、第一線の視察に赴いた。その状況を君の日記によつて、左に紹介しよう。

『午前十時ヨリ第一線視察ヲナス。自動車ニテ伊藤少尉、西島少尉、及傳令二名ト共ニ、上海東北端義勇隊射撃場ニ至リ、視察セルモ敵兵發見セズ。該地附近ハ、歩兵第十九聯隊及陸戰隊ニテ嚴重ナル警戒ヲナシアリ。海軍ニ於テハ榴彈砲數發ヲ發射中ナリ。北四川路附近ハ曩ニ陸戰隊(攻撃)交戰場タルヲ以テ、家屋ハ全部半壞ニシテ悲惨タルモノナリ。亦死骸ノ山ヲナシアリテ。實戰ノ氣分充滿ス。』

かくして悲憤慷慨の意氣に燃えつゝ、宿舎に歸り午後五時三十分より中隊長と共に、舍營衛兵(歩哨線)の巡察をなし、雑務を處理し、かなり多忙であつた。

翌十九日は午前九時より梯子を以てする渡河演習をなす。續て出動準備をなす。背囊入組品の襦袢袴下及毛布天幕等は皆梱包した。愈々明二十日午前七時を以て、第十九路軍が上海東北側より二十軒の地點に撤退せざるときは、攻撃を

開始しようと思ふのである。

(又) 上海附近の會戰に於ける勇戰と壯烈なる其の戦死

愈々二月二十日が來た。敵は我が要求を肯ぜなんだ。我が軍は、かねての部署により攻撃に着手した。第一中隊は戰闘開始以來或は大隊の豫備隊となり、或は第一線となりて行動したが、此間君は砲煙彈雨の中を能く勇敢に前進し、功績多かつた。續て二十三日二十四日は連日連夜金家橋附近の敵陣地に對し、勇奮至近の距離に薄り、第一線陣地の構築竝掘擴、交通壕の築設、突撃陣地の構成等敵の銃砲火の掃射下にありて、從容部下を督して不眠不休の活動を續けた。

二十五日は第二次總攻撃を決定したのであるが、同日午前機を見て一舉に突撃を敢行せんとし、之が準備中、午前十一時、大隊長より河川偵察の命があつた。中隊長は之を兵に命じたのであるが、君は率先立ちて、單身進んで、其の任に當り、敵の猛烈なる銃砲彈の中を物ともせず、沈着機敏に動作し、克く地形を利用して、其の目的を達成し、中隊の突撃を容易ならしめた。然るに續て更に奮進突撃を敢行せんとするに際し、附近に炸裂せる敵榴霰彈の破片により腰部に貫刺を受け、畑地の中に斃れた。されど剛氣の君は之にひるまず、體を起して前進せんとしたが、創傷重くして、身體の自由を失ひ、遂に起つことが出来なかつた。覺悟の君は最苦痛多き腹部の負傷にも拘らず、平然自若斃れたる儘、天皇陛下萬歳を唱へてゐたが、聽て我が陣地に收容せられ、應急手當の上翌二十六日上海第九師團第一野戰病院に送られたが、二十九日終に同病院に於て落命された。

君が率先身を挺して進んで危地に入りたる、崇高なる犠牲的精神は、實に軍人の龜鑑であるり、負傷後に於ける立派なる態度もまた眞に敬服の外はない。尙第一中隊長は次の様なことを述べて居られる。

『江南の如き平坦な戰場に於ては、第一線も豫備隊も危険は同一だ。君がその危険の中にあつて最後迄中隊の團結に努め、中隊の大黒柱となり、細大となく采配をした、人知れぬ苦勞は、知る人とぞ知るのだ。』

君が擔任せる中隊の陣中日誌の記載の跡を見るに、君が戰場の露と消えた二月二十五日の朝迄、墨痕淋漓として、例

の達筆を以て記されてあるのを見て、君の平時の行動を知るもの、誰か暗涙にむせばないものがあらうか。あの寸隙もない砲煙彈雨の中で、死を鴻毛の輕きに比し、一死殉國の念に燃えながら、而も沈着剛膽にして、死生の間毫も平靜を失はず。最得迄其の職責を先したる其の行動が紙面に彷彿として居るではないか、此一事を以てしても君の立派な性格を知ることが出来る。

と、君死するの日を以て歩兵少尉に進み、其の偉功は、功七級金鷄勳章並年金壹百五拾圓及勳六等單光旭日章を授けられた。

(ル) 墓碑

君の遺骨が、郷里に到着するや

森田村は村葬を以て之を禮し、四月四日同村第一小學校に於て盛大なる葬儀を執行した。昭和九年遺族親戚相議りて、君の墓碑を吉田郡東藤島村藤島眞宗大谷派超勝寺境内に建てた。正面の『故陸軍歩兵少尉正八位勳六等功七級野中外吉之墓』と刻せられたる文字は、出動當時の歩兵第三十六聯隊長大賀一男大佐（現時少將）の筆に成り右側面には「昭和七年二月二十九日戦死、陣中院釋常忠」と刻し左側面には略歴、裏面には戦功が銘記されてある。

略歴

昭和六年日支風雲急ヲ告ゲ、翌七年二月二日第九師團ニ動員下ルヤ、歩兵第三十六聯隊第一中隊附トシテ江南ノ地ニ出征ス。二月十四日上海ニ上陸、爾來上海東部及江灣鎮北方地區ニ轉戦、同月二十五日金家壩附近ニ於テ敵彈ヲ爲腹部貫銃創ヲ負ヒ、護國ノ鬼トナル。同日歩兵少尉ニ任ゼラル。

戦功

資性豪毅ニシテ砲煙彈雨ノ中ニ勇戦奮闘シ、身ヲ以テ部下ニ範ヲ垂レ、或ハ猛火ノ中ニ部下ヲ指揮シテ散兵壕、交通壕ヲ構築シ、或ハ河川偵察ノ爲單身其任ニ當リ、沈着剛膽良ク其任ヲ果ス等、出征以來不眠不休ノ活動ヲナシ皇軍戦勝ノ基ヲ拓キタリ。其功績威大ナリトス、而シテ敵彈ノ爲起ツ能ハザルニ至ルヤ 陛下ノ萬歳ヲ唱ヘテ瞑目セリ。其行動眞ニ軍人ノ龜鑑ト謂フ可シ。

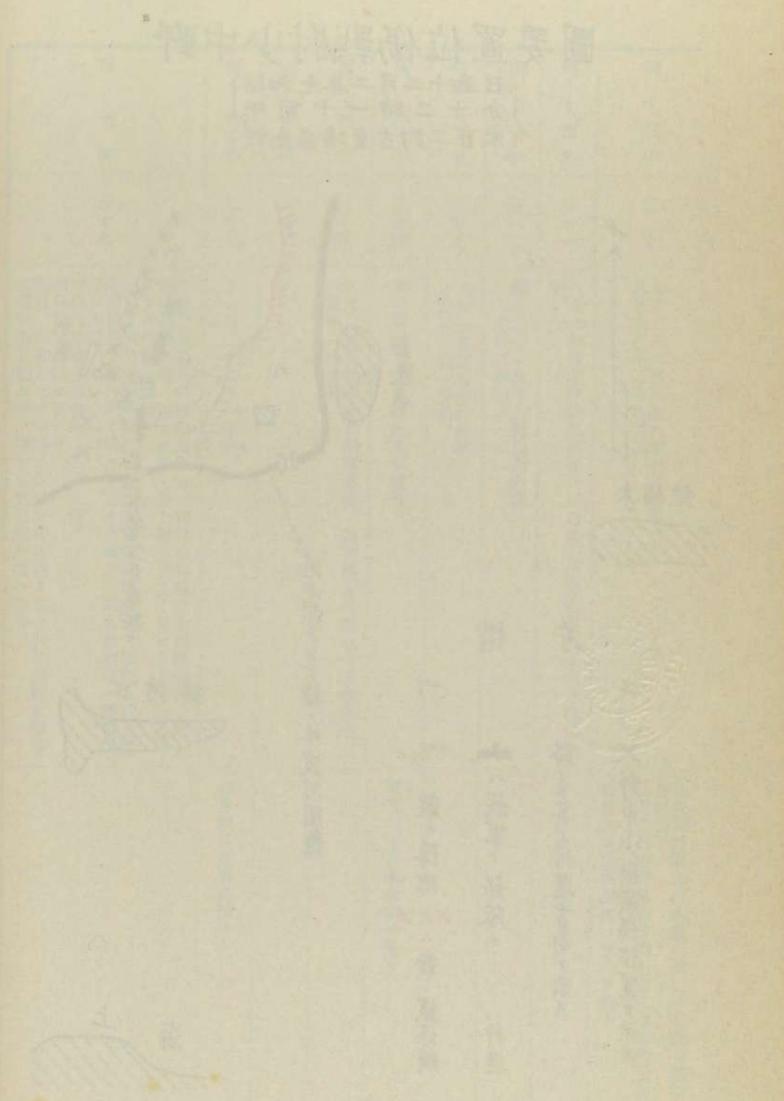
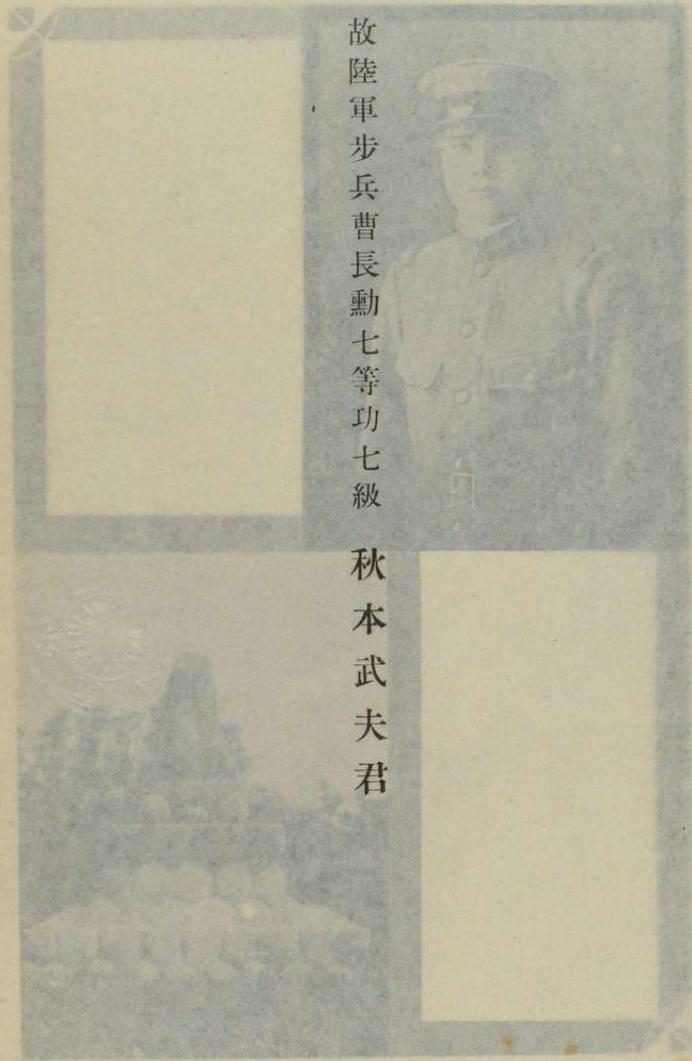
(ヲ) 年譜

| 年 | 年齢 | 陸軍ノ經歷 | 學歴其ノ他 |
|--------|----|---------------------------------|---------------------|
| 明治二十八年 | 一歲 | 六月七日吉田郡東藤島村泉田第二十番地野中勘右衛門五男トシテ出生 | |
| 同 二十九年 | 二 | | |
| 同 三十年 | 三 | | |
| 同 三十一年 | 四 | | |
| 同 三十二年 | 五 | | |
| 同 三十三年 | 六 | | |
| 同 三十四年 | 七 | | |
| 同 三十五年 | 八 | | 四月一日東藤島村立上中尋常小學校へ入學 |
| 同 三十六年 | 九 | | |

| | | | | | | | |
|---|--|---|---|--|--|--|-----------|
| 同 十二年 | 同 十一年 | 同 十年 | 同 九年 | 同 八年 | 同 七年 | 同 六年 | |
| 二十九 | 二十八 | 二十七 | 二十六 | 二十五 | 二十四 | 二十三 | |
| 七月二十日一零給。 九月七日ヨリ十月二十三日至ル間戒嚴地域内ニ於テ臨時派遣歩兵第三十六聯隊ニ在リテ戒嚴ニ關スル勤務ニ従事ス。 | 五月十二日歩兵第三十六聯隊留守隊第三中隊附。 八月十八日復員下令。 十一月一日西比利亞出兵事件ノ勤務ニ依リ金百七拾圓ヲ賜フ。 | 三月十一日露領派遣軍編成下令。 四月七日七尾港出發。同十二日浦潮港上陸。同日浦潮派遣軍ニ編入。各地ノ守備勤務ニ服ス。 七月一日二零給。 九月十八日依病入院。十月十七日全治退院。 十一月五日内地歸還ノ爲浦潮港出發。同八日敦賀港歸着。 十一月九日歩兵第三十六聯隊留守隊第三中隊へ配屬。 | 四月一日ヨリ十一月一日迄補助憲兵ノ教育ヲ受ク。 四月二十四日交代歸還ノ爲釜山出發同二十六日敦賀港歸着。 五月一日第二中隊附。 十一月一日大正三年乃至大正九年戰役從軍記章授與。 同日朝鮮守備ノ勤務ニ依リ金貳拾五圓ヲ賜フ。 同日三零給。 | 四月七日第五中隊附。 同九日朝鮮派遣ノ爲敦賀港出發。同十一日釜山上陸。懸擾事件ニ關シ警備ノ爲黃海道砂里院守備。十月二十九日陣營移轉ノ爲載寧到着。 十二月一日任陸軍歩兵軍曹。 | 五月五日交代歸還ノ爲元山港出發。同六日大阪港歸着。 十一月一日歩兵一零卒。同日上等兵。 | 十月十五日任陸軍勤務。 十二月一日任陸軍歩兵伍長。○歩兵第三十六聯隊附ヲ命ズ。 ○第十二中隊ヲ命ズ。 | 十二月一日一零給。 |

| | | | | | | | | |
|---|-------------------|--------------|-------|-------|------|------|------|--------|
| 同 十五年 | 同 十四年 | 同 十三年 | 同 十二年 | 同 十一年 | 同 十年 | 同 九年 | 同 八年 | 同 三十七年 |
| 二十二 | 二十一 | 二十 | 十九 | 十八 | 十七 | 十六 | 十五 | 十四 |
| 十二月二十日徵兵トシテ歩兵第三十六聯隊留守隊へ補缺入隊。 同二十八日朝鮮守備ノ爲神戸港出發。 一月二日元山上陸。同日歩兵第三十六聯隊第十二中隊編入。元山守備。 | 六月八日父勲右衛門病死(年五十八) | 三月上中等常小學校卒業。 | | | | | | |

故陸軍歩兵曹長勳七等功七級 秋本武夫君



故陸軍步兵曹長勳七等功七級 秋本武夫君

右の志計治君が昭和六年の十月半ば頃、富山市に於ける君の寓居を訪ねた。すると君はいと懇に志計治君を迎へ

「幸、今日は土曜日だし、明日の日曜も、よいあなばいに暇だから、是非今晚は御泊りなさい」

と、すゝめられたので、言はるゝ儘に一宿すると、翌日は志計治君を連れて、市内を隈なく見物せしめ、同夜復一宿を勤めて十一時過まで快談に耽つた。その時志計治君が

「軍隊といふところは、元氣な若い者ばかりで、中々教育に困ることも多からう、また規律も嚴格だから随分骨が折れるであらう」

と、言ふと、君は

「なめに 陛下に捧げてある身だから、自分の體で自分のもので無い。毎日の仕事や、命令は皆 陛下からの御命令だと考へてをるから、少しもつらくはない。そうして其の日の仕事は其の日の中に一生懸命にやつてのける。

自分が眞心こめて一生懸命にやつてをるから、部下の者も一生懸命にやつてくれる。外の人達も多分さうだらうと思ふ。お蔭で自分の中隊は銃剣術も射撃も聯隊で一番である」

と、會心の悦に満ちつゝ愉快に話したとのことである。

誠に貴い立派な、心掛である、此の美しい心掛を以て行はるゝ日々の教育訓練が實に日本軍をして忠勇無比の軍隊たらしむるのである。

(六) これでやつて来るぞ

昭和七年初頭、上海に於ける支那の侮日暴戻は其の極に達し、遂に第九師團の出勤となり、君は富山歩兵第三十五聯隊の中隊長として出征することゝなつた。

出征軍隊を乗せた軍用列車の通過する沿道は、到る所晝夜を別たす見送人が群集して、萬歳々に聲も洩れんばかりの有様であつた。其の熱誠なる見送は眞に涙ぐましく光景であり、送る者も、送らるゝ者も齊しく感激の涙に充ちてを

つた。

丁度君等の乗つてゐる軍用列車が、福井市志比口附近を通過する時、見送りの群集中に郷里林の人の居るのを見出し

た君は、車窓ら上半身を乗り出し、平素寡言沈黙の人なるに似ず、腰の軍刀を脱して打振りつゝ、

「おゝい、これでやつて来るぞ！」

と呼ばれたさうだ。以て當時の覺悟の程を推することが出来るではないか。

(フ) 墓碑

君が戦死の報に接するや、郷里東藤島村は村葬を以て之を禮することに決し、遺骨到着後四月三日、藤島區眞宗大谷派超勝寺に於て盛大なる葬儀を營んだ。續て嗣子清志君が君の墓碑を郷里林區の南端、越前電氣鐵道東藤島驛の傍に建てた。

陸軍歩兵少佐酒井君墓誌銘

君諱豐志、福井縣吉田郡東藤島村人父稱忠左衛門君其二男也、明治四十四年爲士官候補生入歩兵第三十五聯隊大正三年士官學校卒業其年任少尉補歩兵第三十五聯隊附尋叙正八位爾後參加朝鮮及西伯利派遣軍十四年累進大尉爲歩兵第三十五聯隊大隊副官、尋歷叙正七位爾後補同聯隊中隊長及臺灣歩兵第一聯隊中隊長昭和三年爲同聯隊附五年後補歩兵第三十五聯隊大隊副官尋叙從六位其翌年爲同聯隊中隊長九月滿洲事變之突發也其餘波及上海在支那正兵等之對我暴戻爲我陸海軍出動之所不得止、七年二月急我第九師團被派遣于上海、君爲其歩兵第三十五聯隊第九中隊長踴躍從軍上陸上海當時彼敵軍既築砲壘處々深塹濠備新銳銃砲等巧堅防禦攻之我軍亦稍有難色其月二十日夜襲擊孫家宅及顧家宅之敵也君立第一線率先指揮中隊勇戰苦闘少不撓作敵兵潰滅之因越而五日復攻擊敵本防禦陣地前後郭家宅也君猛然與部下將兵共拔劍突入敵陣、手斬數人劍銃相磨數刻使敵兵盡潰走既而遷師團之第三次攻擊也君受第一大隊長戰死之後指揮其大隊三月一日出于橫卒宅附近部署麾下將移突擊其利那敵砲彈破片貫君頸部敵兵雖爲麾下所擊退君終不能起此日進少佐叙正

六位勳四等功四級、君資性溫厚篤實信念堅固以毀譽褒貶不介意平素專爲部下訓育盡心力有專期與部下共捧一身報君國部下將兵亦誓期當事不惜身命於是乎前後數回之激戰皆能得奏其功亦當知非偶然又是可謂發揮我國武士道之本領垂龜鑑者且也君自上海與兒之尺書中有若欲面乃父則來于靖國神社之一語亦以足知其意君以明治二十五年五月生享年四十一配轉正氏名玉喜生一男一女曰清志曰信子男清志嗣余之於君同聯隊且在余部下能知悉君性格功績又痛惜其戰死諠不得不銘乃銘曰

滿腔赤誠。許國以身。每出戰線。卒先奮斃。其揮劍也。勢避鬼神。
身雖終斃。敵盡遺殘。與兒一語。以知君真。

昭和八年四月二十七日

陸軍歩兵少佐 板津直俊撰并書

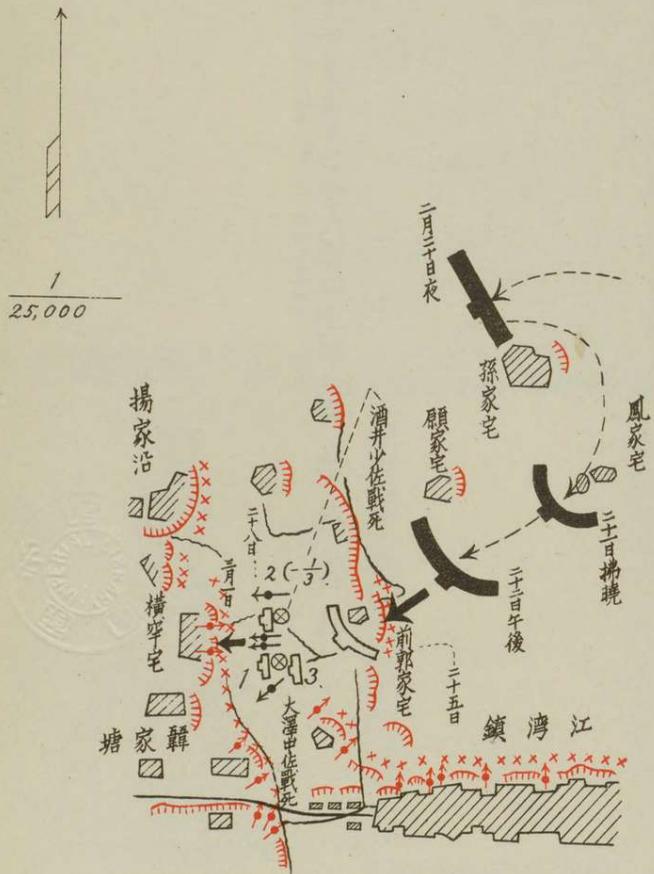
(ワ) 年譜

| 曆年 | 年 | 齡 | 陸軍 | ノ | 經歴 | 學歴 | 其 | ノ | 他 |
|--------|---|----|--|---|----|----|---|---|---|
| 明治二十五年 | | 一歲 | 五月十二日吉田郡東藤馬村林第四十八號十二番地ノ三酒井忠左衛門二男トシテ出生。 | | | | | | |
| 同二十六年 | | 二 | | | | | | | |
| 同二十七年 | | 三 | | | | | | | |
| 同二十八年 | | 四 | | | | | | | |

| | | | | | | | | | |
|-------|----|--|--|--|--|--|--|--|----------------------|
| 同二十九年 | 五 | | | | | | | | |
| 同三十年 | 六 | | | | | | | | |
| 同三十一年 | 七 | | | | | | | | |
| 同三十二年 | 八 | | | | | | | | 四月一日東藤馬村立上中尋常小學校へ入學。 |
| 同三十三年 | 九 | | | | | | | | |
| 同三十四年 | 十 | | | | | | | | |
| 同三十五年 | 十一 | | | | | | | | 四月八日母せき病死(年五十)。 |
| 同三十六年 | 十二 | | | | | | | | 三月上中尋常小學校卒業。 |
| 同三十七年 | 十三 | | | | | | | | 四月一日松岡高等小學校へ入學。 |
| 同三十八年 | 十四 | | | | | | | | |
| 同三十九年 | 十五 | | | | | | | | 三月高等小學校第三學年修了。 |
| 同四十年 | 十六 | | | | | | | | 四月一日福井縣立福井中學校へ入學。 |
| 同四十一年 | 十七 | | | | | | | | |

大澤大隊攻擊經過要圖

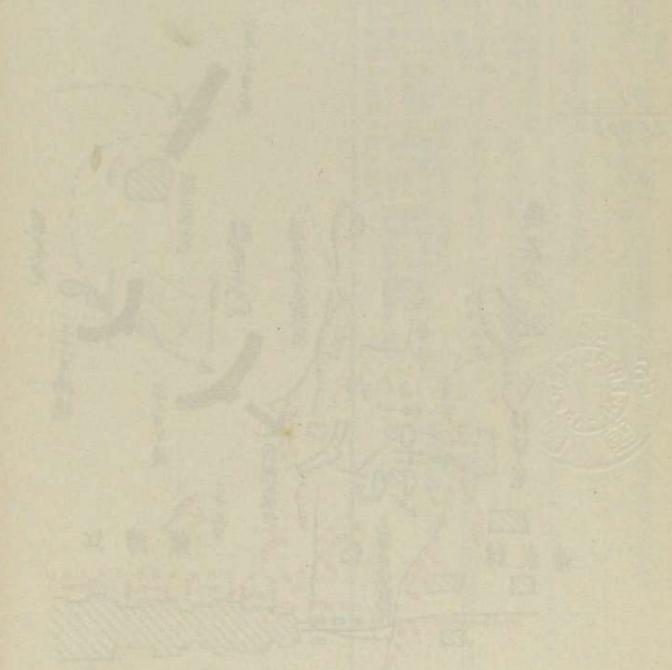
(自昭和七年二月十二日至三月一日)



| | | |
|--|--|----------------------------|
| 同 七 年 四 十 一 | 同 六 年 四 十 | 同 五 年 三 十 九 |
| 一月十五日叙勳五等授瑞寶章。 二月二日第九師團勳員下令。同日步兵第三十五聯隊中隊長被仰付。 二月十一日宇品港出發。同十五日上海上陸。同二十日ヨリ上海附近ノ會戰ニ參加。 三月一日任陸軍歩兵少佐。同日叙正六位(陸軍)。 同日中華民國江蘇省寶山縣江灣鎮北方後郭家宅附近ノ戰闘ニ於テ頸部貫通銃創ヲ受ケテ戰死ス。 同日昭和大七年事變ニ於ケル功ヲ依リ功四級金鷄勳章並年金五百圓及勳四等旭日小綬章ヲ授ケ賜フ。 | 三月三十一日一等給。 八月一日免臺灣公立宜蘭農林學校服務。同日免本職補歩兵第三十五聯隊大隊副官。同九日基隆港出發。同十二日神戸上陸。 三月十一日免本職補歩兵第三十五聯隊中隊長。 | |
| 二月二十七日石川縣石川郡野々市町二六一番地甲號ニ轉籍 | | 八月七日長女信子生ル。 |

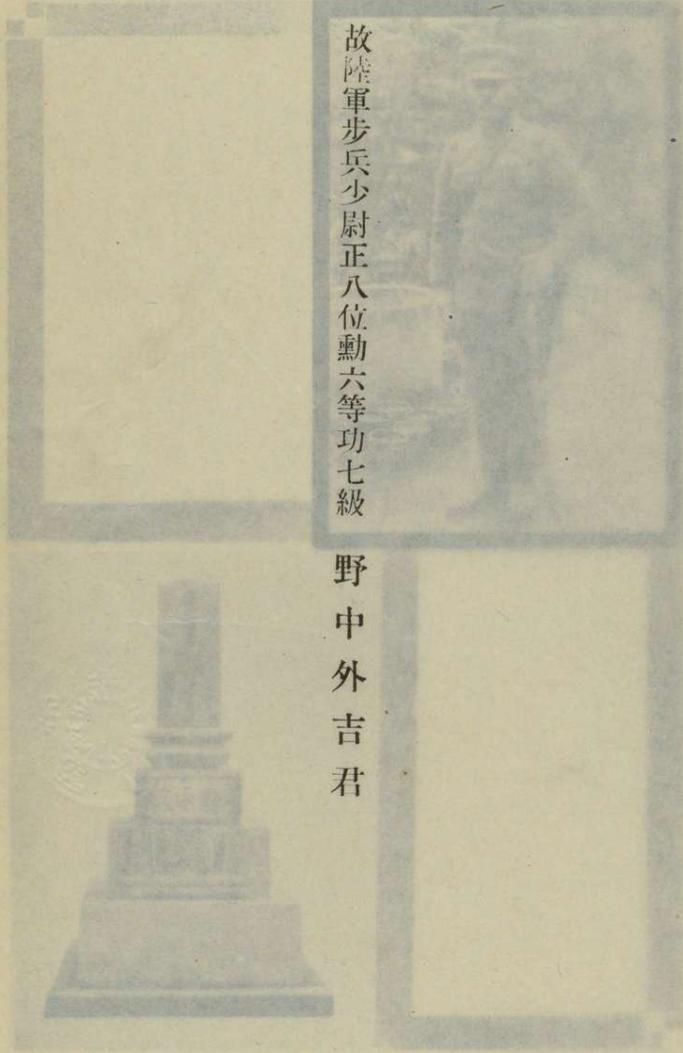
大正六年九月廿一日

（昭和六年九月廿一日）



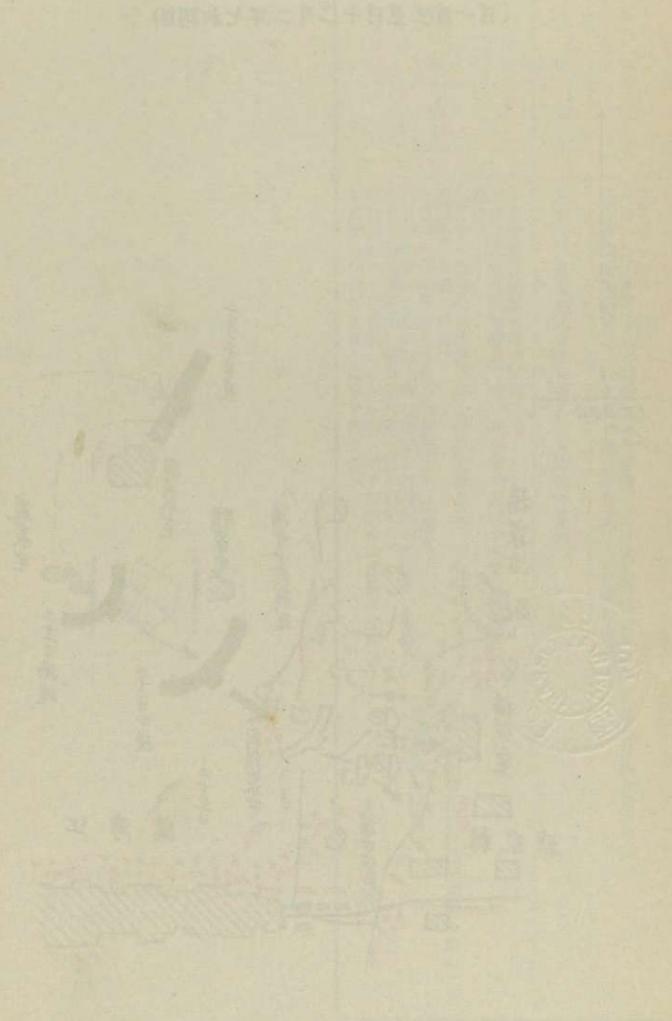
故陸軍歩兵少尉正八位勳六等功七級

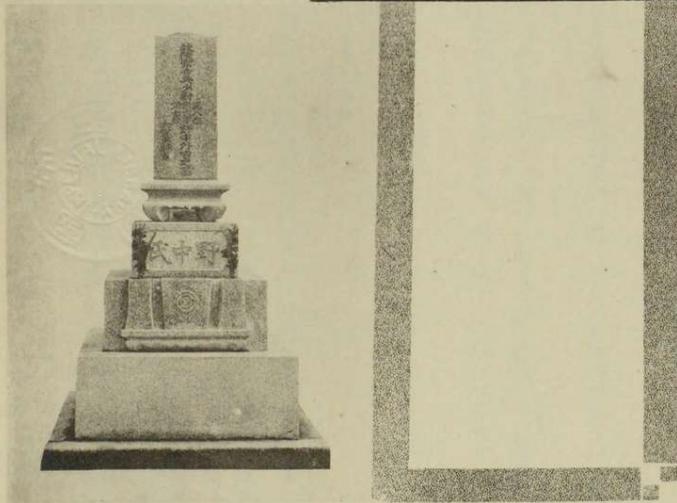
野中外吉君



故陸軍歩兵少尉正八位勳六等功七級 野中外吉君

大日本帝國陸軍少尉正八位勳六等功七級





姓劉軍建元也樹五人於燠六卷也子燧
禮中於吉孫

其二 故陸軍歩兵少尉正八位勳六等功七級 野 中 外 吉 君

(イ) 君の出生と其一家

時恰明治二十八年日清戦役の媾和成りて二箇月目、六月七日吉田郡東藤島村泉田、農、野中勘右衛門の五人目の男子として、我が野中君は呱呱の聲をあげた。

そうして勤勉にして正直、常に村人から仰の如き人とたゞへられてゐた父と、慈しみ深く質素勤儉克く夫を輔け、苦しき家計の間に多くの子女を鞠育しつゝある、けなげな母との圓滿なる家庭の中に、往く年月を丸々と太つて育つて来たのであつた。

父勘右衛門は大正二年君が十九歳のとき、五十八歳にて死亡し、兄勘四郎家を継ぎ森田村八重巻に轉住した。母しづは當年(昭和八年)七十一歳、尙躰鏢として家事の手助けをしてゐる。

(ロ) 幼少年時代

生れつき頗る温順であつた君は、絶えず我儘な友達にをさへつけられてゐたが、兄弟とはいと仲睦く遊び戯れてゐた。それだけ両親にとつては迷惑をかける様なことは殆んど無く、いつも「おまへは、いゝ子だから我慢をせよ」と慰められながら、それはそれは、なごやかな空氣の中にはぐくまれてゐた。

いつしか星移り月變り、其のあたりの子供達と連れ立つて、風呂敷を背負つて小學校に通ふ頃となつた。學校は上中小學校である。學校から歸ると、日のうちは両親の手助けをして、田や畑をかけたまはるので、腕白盛りの童べ達が晝の遊びに疲れて眠に入れる時分、幼少の君はせつせと机に向つて、豫習復習に勉めたのであつた。それ故、同じ級の兒童に對し、先生から

『あれ程、家の手傳をしながら、宿題一つ忘れたことのない、野中さんを、みんな手本にしなさい』

と度々言はれたといふことである。それ程少年の頃から好學の志深く物事に眞面目であつたから、君は、學校では勿論村中での賞め者であつた。

習字は殊の外好きで、讀書に倦いてくると直に紙上に筆を走らせた。其のすまびの鮮かさは當時隣家に居つた學校の先生が之を見て、『うちの中學校へ通ふ子供より、うまい』と感心した程であつた。

かうした君の毎日勉強する室の中には壁や戸にどこもかも軍人の繪畫や、肖像が貼りつけられてあり、又時々軍歌を口遊んで

『長い劍をさげて、お馬に乗つた、えらい兵隊さんに、早くなりたいなあ』
と獨言をいつてゐたことも度々であつた。

(ハ) 青年時代

遠大な理想を抱いて、それへの突進の道程として、上級の學校へ進みたくなつた君は、小學校を四年で卒業すると、其の邊の青年達と同様に、村の機業工場に働かねばならなかつた。かゝる場合、子供ながらも家の事情を辨へてゐた君は、自分の持つてゐる理想や、希望など、母親にさへも申出するだけの勇氣を持たなかつた。總ては運命だ、之を開拓して行くのが、俺の力なのだ、一切をあきらめて、丁年になるまで、同じ工場に小言一つ言はず、只黙々として忠實に働いた。村の人からは模範青年だと稱へられ、工場主からは度々賞與金を貰つた。此等の金は工賃とあはせて、相當多額のものであつたが、君は決して無駄使をせず、總てを貯金した。

斯くの如く濡良著實でしかも無口で眞面目に働く個性を持つた君は、村の青年達が毎夜黄色な聲を絞り上げて、はしやまはまる間にも、そうした事を羨みもせず、與へられた小さき居間の片隅に、豆ランプを便りとして、黙々として思索に耽り、讀書を唯一の樂みとして、他日の成功を目ざし、夜のふけるのも知らなかつた位であつた。子煩悩の母は

心配して、時々

『風をひくから、もうお休み』

と、注意すると、孝心な君は言はるゝ儘に、おとなしく寢床に入り、兩親の寢靜まるを待つて、私かに起き出で、机の前に書を置き、まんじりともせず、東の空の白むのに驚いて、床の中にもぐり込んだことの幾度か。

かゝる有望に燃ゆる好學の青年をして、其の望むが如く學業に親ませたならば、必ずや、今一段と國家有用の材となつたであらう。思へばいと惜しき次第であつた。

兎角するうちに村の一部には早婚の風習があつたので、君もその渦巻の中に捲き込まれて、君の將來を思ふ父母のはからひで、近村の中藤島村寺前の某家に養子に往つた。かゝることは勿論理想にあこがれてゐた君の望みではなかつた。しかしながら父母并に養家の手前之を口に出すことが出来ないうで、懊惱の日が幾日となく續いた。されど何時までも斯うして居るべき身ではないと決心の躰を固め、或日遂に養家の人々の前に打明けて、その了解を求めた。かねて君の性格を知つてゐた養家の人達は、到底その決心をまげ得べくもないので、名残惜しくも之を承諾したのであつた。

爰に於て君は養家を出で、獨立獨歩の身となることが出来たから、青雲の意氣に燃えつゝ、仕事の暇々は勿論毎夜研學に勉めた。そのうち大正二年六月八日慈父勘右衛門は五十八歳を一期として、歸らぬ旅に赴いた。孝心深き君は悲歎の涙にくれつゝ、益々自修獨學に力を注ぎ、無き父の位牌の前に將來の出世を誓つたのである。

(ニ) 徴兵検査―入營

大正四年君年二十一、愈々丁年に達した。徴兵検査に出頭すべく令狀を受取つた君は、大に悦んで當日検査場へ出頭した。

子供の頃から頑丈な體軀であり、病氣一つかゝつたことのない君は、無論甲種合格であつた。幼少より軍人が好きで將來立身の途を是非此方面にと、志してゐた君は、かねて斯くあるものと信じてはゐるたものゝ、頗る満足して、鬼の首

でも取つた様に、悦び勇んで家に歸つた。然るに天公何等の譎諛ぞ、其の後の抽籤に於て相憎籤のがれとなつた。前夜來あこがれの軍隊に入營を夢みつゝ、悦び勇んでゐた君は、之を聞いて頗る落膽し、張り詰めてゐた勇氣も忽ち碎け、爾來青年らしい元氣に充ちた顔も血の氣は失せて蒼白くなり、頑丈な體も日に月に衰へ行き、はたの見る目にも痛ましき限りであつた。母や兄達が心配して色々と思つたが、君は只机に憑れて兩手で頭をかゝへて、男泣きに泣きながら、悶へ苦しむのみであつた。

かくて十一月の末が來た。他の若人達は、勢よく入營の門出をする

『さようなら、御機嫌よう。』

『しつかりやつて來ます、皆さん御體、御大事に、』

心持紅潮した顔で、元氣な青年達は、勇んで郷關を立出する。君は齒ざしりして残念があつた。併しがら天はかゝる若者を決して見棄はしない、其後十數日にして突然入營の令狀が野中家に舞込んだ。補缺として入營を命ぜられたのである。折しも家に居つた君は之を受取つて、夢かと思はれ悦び怪みつゝ、馳せて母や兄に示し、早速入營の準備に取りかゝつた。

愈々君の宿望が達せられたので、一家は急に明るくなつて、和氣霽々の裡に數日を過した。聽て十二月二十日と云ふ日に、折柄の吹雪を冒して、運ぶ足並みいと軽く、村人の歡呼の聲に送られて、目出度歩兵第三十六聯隊に入營した之よりして武人としての君の生涯が始つた。

(ホ) 現役兵時代

當時現役兵の入營期日は十二月一日であつたが、前述の如く、君は定期入營の際生じた缺員に對し、其補缺として入隊したのである。

時に歩兵第三十六聯隊は、朝鮮守備の爲該地に派遣されてゐたので、君は其の留守隊に入營した。そうして在營數日

の後、まだ全く様子のわからない、此の新しい兵隊さん達は、指揮官の引率の下に、兵營出發、二十八日神戸港出帆、朝鮮守備に赴いた。かくて波風荒き日本海上で、明くる大正五年の一月元旦を迎へ、二日元山に上陸し、君は第十二中隊に編入された。爾來元山守備の任に服しつゝ、初年兵として第一期の教育を受け、居ること四箇月餘、同地出發歸還した。恰も初年兵第一期教育を受ける爲に朝鮮まで出かけて行つたやうなものであつた。此入營初頭から守備派遣の勤務に服したことは、爾後君の生涯を通じて、此種勤務に服することの多かつた一種の豫識とも見らるべきであつた。

軍隊に入つた君は、忠實熱心克く働き。教練、學科、體操、劍術等何をやつても他の人に後れをとらなかつた。成績は勿論優秀であつた。從て十二月一日には歩兵一等卒申付られ更に上等兵を命ぜられた。

上等兵となつてからの君は、青年時代、自修勉學の底力が益々現れて。其伎倆愈々向上進歩し、著しく上官の注目する所となつた。加ふるに、軍人として身を立て、以て君國に御奉公しようとの宿志を抱いて、入つて來たのであるから其の働振りも亦他の入達とは大に違つてゐた。聽て再服役の志願も許可せられ、伍長勤務を命ぜらるゝに至つた。

(ヘ) 伍長軍曹時代

大正六年十二月一日君年二十三、歩兵伍長に任じ、歩兵第三十六聯隊第十二中隊附を命ぜらる、爾來内務班長や、初年兵の教育、其の他諸般の勤務に盡瘁し、著々成果を揚げ、大正八年十二月一日更に歩兵軍曹に進んだ。

此間大正八年四月朝鮮に於ける騷擾事件の爲、聯隊の一部が該地に派遣せらるゝことゝなるや、君は四月七日選ばれて第五中隊附に轉じ、再朝鮮に赴くことゝなつた。

かくて九日敦賀港出發、十一日釜山に上陸、警備の爲黃海道沙里院の守備に任じ、十月轉じて載寧の守備に服した。翌九年四月選ばれて補助憲兵の教育を受け上官の信任も頗る厚く、また其の人格伎倆は深く部下の信頼する所となつた。

朝鮮に在ること一年有餘、大正九年四月末交代歸還、五月一日復第十二中隊附に轉じた。次で十一月に至り大正八年朝鮮守備の勤務に依り金貳拾五圓を賜り、大正三乃至九年戰役從軍記章を授けられた。時に年二十六。

大正十年三月露領派遣軍編成の令下り。歩兵第三十六聯隊は、四月七日七尾港を出發した。君また軍に従ひ、十二日浦潮港上陸。浦潮派遣軍に編入せられ、奮勵努力各地の守備に服したが、残念にも九月になつてから、病魔の冒す所となり、十八日遂に入院、翌月十七日漸く全治退院し、引續き奮勵勤務に執掌しつゝあつたが、教育、勤務其の他の關係上内地に歸還を命ぜられ、十一月五日浦潮港出發、八日敦賀港歸着。歩兵第三十六聯隊留守第三中隊に配屬。爾來初年兵の教育其の他留守隊の繁多なる諸勤務に奮勵すること約十箇月であつた。

大正十一年八月聯隊歸還し、復員完結後、諸般の整理が一と先づ片付くと、九月君は第六中隊附に轉じた。十一月一日西比利亞出兵事件の勤勞に依り金壹百七拾五圓を賜る。

大正十二年九月一日關東地方大震災あり、東京横濱被害甚、死傷數萬に上り、頗る慘烈を極め、人心の動搖甚しく遂に戒嚴を令せられ、國內各地より軍隊を招致し警備に任せしめらる。我が歩兵第三十六聯隊も亦此命を受けた。此に於て君は臨時派遣部隊に屬して任に赴き、九月七日より十月二十三日に至る迄、京濱地方に於て戒嚴に關する諸般の勤務に盡瘁した。

斯の如く入營以來の成績優秀にして、功績頗る顯著であつたので、大正十三年七月二十六日勳八等に叙し、瑞寶章を授けられた。時に君年三十。

此の年八月六日第二大隊書記を命ぜられ、大隊本部に勤務することになつた。是れ固より君の人格伎倆に因るものにして、其青年時代に於ける勉學と、少時より書に巧なりし特有の技能とが、此選抜に與つて力あつたことは勿論である。

十月君は妻帯した。

(ト) 曹長特務曹長時代

大正十四年、君年三十一。八月六日歩兵曹長に進み、十三日聯隊書記を命ぜらる。元龍池中のものならず、君の人格

伎倆は愈々現れて來た。

此の年、長女チエ子生る。

大正十五年四月二十一日多年勤勞の成績優秀なるにより下士勳功章を附與せられ、昭和二年營外居住を許可された。

此に於て今立郡神明村に居を卜し、兵營に通勤した。

昭和四年八月二日歩兵特務曹長に進み、第一中隊附を命ぜらる、階級の進むに従ひ、君の青年時代に培はれたる底力は益々其光を現はし、人格伎倆共に圓熟大成の域に進み、聯隊内の准士官並下士官中最優秀なる人物として、上下信頼の的となつた。

中隊に於ける特務曹長の地位は、頗る重要であつて、其の人を得ると否とは、中隊の團結と成績とに影響する所甚大なるものがある。從て君の如き立派な特務曹長を得た中隊は實に上下共に頗る任せであつた。

今君と共に死生の巷に立ちたる第一中隊長菅原中尉の記述により、君の人格伎倆並平常の勤務振りを左に示さう。

一 性格

故少尉の人と爲りは温厚篤實、才能人に優れ、而かもたかぶらず、卑下せず、部下に臨むには寛嚴宜しきを得、上司に對しては義を盡し理を究めて、目的を貫徹せなければ止まぬといふ稀に見る立派な人格の持主であつた。

曹長となり、特務曹長となるに従ひ、人格は益々圓熟し活殺自在の領域に達し、軍人の模範として萬人景慕の的となつた。『體軀は左程偉大ではなかつたが、頑丈にして嘗て病氣した事なく、實に一個の鐵塊の如き、がつしりした人であつた。そうして如何なる艱苦も物ともせず、一難を経る毎に益々勇氣百倍し、喜んで之を迎へた。かくして君の人格は大成したのである。』

予は少尉とは昭和六年夏以來、中隊に於て起居を共にし、特に御世話になつたので一層感慨が深い。

二 執務振

黙々汝々として働く人と云へば、故少尉を惜いて他にないと思ふ。其の事務を執るや机上山積の書類も忽ちにして處理し又書類の作成に當つては暫くの間は數十枚を完成すると云ふ程であつた。殊に君は稀に見る能書達筆で、しかも練達の域に進み、其の才幹と相俟つて、事務家としての執務振は、故三反崎少尉(上海附近の會戰に於て名譽の戦死を遂げた故歩兵中尉三反崎乾君のことと共に、聯隊の雙壁と歌はれたのである。)又教練演習に際しては、卒先部隊の先頭に立つて、自ら範を示し、無言の裡に部下を信服せしめ、其指揮振も亦堂に入つたものであつた。

君の才幹は夙に聯隊に於て認められ、曹長に進級と同時に、本部書記として拔擢せられ、繁雜なる各般の庶務を一手に引受けて處理したのである。かゝることは君の如き人物でなければ出来ないことであつた。

特務曹長に進級と同時に、第一中隊附となり、中隊の人事は細大となく腦裏に收めて、諸般の勤務に盡瘁し、處理公平適切其の衡を失せず、晨に星を戴いて出で夕べに月影を踏むで歸ると云ふ、模範的勤務振であつた。しかし、かゝる精勵努力の間にも、尙友人のいろ／＼な世話をすると云ふ餘裕を持つて居つた。

三 情義

昭和三年の夏、君が聯隊本部に居る時、予は週番勤務として、君と同時に野營の殘留を命ぜられたことがあつた。或夜遅く予は一身上の事で、急に處理しなければならぬ事が出来た。相談する相手もなく止むなく傳令を以て君に我が意を通じた。すると君は取敢へず私服の儘、岡野の私宅から駆けつけて仕事をしてくれた。その情義の深い君の夏衣の姿が今でも目に見へる様で忘れられない印象を残してゐる。中隊附となつても、總て此の調子で部下を取扱つたので、君の恩義に心から感謝せぬものはない。

殊に中隊の將校と下士官以下との間に立つて慇懃斡旋に力め、中隊の團結を鞏固にし、和氣霽々の中に打つて一丸とした功績は偉大なものであつた。

右の記事は實に、我が特務曹長野中外吉君の人物を描き出して遺憾なきものである。

(チ) 家庭

君の生家は、長兄勘四郎の職業の關係から君の入營後森田村に居を移し、大正三年九月四日森田村八重巻第三十七號一番地に轉籍した。

此の年十月十日君は、中藤島村舟橋、中村久左衛門二女ステヲを娶り、兵營に近き今立郡神明村に下宿を置いた。翌十四年十一月十八日長女チエ子生る。昭和二年九月一日營外居住となるや、神明村水落第八十七號四番地に居をとし、爾來此處に居住した。翌三年五月三十日次女幸子、同六年六月四日長男利男が生れた。

君は中隊家庭に於て、よく下士官、兵をいたはり、情義の厚きものがあつたばかりでなく、其私的家庭に於ても雙愛の契り固く、人の見る目も羨ましき程であつた。また誠に子煩悩であつて、演習等で休憩の際、他の者が飲み食ひや、つまらぬ俗事の話など持ち出すときでも、巧に話題を子供のことに轉するのが常であつた。又宴會などの歸りに、子供への手みやげを提げて居るのを見受けたことが一再ではなかつた。出征後、家庭への通信中にも子供に關して特に書いて來たことは屢々であつた。

(リ) 上海出征

昭和七年二月二日第九師團に動員の令下るや、中隊は幹部の轉出入多く、しかも動員業務の爲、上下多忙、人心何となく落ち着かない。此間に在つて君は靜寂其の物の如く、例によつて自若として不眠不休の活動を續けた。

『何一つ遺漏なく立派に出征部隊として、第一中隊が出發出來たのは、全く君の御蔭だ』
と第一中隊長は言つて居られる。

かくて二月五日には動員完結し、午後四時三十分聯隊長の軍裝檢査並訓示があつた。翌六日は出發の前日であり、先發する者もあつたので、何かと忙しがつたが、それでも、明朝は愈々出發せねばならぬから、夜の十時に、動員下令以

來、始めて家に歸り、集つて來た親戚知己と訣別をなし、眠に就くと間もなく、七日午前四時三十分起床、食事を了へ
『俺は十七年も軍人生活を續けて來たが、其の間これとて、御國の爲に盡すことが出來なかつた。然るに、此度は愈々
軍人の本分を全ふることが出來るかと思ふと、誠に本懐の至りである。』

と固き決心を夫人に語り、悦んで装を整へ妻と三人の子供とに別を告げ、六時出勤した。あゝ、これが親子夫婦永遠の
訣れであつた。

君は出勤すると、直に中隊を整別させた。七時大隊は集合する。八時兵營出發、九時鯖江驛に着し、身動きもならぬ
やうな見送りの群集に圍まれ、熱狂的な感激の渦巻の裡に汽車に乗つた。かくて縣民一同熱誠を込めたる萬歳を浴び
つゝ出發し、更に沿道各驛の盛大なる歡送に一層深き衝動を受けつゝ、二月八日午前六時十二分廣島驛に着し、横川町
二丁目永田幾藏方に宿營した。中隊の業務を一身に背負ふて働いてゐた君には、二月二日以来寸分の暇もなかつたので
當日の君の日記を見ると、

『本日は内命以來一週間日ニシテ入浴スルコトヲ得、人間ラシクナッタ』
と書いてある。以て如何に業務多端の間に奮勵盡瘁したか、窺はれる。

九日には侍從武官の御差遣あり、聖旨の優渥なるに感激し、愈々獻身殉國の決心を固め、宿舍の人々と記念撮影をな
し、生家の母と兄とに左の書信をかいた。

『前略……出發時に、とてもあはれんと思つたのに、目の前に會つた時は嬉しかつたね。有り難く候。』

大阪では小生の名を書いた旗(コノ旗ハ支那ノ各地ヲ跋渉シテ持ツテ歸ルツモリ)を立て、出て居つた二人共に別れ
が出來た。握手もした。尙近所の人も澤山見送つて呉れた、結構でした。

八日午前六時廣島に着、八日九日宿營、十日の午後出帆の豫定。今少し暇があるので、内地からの音信も終りだらう
と思つて、書いたのです。尙宿舍の人が寫した寫真ですが送ります。こんど上海に上陸すると、手紙は出すつもりで

すが、敵と戰爭をやらねば氣が濟まん。一戰爭濟んでから出す豫定で居ります。見附や竹内様方へよろしく、竹内の
舍弟も停車場で一寸あはれたが、涙で送つて呉れた、感謝す。

残りの妻子は只兄上たよりで、又兄上はよい人だと安心して残つて居るのですから、どうぞ力になつて、お世話を
願します。

云ふことはあまりありません、よろしく。

元氣旺盛、出帆が出來る

萬歳、々々、々々

二月九日

廣島にて 野 中外 吉

母 上 様

兄 上 様

これで母や兄に言ふべきことは言ひ、頼むべきことは頼むだ。暗ればれた氣持で、十日運送船八雲丸に乗船し、午
後四時、市民の盛大なる歡送裡に出帆した。此間君は職務の關係上、萬事に周到なる注意を拂ひ、中隊を一身に荷ひ、
日夜奮勵したことは勿論である。

十一日は紀元節である、午前九時門司につき、一同甲板上に集合し、君が代合唱 天皇陛下の萬歳を三唱し奉り、午
後五時出帆した。船内で、不足の兵器や被服糧食の支給を受け、また、いろ／＼の準備訓練を行ひ、狀況急を要するの
で、船足を急ぎつゝ、十三日午後四時揚子江口に到着し、十四日海軍の掩護の下に、午前九時上陸を開始し、正午君の
大隊は一切の上陸を終り、上海公大第二工場内民家に宿營した。前方には時々銃砲聲が聞える。君は中隊長と同じ宿舍
で、傳令兵二名と共に同工場内第九五號館宅岡本清吾方に宿つた。』

愈々戦場に着いたのである。此日中隊全員は頭髮の一部を切り取り、一人づゝ封筒に入れて最後の形見となし、遺言を

書いて共に封入した。君も之を最後と通信紙の切片に、次の如く訣別の辭を書いて、頭髮の一部と共に包み込み、いよ／＼思ひ残すことなしと、元氣よく任務に就いた。

『本二月十四日午前九時上海に上陸致候に就ては、愈々戦線に立ち、御奉公する機會に遭遇す、實に本懐至極に存候何時戦死するも思ひ残す事無之、只片身として頭髮のみ残り置く可く候

野 中外 吉

野中ステヲ様

尙裏面に

『子供の養育頼む

二月十四日午後七時上海にて認む

南无阿彌陀佛

と書き封筒の表には

野中ステヲ

同 利 男 殿

とあり。一讀決心の程が、ほの見ゆるのみならず、之を夫人と共に、未だ頭是なき一子利男君に宛てたことを思ふとき、後繼者に對する精神的遺言であると、うなづかれて、忠誠の眞心を我子に傳へんとする、皇道精神の躍如たるを見覺えず感涙に咽ぶのである。

此遺言及頭髮は中隊に於て預り、凱旋の後中隊長から遺族に送られたのである。

十五日は中隊長と共に上海市街の巡察をなし、十六日少閑を得て留守宅及親族に宛て、左の手紙をかいた。

『無事十四日午前九時上海に上陸。當日は日本租界内に聯隊は宿營す。敵は既に上海市街の一里位の處にある。當分

の中は上海にて守備するならん。

郵便の取扱も目下未定に付、不取敢國に戻る御用船に托す。本十六日未だ上海日本家屋に宿營中なり。

子供に氣を付けること

夏服を通知次第送られる様準備し置かれたし

當地の氣候は内地とは暖い位、毎日天氣續なり

二月十六日

上海にて 野 中外 吉

野中ステヲ様

『上海は極めて平靜にして、二月十四日午前九時無事上陸致しました。當夜は上海の日本人宅に宿營致しました。上陸より本十六日まで未だ上海に宿營中です。

將來は第一線に出るものと思ひ候も未定、氣候は内地とはまだ暖い位です。御安心被下度

詳細は後便にて

堀川へも竹内へも出せなかつたから、よろしく申して下さい。

二月十六日

野 中外 吉

野中勘四郎様

『拜啓、今般支那派遣に際しては、多大なる御聲援と格別なる御懇情とに預り難有御厚禮申上候、依御蔭途中無事、十四日上海に上陸仕候間、御休心被下度候、此の上は誠心誠意奉公の一念を以て終始仕り御後援の御期待に背かざる様奮勵努力致度存候間、何卒御放念被下度候。尙出征中は萬事宜敷御願申上候。先は御禮旁御拶まで如斯に御座候葉書が品切で連名にて出します、悪しからず。氣候は内地とは暖かく、天氣も良し

久吉様の方へも、はがき不足で出せないから、よろしく申して下さい

二月十六日

野 中 外 吉

中村久左衛門殿

中村 文 作 殿

野中勘四郎は君の兄であり、中村久左衛門は夫人の父である。これで故國への音信は、一先づかたついたので、此後内地への通信は全く出していない。また事實多忙でもあつたらうし、君としては來るべき戰團に於て、君國の爲に一意奮闘する外、最早言ふてやるやうなことは全然なかつたのであらう。

十七日君は大隊の兵員百名を引率して、午前七時より午後三時に至るまで、飛行大隊長鈴木中佐指示の下に飛行場の整備作業に盡瘁した。

十八日には愈々近日戰場へ出るかも知れないと云ふので、第一線の視察に赴いた。その状況を君の日記によつて、左に紹介しよう。

『午前十時ヨリ第一線視察ヲナス。自動車ニテ伊藤少尉、西島少尉、及傳令二名ト共ニ、上海東北端義勇隊射撃場ニ至リ、視察セルモ敵兵發見セズ。該地附近ハ、歩兵第十九聯隊及陸戰隊ニテ嚴重ナル警戒ヲナシアリ。海軍ニ於テハ榴彈砲數發ヲ發射中ナリ。北四川路附近ハ曩ニ陸戰隊(攻撃)交戰場タルヲ以テ、家屋ハ全部半壞ニシテ悲惨タルモノナリ。亦死骸ノ山ヲナシアリテ。實戰ノ氣分充滿ス。』

かくして悲憤慷慨の意氣に燃えつゝ、宿舎に歸り午後五時三十分より中隊長と共に、舍營衛兵(歩哨線)の巡察をなし、雑務を處理し、かなり多忙であつた。

翌十九日は午前九時より梯子を以てする渡河演習をなす。續て出動準備をなす。背囊入組品の襦袢袴下及毛布天幕等は皆梱包した。愈々明二十日午前七時を以て、第十九路軍が上海東北側より二十軒の地點に撤退せざるときは、攻撃を

開始しようと思ふのである。

(又) 上海附近の會戰に於ける勇戰と壯烈なる其の戰死

愈々二月二十日が來た。敵は我が要求を肯ぜなんだ。我が軍は、かねての部署により攻撃に着手した。第一中隊は戰團開始以來或は大隊の豫備隊となり、或は第一線となりて行動したが、此間君は砲煙彈雨の中を能く勇敢に前進し、功績多かつた。續て二十三日二十四日は連日連夜金家橋附近の敵陣地に對し、勇奮至近の距離に薄り、第一線陣地の構築竝掘擴、交通壕の築設、突撃陣地の構成等敵の銃砲火の掃射下にありて、從容部下を督して不眠不休の活動を續けた。

二十五日は第二次總攻撃を決定したのであるが、同日午前機を見て一舉に突撃を敢行せんとし、之が準備中、午前十一時、大隊長より河川偵察の命があつた。中隊長は之を兵に命じたのであるが、君は率先立ちて、單身進んで、其の任に當り、敵の猛烈なる銃砲彈の中を物ともせず、沈着機敏に動作し、克く地形を利用して、其の目的を達成し、中隊の突撃を容易ならしめた。然るに續て更に奮進突撃を敢行せんとするに際し、附近に炸裂せる敵榴霰彈の破片により腰部に貫刺を受け、畑地の中に斃れた。されど剛氣の君は之にひるまず、體を起して前進せんとしたが、創傷重くして、身體の自由を失ひ、遂に起つことが出来なかつた。覺悟の君は最苦痛多き腹部の負傷にも拘らず、平然自若斃れたる儘、天皇陛下萬歳を唱へてゐたが、聽て我が陣地に收容せられ、應急手當の上翌二十六日上海第九師團第一野戰病院に送られたが、二十九日終に同病院に於て落命された。

君が率先身を挺して進んで危地に入りたる、崇高なる犠牲的精神は、實に軍人の龜鑑であるり、負傷後に於ける立派なる態度もまた眞に敬服の外はない。尙第一中隊長は次の様なことを述べて居られる。

『江南の如き平坦な戰場に於ては、第一線も豫備隊も危険は同一だ。君がその危険の中にあつて最後迄中隊の團結に努め、中隊の大黒柱となり、細大となく采配をした、人知れぬ苦勞は、知る人とぞ知るのだ。』

君が擔任せる中隊の陣中日誌の記載の跡を見るに、君が戰場の露と消えた二月二十五日の朝迄、墨痕淋漓として、例

の達筆を以て記されてあるのを見て、君の平時の行動を知るもの、誰か暗涙にむせばないものがあらうか。あの寸隙もない砲煙彈雨の中で、死を鴻毛の輕きに比し、一死殉國の念に燃えながら、而も沈着剛膽にして、死生の間毫も平靜を失はず。最得迄其の職責を先したる其の行動が紙面に彷彿として居るではないか、此一事を以てしても君の立派な性格を知ることが出来る。

と、君死するの日を以て歩兵少尉に進み、其の偉功は、功七級金鷄勳章並年金壹百五拾圓及勳六等單光旭日章を授けられた。

(ル) 墓碑

君の遺骨が、郷里に到着するや

森田村は村葬を以て之を禮し、四月四日同村第一小學校に於て盛大なる葬儀を執行した。昭和九年遺族親戚相議りて、君の墓碑を吉田郡東藤島村藤島眞宗大谷派超勝寺境内に建てた。正面の『故陸軍歩兵少尉正八位勳六等功七級野中外吉之墓』と刻せられたる文字は、出動當時の歩兵第三十六聯隊長大賀一男大佐（現時少將）の筆に成り右側面には「昭和七年二月二十九日戦死、陣中院釋常忠」と刻し左側面には略歴、裏面には戦功が銘記されてある。

略歴

昭和六年日支風雲急ヲ告ゲ、翌七年二月二日第九師團ニ動員下ルヤ、歩兵第三十六聯隊第一中隊附トシテ江南ノ地ニ出征ス。二月十四日上海ニ上陸、爾來上海東部及江灣鎮北方地區ニ轉戦、同月二十五日金家壩附近ニ於テ敵彈ヲ爲腹部貫銃創ヲ負ヒ、護國ノ鬼トナル。同日歩兵少尉ニ任ゼラル。

戦功

資性豪毅ニシテ砲煙彈雨ノ中ニ勇戰奮闘シ、身ヲ以テ部下ニ範ヲ垂レ、或ハ猛火ノ中ニ部下ヲ指揮シテ散兵壕、交通壕ヲ構築シ、或ハ河川偵察ノ爲單身其任ニ當リ、沈着剛膽良ク其任ヲ果ス等、出征以來不眠不休ノ活動ヲナシ皇軍戦勝ノ基ヲ拓キタリ。其功績威大ナリトス、而シテ敵彈ノ爲起ツ能ハザルニ至ルヤ 陛下ノ萬歳ヲ唱ヘテ瞑目セリ。其行動眞ニ軍人ノ龜鑑ト謂フ可シ。

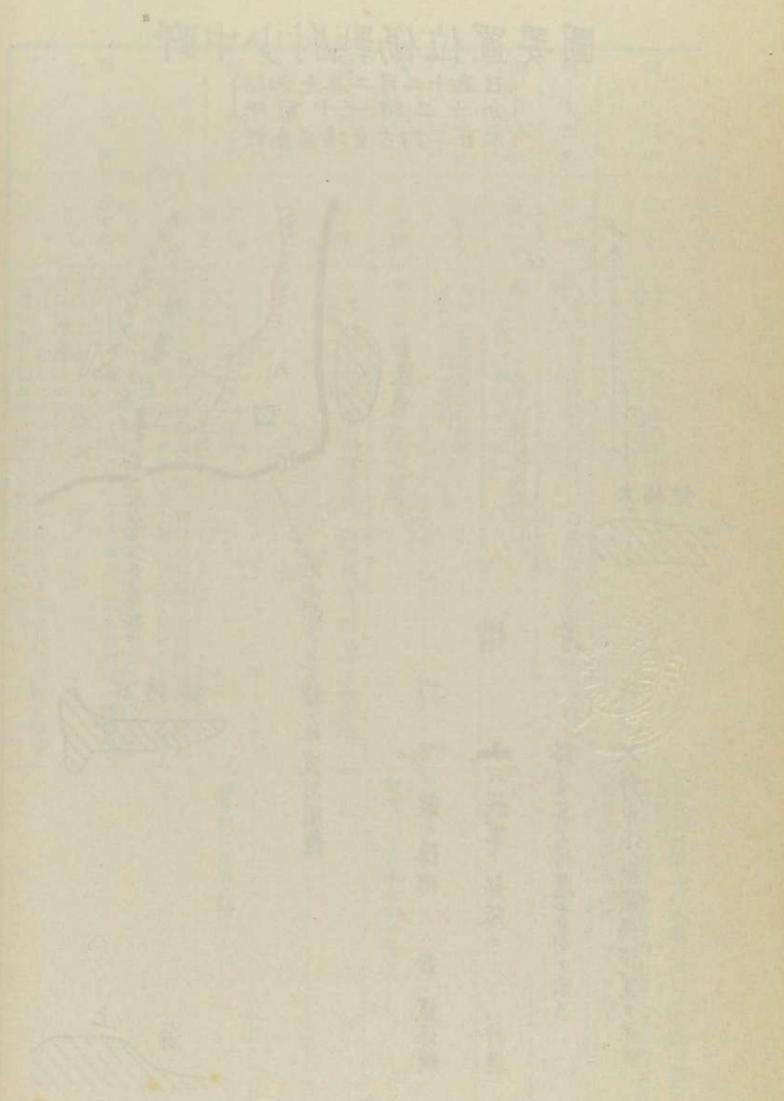
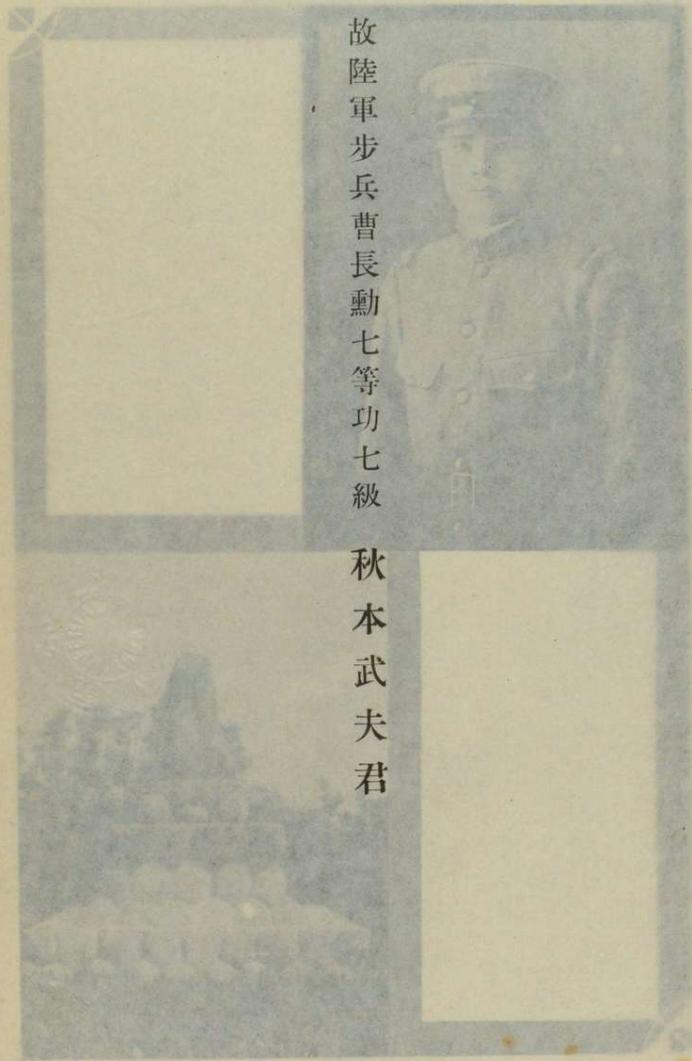
(ヲ) 年譜

| 年 | 年齢 | 陸軍ノ經歷 | 學歴其ノ他 |
|--------|----|---------------------------------|---------------------|
| 明治二十八年 | 一歲 | 六月七日吉田郡東藤島村泉田第二十番地野中勘右衛門五男トシテ出生 | |
| 同 二十九年 | 二 | | |
| 同 三十年 | 三 | | |
| 同 三十一年 | 四 | | |
| 同 三十二年 | 五 | | |
| 同 三十三年 | 六 | | |
| 同 三十四年 | 七 | | |
| 同 三十五年 | 八 | | 四月一日東藤島村立上中尋常小學校へ入學 |
| 同 三十六年 | 九 | | |

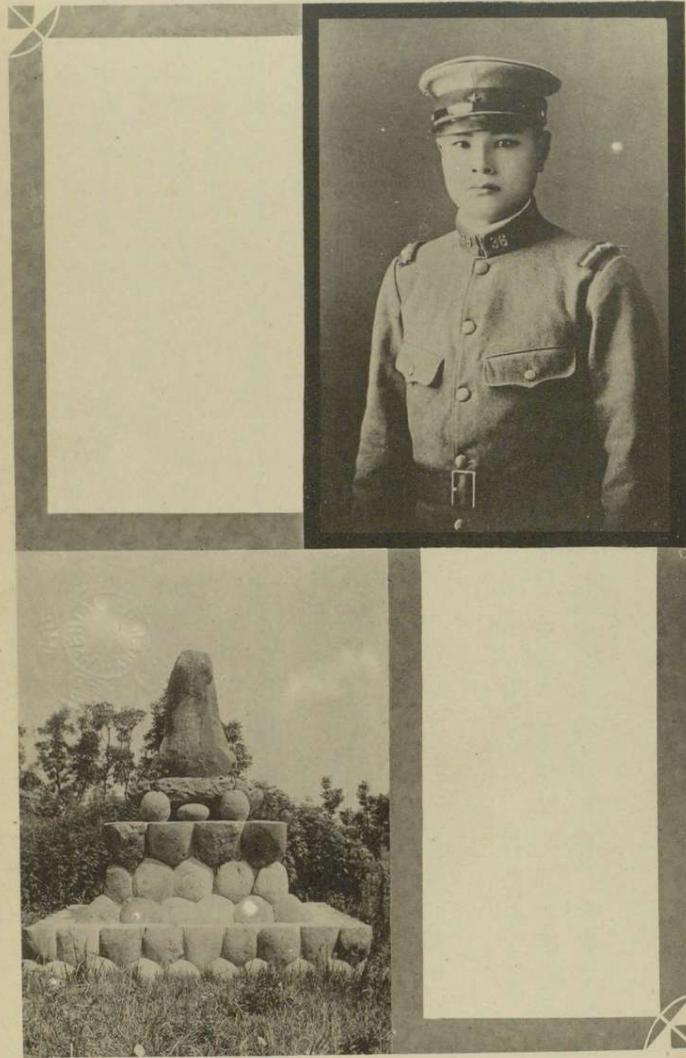
| | | | | | | |
|---|---|---|--|--|--|--|
| 同 十二 年 | 同 十一 年 | 同 十 年 | 同 九 年 | 同 八 年 | 同 七 年 | 同 六 年 |
| 二十九 | 二十八 | 二十七 | 二十六 | 二十五 | 二十四 | 二十三 |
| 七月二十日一等給。 九月七日ヨリ十月二十三日至ル間戒嚴地域内ニ於テ臨時派遣歩兵第三十六聯隊ニ在リテ戒嚴ニ關スル勤務ニ従事ス。 | 五月十二日同隊第二中隊附。 八月十八日復員下令。 十一月一日西比利亞出兵事件ノ勤務ニ依リ金百七拾圓ヲ賜フ。 | 三月十一日露領派遣軍編成下令。 四月七日七尾港出發。同十二日浦潮港上陸。同日浦潮派遣軍ニ編入。各地ノ守備勤務ニ服ス。 七月一日二等給。 九月十八日依病入院。十月十七日全治退院。 十一月五日内地歸還ノ爲浦潮港出發。同八日敦賀港歸着。 十一月九日歩兵第三十六聯隊留守隊第三中隊へ配屬。 | 四月一日ヨリ十一月一日迄補助憲兵ノ教育ヲ受ク。 四月二十四日交代歸還ノ爲釜山出發。同二十六日敦賀港歸着。 五月一日第二中隊附。 十一月一日大正三年乃至大正九年戰役從軍記章授與。 同日朝鮮守備ノ勤務ニ依リ金貳拾五圓ヲ賜フ。 同日三等給。 | 四月七日第五中隊附。 同九日朝鮮派遣ノ爲敦賀港出發。同十一日釜山上陸。懸擾事件ニ關シ警備ノ爲黃海道砂里院守備。十月二十九日陣營移轉ノ爲載寧到着。 十二月一日任陸軍歩兵軍曹。 | 五月五日交代歸還ノ爲元山港出發。同六日大阪港歸着。 十一月一日歩兵一等卒。同日上等兵。 | 十月十五日任陸軍勤務。 十二月一日任陸軍歩兵伍長。○歩兵第三十六聯隊附ヲ命ズ。 ○第十二中隊ヲ命ズ。 |
| | | | | | | |

| | | | | | | | | | | | | |
|-------------|--|-------------|-------------|--------------------------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 同 五 年 | 同 四 年 | 同 三 年 | 同 二 年 | 同 大 正 元 四 十 五 年 | 同 四 十 四 年 | 同 四 十 三 年 | 同 四 十 二 年 | 同 四 十 一 年 | 同 四 十 年 | 同 三 十 九 年 | 同 三 十 八 年 | 同 三 十 七 年 |
| 二十二 | 二十一 | 二十 | 十九 | 十八 | 十七 | 十六 | 十五 | 十四 | 十三 | 十二 | 十一 | 十 |
| 元山守備。 | 十二月二十日徵兵トシテ歩兵第三十六聯隊留守隊へ補缺入隊。 同二十八日朝鮮守備ノ爲神戸港出發。 一月二日元山上陸。同日歩兵第三十六聯隊第十二中隊編入。 | | | | | | | | | | 三月上中等常小學校卒業。 | |
| | | | | 六月八日父勲右衛門病死(年五十八) | | | | | | | | |

故陸軍歩兵曹長勳七等功七級 秋本武夫君



故陸軍步兵曹長勳七等功七級 秋本武夫君



姑 翻 軍 史 吳 曹 昇 燠 子 善 也 子 燦 燦 本 佐 夫 氏

其三 故陸軍歩兵曹長勳七等功七級 秋 本 武 夫 君

(イ) 君の出生と其一家

君は明治四十一年三月三十一日吉田郡東藤島村北野下高山増右衛門の子として呱呱の聲をあげた。父増右衛門は往年日露の戦役に出征し、旅順要塞の攻撃に奮戦して負傷し、一度内地に後送され、全治再出征して、奉天の會戦に参加し勳功を樹て、歩兵軍曹に迄なつた勇士であるが、君が生れた其翌年五月二十日、まだ三十一歳の元氣盛りを、惜しくも二豎の爲に歸らぬ旅に赴いたのであつた。

君は生れて間もなく村内隣區である、大和田の秋本清松に養はれて、其の嗣子となつた。家は養父母を合せて三人、養父母は共に慈みの深い人で近隣の氣受もよく、君は全く其の掌中の玉として、いと順調に生ひ育つた。君の性格の純情で、快活で、玲瓏瑩り無いところは、此の家庭に負ふところが頗る多かつたのである。

(ロ) 小學校時代

大正三年四月一日、君の一家には、日頃にも増していと和かに朗な春の氣分が漂うて居つた。今日は君が居村大和田小學校への入學式の當日である。

『他人の産むだ子だなどは、どうしても思へません』

と、常に人に話すはご慈愛に慈愛を注ぎ、苦心に苦心を重ねて、遣へば立て、立てば歩めと、只管成長を待ちわびた其の子が、今や満六歳の春を迎へて、人たる道の學び舎に連れ行く嚴父の胸の裡、送る母御の悦は、人の想像も及び得ないところがあつたであらう。君は此處に學ぶこと五年、成績至つて優秀で、常に級中一、二の席を占め、而かも無邪氣で、淡白で、滑稽じみた性格は級友のひとしく慕ふところであつた。

其の後一家は故あつて、居を圓山西村町屋に移し。君は同地の道明尋常小學校に轉じて、大正九年三月目出度業を卒へた。續て福井師範學校附屬小學校高等科に學ぶこと一年、更に進んで福井工業學校に入學した。

(ハ) 工業學校時代

君の工業學校への入學當時は、何れの中等學校も入學難の最甚しい時代で、君の學校の如きも應募者數倍の多きに達し、頗る難關視されたのであつたが、君は優秀の成績を以て悠々合格の榮冠を贏ち得たのであつた。しかも、こうした學校への入學は、地方の産業上から考へて見て、極めて適當なる將來への門出であり、慈父の悦やまた大なるものがあつた。

此頃君の一家は、また坂井郡細呂木村山室の地に移ることになった。北陸線金津驛に下車して、途を東にとれば、松翠美しい坂路を越えて、一の農園がある。四周には、小高い緑の山を眺め、内には時折々の花卉や、蔬菜や、各種の果樹が植ゑられて、手際よく奇麗に整理されてある。北の方道に沿うた所には、可なりの廣い芝生があり、庭園があつて、上品な二三の住宅がある。此處はいふまでもなく舊福井藩主松平家の試作農園地であつて、眞に俗塵を離れた別天地である。養父清松は蔬菜、園藝に深き趣味と技能とを有し、夙に郷土の産業開發に寄與したところ亦少くなかつたので、遂に松平家の見るところとなり、選ばれて此の試農場に入ることになったのである。此處へ來てからの君は、場内の人々から、いたく可愛がられてゐたが、殊にそれ等の人々の中に、君が道明校時代の學友伊藤一意なる人があつた。此青年と君とは、日夜兄弟同様に、共に食ひ、共に寝ね、親交終始渝らなかつたと言ふことである。此の自然、此の人情の美しき別天地から、毎日汽車を利用して、通學し、出で、は學に勵み、入つては父母に孝養を致し、生來の美質は、此環境に育まれて、すく／＼と伸びゆくのであつた。

君はまた此頃から「ハーモニカ」に興味を持ち、塵球に興を覺えた。殊に塵球は日と共に其の技に上達し、第四學年の頃には、同校に於ける一騎當千の名聲を博し、同好學生間の畏敬する所となり、之が交友亦多きを加ふるに至つた。

斯くして大正十五年三月首尾克く同校を卒業し、間もなく機械工場の實務に就いたのであるが、豪放な君の性格と相容れず、暫くにして職を止め、潜龍暫く雲の至るを待つたのである。

(ニ) 徴兵検査―入營

昭和三年五月二十二日、蛟龍遂に雲霧を得るの時が來た。君は本年正に滿二十歳、今日は吉田郡松岡徴兵署に於て、護國の重任に當るべき資格決定の検査當日である。

検査の通知を受けた其の日から

『何とかして、をさまればよいが』

と、口ずさまぬ日とはなく、養父清松も亦

『男と生れて、陛下の御役に立たれないでは』

と、合槌を打つてゐた。當日は時間が早いので、前後圓山西村町屋の親戚に來り、早朝徴兵署に出頭した。まだ人は來てゐない。時間を待つ間が待遠しくてたまらない。其のうちに検査は始まつたが、こんどは自分の番がくるのが、聞だるくて耐へられない。司令官の前に呼び出された時も色々の事を問はれるが、何も頭にはいらぬ。それよりも早く『甲種合格』の言葉が聞きたかつた。そのうちに『甲種合格』と耳朶に響いたとき、君は飛び立つばかりに嬉しかつた。

工場監督の實務見習を止めてから、二年餘、其の間將來の方途に就いて、どれだけ心を痛めたことか、慈愛に慈愛をかけて育て上げ、大きな望をかけて教育してくれた、父母の大意に酬ゆべく、人知れず焦つたことであらう。あゝも考へ、かうも手を出して見たが、何れも君の氣には合はない。そこで君は

『俺の性格は、軍人でなければ駄目だ。俺はどうしても軍人にならう』

と決心してゐたのである。であるから、當日の検査の成績如何は君の爲には一大事であつた。若し徴兵官の言葉が『乙

種」或は「丙種」とひびき、不合格となつたら、君はどうしたであらう。決して安閑として生きては得なかつたであらう。

斯くの如く眞剣であつた君が、前述の如く検査に合格したのを極度に悦んだのは、實に當然過ぎる程當然なことであつた。

當時徴兵官は君に對して幹部候補生を志願すべく、すゝめたのであるが、君はこれに従はないで、即座に下士志願の手續をとつた。蓋し、これ實に君の宿志であつたのである。

間もなく昭和四年一月九日となつた。明日は、愈々入營の當日である。試農場内の人々を始め親戚、知己、朋友等、山室全區の人々までが、盛に見送りをなすべく、其の日時を問合せるのであつたが、君は他人に迷惑をかけまじと、わざと前日七時幾分かの金津發の列車で竊に家を出た。

(ホ) 現役兵―教導學校時代

昭和四年一月十日君は現役兵として歩兵第三十六聯隊第三中隊に入隊した。爾來孜孜として學術科に務め、其の成績優秀であつた。七月十日一等兵に、十二月一日上等兵に進み、仙臺陸軍教導學校に派遣された。

君は入營當初から陸軍士官學校入學の志望を抱き、日夜勉學怠らず、教導學校在學中にも一教官から過度の勉學が健康に障害を及ぼすことを憂ひて、特に嚴父に書信を寄せて、其の注意を促した程であつた。宜なるかな、五年十一月二十四日業を卒へ、同聯隊同期出身十八名中の首席といふ最優秀の成績を得て、原隊へ歸還したのである。

(ヘ) 下士官時代

五年十二月一日歩兵伍長に任官し、愈々軍隊に於ける幹部の一人として、教育指導の任に當ると共に、指揮統御の職に就く身となつた。下士官時代の君は、志操堅確にして、頗る責任を重んじ、諸勤務の成績が優秀であつたのみならず、研究心に富み、學術科共に常に優秀の成績であつた。特に内務班長として又教育助教として又教育指導其の宜しきを得、

常に激刺たる元氣を以て部下を導き、頗る上下の敬愛を受け、其の信頼する所となつた。

次で昭和六年十二月一日、歩兵軍曹に進み、ますます奉公の念に燃え、一意軍務に精勵してをつた。

(ト) 家庭

君年齒尙若く、室なし、養父清松(後清右衛門と改む年六十一)母ふよ(年五十八)あるのみ。君と許婚の間柄で、親族の娘に「ちのゑ」と云ふのがあつたけれど、出で、他方にあつて未だ同居しなかつた。

(チ) 上海出征

昭和七年二月三日動員の令は、我が第九師團管下に飛び、君も第三中隊の輕關銃分隊長として、出征することになつた。

一度此報が傳ると、親戚知人は毎日、夜を日について面會に出かけたが、君は頗る元氣で

「今度はしつかりやつて來ます、顔さへ見ればもう安心です」

と誠にあつさりしたものであつた。想ふに君には深く心に決する所があつたものらしい。七日早朝愈々征途に上る。其の際も非常な元氣であつた。かくて縣民一同の熱狂的歡送の裡に鯖江驛を發し、鐵道輸送を以て八日廣島に到着、同地に宿營した。此の日嚴父宛左の書簡を寄せた。

「無事廣島に到着、十日出發、十四日上海に着く豫定。ちのゑに遇ふことが出來て、本當に愉快。もう心配は何もない。時計は買つた、エルゲンと云ふので三十五圓。餘はまた次に。遠藤さん、伊藤さん、東さんによろしく」

かくて十日宇品出帆、途中何等の支障無く、十四日上海に上陸した。上陸後直に出した稟書には、
「お父さんも、お母さんもお達者ですか、豫定通り十四日朝無事上海に着きました。どうぞ御安心下さい。何も目もまるくするやうなものはありません。欠張り猫めはをります。これからはどうなるか、わかりませんが、今のところ何もありません、ちよい／＼便りは出來ません、郵便は一切不通です。此便りは今朝まで乗つて居つた、八雲丸に頼

むで、送つて貰つたのです。』

一讀平々凡々、何等の特長を認めず、何等の波瀾もなし、これしかしながら、裡に萬斛の涙を藏し、決死の覺悟を定めつゝ、海嶽も音ならざる鴻恩を受けたる、老いたる兩親に、少しでも心配をさせまじと、強て平氣を装ふところ、眞に同情に堪へざるものがあるではないか。

爾後同地警備の任に服しつゝ、來るべき會戰の準備をなしつゝあつた。

(リ) 上海附近の會戰に於ける勇戦と壯烈なる其の戦死

二月二十日から戰鬪が開始された。君は終始第一線に立ちて。勇戦奮闘、部下を督して不眠不休の活動を続け、頗る勳功があつた。就中二月二十五日第二次總攻撃の際には、彈丸雨飛の間を物ともせず、率先部下を督して奮闘し、敵の自動火器の撲滅に力め、以て小銃分隊の突撃に協力し、更に追撃に移るや、敗退する敵に猛射を浴せ、中隊の金家壩占領を確實ならしめ、偉大なる功績を樹てた。

中隊のうちで、最重要な働をするものは、輕機關銃分隊である。それだけ敵の最注目する所となり、危険も亦頗る大である、君は此重任に當り、率先勇奮部下を率ゐて、常に力闘したのである。

次で敵の猛烈なる十字火を受くるや、奮然衆を勵まして、敵の側防機關銃の撲滅に全力を注いだが、雖も頭部に貫通銃創を受けて悲壯なる戦死を遂げた。其の勇烈果敢なる行動は實に軍人の龜鑑として稱へらるべきものである。

此日の戰鬪に於て、第三中隊は中隊長以下約半數の死傷者を生じた。以て如何に其激戦であつたかを察することが出来る。しかも君の如き前途有爲の士を失ふたことは、國家の爲とは云ひながら、實に痛惜の極みであつた。享年二十五死するの日を以て歩兵曹長に進み、其偉功は功七級金鷄勳章並年金壹百五拾圓及勳七等青色桐葉章を授けらるに至つた。

(ヌ) 早くから佛檀の抽斗に入れてあつた、血判の遺書

君は軍籍に入りし當初より一死奉公の志堅く、昭和六年九月、日支の紛争起るに及んで、愈々其の覺悟を固め早くから遺書を認めて、血判を了し我家の佛檀の抽斗深く藏めてあつた。

出征後、我軍の上海に着くや、中隊毎に全員頭髪の一部を切り取り、遺言と共に封筒に收め、以て決死の覺悟を示した、此時の君の遺言は次の通りであつた。

一 遺言

秋本 武夫 ㊦

オ達者デ暮シテ下サイ、武夫ガ戦死シタコトヲ、オ聞キニナツタラ、佛檀ノ左ノ抽斗ニアル紙包ヲ開封シテ下サイ、サヨナラ、

父 上 様

母 上 様

これは出征途上八雲丸の中で認めたもので、戦死後直に中隊長笠原大尉より、遺族に送られたものである。この遺言を受取つた父母は直様自宅の佛檀を探して見ると、果して次の遺書が発見された。

一 父 上 様

母 上 様

一つも御恩返しをすることの出来なかつた、この武夫を、どうか許して下さい。長いこと有難うございました。ちのゑ夫婦を可愛がつて上げて下さい。益々御家の榮えんことを草葉のかけで祈つてゐます。

昭和六年十一月十九日

武夫 ㊦血判

享年貳拾四歳



一讀以て其志操の美しく且堅きを知ること出来ると共に、何となく君の孤獨の境遇と心事とに思ひめぐらされて、日がしらの熱くなるを覺ゆること、豈に吾人のみならんやである。

(ル) 逸 話

尚君の人格修養の一端を知るに足ると思ふから、二三の逸話を次に示す。

(一) 部下に對して同情深い。

君は少い時から小事離脱せず、豪毅で快活で、人に接して少しも障壁なく、高笑快談、胸に一物も秘めない氣持のよい男であつた。而かも人には親切で、部下に對しても同情深い人であつた。在營中一人の部下が金を失つた時にも、君は裕でもない自分の財布から、五圓札を出して、其の部下を慰めたさうである。以て其の性格の一端を知ることが出来るではないか。

(二) 兩親に孝行であつた。

君はまた兩親に對して、頗る孝行であつた。乃ち一見磊落豪快な君も、養父母だけには細心の注意を拂ひ、其の命に逆はず、其の心を痛ましめないやう努めてをつたさうである。

今回の事變に際しても君は出征以前から悲壯な覺悟を固め、前に載せたやうな遺書を認めてをり、出征に際しても、他人には其の決意の程を打ち明けたさうであるが、兩親に對しては、一言半句も、それらしいことは言はず、只管父母の心を安んぜんことをのみ、努めてをつたさうである。

昭和六年十二月君が軍曹に昇進したことを父母が祝つた手紙に對しての君の返事にも、その孝心の厚いことが窺はれる。

「御兩親様益々御達者の由喜んで居ります。武夫が軍曹になつたことを、お喜び下さいまして、有りがたう御座います。だが、武夫は、その親様の心の中をお察し申して泣いて居ります。此の不束者、不孝者をどうぞ許して下さい。

御兩親様は此の武夫をもつとく偉いものにしてやりたいといふ、御心から無理をして、工業學校へまで出して下さつたのに、其の御心に副ふことが出来ませんでした。どうか勘忍して戴きたい。それにも拘らず、今喜んで御言葉を戴くことは、此の武夫には、身を切るやうな思が致します。然しながら武夫も何時かは長い軍刀を下げて、御目にかけます。お父様や、お母様の目のあかるいうちに。 さよなら

十二月十三日

武夫より

父 上 様

君は折角工業學校を出たにも拘らず、其の修得した方面には進まずして、軍籍に身を投じたことを、父母に對して常に濟まぬと感じて、をつたのである。今此文を見ると、其不孝を詫び、祝辭を戴いたときの遺る瀾なき思ひを述べ將來の立身出世を誓ふあたり、凱切、悲痛、眞に涙なくして讀むことが出来ない文字である。しかも御國の爲とは云ひながら、君既に逝き、最早長い軍刀を提げた勇姿を、生前、父母の前に現はすことが出来なかつた。遺憾曷ぞ極らん。

されど偉勳を國家に樹て、皇國の威武を全世界に輝かし、名を揚げ、父母を顯はした、其の大孝は、以て幾多の立身出世にも勝るべく、決して長い軍刀を提げる位の出世の及ぶ所ではない。君もまた亦莞爾として地下に笑を含むでをるであらう。

(三) 佛 教 信 仰

君は其の性格にも似ず、若き身ながら、佛教に深き信仰をもつてをつた。軍隊に居る時でも、家へ歸る度に、手を洗ひ佛壇を聞いて、合掌禮拜怠りなく、未來の安心に就て、兩親に聞きたゞすやうなとも、度々であつたと云ふことである。

實に父を知らない、いじらしい子供、生きてゐる母にも會ひ得ない薄倅な兒としては、如何に幸福な境涯にあつてもそこに内心物淋しい感じが込み上つてくるのは、人情の自然である。この物淋しさを慰むる何物かを求めんか爲に、つ

い佛壇に足が向いたのではなかつうか、古より幾多の賢僧大徳の中には、幼にして父を喪ひ、母を失ひ、或は寄るべなき孤兒となり、痛く世の無常を感じ遂に身を佛門に投じた人も蓋し少くない。従つてかゝる淋しい境涯にあつた君として自然佛の前にぬかつくに至つたのは、最なことと同情に堪へない感じがする。

併しながら君が武人として、勇ましく戦場の花と散り、以て國家に殉じたことは、其本懐とする所であり、勇戦奮闘以て江南の地に残した偉大なる功勳は、千載青史を照らすべく、死して餘榮ありと言ふべきである。君以て瞑すべき也。

(ヲ) 墓 碑

君の遺骨が郷里に到着するや、東藤島村は村葬を以て之を禮し、四月〇〇日大和田區正願寺に於て盛大なる葬儀が営まれた。また。

大和田區の共同墓地には、君の爲に立派な墓碑が出来上つた。慈父清松が工夫して設計を立て、勝山在の奥地より大きな玉石を取寄せて、七年六月工を起し、八年五月漸く工を竣へて、莊嚴な招魂式を行ふた。根幅方二間、大きい玉石を切つて、亀甲形に積み上げた基礎の上に、大きい玉石の碑石が建つてゐる、總高一丈餘、碑の表面には「故陸軍歩兵曹長 勳七等 秋本武夫之墓」と記し、表面には君が出征當時の中隊長、歩兵第三十六聯隊第三中隊長大尉笠原善修の筆になる左の墓誌が刻されてある。

墓 誌

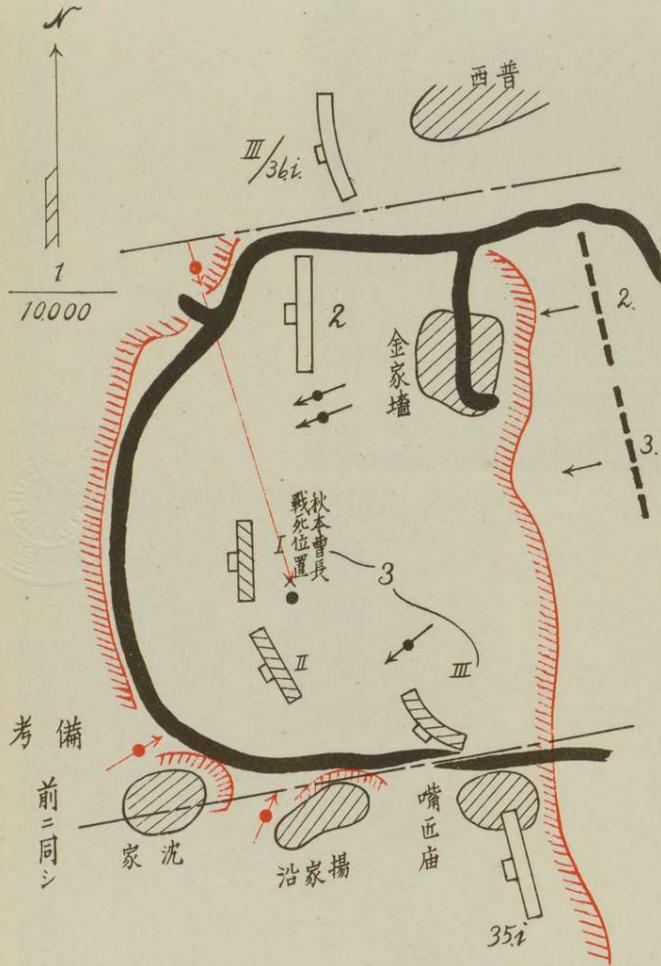
君ハ天性快活ニシテ淡泊、隊内有爲ノ青年下士官タリ。昭和七年二月二日動員令下ルヤ、輕機關銃分隊長トシテ勇躍出征、同月十四日中華民國上海ニ上陸ス。二月二十日ヨリ戰闘開始セラル、ヤ、終始第一線ニ立テテ勇戰奮闘不眠不休ノ活動ヲ續ケタリ。特ニ二月二十五日第二回總攻撃ニ際シテハ雨霰ノ如キ銃火ヲ冒シテ小銃分隊ノ突撃ニ協力シ、更ニ追撃ニ移リ敗退スル敵ヲ猛射シ、以テ中隊ノ金家壙占領ヲ確實ナラシメ、偉大ナル功績ヲ樹テタリ、次テ敵ノ十字火ヲ受クルヤ、奮然敵ノ側防機關銃撲滅ニ努メタルモ、擲テ頭部貫通銃創ヲ蒙リ、年二十五歳ニシテ勇壯ナル戦死

ヲ遂ゲタリ、然レドモ日支ノ風雲急ヲ告クルヤ君ハ曾テ心ニ固ク期スルトコロアリ、其ノ壯烈ナル最後ハ武人ノ本懐ニシテ、其ノ偉勳ハ永ニ青史ニ耀シ、君以テ瞑スヘシ

| (フ) 年 譜 | | 年 齡 | 陸 軍 | 經 歴 | 學 歴 | 其 他 |
|---------|---|-----|-----|--|---|-----|
| 同 四十二年 | 二 | 一歲 | | 三月三十一日吉田郡東藤島村北野下第五號十二番地高山増右衛門ノ庶子トシテ出生。母ハ同村間山第一號二十五番地瀧波平右衛門長女みさを。 | 五月二十九日東藤島村大和田出第四十六號十二番地ノ一秋本清松(後清右衛門ト改ム)ノ養子トナル | |
| 同 四十三年 | 三 | | | | | |
| 同 四十四年 | 四 | | | | | |
| 同 四十五年 | 五 | | | | | |
| 同 四十二年 | 六 | | | | | |
| 同 三年 | 七 | | | | 四月一日東藤島村立大和田尋常小學校へ入學。 | |
| 同 四年 | 八 | | | | | |
| 同 五年 | 九 | | | | | |

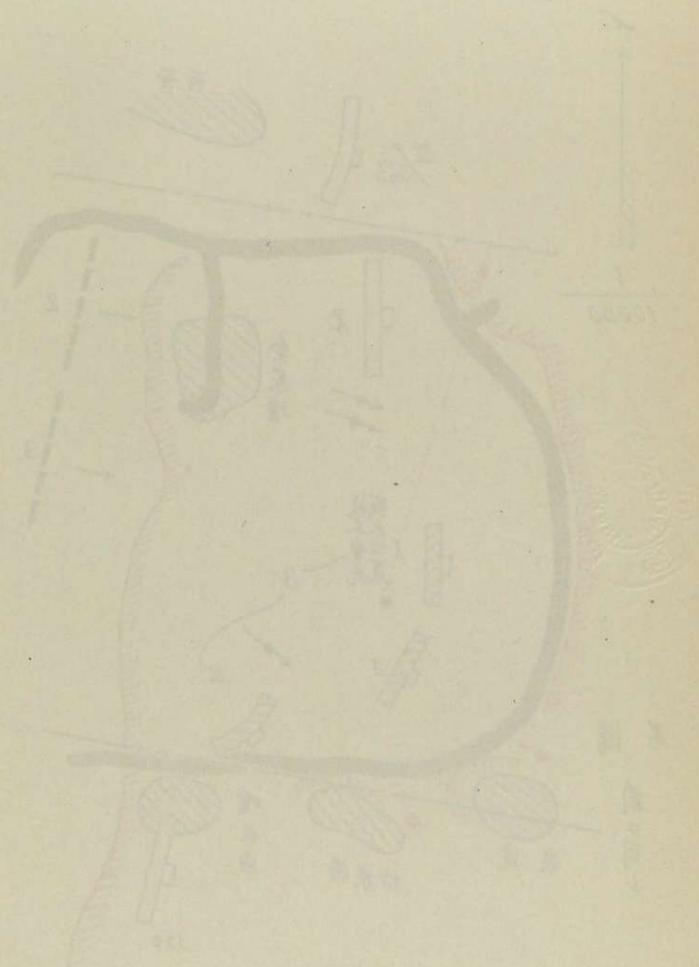
圖要置位死戰長曹本秋

(近附牆家金於日五十二月二年七和昭)



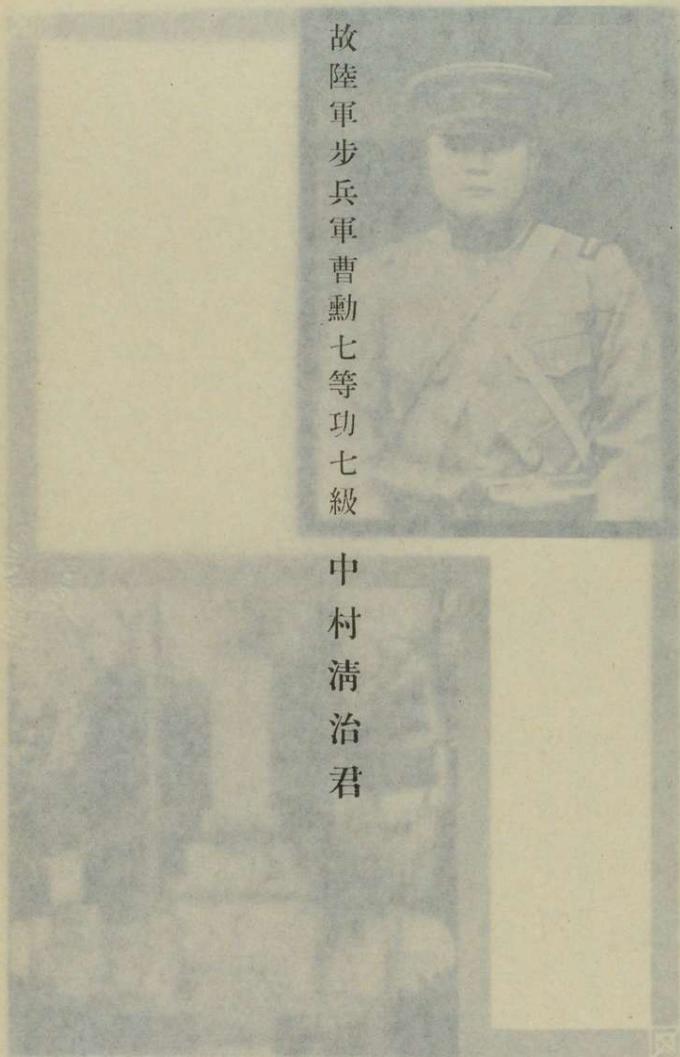
日本曹長陣亡位置等圖

(昭和十一年二月二十三日陸軍省資料部刊)



故陸軍歩兵軍曹勳七等功七級

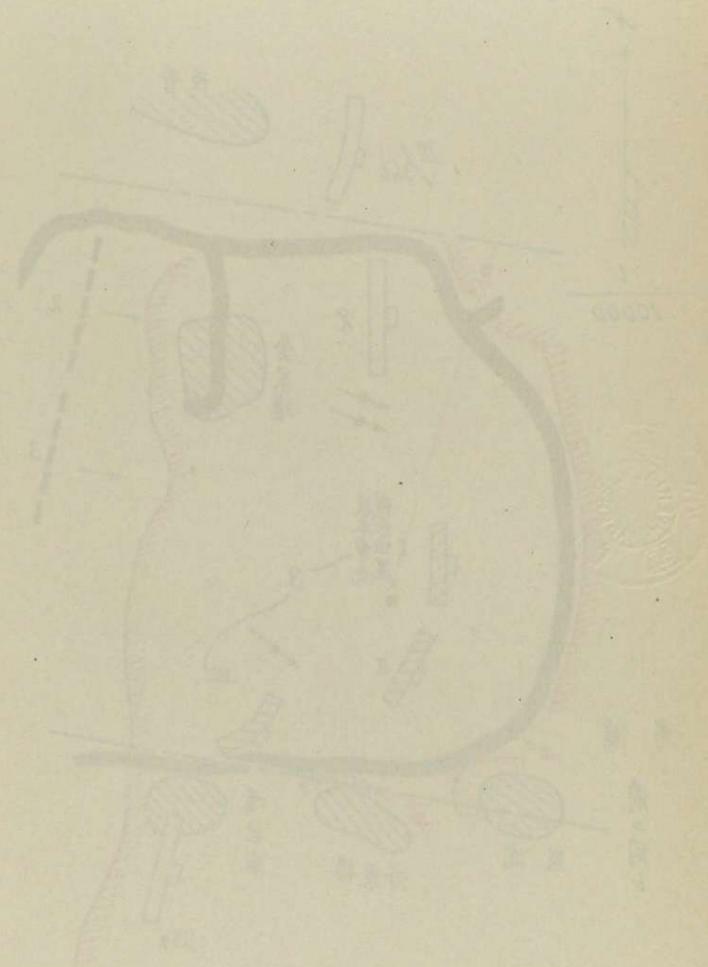
中村清治君

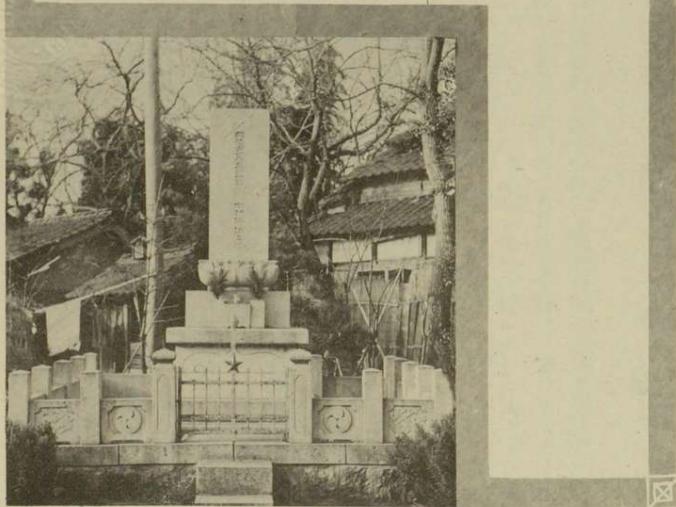
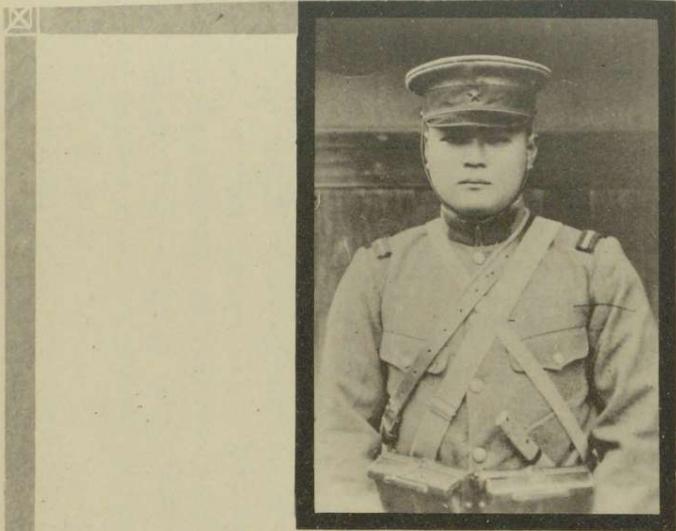


故陸軍歩兵軍曹勳七等功七級 中村清治君

日本曹長勳章設置要圖

(昭和十一年二月二十五日陸軍省訓令第九)





站 綏 軍 退 兵 軍 曹 應 子 善 也 子 繼 中 林 漸 帝 孫

其四 故陸軍歩兵軍曹勤七等功七級 中村清治君

(イ) 君の出生と其一家

吉田郡西藤島村と云へば、郡の西端で、九頭龍、日野兩川の合流點附近にあつて、土地低濕頻年水害を被り、三年に一度満足に收穫があれば、それで良いとされた位であつた。従つて農家は實にみじめな生活を續けて來たのである。それが往年故杉田鶴山先生の御蔭で、河川改修の工事成つてから、水害は除かれ、毎年十分な收穫が得られるやうになつたので、其後はお村自慢の民謡

「種りますぞへ、越路の原は

杉田翁の喜び、のせて

『稲の穂波はごこまでつゞく』

そのまゝに、郷土の田の面は、秋になれば、毎年黄金の波を漂せるのである。かくて農家の生活状態が、次第によくなるにつれて、自暴自棄、其の日暮しの氣分は次第に失せて、勤儉貯蓄、新興氣分に燃ゆる良風が逐次起きて來た。

かやうにして、西藤島村の各部落は、だん／＼誕生して來て、今は昔の面影は殆んど見られなくなつて來た。

我が歩兵軍曹中村清治君は、此河川改修工事が、今一二年を以て完成せんとする、明治四十二年七月二十八日、同村上伏、中村清太夫の二男として出生した。家は世々農を業としたのである。母を「きり」と云ひ、男二人女二人の四人兄弟で君は其の末子であつた。従つて父母の愛を一身に集めて、のんびりした田園生活の間に、のび／＼と育つて來た。

(ロ) 小學校時代

かくて大正五年には、學齡に達したので、村の小學校に入學した。學校に通ふかたはら野良に出て、家業の手傳をなすのは農村兒童の常である。況して田畑の外何物もない、純農村で

ある此邊の部落では尙更であつた。此毎日野良に出で、大自然に接する生活は、兒童の發育を之と調和せしめて、精神、健康、共により良き人間をつくり上げるのである。昔から英雄豪傑皆山澤より生ず、とは實によく言つたものと思ふ。君もだん／＼大きくなるにつれて家業の手傳もした。そうして、それが中々よく間に合つた。しかも、學業の成績は優良であつた。

かゝる兒童の常として田植の手傳、稻刈時の野良仕事の間にも、好學に燃ゆる憧憬の世界を夢見すには、をられなかつた。丁度十三歳の秋だ、友達の或者は翌春の中等學校入學を前にして、之が準備に忙殺されてゐた。まのあたりに之を見てゐる君は、『俺も中學校へ入りたいなあ』

之が當時に於ける唯一の望であつた。従つて野路を急ぐ暫しの間も、中等學校入學試験問題集を手離さなかつた。父兄はかゝる君の志望を知らぬ筈はない。昔とは違つて水害はなく、毎年の收穫はあつても、中村家としては君の希望を満足させる程生活の餘裕はなかつた。従つて慈愛深き父も、友情厚き兄も、君の欲求を充させることが出来なかつたのである。

大正十一年三月、好成绩を以て尋常科を卒業した君は、引續高等科を修業することゝなつた。

しかし、君の好學の志望はそんなことで挫折しなかつた。相變らず學校の歸り道、家業の手傳の傍、僅の暇さへあれば讀書にいそむだ。釣瓶落しの秋の夕陽が沈んでからも、尙田疇瓏畝の間に坐して、書見に餘念なき君の姿を、村人は絶えず目撃した。

『頭のよい子だ、あの子の思ふ通りにしてやれば、よいのに、』
と、心ある村人の口ずさまぬものはなかつた。さうこうしてゐる間に、大正十三年三月、君は高等小學校を卒業することゝなつた。

此頃のことである、福井市佐佐枝上町柳下病院長、柳下彦雄氏が、君が操行善良、學業優等にして、好學の志望頗る切なるものあるに拘らず、其志望を達する能はざる境遇にあるを耳にし、頗る之に同情し、特に學資一切の供給を引受

け、學僕として同家に置き、勉學せしむることを申出られた。君の喜びは勿論である。父兄も異存はない。そこで愈々同年三月二十日より柳下家に寄寓することゝなつた。

(ハ) 柳下病院寄寓時代

之に於て君は發奮努力、優秀なる成績を以て、福井中學校入學試験に合格し、爾來柳下病院に在りて、寢食起居共に家族の一人として、極めて暖き家庭の垣瑁中に薰陶を受けつゝ通學の傍、薬局の用務並柳下氏の研究を資け、五年の星霜を経て、茲に昭和四年三月、福井中學校を卒業するに至つた。之れ固より君の奮闘努力に因るとはいへ、亦柳下氏の薰陶が興つて大に力あることは言を俟たない。

君資性質實にして剛健、寡言實行の美風を有し、特に國家觀念旺盛にして、祝祭日には卒先齋戒沐浴して、遙に東方宮城を拜し、日出と共に國旗を掲揚し、日没と共に之を撤する等、其善行美談は實に枚擧に遑がない位であつた。之れ併しながらまた柳下彦雄氏其の人の崇高なる人格の反映である。

又中學校在學中君は柔道を修め初段の免許を得、身體頑健中々しつかりした體格であつた。しかも常に

『男と生れて國家の干城となることが出来ないやうでは男子たるの甲斐がない』

と云つて自ら努めると共に友達をたしなめつゝ、どんな忙しき間にあつても、勉學と共に體育に専念することを忘れなかつた。かくして、他日軍人となつて國家に報效すべく、竊に期する所があつたのである。

(ニ) 徴兵検査―入營

昭和四年君年二十一、愈々徴兵適齡に達した。検査は立派に甲種合格となり、躰て抽籤の結果は、歩兵第三十六聯隊に入營することゝなつた。君は『我が事成れり』と心竊に悦んで愈々軍人として身を立てるべく決心した。

翌五年一月十日、父兄親族知友、わけて柳下博士一門に見送られて、糺野の兵營内第七中隊に入隊して皇國軍人の一員となつた。

(ホ) 現役兵一教導學校時代

入營後の君は諸動作頗る真面目で、表裏無く、熱心軍務に精勵し、沈着剛膽事に當り、諸勤務の成績、學術科の伎倆共に優秀であつた。従つて四月十日には君の志望により下士候補者を命ぜられ、七月十日一等兵に、十二月一日上等兵に進み、伍長勤務を命ぜられ、仙臺陸軍教導學校に派遣された。

かくて在校一年間、幹部として必要な諸般の教育を受け、鋭意勉勵、優良の成績を以て、昭和六年十一月二十一日卒業歸隊した。十二月一日歩兵伍長に任し、第七中隊附となつた。

(ヘ) 下士官時代

十二月一日伍長となつた君は、内務班長として、又教育助教として、良く中隊長の意圖を體し、一意専心、教育指導に力め、將來頗る有望なる青年下士官として囑望された。特に獻身殉國の精神、内に充ちて、頗る責任を重んじ、率先難事に當るの美風を有し、常に自ら範を示しつゝ、自己の徳性と伎倆とを陶冶するに勤め、また懇切公平以て部下に對し、之が善導化育に力を盡くした。従て部下の尊崇と信頼とを受けつゝあつた。

(ト) 家庭

君未だ妻帯せず

父清太夫(前名)は大正十三年六月、君が十六歳のとき病死し、兄清雄家を繼ぎ、清太夫と改む。長姉すきを同區石川忠四郎に、次姉よしを同區山西村經田、高塚庄太郎に嫁し、(次姉は昭和一年八月十一日二十四歳にて病死)家には六十に近き老母と、兄弟及其の子供が居る。一家至極圓滿、農事に精勵してゐる。

老母としては、君は最愛の子であり、兄姉及嫂みな、一しほ君を愛し、君も亦母に孝養を盡くし、兄弟並に嫂に親切で、友悌の道を盡くした。

(チ) 上海出征

昭和七年二月二日第九師團に動員の令が下つた。君は現役下士官である。隊務は多事多端である、目のまはる程忙しく歸省の餘裕などは勿論ない。首途に際して故郷に送つて來たものは只一個の本箱のみであつた。この中の書籍こそは君が今日迄の無二の友達であつたのである。兄清太夫受取つて、中を檢めると、抽斗から意外にも二個の印鑑が出て來た。驚いたのは兄である、思ひらく、印鑑は在隊中入用のものである。然るに今、本箱に入れた儘、送つて來たのは匆卒多忙の際であるから、必ず忘れたに相違ない。若し果して然りとすれば、後に至りて、恐らく、困るに違ひない。こりや、こうしては居られぬと、直様、馳せて村長の許に至り、證明書を請ひ受け、夜半兵營に赴き面會を求めた。幸にも許されて、君に面會し。印鑑を渡したが、君は只阿兄の勞を謝するのみで別に謂ふ所がない。阿兄怪んで、

「兵でさへ、印鑑が無ければ困るのである。況して下士官の身分として、之を無くしたならば、一層困るのではな
いか」

と、反問した。すると、君の言ふには、
「僕が居らなくなつた後に、印鑑の必要なこともあらうかと思つて、家に送つたのである。僕には別に新らしく拵へた印鑑がある。」

と、上衣の物入より一の印鑑を出して、之を見に示し、更に此頃送つた二十圓の爲替證書を出して、

「父が亡くなられてから、年老いた母は僕の爲に、どんなに心配されたであらう。それなのに、僕既に長じて二十四歳、未だ何一つ母に孝養したことがない。せめて、この金で、何か好きな物を買ふて、一人の母に差上げて下さい。」と云ひつゝ、兄に渡した。兄は此純情に泣かされて、果ては兄弟互に手に手を取つて、人なき影に涙の別れをした。かくして、七日には、兵營を出發し、親族、知友や、多くの見送人の熱狂的な萬歳の聲に送られて、鯖江驛を發し、鐵道輸送を以て、八日廣島に着いた。此處に宿營すること二夜、十日宇品港出帆、十四日上海に上陸し、爾來同地警備

の任に服した。

(リ) 上海附近の會戰に於ける勇戰
二月二十日よりの戰鬪には、君の小隊は、其の前日乃ち十九日午後四時より二十九日朝に至る間、野戰重砲兵第二聯隊掩護の任に當つた。

此間十九日より二十一日迄は、重砲兵第二聯隊第一中隊の掩護に任じ、小隊の小銃先任分隊長として、新公園及復旦大學附近に於て、陣地警戒の任に服し、厄介な便衣隊の掃蕩や、部落の巡察等、不眠不休積極的に活動して小隊長を輔佐した。

二月二十二日には、小隊は江灣鎮競馬場に於て、重砲兵第二聯隊第一大隊の掩護に任じた。此際小隊長が積極的に江灣鎮の敵を掃蕩するに決するや、君は率先小銃分隊を指揮して、勇敢に北普橋西端に近接し、鐵道線路附近に居る敵に對し、猛烈なる射撃を加へ、之を沈黙せしめた。

二月二十四日には、重砲兵大隊が梅園附近に陣地を變換することになった。小隊は先行して、天樂寺西方踏切附近に達すると江灣鎮東北側敵陣地より、小銃及機關銃の猛射を受けた。小隊は全力を以て之に對戦し應射した。此時、君は頗る勇敢なる態度を以て部下を激勵し、射撃の威力を發揚して、敵を沈黙せしめた。

かくして終始忠實勇奮克く小隊長を助け、常に積極的に行動し、率先部下に範を示して、掩護の任務を完ふし、重砲兵大隊をして一意其の威力を發揮せしめたるに與て大に力があつた。

二月二十九日午後、小隊は中隊に復歸し、第三次攻撃に参加することゝなつた。そうして同日午後六時頃、中隊の登家宅占領に際しては、君の小隊は右第一線として活動した。此際君は該地東端にある幅約十米の濠に對し、架橋班長として、敵の銃砲彈の掃射下に於て勇奮部下を督し、土囊棺等を投入して埋立をなし、竹梯子を架し、中隊主力を渡河せしめ、以て登家宅占領を確實にし、三月一日に於ける大隊攻撃奏效の端緒を開いた。

此日戰場に於て寸暇を得て敵彈下に、次の通信を認め、郷里の兄に出した。

『無事。』

戰鬪、又戰鬪。

やつた。やつた。

痛快。

歸宅あてにするな。

一、二九、

清治より

清太夫様

此實に戰鬪開始後、今日迄の状況を述べ、愈々生還せずと決心し、訣別の意を寓せる最後の通信である。しかも、其記する所簡明直截、痛快極まりなし。一讀眞に血湧き、肉躍るの感を抱かしむ。

(ヌ) 君の重傷と其の崇高なる傷死

翌三月一日中隊が、登家宅より金家碼頭に向ひ攻撃前進中、君は豫備隊長として、小銃機關銃各一分隊を指揮し、敵の銃砲大雨注の下を第一線の直後にありて、勇敢に前進した。此際君は敵の榴霰彈の炸裂により、左頭部に數個の破片を受けて瘡れた。

何分瀕死の重傷なので、全く人事不省であつたが、間もなく收容後送せられて、上海第四野戰病院に入院した。

入院後、いろ／＼手當をしたので、漸く意識を恢復したが、すると、先づ、負傷せる中隊長の容態を尋ねた。そうして其の輕傷なるを聞くや、發言十分ならず、且右半身不隨の苦惱中にも拘らず

『中隊長殿萬歲』

『第七中隊萬歲』

を唱へた。其の後三月八日中隊長は君を病院に見舞ふた。すると君は、苦しき中に、懐しき中隊長の姿を認めて、『中隊長殿萬歲』

を唱へた。之を聞いた中隊長始め病室内の傷病者一同は、皆君が自ら幽明の境を彷徨しつゝも、尙只管中隊長の恢復を祈つて已まず、且又部下に對する心づくしの數々の言を述ぶるのを聞いて、感激落涙せないものはなかつた。

三月十三日夜より、容態急變して腦膜炎を發し、十五日午前八時該病院に於て、隊長と部下との健闘を念じつゝ、不歸の旅に赴いた。享年二十四。その純情は眞に神であり、佛である。

君死するの目を以て、歩兵軍曹に進み、功七級金鷄勳章、並年金壹百五拾圓及勳七等青色桐葉章を授け賜ふ。

(ル) 逸話

君の逸話は少くないが今其の一二を録して、生時を偲ぶよすがとしやう。

(一) 形見の桃樹

君が最深き恩顧を受けた醫學博士柳下彦雄氏は、夙に敬神崇祖の念篤く、毎年の盂蘭盆會に於ける魂祭には、家族一同を集めて、生前好きこのんだ果物等を供へ、鄭重に祖先の靈を弔ひ、往時を語りて今日の自己ある所以を知らしめ、以て崇祖の念を培養することを勉めて居らるるさうである。

現時同家の庭内に二本の桃樹がある。泉水木立思ふに任せて、風流に造りなしたる築山の陰にさりとては、また、餘りにも似つかぬ鄙びたあしらえである。ところが此桃樹は、中村君の郷里西藤島村上伏區は、果樹の栽培地として評判な所であるので、柳下家に於て行はるゝ例年の魂祭に供へる果物を得んが爲、君が自分の生家より持ち來つて移植したもので、三本あつた。君が征途に上るに方り、柳下氏に向ひ、

『私が戦死したならば、彼の桃樹を以て形見として下さい。』

と、申し残して出發した。然るに不思議にも、其のうちの一本は、君の戦死と共に枯れてしまつて、今は二本となつ

てしまつた。そうして、これが今日君の形見として立派な庭園内に、相變らず卑びた姿を残してゐるのである。なんと床しい話ではないか。

(二) 柳下氏の研究を助けた努力

又往時柳下氏が人生不治の腎臟病に就き寢食を忘れて研究に没頭し、遂に醫學上一大發見をなし、人生に偉大なる貢獻をなすに至りしことは世人の齊しく知る所であり、其の醫學博士の學位を享受されたことは、氏一身の榮譽のみならず、また我福井縣の誇りであるが、乍併其の背後には汝々として倦まず、撓まず、主人の爲に盡したる涙ぐましく中村君の努力があつたことを見通してはならぬ。實に柳下氏が其の研究の爲になしたるモルモットの解剖だけでも六七百匹の多數に上つてゐる。而して之を解剖して以て一々カメラにおさめ、之を現像し、之を記録し研鑽討究以て有名なる一大論文が出来上つたのである。

此間君は日夜博士を助けて、其の研究を容易ならしめつゝ、中學校に通學し、遂に其の事業を完成せしむると共に、身もまた中學校卒業てふ一つの目的を果した、其奮闘努力また感すべきではないか。

(ヲ) 墓碑

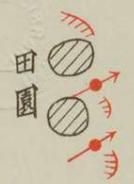
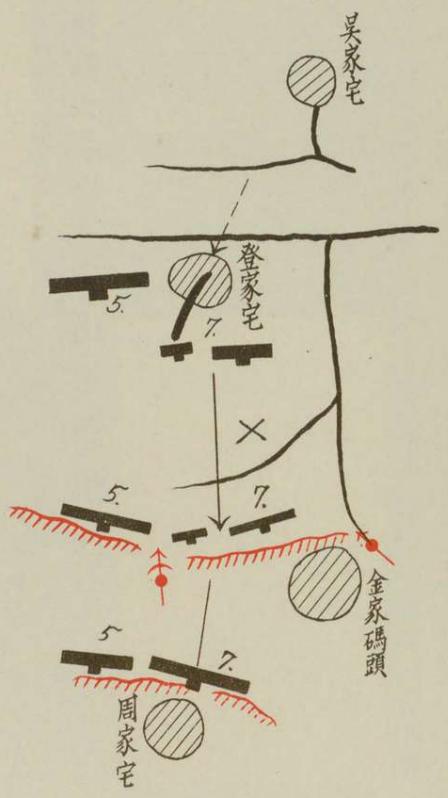
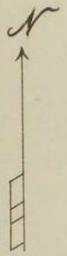
君の遺骨が郷里に到着するや、西藤島村は村葬を以て之を禮し、四月二日午前同村小學校に於て盛大なる葬儀を執行した。次て君の生家の前に立派な墓碑が建てられた。正面には『故陸軍歩兵軍曹勳七等 中村清治之碑』裏面に『法名釋感悟二十四歳、昭和七年八月建之』と刻し、側面に左の経歴及戦功が録されてゐる。

経歴

昭和五年一月十日現役兵トシテ歩兵第三十六聯隊第七中隊ニ入營。同日歩兵二等兵、四月十日第一期卒業。同日下士官候補者ヲ命ズ。七月十日歩兵一等兵、十二月一日歩兵上等兵、同日伍長勤務上等兵。同日仙臺陸軍教導學校ニ入學。昭和六年十一月二十一日同校卒業。十二月一日任歩兵伍長、同日第七中隊附。昭和七年二月二日動員下令。同日歩兵

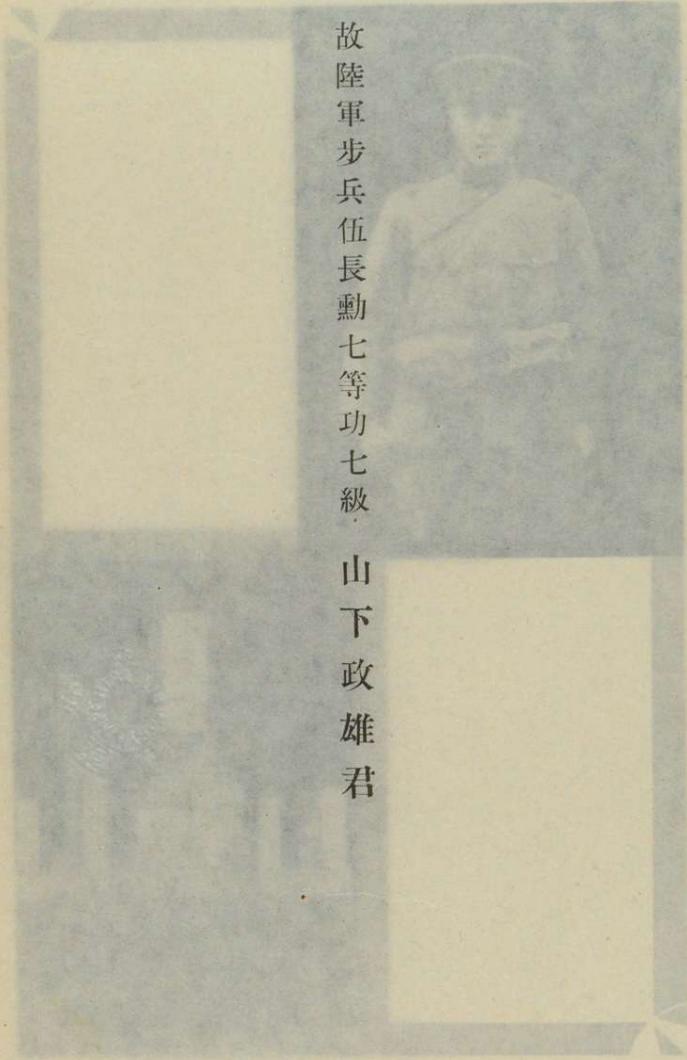
圖要置位傷戰曹軍村中

(近附頭碼頭金於日一月三年七和昭)



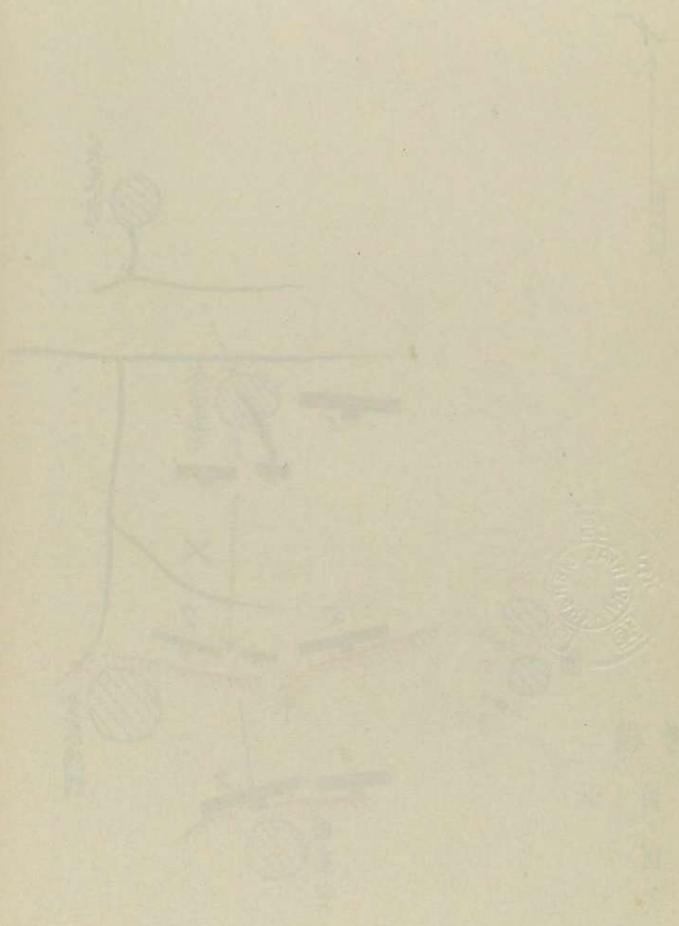
考備
前二同シ

故陸軍歩兵伍長勳七等功七級 山下政雄君



中村軍曹輝勳外置要圖

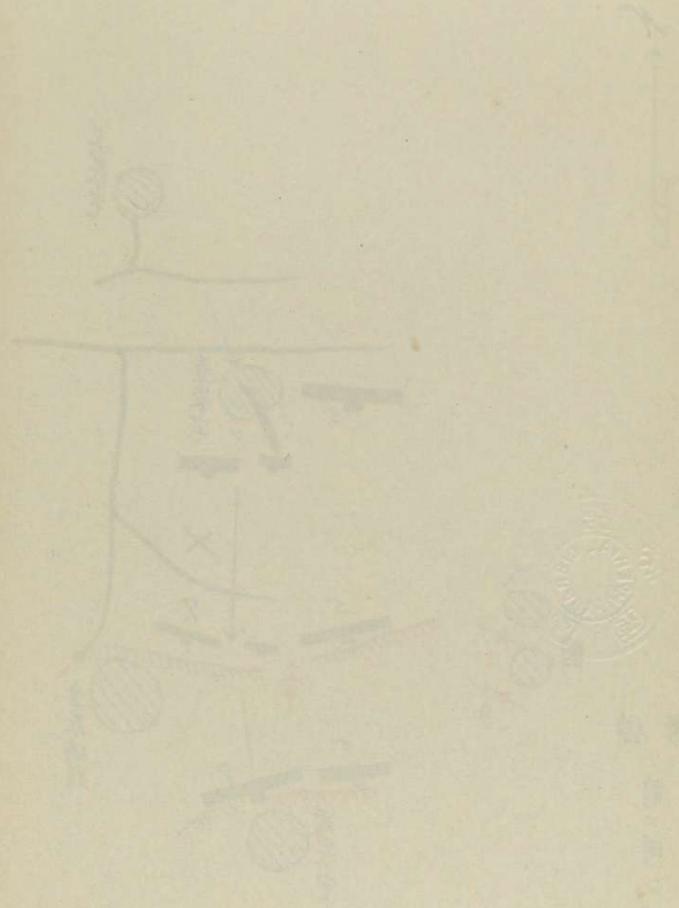
昭和十三年三月一日陸軍省軍醫部

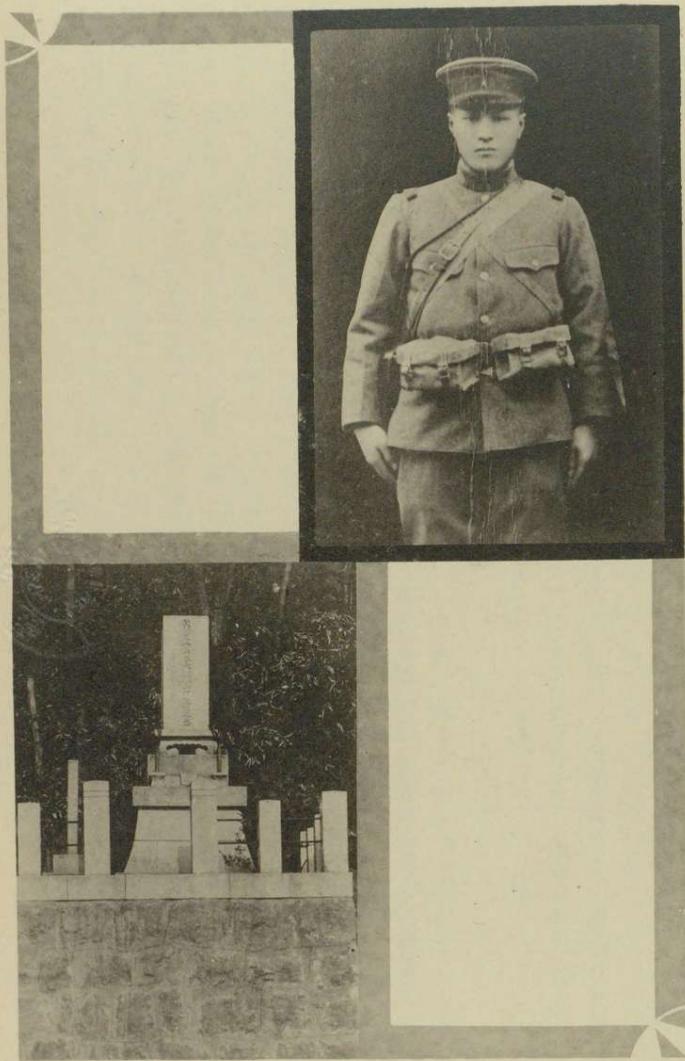


故陸軍歩兵伍長勳七等功七級 山下政雄君

中林軍曹規對勳章要圖

(昭和四年三月一日陸軍省勳章部制定)





站
劉
軍
忠
吳
世
長
德
子
善
世
子
燦
山
不
頌
無
存

其五 故陸軍歩兵伍長勳七等功七級 山下政雄君

(イ) 君の出生

君は明治四十二年三月五日大野郡羽生村大宮、農山下家の三男として生れた。父次郎松は明治四十四年十二月君三歳の時他界し、君は二兄と共に母の手一つにて成人した。父の在世中は相當の田畑山林を有し、かなり有福に暮らしたのであつたが、其の歿後は父の残した借財の爲に苦しめられ、一家は思もよらぬ悲惨な状態に陥るに至つた。

(ロ) 小學校時代

かゝる苦しき生活の中にも、すなはなる君はぬく／＼と成長し、大正四年、年七歳、羽生村立小學校に入學した。そうこうしてゐる間に、大正五年四月一家は福井市に轉居し、君は同市順化小學校に轉校した。天性順良にして明敏物事に熱心なる君は學校の成績も優秀であつたが、一家の不幸を見るにつけ、孝心深き君は、母の心を少しでも慰めたげにも憐寸の箱張りや、團扇張りなどに備はれて、熱心に働いた。又仕事の都合で、或時はデーニール線等にも備はれげにも憐寸の箱張りや、團扇張りなどに備はれて、熱心に働いた。又仕事の都合で、或時はデーニール線等にも備はれた。かくして日に十錢二十錢の金儲けを怠らなかつたのである。正直で勤勉な君の性行は、いつとはなしに近隣に知れわたつて、感心な少年、親孝行な子供として評判が高くなつた。

かゝる間に、かねて名古屋市枇杷島の某染色工場に働いてゐた長兄次右衛門が、徴兵検査の爲歸つて来て、愈々自分で商賣を始めると云ふので、福井市寶永下町二十五番地（元鷹匠町）に移つた。次で大正十年三月には君は優等の成績を以て順化小學校を卒業した。

(ハ) 西川呉服店々員時代

尋常小學校卒業後は直に福井市錦上町（二乗町）呉服卸商西川捨利方店員となり、恪勤誠實、主家の爲に精勵した、

則ち仕事に表裏なく、坐作進退にも油断なく、萬事に注意が行届き、何をやつても痒ゆい所へ手が届く勤振りであつた。主人もよなきものとして之を愛し、君もまた真心を盡して主家に仕へ、同僚に對しても、客筋に對しても、誠に人づき合ひも善く親切で、みなの人に可愛がられ、信頼された。

(二) 徴兵検査—入營

昭和四年君年二十一歳、徴兵適齡となつた。西川呉服店では、前後九年、またなき大事な店員であり、商賣のことは何もかも一切のみこんで、主人に代りて奔走勤勉、一家の柱石として働いてゐる君を一時でも失ふことは、誠に好ましくないことであつた。従つて徴兵検査に合格することは商賣の上からは決して望ましいことでは無かつた。併し、君としては、苟くも日本男子である以上、不合格になるやうなことは、絶対に望ましくない。願くば立派な男子としては是非軍隊に入つて見たいと、念じて居た。

體て検査の日は來た。體格、人物共に申分なき青年である。甲種合格となつた。君は心竊かに悦んだが、併ながら一方自分が居らなくなれば、主家の商賣に困るやうなことが無からうかと、主家を思ふの餘り入營が心進まぬやうな氣がせぬでもなかつた。けれども、兵役の義務は公事である。私事を以て公事を議すべきでない、明敏な君は自ら誠め自ら誓つて、検査に合格後は尙更一生懸命に主家の爲に商賣に勤めた。自分の留守の間の分までも出来るだけ働かうと考へたのである。

そのけなげなる志は一層主人の氣に入つた。愈々入營の日が近いた。君は主人に挨拶して、従來の恩を謝し尙退營後も引續いて働くべく約束した。主人は君の長き間の勞を謝し、其の精勤を賞し、入營中も休日には歸つて來て、店の世話をしてくれるやうにと話した。この意氣に感じて、君は堅く心に誓つて、昭和五年一月十日歩兵第三十六聯隊に入隊した。

(ホ) 現役兵時代

入營後の君は第十中隊に編入された。爾來刻苦精勤軍務に勵み、諸規定の履行確實にして、諸勤務の成績優良、學科亦優秀であつた。特に其誠實溫良にして義務心厚く、克く上官の命令を遵守して率先難事に當るの美風は上長の信頼を得、同僚の敬愛を受けた。また友達との交りは圓滿で情に篤く、品行は方正であつた。

かくて四月十日上等兵候補者を命ぜられ、七月十日歩兵一等兵に進み、十二月一日上等兵を命ぜられ、六年五月十五日精勤章を附與された。

今在隊間の君の働振りの二三を中隊よりの通知から摘記すれば次の如くである。

『山下は平素から用意周到で責任觀念厚く、如何なる場合でも自己の責任を忘るゝ事なく、稀に見る人格者で、常に同輩より敬愛されてゐた。』

二年兵となつて以來、除隊するまで、中隊兵器掛助手となり、常に積極的に活動し、中隊兵器の向上に心懸け、秋季演習で疲勞困憊した時でも、滞在日等には進んで兵器の整理に任じて居た。又戰友に對する同情厚く、自己の戰友に對しては懇切丁寧に指導し、殊に輕機關銃の故障排除、構造機能の學科を終始教育してゐた。

週番上等兵の勤務に當りては、常に率先して事に従ひ確實周到で寸分の隙もなく、當時の上等兵中模範者であつた。と、以て君の軍隊に於ける行動の如何に獻身的で熱心誠實、軍務に盡瘁し、志操堅確、人格高尚、衆の模範であつたことが推知さるゝではないか。』

かくて大正六年八月二十日歸隊除隊を命ぜられ、下士適任證書及善行證書を附與された。乃ち在隊間の成績は最優秀であつたのである。

(ハ) 西川呉服店再勤時代

除隊後は従前の約束通り西川呉服店に歸店し、益々精勤した。

生來孝心深き君は常に母をいたはり、慰め、兄弟との間柄も友悌の道を守り、仲睦しく、濃厚篤實、眞摯勤勉なる模

範青年であつた。

西川呉服店の當時の繁榮は實に君の手腕信用によると云ふも過言ではなかつた。君が在隊間は同呉服店の商賣は實に從來の三分の一にまで衰へたが、六年八月君が退營後再勤するや、得意は以前に倍加し、商ひ高は日に日に躍進繁榮した。此状態で進んだならば同呉服店の將來は大に祝福すべきであつたのに、意外の事變が起つて、此有爲なる青年は、再西川家を去らねばならぬことゝなつた。しかも此度は永久に西川家を去つたのである。噫

(ト) 家庭

君年齒若く、未だ妻帯せず、家は長兄次左衛門戸主となり、一家を經營し、次兄次作は別に分れて一家を成してゐる。家には長兄の外、母すみ及嫂並に其の子女が居る。

大正九年頃より君の家は、前記の如く福井市寶永下町二十五番地(元鷹匠町)に居住し、細き烟を立て、をつたが、此間次兄次作は現役兵として歩兵第三十六聯隊に入營した。昭和五年八月更に一家は圓山東村下四ツ居に轉居し、戸主は紙箱製造工場に通勤し、家は飲食店を業とし、其の日の生計を立てゝゐた。

(チ) 召集

昭和六年九月十八日の北大營附近に於ける支那官兵の南滿鐵道線爆破は、滿洲事變を勃發せしめ、國民敵愾の氣一時に高調し、一方支那の我に對する暴戾非道は益々惡化し、事態容易ならざるものがあつた。在郷軍人は切齒扼腕して、みな其の出動の時の至ることを待つてゐた。君もまた、風雲の急なるを見て、大に決心する所があつた。併しながら平素より温厚沈着な君は、一家の者には何等口外せず、孜孜として主家の爲に精勵するのみであつた。何時動員令が來るかかわらぬ。それまでは大恩受けた主人一一意自分を信用して働かしてくれる此主人の爲に出来るだけ働いてをかうと云ふ心持であつたらしい。

當時君の家は圓山東村にあるけれども、まだ戸籍上の手續が了つてなかつたので、依然福井市寶永下町に居住してゐる

ることになつてゐた。

かゝる時に、二月二日動員の令下り、三日朝召集令狀がそれゝ配布された。しかし、それが福井市から圓山東村役場を経て君の家へまわつて來るので、山下家へ配達されたのは、最早正午頃であつて、主家に居る君の許に届いたのは尙一二時間後であつた。そうしてそれが翌四日朝八時歩兵第三十六聯隊へ入營せねばならぬのであつた。

かねて、斯くあるべく期して居つた君は、直に主人に其の旨を報告して、從容自若、自分の出て行つた跡の商用につき、それゝ必要な處置をなし然る後主人に告別の挨拶をなし、家に歸り母や家人に之を話し、直に元氣良く家を飛出して、市内の特に世話になつた得意先へ告別に廻つた。そうして夕刻には歸つて來て、自分の身廻りのものを全部始末し親類の人々が訣別に集つた席へ出で、全く別人かと思ふ程、元氣な面持で

『愈々最後の時が來ました。二箇年の軍隊教育によつて得た、此身體、此精神を以て、思ふ存分商賣の道を學ぶ考へで居りましたが、今度は「廻れ右」です。滿洲の平野が待つて居る。命を的に舞を舞つて來ます。』

と言つて人の心配も知らぬかの如く立派に挨拶をなし、母に對しても

『母さん、何も心配することはない。鐵砲の彈の數程支那人の首を持つて來ますよ』

と言つて却て母や家人を慰め勵ました。しばらくすると福井市寶永分會よりは『福井市から出發せよ。』『武運長久の祈願祭にも市の方へ出よ』『送別會にも出よ』と盛に言つてくる。之れには『御親切は難有いが、目下福井市に居住してないから』と斷つて居ると、今度は近所の人が來て『區内の送別會が今夜あるのに通知がまだ來ないか』『明日は圓山小學校の生徒が見送る筈だが何時出發するのか』など聞きに來ると云ふ始末で、戸籍上の手續がしてなかつたので氣の毒にも、君は村の送別會や、見送りの受け得ないで、出發した。君はかゝることには一向平氣で何の頓着もなく終始元氣で快活に出發したが、家族一同としては遺憾に堪へなかつた。特に戰死された今日一層其感を深くするものがあつた。吾人も頗る同情に堪へない心地がする。かくて四日午前八時立派に歩兵第三十六聯隊に應召し第十中隊に編

入された。

(リ) 上海 出征

應召後の君は繁雜多端なる動員業務に對し中隊幹部の命を受けて、敏活熱心に、入隊の其の日より連日不眠不休で精勵した。君のやうな有用な人物は實に重寶で、かゝる忙しき場合には、ほんとによく役立つものである。

かくして君は上等兵であるけれども、第二小隊輕機關銃第三分隊長を命ぜられ、七日朝兵營出發、沿道山の如き見送人の中を鮎江驛に至り熱誠溢るゝ萬歳聲裡に出征の途に就いた。

沿道各驛の見送もまた中々盛んなものであつた。かゝる國民の熱誠を滿喫した君は七日米原驛に於て、列車中から次の書信を郷里に送つた。

『前略、御許し下さい。陳者山下は大に元氣で米原を出發します。今は四時五分過で有ります。山下は分隊長として大に國家の御爲に働きます。御休心下さい。山下は一寸酒によつて字が亂雜で有りますが、御ゆるしの程願ひます。』

以て君の奉公心の厚き一端を知るに足るではないか。翌八日廣島に着して宿營し、また次の通信を書いた。

『前略御許被下度候、陳者我々は八日朝七時に廣島に着き、直ぐに舍營仕候。宇品出發は十一日午後御座候。我が第三大隊は、獨立大隊として出征との事に御座候、大隊長市川元治殿、中隊長坂中中尉殿、我が分隊の小隊長は岩崎少尉に御座候。今後新聞紙にも出る事もあるべく一寸氏名御通知申上候。今日までに廣島だけで三個師團程集合致居候。次に寫真を取り申候間、拾日程後には着申すべく、只今は表記の家に舍營、大變なる御世話になり出發致すべく候間、何卒禮狀宜敷御願申上候 敬白』

註、「第三大隊が獨立大隊として出征」とか、「三個師團」云々と云ふことは、君の聞き誤りである。

かくして廣島市民の非常なる歡待を受け、十一日宇品港に至り乗船した。此時の通信には、

『拜啓、今十一日午後二時宇治奈丸に乘りました。埠頭には人の山で屋根と不言、山と不言、人を以て埋められ、

生れて始めての見送り有ります。私は大元氣であります、御休神下さい。 敬白』

とあつて國民の熱狂的盛大なる見送を受け益々報效の決心を固くし、同日出帆。瀬戸内海を航行し、十二日下關に着いた。

『昨日宇品を出發、瀬戸内海を進み、本日下關に着きました。此所出帆は午後五時頃であります。先方に上陸は十五日中で御座います。それから後は吾々の大に活動致す時であります。』

と通信して、早くも上陸後の活動を豫期しつゝ夢魂既に上海の空を驅り、十五日船は上海沖に着いた。

十六日には愈々上海に上陸した。

『拜啓時下私事郷中は格別の御厚情御指導に預り難有厚く御禮申上候。只今上海に上陸し上海東南方上海紡績第一工場に休止致し居候。明十七日は上海工部局の不良狩を行ふ由に御座候。敵は總數三萬五千との事に御座候。先づは在郷中の御禮申上御通知迄。

支那は割ばし、北京と折れて

やがて日本のまゝとなりませう。』

右は上陸後第一回の通信である。愈々敵地に入つた。元氣日頃に百倍して、氣既に支那全土を呑むのである。之れより前記第一工場に宿營して、それ／＼警備の任務に就いたのである。十八日更に左の通信を書いた。

『昨日は午後三時より第十中隊の警備區域を偵察に出で、六時三十分頃歸隊致しましたが、我々陸軍が上陸致したので大喜びで有ります。上海の氣候は、我國と變りは有りませんが、水は湖水の水を水道に用ひて居りますから、生水は飲用水には出来ません。今居る所は共同租界の上海紡績跡でありますから、御休神下され度願ひます

二月十八日午後八時』

かくて警備區域の警戒に従事し、更に君は上海日本郵船會社支店の衛兵として服務した。此間來るべき會戰を豫期し

つゝ準備おさく、怠りなく、以て二月二十日に至つた。

(又) 上海附近の會戰に於ける勇戦と壯烈なる其の戦死

二月二十日よりの上海附近の會戰に際しては、二十日君の中隊は師團の豫備隊として不眠不休警戒の任に當り、二十一日朝大隊に復歸すべく師團司令部の位置を辭し、迂回して行軍すること二里餘。此間連日の疲勞の後重き軍裝を以て行軍する兵士の足並は、動もすれば鈍り勝ちであつた。しかも敵に近く進むに従ひ、敵彈は盛に飛んで來る。これを見

た君は

『何、チャンコロの彈なんか、中るものか、度胸を据えて前進せよ』

と敵彈身邊を掠めて危険極りなきも平然自若、叱咤督勵して率先奮進した。

かくて中隊は大隊主力の位置丁家宅に着し、直に右第一線となり、第十一中隊の右に連つて、戰鬪を開始した。君は敵の正面射並熾烈なる側射の下を部下を督して勇敢に前進し適切なる射撃指揮を以て、普西にある敵の自動火器を制壓し、午後二時三十分遂に普西の敵陣地に突撃して、之を奪取するを得せしめたるに與て大に力があつた。

敵陣地占領後中隊は普西西端の水濼の線に進出して、陣地構築に従事したが、前方約八百米にある敵陣地より、猛烈なる射撃を受け、作業頗る困難であつた。君は此間に在りて勇敢に部下を勵ましつゝ、工事をなしたが、日暮頃に至り漸く掩體を設けることを得た。然れども敵の敗殘兵尙村落内に伏在して中隊を射撃し、前後及側方より狙射を受け、危険極りなく、死傷續出する。君も亦此時之が犠牲となり、午後八時頃右胸部に敵彈を受け、壯烈なる戦死を遂げた。其の勇烈果敢なる働振りは實に武功拔群であつた。

更に君の戦死後、中隊の特務曹長より遺族に通知せられたる書信を載せて、君が戰場に於ける働き及其の戦死の有様を一層追懐する、よすがとしやう。

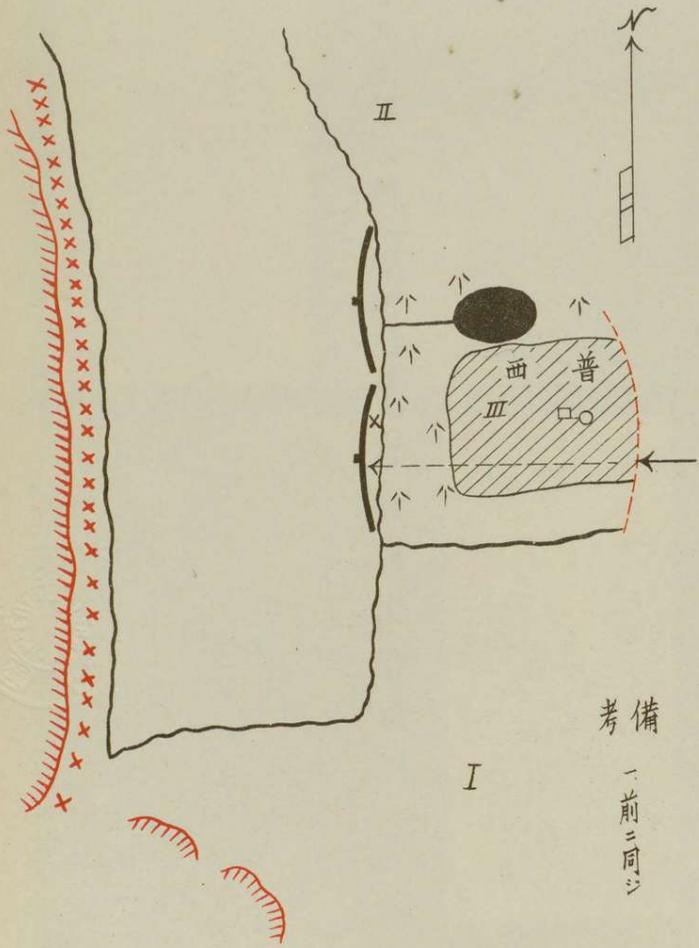
『新聞ニテ御承知ノ通り、政雄君ハ二月二十一日午後八時頃、名譽ノ戦死ヲ遂ゲラレ申候。政雄君ハ至極眞面目ナ人

物ニテ現役時代ハ勿論今回ノ召集以來熱心ニ努力セラレ、第二小隊第三分隊長トシテ活躍セラレ候。中隊ハ二月十一日宇品丸ニテ宇品ヲ出發シ十五日上海ニ到着、十六日上陸仕り當日ハ上海紡績第二第三工場ニ宿營シ、十九日迄出動準備ノ爲休養シ、傍ラ諸事ノ準備ヲ致居候。愈々十九日出動命令アリ、中隊ノミ他中隊ト別レ、午後十二時(政雄君ハ其レ迄上海ノ日本郵船會社ニ衛兵トシテ服務)上海北端ノ師團司令部ニ至リ、師團ノ豫備隊トシテ其夜ヲ明シ、二十日モ亦豫備隊トシテ師團司令部ト行動ヲ共ニシ、二十日夜ハ敵ノ砲彈ガ猛烈ニ師團司令部近ク落下シ、又敵ノ夜襲等有之、一睡モセズ、警戒致居候。二十一日朝四時大隊ニ復歸ヲ命ゼラレ、中隊ハ師團司令部ノ位置(江灣鎮東方約一里復旦大學)ヲ辭シ、迂回シテ約二里許行軍シテ第一線ニ進出仕候。敵トノ距離約一里位ニ到着スレバ、敵ノ小銃彈ハ熾ニ飛來ス、此敵彈ヲ物トモセズ、中隊ハ疎開隊形ヲ以テ前進シ、大隊主力ノ位置上海北方丁家宅ニ到着、直ニ大隊右第一線トナリ、第十一中隊ノ右ニ連リ戰鬪ヲ開始致候。此位置ハ敵トノ距離約千米所ニテ益々敵彈ノ洗禮ヲ受ケ、危險此上モナク實ニ生命ハ風前ノ燈火ノ有様ニ有之候。追々進ンデ五百米位ノ所迄前進シタ時、中隊ノ喇叭手西出茂ガ第一ニ戦死シ、輕機關銃手山下作次郎(後ニ病院ニテ死ス)大辻又吉兩君ハ重傷ヲ受ケ申候。敵前二百米位ノ所ヨリ普西ノ敵ニ對シ突撃ヲ致シ、普西ノ敵ヲ撃退仕候。

併シナガラ普西ノ敵陣地ハ、敵ノ警戒部隊ニテ、其後方約八百米ノ所ニハ立派ナル陣地ヲ構築セル敵ノ主陣地ガアリ其所ヨリ猛烈ナル射撃ヲ受ケ、進退ハ極マリ、普西部落ノ西端ノ川(深サ一米、中約十米ニ飛込ミ、前岸ニ散兵壕ヲ作り、漸ク安心致居候、シカシナガラ敵ノ射撃ハ猛烈デ一步モ外ニ出ル事ガ出來ズ、腰カラ下ヲ水中ニシテ散兵壕ヲ構築シ、一方普西ノ部落ヲ燒拂ヒ申候。普西部落ハ上海西北方約二里デ、大場鎮東方約一里位ノ地點ニ御座候。新聞デ有名ナ爆彈三勇士ノ戦死セン廟行鎮ノ南方三千米位ノ所ニ御座候。此普西西端ノ散兵壕ヲ充分安全ニスル間、中隊ハ一同必死トナツテ作業シ、漸ク日暮時ニ其レラシク相成候ヘドモ部落ニハマダ敗殘兵ガ有リ、背後ヨリ中隊目ガケニ射撃シ、中隊ハ前後ニ敵ヲ受ケ、死傷者相次キ申候。其ノ間政雄君ハ胸部ニ敵彈ガ命中シテ小生ヨリ右(敵ニ面シ

山下伍長戰死位置要圖

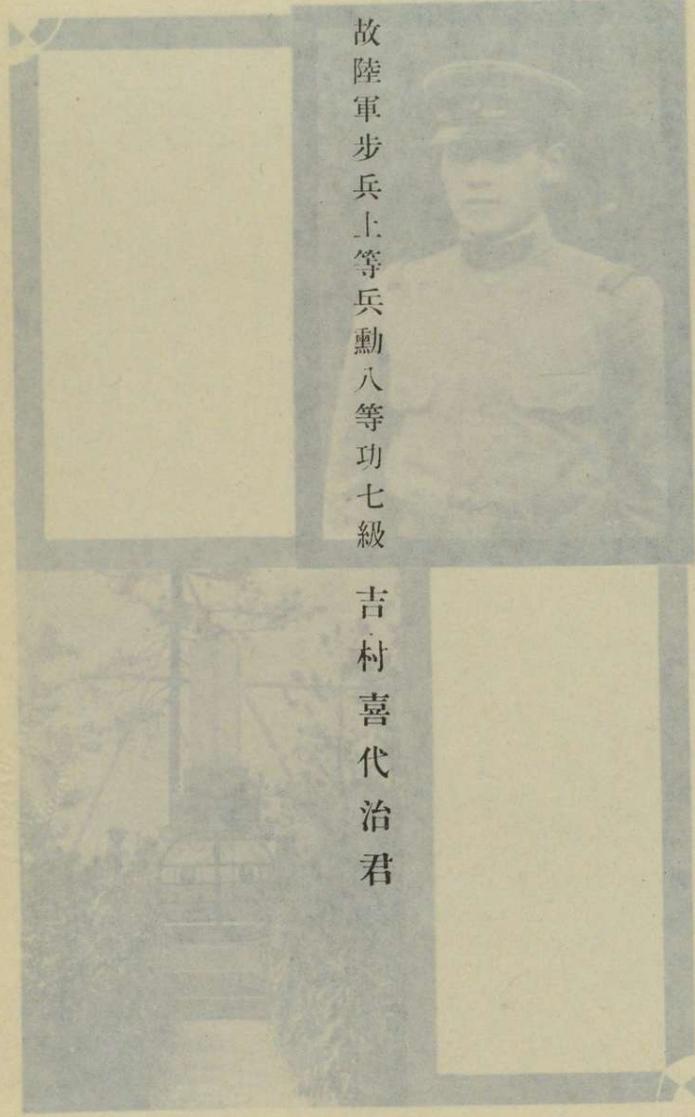
(昭和七年二月十一日於普西附近)



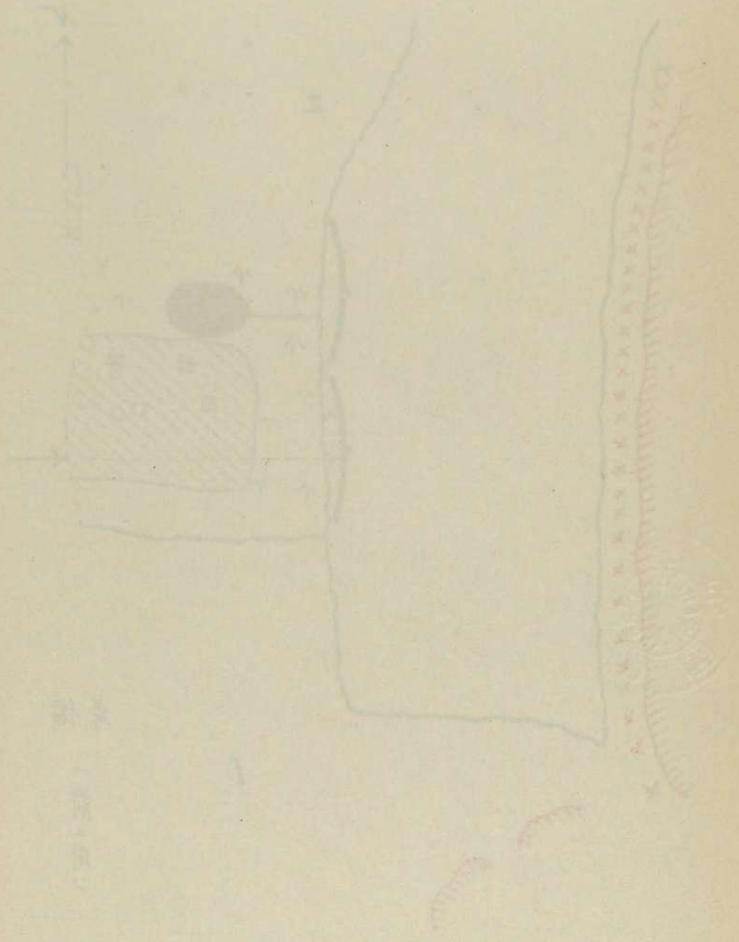
備考

一前二同シ

故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級
吉村喜代治君

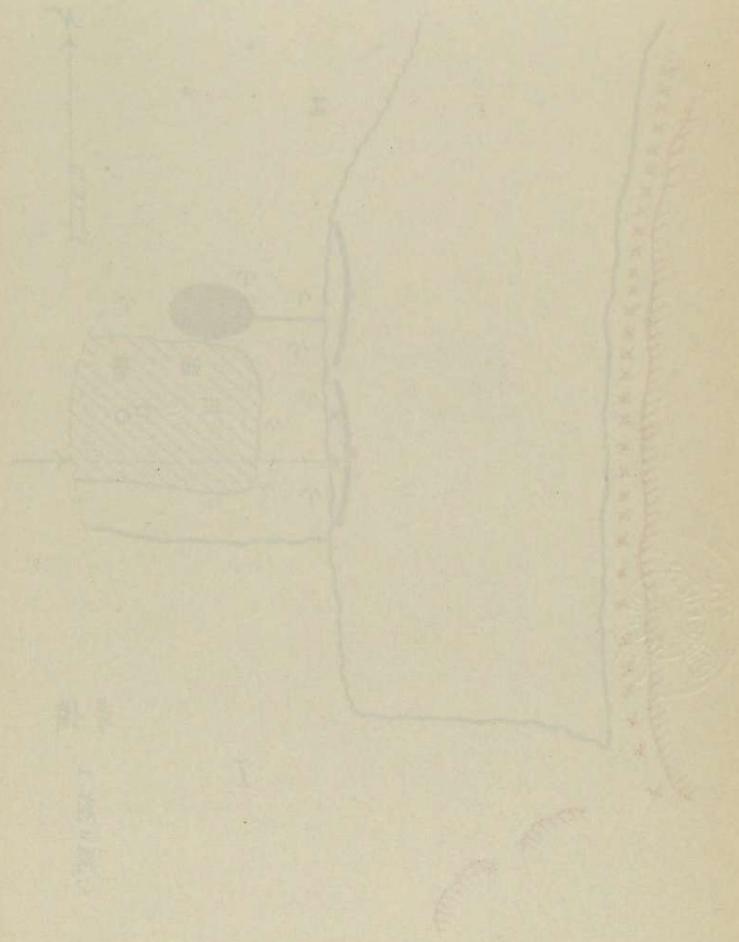


山不崩身類天並置要圖
(明治二十二年二月一日陸軍省刊)

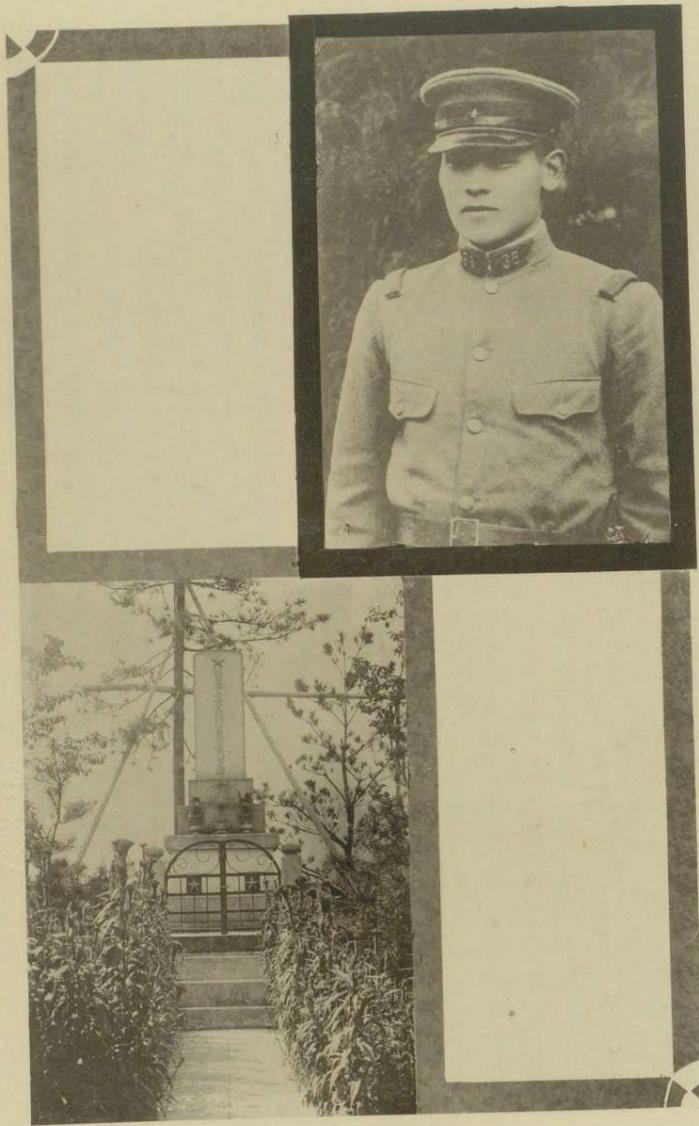


圖要並其地是山

(此圖係二頁二十一頁之續圖也)



故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 吉村喜代治君



站綢軍巷兵士卷兵燠入卷也子縣 吉林喜升前係

其六 故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 吉村喜代治君

(イ) 君の出生と北海道

君の家は西藤島村三郎丸にありて、世々農を業とした。

西藤島は北は九頭龍川東より流れ、西方には日野川ありて、東安居村の南方に於て足羽川を合せ、北流し來りて村の一隅を横ぎり、村の北邊に於て九頭龍川に合してをる。又南境には、吉田郡平野の灌漑用水の落水の集りより成れる底喰川の流るゝありて、其の三方が川に圍まれ、土地低濕頻年水害を被り、往時は農穀稔らざること多く、農家の生計は實に窮乏に堪へざるものがあつた。此に於てか、少壯有爲の青年が、なつかしき故郷を出で、或は天與未開の美地に前途の光明を見出すべく、或は殷賑繁華の巷に成功の途を迎へべく、他郷に奮進するものが少くなかつた。君の父石太郎も亦其一人であつた。

七歳にして母を失ひ、父兄と共に辛苦の裡に營々として農耕に努力しつゝありし、元氣な青年石太郎は、明治三十八年、年二十一、徴兵検査もすんで九月になると、鬱勃たる英氣止み難く、父兄に別を告げて、まだ獨り身のいと軽く、北海道へと出立した。當時北海道と云へば、未開の沃野、廣漠として、農業、鑛業、森林、水産等遺利山の如しと宣傳され、失意不遇の人々が成功を夢見つゝ、我も〜と入り込んだのであつた。

北海道に渡つた石太郎は、石狩の平野に足を止め、土地の開墾並に農耕に奮闘した。居ること二年餘、だん〜足場が固まるにつれて、妻帯の必要を感じ、岩見澤町札幌向原野北參線東戌號戸主北川六松長女しずを娶り、新らしき生活に入った。そうして、明治四十一年の十一月二十八日長男喜代治君が生れたのである。

かくして高原のパラタイスに樂しき團欒の夢は、夫婦共稼の下に幾年か續いて、此間にまた三人の娘が生れた。(内一は生れて間もなく死す) 然るに好事魔多しとかや、大正四年頃より妻しずをは心臓を患ひ、屢々十數里を距たれる札幌の病院に於

て療養したが病勢時に消長あるも、宿痾容易に瘥へず、不幸にも同六年六月終に歸らぬ旅に赴いた。喜代治君時に年僅に十歳であつた。

當時父石太郎には開墾せる田畑並少々の貯へもあつたが、妻の長わづらひの爲、田畑は賣拂ひ、貯への金は使ひ果し北海道に來つて十二年、辛苦努力の結果も之に至つて無一物となり残つたものは頭是なき三人の子供のみであつた。雄志空しく、希望は水の泡と消え、途方にくれざるを得なかつた。されど氣を勵まし勇を鼓して漸く其の年の秋の收穫を濟ませたので、愈々故郷に歸るべく決心し、今や冬の寒さに入らんとする十二月の或日、亡き妻の遺骨を長男喜代治君に捧持せしめ三人の子供を連れて、住馴れし石狩平野をあとに、郷里に向ひ出立した。可憐なる少年喜代治君が長き汽車旅行の間一睡もせず、母の遺骨を手にして啜り泣きするのを見て、人知れず涙を催す父親や、身の上話を聞きて、同情の涙を滴ぐ車中の旅客達に慰られ勵まされつゝ、故郷西藤島村三郎丸に辿り着いたのは其の月の末であつた。

喜代治君の楽しい少年時代の夢は、かくの如く美しい母の死によつて、摘み取られてしまつたのである。

(ロ) 小學校時代

故郷にかへつた君の父は、家に残つて老いても尙元氣な祖父の下に暫し身を寄せ、足手まとひの子供も居るので、後妻を娶り、農業に従事していたが、幸にも鐵道省小荷物取扱所に出ることゝなつたので其の年の暮福井市松影町に轉住した。一方喜代治君は、曩に大正四年父と共に北海道に在りし時、岩見澤村志文尋常高等小學校に入學したが、大正六年の暮郷里西藤島村に歸つてより、同村立尋常高等小學校に轉じ更に福井市に移住後は、同市花月尋常小學校に轉校したのである。かくあちら、こちらと學校をかはることは、教育上子供の不幸は云ふ迄もないことであるが、しかし多くの子供をかへ、安住の生活を求めて離離苦闘する父を見るにつけ、まだ頭是なき子供ながら、根が實い少年である喜代治君は、いたく父に同情し、放課後は馳せて家に歸り、家事の手傳や、妹共の世話や、それは忙しく働いた。かかる間に於ても、豫習復習に心を傾けて常に學事に親しんだが、到底十分なことは許されなかつた。けれども學校の成績は

いつも中位を下らなかつた。

間もなく繼母が迎へられた。君はまたよく之に仕へ只管其の心を悦ばしむるを以て無上の樂としてゐた。かくて逐次弟妹が生れて來るにつれて、之をいつくしむことも亦一通りではなく、萬事に氣をつけて、少しもかけへだてなく愛撫して來た。

大正十四年三月、花月小學校を卒業した。時に君年十四。實に眞面目で熱心で、すなほな少年であつた。

(ハ) 青年時代

小學校を卒業した君は、少しでも父の手助けとなつて一家の生計を補ひ、且は自分の將來の生業をも考へて、自ら進んで福井市佐佳枝上町中菓子店に奉公の身となつた。

奉公人としての喜代治君は、主家を思ふの情厚く、正直に表裏なく働き、常に主人に愛好されてゐたが、毎月貰ふ少額の給料では中々苦しい一家の生計を救ふことが出来なかつたので、已むなく同店を辭して福井郵便局の配達夫となつた。時に年十七である、此間父は屢々病氣となり、十分に働くことが出来なかつたので君は懸命に働いた。おいしい物が食べたいの、美しい着物を着たいなど、贅澤を言ふてゐる場合ではない。當時一家の困難は想像するだに氣の毒な状況であつた。貧乏人の子澤山と云ふ世の諺の如く、君の家には、子供は殖えるし、生活は益々苦しくなるばかりであつたから、一家はまた西藤島村に歸つた。かゝる貧苦の間に君は病父に仕へ繼母をたすけ、弟妹をいたはり、少しもいやな顔をせずいつもやさしく、おとなしく、一家の中軸となつて働き、圓滿平和の家庭に感謝の日を送つてゐた。村民は譽て君の善行を嘆稱し青年の模範として之を仰がしめた。

郵便局に奉職すること約二年、父もだん／＼元氣になり、妹共も今は大きくなつたので、大正十五年三月知人の勧めにより、郵便局を退き大阪に赴き、此花區大開町菓子商藤田清吉方に商賣見習の爲奉公の身となつた。

(ニ) 徴兵検査―入營

大阪に居ること二年餘にして、昭和三年、年二十一、徴兵満齢に達したので、検査前郷里に歸つた。検査は立派に甲種に合格し。歩兵に入隊した。

これより暫く家にあつて父をたすけて農業に勵み、また西藤島青年訓練所に入所し、只管入營準備に力めた。かゝる間に祖父は八十二歳を以て歿し、間もなく君は翌四年一月十日現役兵として歩兵第三十六聯隊へ入隊した。

(ホ) 現役兵時代

歩兵第三十六聯隊に入隊した君は、機關銃隊に編入せられ、爾來熱心精勵諸勤務に努力し、十二月一日一等兵を命ぜられ、昭和五年十一月三十日滿期除隊した。在隊中の君に就て、中隊幹部の見る所を述べれば次の通りである。

一、志操堅確、性温順ニシテ品位整ヒ、氣概アリテ卒先難ニ趣クノ美風ヲ有ス。

二、言語明瞭、態度嚴正ニシテ品位端正ナリ

君が立派な人物であり、人格者であつたことは以上の數行を以て盡されてゐる。かゝる人格性行は固より天性にも因ることであるが、また一面には、幼少より艱苦の裡に人となり、東奔西走一家の支持に力め、將來の發展を準備しつつ奮闘し、一難を経る毎に愈々強く、屈せず挽ます邁進して來たので、天稟の美質が益々陶冶され、洗練されて、志操の堅確な、意志の強い、氣概のある元氣な青年となつたものと思はれる。

特に貧苦の中に成長したにもかゝらず、品位整ひ、態度嚴正、品行方正であり、言語應對も立派であつたと聞いては、其内に養はれてある善美な精神が思ひしのばれて、一層尊く床しき心地が湧き出づるのである。

(ヘ) 豫備役兵として在郷時代

除隊後の君は、軍隊に於て鍛練陶冶された精神と體軀とを以て、愈々家業に精を出し、傍ら福井市に出隊をなす等奮闘努力一家の生計を支へ、又在郷軍人としては常に修養鍛練に努め、他日の報效を期しつつあつた。

(ト) 家庭

君未だ妻帯せず。

父石太郎は明治十一年九月九日生れにして、年未だ五十有餘なるも、兩三年前より腰部神経痛の爲め激動に堪へず、従て年若き君は父を助けて、貧困なる一家を支持すべく頗る苦心した。

君は實母早く死し、父及繼母に事へ至孝であつたことは前述の通りである。又妹豐子、榮子、異母弟賢勇、繁雄等の弟妹に對しても少しも隔てなく愛撫し、友悌の道を盡した。従て貧困の裡にも一家圓滿にして天晴孝行者よと稱せられ、近隣青年の模範であつた。

(チ) 召集—上海出征

昭和七年二月二日第九師團に動員の令が下つた。かねて期したることなれば君は悦び勇んで、父母弟妹に別を告げ、親族並に近隣の人々に挨拶し、村長分會長及び區長の嘘けの辭に對しても、元氣な答辭を述べ後事を依頼して、四日朝八時歩兵第三十六聯隊に應召した。

即日第一機關銃中隊に編入せられ、繁劇な動員業務に奮勵し、七日多數見送人の萬歳聲裡に兵營出發、鯖江驛より鐵道輸送を以て八日廣島に着き宿營した。

十日國民の熱狂的見送の中に宇品港に於て運送船八雲丸に乗船した。かゝる忙しき間にも親を懐ふの情厚き君は寸暇を得て、次の如き書信を認めて、當時の感想をなつかしい父に知らせた。

『其の後御變りは有りませんか。』

私等は懐しい日本の土地を後にして、上海の地に今出發します。出發時間は午後五時二十五分です。

その間の感想を書きます、鯖江を立出より途中の歡送の嬉しかったこと、實に感極まつて涙がこぼれました。併し悲しいことも有りました、今日乗船の際負傷した方が一人ありました。

今日出發すると上海に到着するには多分三日間位かゝる豫定であります。

かくて宇品港出帆、風景繪の如き瀬戸内海を夜中に航行し、十一日朝下關についた、此處でもまた一書を裁して郷里の父に送った。

『只今下關に到着しました。』

船は静かに棧橋に着くと思つたら、はるか港外にとまりました。多分最後の日本を離るゝ淋しさを慰めてくれるであらうと、心に望んで居ります。

海は實際静かでした、一夜の船内生活も、最後の希望と幸福とをのせて、静かに明けました、私等の今の心情は遊びにでも行く様な心持です。

尙書きたいけれども書けません

二月十一日八雲丸にて

吉村喜代治

愈々最後の別れを日本の土地に告げるのである。生きて還らぬ身の心淋しさを感ずるは、むしの知らせか、神の告げか、さはあれ、元氣に遊びにでも行くやうな心地で衆と共に君は行つた。そうして、日本の土地と別れた、しかも、とこしえに。海路無事十三日上海港外に到着、愈々明日よりは戦場に出るものと勇む心にも親を思ふ純情止み難く就寝前父に一書をかいた。

『只今私等の船は錨を下しました。支那の時間にして今八時です。』

上海の町が見へます、飛行機が射撃したさうである、上海の上空は火の海となつてゐます。上陸は十四日早朝であらうと思ひます。

今消燈喇叭がなりました、我等の寝る時間が來ました、明日の夜は楽しい寝所へは、はいれぬで有らうと思ふ。

上海の町はよく見へぬけれども、全部電氣を消して居るらしい。闇黒である、その中に砲彈の爲にやけて居る火は實に好く目立つて居ます。

私等の外の船は見へません、軍艦が靜に見守つて居るだけです。

今晚十三日夜は船内に寝ます。

今私は上海の上空を見ながら此手紙を書いて居ます。では頭が重くなりましたから、やすませて戴きます。

お寝みなさい

八雲丸にて

きよじ

さて愈々明日は戦地に上陸する、ゆつくり寝所へ入るのも今晚のみである。かく考へながら手紙を書いた君。書き終りて、恰も親が傍に坐すが如く

『では頭が重くなりましたから、休ませていただきます。おやすみなさい』

と、心に思ふ所、之が筆に現れたのである。嗚呼孝行者よ、讀、眼がしらに露宿る。かゝる孝子は必ずまた忠勇の士である。十四日、上陸すると上海の公大工場（鐘紡）社宅に宿營した。上陸後直に敵彈の下に立つものと考へてゐた君は、此はまた意外の心地がした。そこでその晩また次の手紙を書いた。

『私は今床の中に入る所です。戦争に來て床の中へ入ると云ふと變に思ふけれども決して笑ふ事はないと思ひます。』

私等は今朝十時二十五分に八雲丸より下船致しました。下船してより一丁ほどで休み、晝飯を喰べました。

私等は上海の端にて居留民の家に於て今晚は床に入ることが出來たのです。

私等は第一大隊で今後方に居りますが、第三大隊は今第一線に出て居ます。地藏堂の西島君は第三大隊ですから多分第一線に出て居ます。

私等は今朝五時頃吳淞の要塞下を通りました。その時に大砲や機關銃の音が聞えました。

船は揚子江の河上に上りまして上海の端に上りました。私等の居る所より戦線まで四里餘有るとの事です。私等の戦線へ出るのは多分明後日だらうと思ひますけれどもまだ判明しません、居留民は實際喜んで居るやうです。皆は實際健康です、他事ながら御安心下さい。

いづれ後便にて申上ます。

晝は教練や勤務に奔走して、懸命に働くから、それ以外のことは思ひもせず、考も浮ばない、又手紙なども書く暇もない。夜になり、仕事も済み、今や寢床に入らんとする頃になれば、孝子の心にはまた親を思ひ出すのである。かくして如上の書信が出来上つたのである。

此より十九日まで教練や諸勤務に従事し、出動の準備をなしつゝあつたが、十九日になると明日より愈々戦場に出ると云ふので、また一書を認めた。

『御父上様には其の後は變り有りませんか。』

私等も其の後無事にて働いて居ります、乍他事御安心下さい。

昨日今日は盛に砲聲が聞えます。實は居留民は戦々兢兢たる有様ですから、兵隊を本當に大切にしてくれませう。私等は多分今日か明日は第一線に出るでせうけれど、今は後方にて銃の入手やら、馬の運動をやつたり、時としては内地でやる様に演習もやつて居ます。昨日は支那人の苦力を使つて荷物の積下しをしました。言葉がわからないので、皆が支那語を研究して居ます。上海に着てから、煙草には不足しません。煙草は實に安いのです、内地で七錢するものであつたら二錢五厘か三錢で有ります。外のすべての物品は内地に比し値が高いので、本當に弱つて居ます。みかん、なんか八つで七十錢もするのです。

今私等は寢て居ます、確に戦地に行くのですもの、昨日聞きました、第二大隊の兵が一人死しました。支那の便衣隊にです。陸戦隊は随分死傷者を出して居る様です。敦賀の第十九聯隊の兵は四人許です。私は行かなかつたけれども昨日の自動車で機關銃隊の將校連中が戦線を見に行つたのです。敵との距離は約三十米ほどしか無いとの事です。では戦線に出てから又御知らせ致します。此からは便りの度も少くなりますから、御心配なく、では皆々様、御體を大切に

左様なら

十九日午後二時三十分、支那の時計です

きよじ

御父上様

御許へ

此迄の封書には最後に宛名もなく、只封筒に福井縣吉田郡西藤島村字三郎丸、吉村石太郎様と書いてあるのみだのに此手紙には先づ最初に『御父上様には……』と書き出し、最後に『御父上様御許へ』と書き、時刻迄丁寧に認めてあるのは、或は絶筆とでもならうかとの心構へではなかつたらうか、殊に文章の末尾に『では皆々様御體を大切に、左様なら』は父母弟妹一同に宛てたもので、訣別の心組らしく思はれて、何となく懐しき心地がする。

(リ) 上海附近の會戦に於ける勇戦

二月二十日よりの會戦に際しては、君は中隊の最古年次兵として、勇敢沈着克く他兵に活模範を示し、特に彈藥手は殆んど小銃兵なりし爲、能く此等を指導して、敵の銃砲火の下にありて、後方との連絡及銃側の彈藥補充に任じ、常に中隊の行動を有利ならしめた。

特に三月一日沈家の攻撃に際しては、午前十一時十分、沈家西北方戦場に於ける突撃陣地に就き、勇敢機敏に分隊長の意圖の如く、銃側彈藥の補充を確實ならしめ、又此間常に迅速に敵情を發見し、分隊長をして機宜に適する有效なる射撃を以て、機關銃の威力を最高度に發揚せしめ、大隊の攻撃を有利ならしめたのである。殊に敵の退却に際しては君の分隊は小隊長の命により第一線歩兵に先んじて前方堆土に前進し、退却せる敵に猛射を浴せかけたも、此の勇敢なる躍進は彈藥補充の困難を來たし、最重要なる時機に射撃を中絶せねばならぬやうな情況になつた。此時第一小隊の四番であつた君は、集注する敵の狙撃下に於て、卒先勇奮萬難を排して彈藥補充に奔走し、遂に貴重なる彈藥一箱を銃側に搬送して、克く分隊をして緊要なる時機に於て射撃を繼續するを得せしめ、以て敵に絶大の損害を與へ、大隊の攻撃の

成果を益々大ならしめたのである。其の武功は實に披群と言はねばならぬ。

凡そ戰場に於て特に目だつた場合に於ける武功は能く人の注目する所となり、大に喧傳せらるゝも、然らざる場合には偉大なる武功も、それ程に目につかず、勇敢忠烈なる犠牲的行動も、往々人の知る所とならざることあるは、實に遺憾の次第であつて、君の行動の知きも亦此に屬するものであつた。

(又) 壯烈なる其の戦死

かくして雨霞と來る敵弾の下に更に彈藥補充の爲、活動中、左方より來れる敵機關銃弾により頭部に貫通銃創を受け、『シマッタ、ヤラレタカ』

と一言、其場に倒れた、そうして終に名譽の戦死を遂げたのである。時に年二十五。中隊より送附し來れる戦歴の最後に

『吉村ハ分隊ノ最古年次兵トシテ卒先自ラ難局ニ當リ勇敢ニ行動シ、分隊ノ他兵ニ模範ヲ垂レタリ、其ノ功死ストモ尙分隊に活模範ヲ殘シ、永久忘レザルベシ、斯ノ如ク其ノ功績特ニ大ナルモノアリ』

と述べられてある。實に至言と言ふべきである。

君死するの日を以て、歩兵上等兵に進み、功七級金鷄勳章並年金壹百五拾圓及勳八等白色桐葉章を授け賜ふ。

(ル) 絶筆

二月の末の上海の空は曇り勝ちで、小雨頻りに降つて、泥土膝を没し、我軍は少なからず苦しむだ。加ふるに迷路多く、到る處湖沼クリークを有し、敵は巧に梯子を架けて自由を通行してゐたが、我軍は敵の銃砲火の下にあるので意の如くならず、行動頗る困難を感じた。丁度二月二十八日の黄昏時、塹壕内で待機中の君は僅かの時間を得て、故郷への最後の手紙を認めた。

『其の後は永らく御無沙汰を致しました。』

お父上様始め御一同様には御變りはありませんか、小生は無事で皇國の御爲に戦線に働いて居ります。第三十六聯

隊は今第一線に出でゐます。今は敵の第二線に向て進んで居ます。敵は非常に強い者であります。私等は毎日々々穴の中に暮してゐます。夜になると敵に向ひます。私等の分隊はまだ一名の負傷者も出てゐません。皆非常に元氣で居ります。

けれども負傷者は師團で何程有るか解りませんが、聯隊では死者百名餘有ります、負傷者は四百名程と思ひます。その中に、はつきり解りませんが、下市の中谷が戦死したと聞きました。その日聯隊は第一回總攻撃で、夜の八時頃に私等は顔を見ましたけれども良くは解りませんでした。

三日には増援隊到着を待つて總攻撃らしい。今は穴の中で書いて居るので、見にくいですが御許し下さい。では後便にて、左様なら。

二月二十八日夜記す

吉村喜代治

吉村石太郎様

此手紙は葉書二枚に認めたのであるが、折から吹き來つた一陣の風に、其の一枚は泥土の上に吹き落された。君はすかさず拾ひ上げたが、最早葉書には泥土がベツトリとついてしまつた。困まつた顔で之を眺めてゐると、通りかゝつたのは第十中隊の曹長猪坂繁榮氏であつた、君と同じく西藤島村の人である。君は残念さうに此葉書を猪坂曹長に示して

『曹長殿、國では父親がごんなに、私の便りを待つてゐることせう。あわたましい戦場の巷、それに毎日降り注ぐ小雨、故郷への便りも遅れてしまいました。死は固より覺悟です、今生の訣れに書いた此手紙が

残念にも泥だらけとなりました。』

曹長は思ひやりの涙にくれながら、

『心配するな、たとへ手紙は泥だらけとなつても、君の精神は光つてゐる、大丈夫だ、御互何時死ぬやらわからぬ身

ではあるか、萬一僕が無事で歸つたなら、きつと國許へ届けてやる』
と互に言葉をかはした二勇士は堅き握手の後別れたのであつた。幸に猪坂曹長は生き残つた。葉書は郷里の親の手許に送られた。

十九日に手紙を出してから、漸く十日、一瞬の間も氣を弛めてはならぬ戦場の苦心慘愴、緊張しつゞけの十日間は所謂一日千秋の思をなしたであらう。そうして今や塹壕に身を寄せて、僅かのひまを得たので、油然として湧き出づる親を懐ふの情が此の手紙となつたのである。あゝ何と云ふ美しき純情であらう。一日居れば一日君を思ふと共に親を思ふ其の心が忠臣であり、孝子ある。しかも彈丸雨注の間に立ちては勇猛果敢に働く、これ實に日本男子である。

嗚呼君の英姿は再故郷の地に見ることは出来ない。しかし君の崇高なる日本人的氣魄は、今尙嚴然として此葉書の中に耀いておる。是れ實に君の絶筆である。特に此絶筆に附着した上海戦場の泥土は永く君の功績を物語る好記念である。吾等は君の家を訪ふて君の靈前に額つき此葉書を拜見するとき、涙の滂沱たるを禁ずることが出来ない。

(ヲ) 墓 碑

君の遺骨が郷里に到着するや、西藤島村は村葬を以て之を禮し、四月二日午後同村小學校に於て盛大なる葬儀を執行した。次で西藤島村小學校前、縣道の傍に、明治時代に於ける本縣政治家の明星であり、また憂國の士であつた鴉山杉田定一君治水謝恩之碑と相並んで、立派な墓碑が君の父によつて建てられた。

正面には『故陸軍歩兵上等兵功勳八等吉村喜代治之碑』。側面には『法名釋敬信俗名喜代治』『昭和七年八月建之』と刻し裏面に左の經歷及戰功が録せられておる。

經 歴

昭和四年一月十日現役兵トシテ歩兵第三十六聯隊機關銃隊ニ入隊。

同 年十二月一日歩兵一等兵ヲ命ズ。

昭和五年十一月三十日現役滿期。

同 年十二月一日豫備役。

昭和七年二月一日動員下令。

同 年二月四日召集ノ爲歩兵第三十六聯隊ニ應召。同日第一機關銃中隊ニ編入。

同 年二月十日宇品港出發。

同 年二月十四日上海上陸。

同 年三月一日歩兵上等兵ヲ命ズ。

同 日上海附近ノ會戰第三次攻撃ノ際頭部貫通銃創ニ因リ戰死。

戰 功

昭和七年二月二十日ヨリ同年三月一日ニ亘ル上海附近ノ會戰ニ於テハ八番銃手トシテ活動、分隊最古年次兵トシテ克ク他兵ニ模範ヲ示シ殊ニ彈藥手ハ殆ンド小銃兵ナリシタメ常ニ他ノモノヲ指導、彈丸ヲ犯シテ後方トノ連絡ヲナシ銃側ニ彈藥ヲ補充シアリシカ三月一日午前十一時十分沈家西北方ニ於テ突擊陣地ニツキ敵ヲ射撃シ敵退却ニ移ルヤ猛然コレヲ攻撃前進シ、銃位置ニ彈藥ヲ補充シアリシ時、左方ヨリ來レル彈丸ニヨリ頭部ヲ貫通戰死セリ。

其ノ功績顯著ナルモノヲ認ム

歩兵第三十六聯隊第一機關銃中隊長

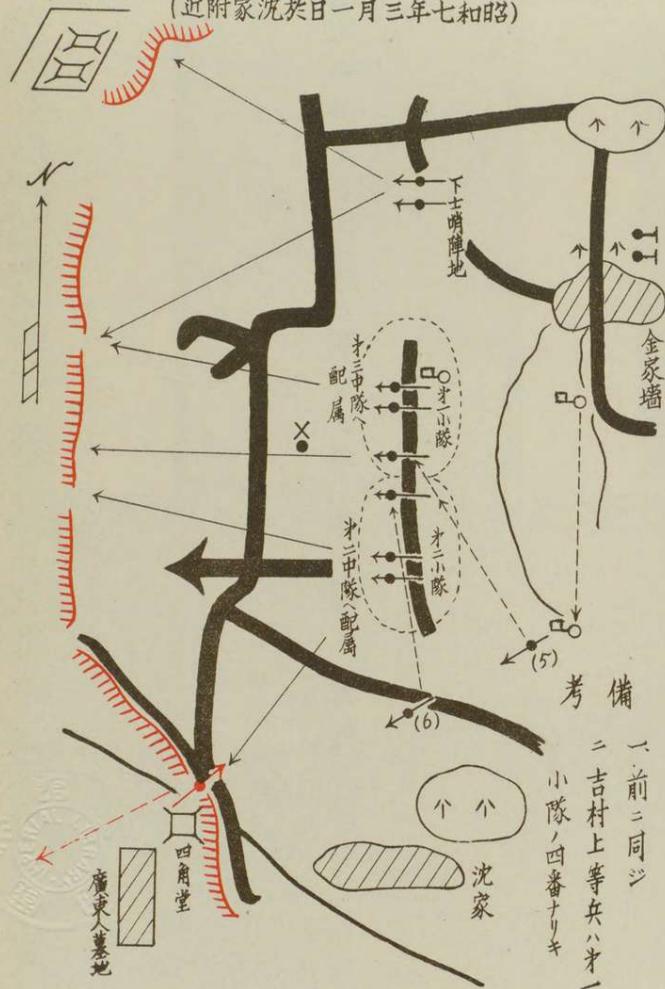
陸軍歩兵中尉 末松 巖

代理陸軍歩兵少尉 磯部 明 男

(ワ) 年 譜

吉村上等兵戰死位置要圖

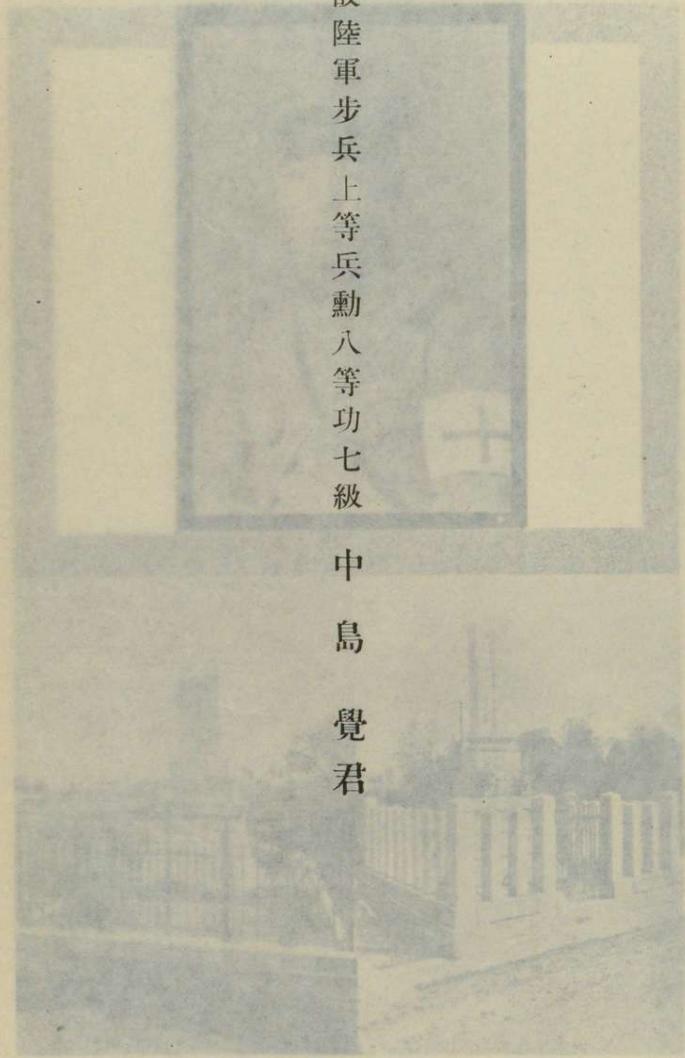
(昭和七年三月一日於沈家附近)



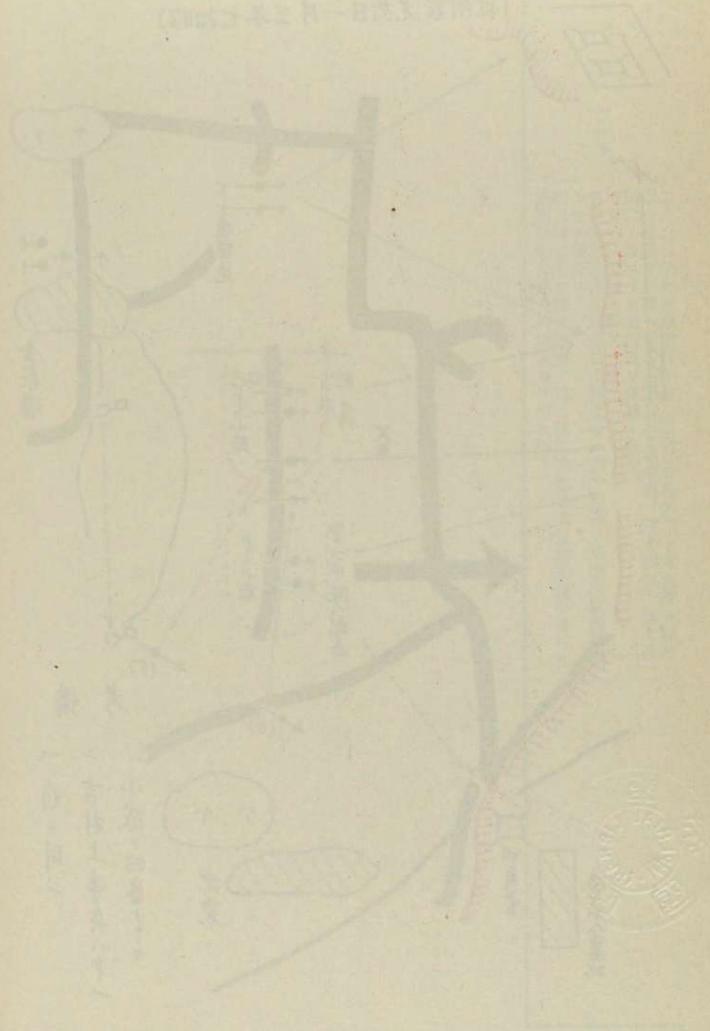
備考
 一前ニ同ジ
 ニ吉村上等兵ハオ一
 小隊ノ四番ナリキ

| | |
|-----|------------------------------------|
| 同 | 二月二日第九師團動員令。同日歩兵第三十六聯隊ニ應召。 |
| 七 | 第一機關銃中隊ニ編入。同日宇崑港發。同十四日上海上陸。 |
| 年 | 三月一日ヨリ上海附近ノ會戰ニ參加。 |
| 二十五 | 同日中華民國江蘇省寶山縣沈家ニ於テ戰陣ノ際頭部貫通銃創ヲ受ケ戰死ス。 |
| | 同日昭及勳人等白色桐葉章ヲ授ケ賜フ。 |

故陸軍步兵上等兵勳八等功七級 中島 覺君

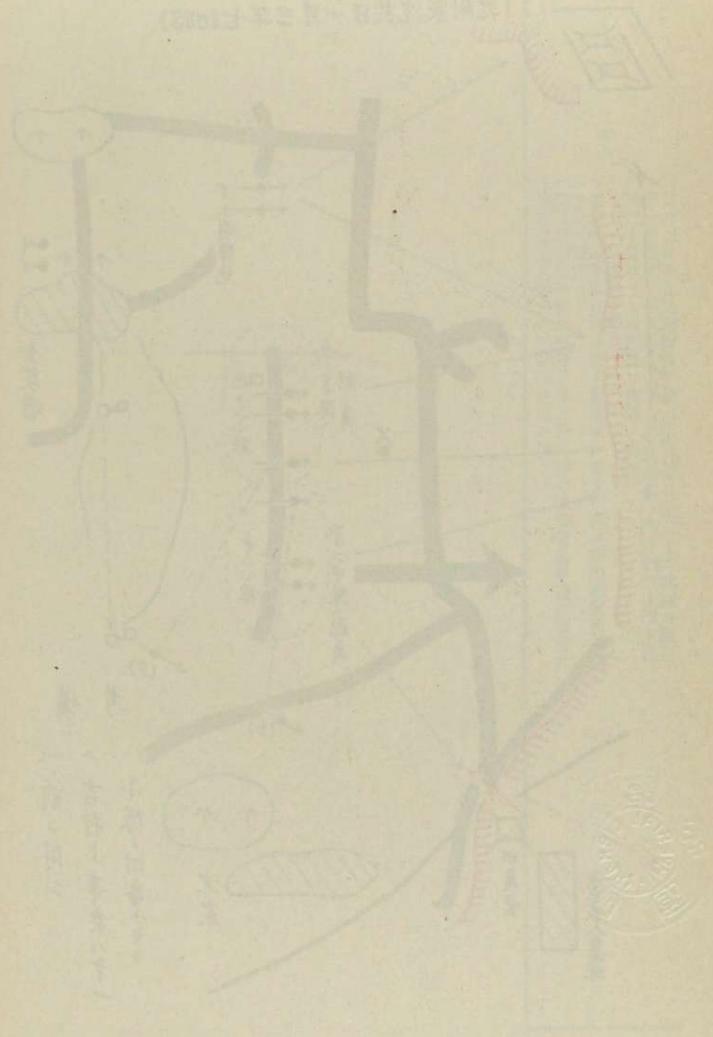


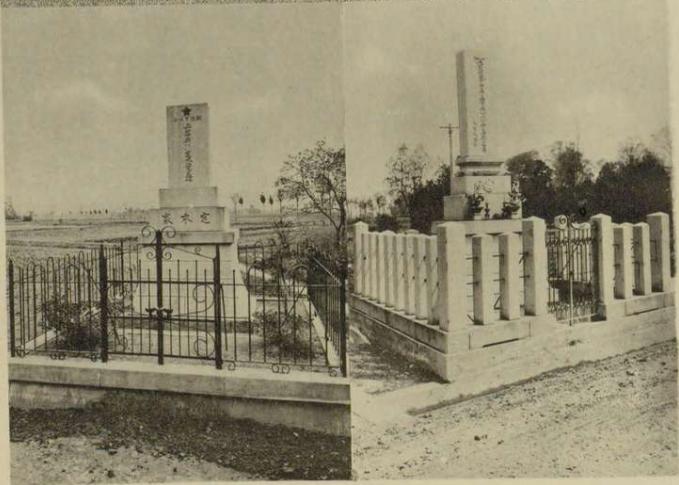
吉林上等兵勳八等功七級



故陸軍步兵上等兵勳八等功七級 中島 覺君

吉林土著兵燹後之遺蹟圖





姑剝軍赴吳土善吳憫人善也子嫌
中島覺吾

其七 故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 中島 覺 君

(イ) 君の出生

君は明治四十二年二月一日坂井郡磯部村定重第二號二十九番地定本家に生れた。定重と云へば、九頭龍川の北方、北陸道に近く、越前平地の真中にある部落である。従て同家は世々農を業としたが、今は機業を営んでゐる。父を新之丞と云ひ、母をゆりと云ふ、君は其の二男である。

幼時より濶厚玉の如き美しき性質を持つてゐたが又一面には極めて男性的であり、快活で元氣な人柄であつた。

(ロ) 小學校時代

大正四年四月一日七歳にして、村の磯部小學校に入學し學業頗る優秀、末頼母しき兒童として、將來を囑望された。そうして君自身もまた、幼より

『男と生れた以上、いつまでもこんな片田舎に居つて、くよ／＼したくはない、一つ上京して、うんと腕を磨いてやらう。』

と、あくまで強い決心を持つて居つた。大正十年三月尋常科卒業、引續て高等科を修め、十二年三月卒業した。

(ハ) 中島鑄造所時代

高等小學校卒業後、かねての希望の如く四月上京して、母方の遠縁に當る、東京府下北豊島郡千住中島乙吉氏經營の鑄造所に入り、五月より徒弟として就業した。

其の後の君は刻苦精勵誠心誠意研修之れ努め、技術を練磨した。所主中島乙吉からは、またなきものとして愛護された。

誠實で些の邪念もない君は、少しも蔭日向がない。人が見てをらうが、をるまいが、何時も眞面目に一生懸命に働く

隨て仕事は確實で技術は上達する。かくして大正十五年五月迄滿三年の期間を立派に務め上げ、其の後一年の禮奉公も十分に働き、爾來一人前の職工として、相變らず忠實熱心業務に精勵した。技術は優秀であり、行狀は正しく、益々主人より信頼さるゝに至つた。此間君はまた弘道館へ通ふて柔道を修業し、初段の免許を受けた。

昭和四年、君年二十一。徵兵適齡に達したので、東京に於て検査を受けた。體格は立派であり、何一つ申分がないので直に甲種に合格し歩兵第三十六聯隊へ入營することゝなつた。

十二月には愈々入營の期日も迫つて來たので郷里へ歸つた。所主中島乙吉いたく之を惜み、記念品として紋服一揃も左の表彰狀を添へて君に贈つた。

表彰狀

福井縣 定本 覺殿

君ハ大正十二年五月當所ニ就職、大正十五年五月、三ヶ年ノ年期滿了、爾來勤績、忠實職務ニ勉勵シ、技術優秀以テ今日ニ至レリ、然ルニ今般兵役ニ服スルニ當リテ永年ノ勞ヲ賞シ、茲ニ聊カ記念品ヲ贈呈シ之ヲ表彰ス

昭和四年十二月十五日

東京中島鑄造所 所主 中島 乙吉 囑

(ニ) 現役兵時代

昭和五年一月十日歩兵第三十六聯隊に入隊し、第二中隊に編入された。爾來熱心軍務に精勵し、十一月五日歩兵一等兵を命ぜらる。此間また擔架術の修業を命ぜられ、昭和六年二月十二日之を卒業した。かくて二年に近き在營年限を立派に勤めて十一月二十三日歸隊となつた。在營間の君の成績は優良で、殊に銃劍術にかけては、中々の猛者であつた。從て中隊長から表彰さるゝこと三回、大隊長からも表彰されたことがある。尙君の在隊間の言行につき、中隊長は次の如く述べてをらるゝ、

『當時精神修養ニ勉メ、毎晩暇アル毎ニ勅諭ヲ謹書スルヲ以テ、最大ノ樂ミトナシ、又中隊備附ノ文庫ヨリ精神修養ニ關スル書籍ヲ取出シテ精讀シ修養ニ資シ居タリ。平素極メテ寡言沈黙、事ニ應ジテ動セズ、銃劍術ハ得意トスル所ニシテ、劍術ノ間稽古ニハ如何ナル日ト雖モ、卒先出場シ中隊長ヨリ表彰セラレタルコトアリ。其ノ伎倆モ上等兵ヲ凌グモノアリキ。即チ修養ニ依ル沈着ト、武技ニ依ル自信力トハ、彼ヲシテ勇者タラシメ、平素大言壯語虚勢ヲ張ル者ハ戰場ニ於テ概シテ勇者ナラサルヲ思ハシム』

と、以て君の修養と練磨との結果は徒らに口舌の雄にあらずして、眞に爲す有るに足る人格者とならしめたことを知り、感歎に堪へざるものあると共に、中隊長が『即チ修養ニ依ル沈着ト、武技ニ依ル自信力トハ、彼ヲシテ勇者タラシメ、平素大言壯語、虚勢ヲ張ル者ハ戰場ニ於テ概シテ勇者ナラサルヲ思ハシム』なる言は、吾人も亦往年實戰場裡に立ちて、實驗する所にして、其の至言であることを深く信するものである。

(ホ) 退營後の二箇月と其の家庭

除隊後の君は十二月、吉田郡森田村上森田中島春吉の婿養子となり、翌昭和七年一月二十五日春吉の長女「きささ」と結婚した。

中島家は君の叔母はる（父新之丞の姉）の嫁して來た家であつて、養父春吉と君とは従兄弟の間柄である。養父は米穀、肥料商を営み、四人の娘があるけれども、男の子がないので、君を迎へて長女にめあはせ、其の後継者としたのであつた。當時養父春吉五十五歳、養母ちのえ五十歳、妻きさを二十五歳であつた。

又生家は、定本家は、父新之丞（當時年六十三）母のり（當時年五十七）共に生存し、兄を篤と云ひ、家に居り、姉カズイ、同アサヲ、妹トサヲ、同禮子及君と合せて六人の兄弟である。

(ヘ) 兩家共に家庭圓滿で平和な生活を續けてゐる。

召集—上海出征

新婚の夢未だまごかならざる二月二日第九師團に動員の令が下つた。そうして二月五日朝歩兵第三十六聯隊に入營すべき令狀が、三日の朝磯部村役場を経て君の家に届いた。結婚はしたもの、未だ入籍の手續が了つてなかつたのである。五日の朝は健氣なる妻其の他の人々に送られて勇躍歩兵第三十六聯隊に應召し、第二中隊に編入された。七日には沿道山の如き見送人の熱狂的歡送の裡に兵營を出發した。此間君は訣別に來る人々や、見送人に向ひ、極めて元氣に挨拶し、腕を扼して

『支那の便衣隊の五匹や十匹は、おれの柔道でひねりつぶしてやる』

と、平素の寡黙にも似ず、それはく盛んな勢であつた。

かくて鮎江驛より鐵道輸送を以て、八日廣島に着し宿營した。十日宇品港に於て乗船、全國民の熱誠をこめたる見送の下に出帆し、十四日目的地上海に上陸した。

上海上陸後は該地の警備に従事し、十六日家庭に向つて次の書信を出した。

『十四日午前八時上海に上陸、すぐ警備に就いた。今日は民家に世話になつてゐる。命を的に君國のため働きます。御父様も、お母様も體を大切に』

之より十九日に至る迄、教練や諸勤務に努めつゝ、戰鬪の諸準備をなし、愈々明日より攻撃を始めると云ふので、十九日また次の手紙を出した。

『拜啓、不安の幾日かは過ぎた、今晚あたり攻撃に参加する。僕は君國の爲に身を捧げる、死は厭はん、これが最後の便となるかも知れん、なにも心配することはない。皆によろしく。』

以上の書信は、誠に簡結であるが、しかも勇士の面目躍如として文面に溢れ、尙其の間に父母や一家に對する情愛の何處となく描き出されあるを覺ゆ、千萬言を費したる文章よりも、此簡結なる文章が千萬無量の味はいがする。嗚呼君は眞に忠烈義勇の士である。

(ト) 上海附近の會戰に於ける勇戰

二月二十日より第九師團は、いよ／＼暴戻なる支那第十九路軍を膺懲することゝなつた。君は武人の本懐此舉にありと、非常な決心の下に、奮躍、戰鬪に加はつた。即ち二十日には梅園に於て陣地の構築並に警戒勤務に盡瘁し、二十一日唐家舎の敵陣地を夜襲するに際しては、卒先勇奮突撃を敢行し、武功抜群であつた。

翌二十二日金家塔の敵陣地攻撃に方りても亦第一線にありて猛火を冒して勇進した。此際中隊は敵の猛烈なる十字火を受け、死傷續出攻撃頗る困難となつた。勇敢にしてしかも沈着大膽なる君は、敵の側防機關を發見し、直に之を報告して其の制壓に勉めしめ、中隊の行動を容易ならしめた。

かかる場合君の行動は敵彈雨注の中を、いつも從容自若として、卒先勇進し以て他に規範を示すのであつた。しかし時には、あまり猛進しすぎるので、中隊長中島大尉は之を見かねて

『おい、定本もつと下れ』

と命令したところ、君は

『そんなことで戰爭が出来ますか』

と反問して、平然眞先に進んだと云ふことである。如何にも中島君は勇敢なる兵士である。かかる勇敢なるものがあるので日本軍は強いのだ。戰鬪の勝利は、元より大御稜威によることであり、指揮官の畫策統率の宜しきによること勿論であるけれども、亦實に上下を通じて君等の如き勇士の奮闘によつて得らるゝのである。

(因みに云ふ) 君が中島家に入籍したのは、上海出征後であつたから、中隊では依然定本と稱し、中島とは云ふてをらなんだ。

チ) 壯烈なる其の戰死

かくして、君は勇敢に前進中、不幸敵の一彈股を貫通し、其の場に倒れた。豪氣なる君は之に屈せず、上半身を起して後方より前方にある中隊に向ひ

『第二中隊、しつかりやれ』

と連呼しつゝ味方を勵まし、更に前進を續行せんとせし折も折、第二彈は胸部を貫通し、再び撞と轉倒し、尙も起き上らんとするや、第三彈は顔面を貫通した。今は是迄なりと思ひしか、君は、背囊及上衣をかなぐりすて、つゝ立ち上り、更に鐵帽をも脱ぎすてた。此時の君は、顔も、白い襦袢も朱けに染りて恰も血達磨其の儘であつた。聽て兩手を高くさし上げて、元氣な聲を張り上げ、力一ばい。

『天皇陛下萬歲』

を三唱し、次に

『第二中隊萬歲』

を絶叫した。そうして其の儘大木の倒るゝが如く、其の場に打ち倒れ、名譽の戦死を遂げた。中隊長以下皆此の有様を目撃し、其の壯烈なる最期に對し感激の涙を溢し、益々一死報效を誓ひ、勇戦奮闘したと云ふことである。

中隊よりの通知に、此時の有様を述べて、最後に次の如く書いてある。

『其ノ様悲壯絶倫、氣魄ノ剛健、敵愾心ノ旺盛ナル本人一人ノ死ハ、更ニ中隊ヲシテ百人ノ援兵ヲ得タルヨリモ、志氣ヲ奮起セシメタリ』

と又當時君と同時に名譽の負傷をした渡邊一等兵の言に、

『私は左の上膊部へ盲管銃創をうけて、病院で彈丸を抜きとつて貰ひましたが、殆ど同時にやられた戦友定本覺君が二度も彈丸のお見舞を受けながら、大きな聲を張り上げて、『萬歲』を連呼してゐたのは、自分の痛さを忘れて貰

ひ泣きました』(當時の新聞記事)

と、いふてゐる。本當に其の通りであつたらうと吾人は當時を想像して痛く衝動を受けるのである。

尙君の戦死の様様に就ては、森田村第二小學校の調査によると、中隊長中島大尉の談として、左の如く書いてある。

『二月二十二日唐家舎附近の戦闘に於て、勇躍第一線に立つて奮戦中、にくむべき敵の一彈は遂に彼の胸部をかすめた豪氣な君は、忽ち起上つて猛然更に前進すると、又もや第二彈は頭部を貫く、頭と胸とを眞赤な血潮に染めた君の姿は、如何に物凄く且勇壯であつたことだらう。頭部に彈が中ると、一時はバツタリ倒れたが、忽ち血染めの軍服と軍帽とをかなぐり棄て、銃を杖に今一度突立ち上らんとした所、第三彈は脚を貫く、

『あとをしつかり頼むぞ』

天皇陛下萬歲』

と絶叫して終に斃る』

また、教育總監部發行の滿洲事變軍事談集には『身に三彈を受け鐵帽を脱いで起ち上り恭しく 陛下の萬歲を三唱す』と題し左を如く書いてある。

『二月二十二日上海會戰に際し、唐家舎附近に於て敵の猛火を冒し前進中、不幸敵彈に股を貫通せられ其の場に倒れた。志氣旺盛なる彼は之に屈せず、尙も身を起しつゝ、

『しつかりやれ』

と、戦友を勵まし、更に前進を續行せんとせし折も折、第二彈は腹部を貫通し、再び撞と轉倒し、彼が更に起き上らんとするや、御三彈は彼の顔面を貫いた。今は是迄なりと思ひしが、彼は鐵帽を脱いで起ち上り、

『天皇陛下萬歲』

を三唱し、且

『第二中隊萬歲』

をも叫んで、遂に名譽の戦死を遂げた』

即ち前者は、第一に胸、第二に頭、第三に脚とあり、後者は、第一に股、第二に腹、第三に顔面とあつて、敵彈を受

けた順序及部位共に、頗る一致しない。更に又歩兵第三十六聯隊第二中隊よりの通知によるときは、

『昭和七年二月二十二日、上海附近金家壩ヲ攻撃ニ際シ、前進中、敵彈胸部ヲ貫通轉倒セシモ更ニ起テ上リ、前進中更ニ敵彈ヲ受ケ轉倒スルヤ、半身ヲ起シ、後方ノ中隊ニ向ヒ

『第二中隊、シツカリヤレ』

ヲ連呼シ、友軍ノ志氣ヲ鼓舞シ、遂ニ背囊及上衣ヲ脱シ、白襦袢其他所謂血塗磨トナリ、死期ヲ自覺スルヤ、銃ヲ杖ニ仁王立トナリ

『天皇陛下萬歳』

ヲ三唱シ、大木ノ倒ル、如ク打倒レタリ』

と、あり福井聯隊區司令部にある戦時名簿には、

『中華民国江蘇省寶山縣唐家宅附近ノ戦闘ノ際、胸部及顔面貫通銃創ヲ受ケ戦死ス』

と、明記しあり、尙又前述の新聞記事にある渡邊一等兵の語る所によるも

『定本君は二度も彈丸のお見舞を受けながら』云々

とあるから、一發の敵彈を受けたことは間違なく、それが胸及顔面であることも、確かであると見てよいが、果して三彈を受けたか否やは少々疑問の餘地があるので、君が出征當時の中隊に就て、直接調査したところ、胸部、顔面、股と三發の敵彈を受けたるに相違なく、そうして最初股に負傷したことも、亦確に目撃した所であると、當時同中隊給養掛たりし下士官が述べて居る。従つて、股の負傷が戦時名簿に書いてないのは、胸及顔面の負傷は重要部位で致命的であつたから、之を書き、股の負傷は部位からいふても、また程度からいつても、それ程でなかつたから、之を略したも
のと思はれる。特に教育總監部發行の軍事美談集は、各部隊よりの報告に基づき編纂したものであるから、先づ間違のないものであることを更に附加へて置く。

けれども、彈の中つたのが二發であらうが、三發であらうが、或はまた脚に中つたのが最初であらうが、最後であらうが、そんなことは問題ではないので、君の武人としての面目は、其の戦死の直前に於ける悲壯なる態度であり、勇烈なる動作である。此動作態度こそは、實に君の平素の修養と人格とを現はして、餘蘊なきものである。殊に又其の旺盛にして崇高なる攻撃精神は實に皇軍の華であり、粹である。

君死するの日を以て、歩兵上等兵に進み功七級金鷄勳章並年金壹百五拾圓及勳八等白色桐葉章を授け賜ふ。時に年二

十四

(り) 逸話

(一) 友情

君性頗る快活、最も正義を重んず、また頗る奇智に富み、衆の愛好する所となる、而かも友誼に厚く、已を忘れて人の爲に圖ると云ふ風があつたので、また他の信賴と敬慕とを集めてゐた。出征後常に相勵まし相慰め合つた戦友加藤久君(坂井郡大)との間柄の如き、其の一端を窺ふことが出来る。今加藤君から君の留守宅へ宛てた手紙の一節をこゝにかゝげる。

『今般小生出發の際は色々御世話様に相成り、難有御禮申上げます。…中略…覺君は同中隊同分隊ですから、覺君の事は僕が一切引受け、僕が死んでも覺君だけは助けるつもりです。姉さん(中島君の妻を云ふ)に一言申上げます。僕は一人者ですから、國の爲に死するのは嬉しいから、死んでも覺君だけは助けるつもりです。一寸も心配下さらないうやうにして、凱旋を待つてゐて下さい。』

身を以て友の爲に圖らんとする戦友の心根は、此手紙を通じて十分見ることが出来る。併し、敵の彈は人を選んで中るものではない。生も死も皆運命である。加藤君は無事凱旋したが中島君はとうとう還らなかつた。

(二) 此父にして此子あり

君の戦死當時、某新聞に次の様な記事があつた

『さきに名譽の戦死者西出一等兵を出した坂井郡磯部村では、また、同村定重の定本新之丞氏の二男、上等兵定本覺君が名譽の戦死をしたので、在郷軍人分會員を始め村民一同は重なる郷土の名譽と、二勇士の死を感激してゐるが、實父新之丞さんは、流石武人の父だけに、健氣に語る。

「覺は昨年十一月除隊後森田村の縁邊へ養子に行きましたが、召集される時は元氣で、自慢の柔道で便衣隊を捕へてやると、豪語して行きましたが、まだ十分働かない内に戦死したことを、残念に思ひます」

云々と」

折角戦場に出て、二三日にして戦死したのであるから。父として頗る遺憾に思はるゝことは同情に價するが、しかしながら、中島君は戦場で働いたのは二三日であるけれども、勇ましい最後は實に萬世の儀表であり、軍人の龜鑑である。

(三) 技術の形見

目下定本家に鉛製で直径三十糎、厚さ一糎半位の床板がある。圓形で表には達磨の像が浮き出されてあり、中々念の入つた作品である之れは君が東京の中島鑄造所に居つた時に作つたもので、在世中の優秀なる技術を偲ぶ唯一の記念品である。願くば、永久に保存して勇士の面影を回顧する資料とされんことを、切に同家に對して希望するものである。

(又) 墓碑

昭和七年三月二十六日君の爲に盛大なる村葬は上森田嚴教寺に於て執行された。程過ぎて北陸道筋にある中島家の前には養父春吉の手によつて墓碑が建てられた。碑文は君が出征當時の中隊長大尉中島徹が自ら求めて書いてくれたものである。中隊長は君の戦死を深く愛惜し、且其の最期の壯烈さにいたく感激し、凱旋後各地の講演會に於て、君の戦死の様を語り涙を揮つて感激激賞したやうである、

森田第二小學校訓導村田明頼君が或日中島家を訪ると、養父春吉が我家の前にある墓碑を仰ぎつ、

『こうして居ると誠にいろ／＼なことがあります、聞けば或ときなど丸岡の方から疾走して來た自動車が、碑前でピタリと止り、中から何處の方か知らぬが出て來られて、しばし黙禱を捧げ花を供へて、再車中の人となり、福井の方へ行かれたとか、又或時はきたない乞食が、碑前た端坐して靜に拜禮し、やがて一錢の賽錢をさ／＼けて立去つたとか、色々有難いことがあります』

と、話して聞かせた。英靈はかくして永遠に國民を感化してをるのである。

墓碑の正面にある『故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級中島覺之墓』の文字は君が出征當時の聯隊長大佐大賀一男(現時少將)の書である。

碑文

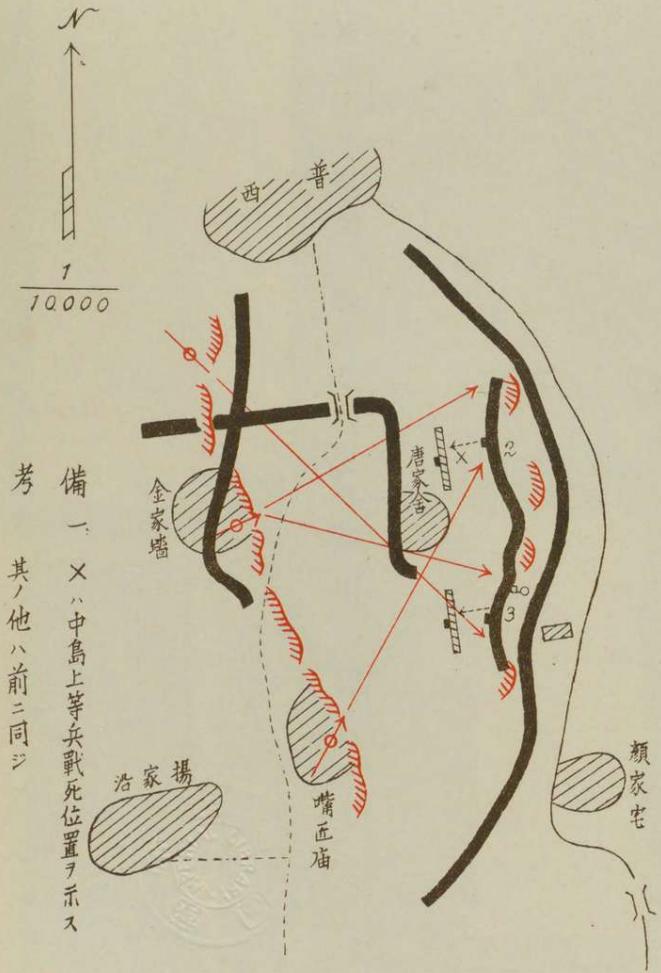
昭和七年二月二日動員下命、同月四日應召第二中隊、同月七日屯營出發、同月十日宇品出帆同月十四日上海上陸、十九日迄從事警戒勤務、同月二十日戦闘開始、於梅園從事陣地構築及警戒、同月二十一日於唐家舍夜襲奏殊勳、同月二十二日於金家橋勇戦中斃凶彈調、眞可惜、君之偉勳者永垂竹帛以可薰染鄉黨閭里。

又磯部村定重の定本家の前にも實父の心づくしに依つて墓碑が建てられてある。正面には『故陸軍歩兵上等兵勳八等定本覺之碑』向つて左側面には『釋覺誠』と刻し、同じく右側面には左の文字がぎざまれてある。

『昭和五年一月十日現役兵トシテ歩兵第三十六聯隊第二中隊ニ入營、昭和六年十一月二十二日動員下命、二月五日充員召集ノタメ歩兵第三十六聯隊第二中隊ニ應召、二月十日宇品港出發、二月十四日上海上陸、二月二十日ヨリ二十二日迄上海附近ノ戦闘ニ參加、二月二十二日中華民國民江蘇省寶山縣唐家宅附近ノ戦闘ノ際胸部及顔面貫通銃創ヲ受ケ戦死ス、昭和七年二月二十二日上等兵ニ昇進。』

中島上等兵戰死位置要圖

(略和七年二月二十二日唐家附近之共テ)



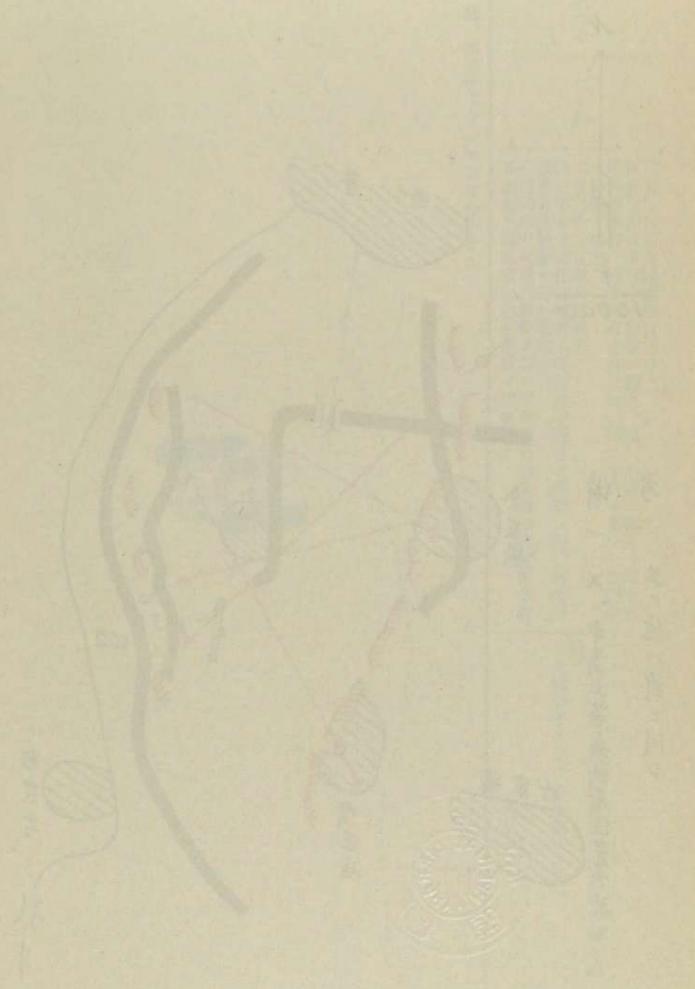
備一、×ハ中島上等兵戰死位置ヲ示ス
考 其ノ他ハ前ニ同ジ

註、唐家宅トアルモ唐家舎ナラン

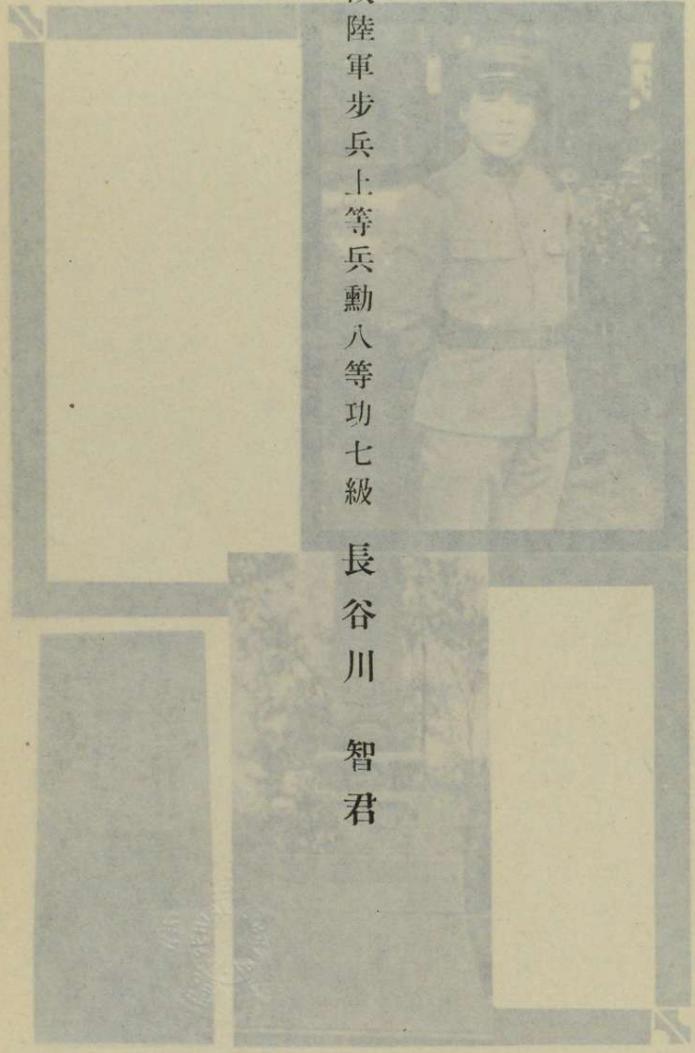
| | |
|---|-----------------------------|
| 同 | 二月二日第九師團勳員下令。 |
| 七 | 同五日步兵第三十六聯隊ニ應召。第二中隊ニ編入。同十日 |
| 年 | 宇品港出發。同十四日上海上陸。同二十日ヨリノ上海附近 |
| 二 | ノ會戰ニ參加。同十四日上海上陸。同二十日ヨリノ上海附近 |
| 十 | 二月二十日歩兵上等兵。唐家宅附近ノ戰鬪ノ際、胸部及 |
| 四 | 同日中華民國江蘇省寶山縣。唐家宅附近ノ戰鬪ノ際、胸部及 |
| 十 | 顏面貫通銃創ヲ受ケ戰死ス。唐家宅附近ノ戰鬪ノ際、胸部及 |
| 五 | 同日昭通七年滿洲軍變ノ功ニ依リ功七級金鷄勳章並年金百 |
| 拾 | 五拾圓及勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜フ。 |
| 一 | 二月二十五日前記中島春吉長女ぎさを結婚。 |
| 月 | 二月婚養子トシテ中島家へ入籍。 |

中島上等兵輝功功賞要圖

(昭和二十二年二月二十二日勅賜特賞一號)



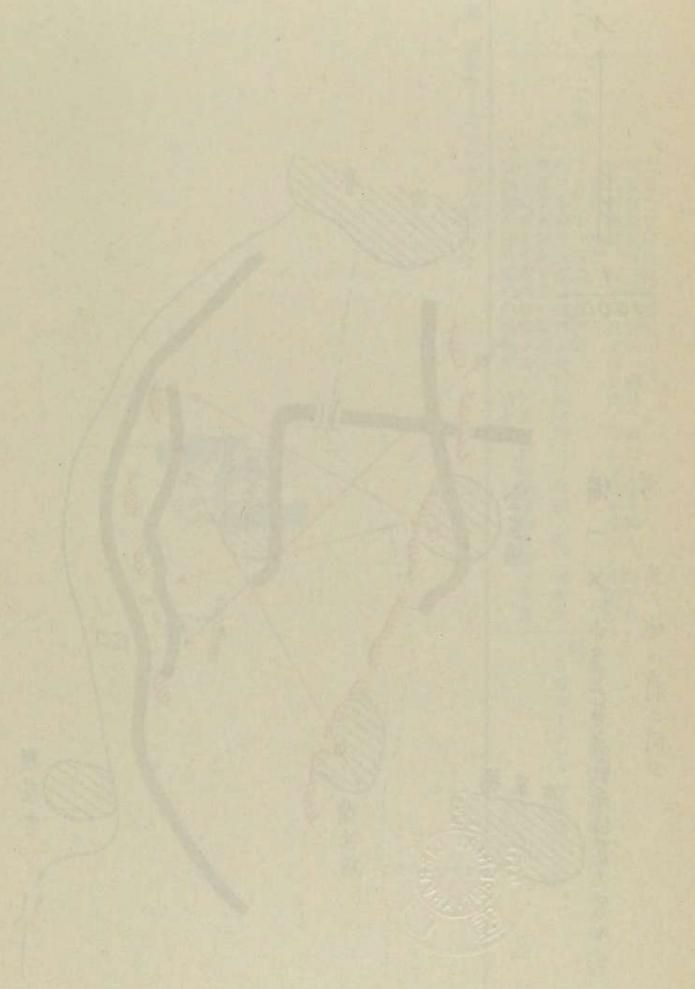
故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 長谷川 智君

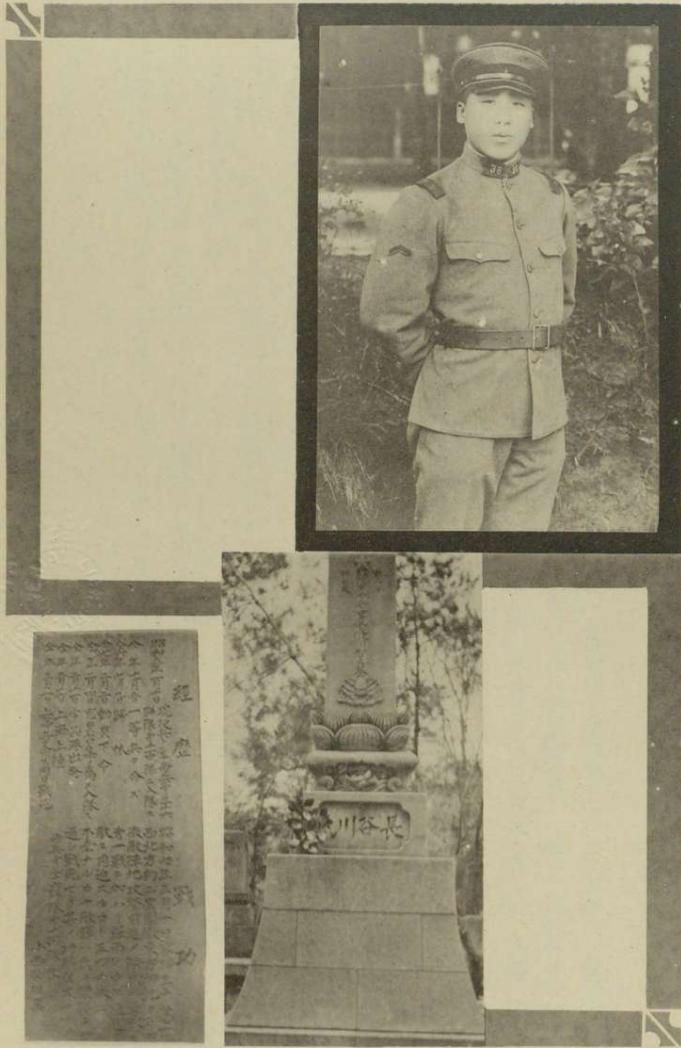


故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 長谷川 智君

中島上等兵勳八等功七級

(昭和十一年二月二十二日勳章授与)





站
 望
 軍
 忠
 兵
 士
 第
 一
 聯
 隊
 八
 等
 中
 士
 兼
 長
 谷
 川
 啓
 吾

其八 故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 長谷川 智君

(イ) 君の出生

九頭龍川が勝山盆地より西流する所、約四里の間は、南に經ヶ岳、大佛寺山、吉野嶽あり、北に水無山、鷲ヶ岳、淨法寺山、冠岳等一帶の山脈相連なり、所謂山間の狭谷をなし、松岡町附近に於て、福井平野に出づ。此狭谷の中、小舟渡以西約三里の間は所謂志比莊である。現在は上志比、下志比、志比谷、淨法寺の四村に別れてゐるが、此邊の住民は昔より律義で、熱心で、稍偏狭ではあるが義に勇み、事に當りては奮闘努力斃れて尙止まざるの氣概を有し、猛勇猪突所信を斷行するの風格がある。之を善導し之を薰化するに方を以てせば必ずや良風美俗を馴致し、國家有用の材を出すへきこと期して俟つべきである。我が長谷川智君は實に此志比莊内下志比村東古市の人であつた。

明治四十二年三月二十二日長谷川彌三兵衛の長男として出生。母をキクと云ふ。生れつき丈夫な子供であつた君は、律義な父母の慈育愛撫の下に恙なく發育して、末頼母しい兒として近所の人々に迄愛せられた。

(ロ) 小學校時代

大正四年四月一日年七歳、下志比村立下志比尋常高等小學校に入學した、學業の成績はさほど優等ではなかつたが元氣は常に儕輩を凌いでゐた。

大正十年三月義務教育を了へ、四月一日進んで高等科に入學し、十二年三月首尾よく高等科をも卒業した。

家は農を業としてをつたから、君は通學の餘暇父母を助けて野良に働き、眞面目な、可愛い子として両親の愛を集めてゐた。

(ハ) 補習學校及青年訓練所生徒時代

愈々一人前の學歴を持つた君は、世の中へ出る事になつたが、家庭と村の狀況とは、君をして機業の運轉手となる

べく導いた。運轉手見習の君は、隣區高橋の機業家山口氏の工場に働いた。

しかし高等小學校卒業後は補習學校へ入つたので、君は晝の仕事が終ると、近隣の友達を誘ひ合せて、村立農業補習學校へ通つて、自己の學修に専念した。螢雪の功空しからず、大正十四年三月君は補習學校をも完全に卒業した。

世界の大勢と皇國の立場とは今や青年の訓練を要する時代となつた。大正十五年四月二十日勅令第七十號は公布せられ、全國の青年は一齊に冬眠夢幻の世界より覺醒の明るみへと投げ出された。村役場より青年訓練所入所適齡の通知に接した君は欣躍入所し、晝は松岡町古市屋機業工場に運轉手として働き、夜は友人と共に學科に教練に心身の鍛練に力め遂に四ヶ年を通して總出席時數八百六十一時間と云ふ好成績を以て、昭和四年十二月二十三日修了證を授與されたのである。

(二) 徴兵検査—入營

かくて昭和四年君年二十一、徴兵適齡に達した。生來丈夫な資質を有し、しかも日常體軀の練磨を怠らず、また青年訓練に精動した君は、自ら其の合格を信じつゝも、どうか立派な帝國軍人となつて、男の中の男とたてられたいと心に念じつゝ、六月二十四日早朝徴兵署に出頭した。

聽て検査は始まり、間もなく君の順になつた。身長、體重、其他身體各部の検査も済み、愈々徴兵官の前に出た。すると聯隊區司令官は、莊重なる口調を以て

『君は甲種合格である。帝國の軍人として來年は入營せねばならぬ、どうじや覺悟はよいか』

とたづねた、君は「やれ安心して、愈々男の中の男となれるか」と渾身の悦と、青年の持つ快活な氣分とを以て胸を躍らせつゝ、

『ハイ、本望であります』

と答へた。司令官は更に言を次いで

『入營までは充分からだを大切にせよ、これからは、お前からだであつて、しかも自分のものでない、天皇陛下に差上げたからだである。陛下のものだ、御國のものだぞ』

と、説き示し、尙懇々と注意があつた。君は沁々と承り深く心に銘記しつゝ、其場を退いた。

願は叶つた。胸は躍る。じつと落ちついてをられない。早く父母に知らせて安心させたい。と許しが出ると急いで家に歸つて來た。急遽父のたづねに對して、

『お蔭で合格しました。御國への御奉公が出來ます』

と悦んで返答するのであつた。父も母もまたたつた一人の妹までも悦んでくれた。

それよりは青年訓練に一層研究精勵すると共に只管入營の準備に努めた。

昭和五年一月九日、明日は愈々入營である、両親や親戚知友、さては村長、分會長、竝に村内の人々に送られて、居村を出發した。そうして翌十日朝歩兵第三十六聯隊に入隊した。

(ホ) 現役兵時代

入營後の君は第十一中隊に編入された。爾來一意軍務に精勵し、諸規則の履行確實、成績優良であつた。従つて上官の信任を得、同僚間の氣受も良かつた。十一月五日歩兵一等兵に進み、十一日兵卒精勤章を附與された。中隊よりの通知によると

『性溫順ニシテ快活無邪氣、諸事積極的ニ行動シ、克ク上司ノ命ヲ守リ、諸規定ノ履行確實ニシテ諸勤務ニ服シテ表彰サレシコト六回ニ至ル』

と、以て君の在營間の働振りの一般を知ることが出來ると思ふ。軍紀軍律の前には、また正義公道の前には溫順で克く服従し、其の實行には實に元氣で勇敢であつたのである。此の如き人こそ、眞に男子の中の眞男子、日本男兒の眞骨頂である。

某日父と母とが面會に行つた。『どんなにつらからう、是非あの子を慰めて、また自分も安心したいと。』思ひつゞけつゝ、兩親は兵營内の面會室で待つてゐた。

すると、しばらくして面會室にあらはれた君を目敏く見つけた母親は

『お、智や、智、お父さんも來てゐるよ』

と身近く寄つて行つた、間悪く擧手の禮をした君は、父母の眞中にどつかと、座を占めた。面會所は、當日は人でいっぱいだった。

母は

『智、どうじゃ、つらいか』

と、たづねると、君は

『いや何もつらくない、家に居たときは、うまく勤まるかと、可なり心配したけれど、來て見ると、思つたよりは、樂で面白い。』

と、頗る快活に言つてのけた。また父が

『錢はいらないか』

とさくと

『別にいりません』

と、答へた。いつも面會のときは、これ位で終り、三十分と一しよに居たことはなく、其都度、隊が忙しいたらと云つて、中隊へ歸るのであつた。しかも、君の風手は會ふて氣持が良い位、いつも元氣で快活であつた。

かくて一年半の勤務は早くも過ぎ、青年訓練修了の特典が歸隊となつて、昭和六年七月に歸郷した。

(へ) 青年訓練所指導員時代

君の歸隊を悦んだのは勿論君の父母であつた。妹であつた。それよりも意外の所で歓迎したのは下志比青年訓練所であつた。

『此度長谷川君が歸隊でかへつたそうだが、智さんは新しい軍隊教育を受けて歸つて來たので、しかも眞面目でよくやつて來たと云ふことだ。その立派な所を青年訓練所へも分けてもらいたい。某指導員が家庭の都合で近く止めるとのこと、其の後任は是非長谷川君にやつてもらいたい。』

こんな話が持ち上つた。そして十月三十一日には指導員の囑託辭令が來た。勿論それまへから指導員として働いたのであつた。

快活な君はいつも生々した氣分でしかも萬事を凡帳面にまた忠實熱心に働いた。そんなことがあつても青年訓練の日には缺勤しない。其指導振りは嚴格の内に親切味があり、寛嚴宜しきを得た。生徒はいつしか君の徳化になつき、在郷軍人からは模範會員としてたゞえらるゝに至つた。

(ト) 家庭

君の父彌三兵衛は、同區長谷川彌三七の弟であつて、往年分家して、別に一家を立てたのである。本家彌三七方には祖母いしが尙元氣で生きて居る

君年齒若く未だ妻帯せず。家には父母の外に妹まつを一人あるのみ。家庭至極圓滿で、父母は毎日野良に出でて農業を營み、以て一家の生計を維持し、君は機業運轉手、妹は機織職工として働き、以て生計を補助し、人の見る目も羨しき程、睦じい田園家庭であつた。

(チ) 召集

昭和六年九月に起つた滿洲事變をきっかけとして日支の關係は刻々悪化した。國民は一齊に興奮した。在郷軍人は皆齊しく堅い決心の色を浮べた。昭和七年の初頭になると上海方面は特に險惡となつた。

『大分喧しくなつたね、いつ下るだらう』

『さあ、いつかはつきりしないが今度は第九師團の番らしいから、早晚来るにきまつてる、一家親類へそれとなく挨拶して置いた、召集と共に此身は君國に捧げるのだ』

『我々の様なものが陛下の股肱として、御國の爲に大に働くことが出来るかと思ふと、此腕が奮ひおのゝき、此胸がワク／＼するよ』

とは此頃君が友達同志に話す述懐談であつた。

愈々二月二日には第九師團に動員令が下つた。四日午前八時迄に召集部隊たる歩兵第三十六聯隊に到着すべき赤紙の令状は三日朝君の家にも配布された。聽て之を聞きつけて親類一同は集つてくる。近所の人々もよつて來た。

『智君、愈々來たね』

と、云ふと、君は

『ウン、來た、これで安心した、來るか／＼と待つてゐたのだ』

と、さも安心らしい、愉快さうな表情の裡に堅い決心が潜んでいた。

母から

『智や、よく氣を、をちつけてね』

と、云はれて、君は

『有難うお母さん、入營のときは違ひますよ、あの時は向うが眞暗だつたから、それで幾分心配した。けれども今度は、向ひが明るい、何も心配することはない、安心して下さい。』

と、元氣よく答へるのであつた。

本家から祖母が、目に涙を浮べてやつて來られて

『智や、大丈夫かへ』

と云ふと、君は

『祖母さん、僕はきつと祖母さんより早く死にます。死ぬと神様になります。東京九段坂の靖國神社に祀られます。御國の守護になります。』

と、答へた。祖母は君の心根を汲んで、目に露を宿しながら、君の顔を見守るばかりであつた。

かくて、時日もないので、村役場や、分會長、小學校、其他夫々の家へ別れの挨拶にまはつた。小學校へ來ては校長小林實先生に會つて

『先生、行つて來ます、永々御厄介になりました』

と、挨拶すると、校長は

『君には、愈々御出征の趣、御目出度御座います。暫く御會することが出来ません、しつかりやつて來て下さい。凱旋の日を待つてゐます』

と、訣れの辭を述べた、すると、君は

『難有う御座います。平素の御諭しは胸底深く藏つてあります、歸りは箱の中に白くなつて歸ります。充分お體を大切にして下さい。』

と深い決心を挨拶の上に現し、更に訓練生一同に對しては

『諸君愈々私は出征することになりました。帝國の男子としての、此の上もない名譽であります。平素皆さんに教へたこと、話たことを實際に行ふ時が來ました。諸君私が手本を示します。邦家に重大事が起つた時は、不肖長谷川をまねて下さい。各指導員方の教へを守つて、しつかり勉強して下さい。』

と訣別の辭を残し、翌四日には朝早く起きて祖先の靈牌に告別し、氏神に詣で、最後の祈願をなし、村役場より指示

された時刻に、越前電鐵永平寺口驛に集合した。皆が集まると、村長や、分會長の挨拶があつた。君は一同に對して

『皆さん有難うございます。只今村長さんや、分會長殿から御懇篤なる御詞を賜り、長谷川にとりましては身に餘る光榮と存じます。かくなる上は粉骨碎身、御國の爲に御奉公致します。』

家には老いたる父母と年若い妹が居るだけでありますから、何かとお世話になることゝ存じます、何分宜しく御願致します。それでは皆さん随分お體を大事に御願致します。簡單であります、是で終ります。』

ついで村長の發聲にて

『天皇陛下萬歲』

を三唱し、更に出征軍人の萬歲を三唱して、小學校兒童の送別の唱歌に送られて、生い立ちし故郷に最後の訣れをなし、日章旗のトンネルを通つて鯖江兵營へと急いだ。

かくて歩兵第三十六聯隊に應召し、第十一中隊に編入された。

(り) 上海出征

應召後は上官の命を受けて毎日不眠不休、繁雜多端なる動員業務並に出征準備に奔走しつゝあつた。

五日には父母打揃つて妹も連れて、最後の訣別をなすべく、兵營を訪ねた。君も待つて居た、親類の誰かれも二三人やつて來た。

『お前にお金を用意して來た、持つて行けよ』

と父は若干の小遣錢を出した。君は押戴いて

『ほんとうに有難うございます。けれども戰場には金はいりません。戰場で何が買へますか、私の手許にある金もお父さんにお上げしたいのです。』

と懐中より金を出しかけたが、父は勿論受けなかつた。すると此度は君から

『出動準備のため二三買物がしたいのです。お父さんお願出来ませんか。』

父は直に承知して營外へと出て行つた。間もなく父が歸つて來ると、君は容を正して

『お父さんも、お母さんも、妹も、親類の方々も皆さん、今日は此世のお別れです。最後のお願を致します。皆さん働いて下さい、どうか丈夫で働いて下さい。』

まつを(妹)や、兄さんは今日限りもうゐないのだ。兄さんに代つてお父さんやお母さんに孝行をしてくれ、これが私の御願です。』

と最後の挨拶を致した。すると母から

『葉書を時々出してくれよ』

と云れたので、君は

『お母さん葉書も出せませうまい。家に手紙を書いてゐるでは、兵隊の仕事が出来ません。ですから葉書が來なくとも勘忍して下さい』

更に母を安心させようとか

『お母さん僕はきつと生きて歸つて來るから安心してゐなさいよ』

と云ふと、此母にして此子ありだ、母は形を改めて

『智、何を云ふか、軍人は戦に出たら餅の中の糠だ、めつたに歸れまい、死んで歸れ。家には妹まつをも居る。家の事は心配するな。御奉公が大切だ。』

と、きつぱり諭す非常時の母、君は頗る安心して

『お母さん、安心した、それで安心した。お體を大切にして下さい。お伯父さんも、お叔母さんものみです。』

此面會は實に君と長谷川一家との人生最後の訣れであつた。かくして七日には兵營を出發した、沿道は此出發を壯にすべく、また最後の名残を惜まんと、四方よりつごる來れる群集無慮數萬に及び、停車場迄約一里の間道路の兩側に堵列して、殆ど立錐の地なしと云ふ有様であつた。其の中を嘯唳たる喇叭の聲につれて、威風堂々と出征部隊は行進する。群集は手に／＼國旗を打振り、萬歳々々の聲沸くが如くであつた。

間もなく鯖江驛に着いて、若干休憩の後、軍用列車に乗り、熱誠こめたる群集の萬歳聲裡に出征の途に上つた。

八日廣島に着き同市に宿營し、十一日宇品港出發、十六日上海上陸、該地警備の任に服し、連日不眠不休で働いた。此間に二月十八日伯父長谷川彌三七宛次の書信を出した

『前文御免下さい。貴家様は私出發後は毎日御健康のこと、存じます。御蔭様にて小生出發後は何の變りも無く、毎日無事軍務に精出してゐますから御安心下さい。廣島市に二泊、宇品港出發は十一日午後二時半宇品丸にて出發致しました、十五日ウーソン上陸の筈でありましたけれども敵のために上陸出來ず、十六日午前九時上海に上陸致し午後三時に上海第二紡績に宿泊する事になりました。我等は敵の姿も見ずに居ます。今日までは安全な所にあるのです。』

市内巡視に行くと、晝は女の便衣隊が居つてあぶないけれど、其の外は安全なものです。支那市民は皆店戸を下して居ります。支那市民は日本軍人が通るとかくれてしまひます。貴家の御健康を御祈りします。左様なら

上海市上海第二紡績にて

二月十八日

長谷川 智

(x) 上海附近の會戰に於ける勇戦

二月二十日よりの上海附近に於ける會戰には、二十日夜中隊が孫家宅に推進するや、隣大隊との連絡の爲林將校斥候を差遣した。此際君は同將校斥候に屬し、砲煙彈雨の間を勇敢に行動し、克く斥候長を輔佐して、梁殿宅にあつた第一大隊と完全に連絡をなし、其任務を全ふせしめたるに與て力あつた。

二十一日普西の敵を攻撃するに方りては、第一線の小銃手として勇猛沈着に射撃し、豪膽にして機宜に適せる躍進と相俟つて敵に近接肉薄し、突撃に際しては卒先敵陣地に突入し、中隊の該部落占領に與て大に功があつた。

二十二日夕中隊が決死的夜襲を決行するに方りては、最勇敢に行動して克く其目的を達成せしめた。

二十三日より二十六日迄の間は熾烈なる敵火の下にあつて晝夜兼行、交通設備作業に或は大隊本部と中隊との連絡に努力し、二十七日更に第一線に進出し二十九日迄敵前四五十米の地點にありて、不眠不休の警戒と突撃陣地の推進とに努力し以て三月一日の攻撃を準備したのである。

此間塹壕内にあつて休憩中、郷里の知友酒井義一にあつて、次の手紙を書いた。

『前文御免被下度

義一君、長々の間御無沙汰平に御許し下され度候。實際筆取る暇も無之、實に悲慘なる光景に御座候。戰場では初めて彈丸は雨霰の如く、隣に居りし戦友も敵彈のため一人二人と去り、今や中隊は人員欠、死傷者は毎日限りなく實に國家の爲とは云へ、残念なことに存じ候。

然し、自分は全く無事で一つだに彈丸も當らず、神のお護りに依る事と存居候。毎日々々食ふや食はず、散兵壕の中に穴を掘りて土の中に居り、敵兵との間は僅か三〇〇米です。戦は益々激戦となり、我が分隊は鯖江出發の時九名が現在三名です。』

此手紙は連日の激働、苦闘の裡に僅の小閑を得て、塹壕内に腰を卸したとき、認めたものである。これによつて、戦

場に在る忠勇なる我が兵士達が、毎日危険悲惨の巷に立ち、如何に苦辛し、如何に奮闘してゐるかを知り得ると共に斯る場合に書かれたる君の絶筆として、頗る大切な記念品である。

三月一日は早朝、前日来構築せる攻撃準備の位置を脱し、中隊の援隊となり、第一線に追尾し、團敦東方の敵陣地前七八十米の地點に肉迫し、突撃を準備す。午前十時四十分頃今や突撃準備完了せんとする時機に於て、擲彈筒手は、敵機關銃に對し猛射するのは、今ぞと、盛に發射中、中隊長代理山田少尉は、擲彈筒手四名が携行彈の大部を射盡したるを知り、附近に在る特務曹長に

『手榴彈の補充』

と、呼んだ。第一線に近迫して居つた君は、此命令を聞くより早く、つゝ立ち上り、敵の銃砲火の下に立ち、獨斷附近の戰友及自己の携行せる手榴彈を擲彈筒手に補充し、以て擲彈筒の射撃を繼續せしめ、敵の機關銃を制壓し、中隊に突撃發起の機を與へ、其突撃を容易ならしめた。

以上の行動は實に勇敢機敏、犠牲的精神旺盛にして、眞に軍人の龜鑑であり、武功拔群と稱すべきである。

(ル) 壯烈なる其戦死

かくて、中隊は敵の第一線の陣地を占領し、更に團敦東端の線にある敵陣地を攻撃せんとしたが、西南方六角堂方面の敵の掩蔽機關銃四坐よりする側射は頗る猛烈にして、砂塵濛々として咫尺辨ぜず、中隊長代理山田少尉は、我が奪取せる敵陣地の塹壕を利用し、團敦にある敵の側背に出で、之を突撃すべく、著々準備をなすと共に、中隊(一小隊)内の輕機關銃及擲彈筒の全部を集めて、團敦東方畑地に位置せしめ、敵機關銃の制壓に任せしめた。正午過には中隊は大概其位置に就いたけれども、我が輕機關銃の位置は近く敵に曝露しある爲、死傷相踵ぎ、出る射手も、出る射手も、皆撃たれて、射撃意の如くならず、時に、後方塹壕内にあつて、之を見てゐた君は、憤慨禁する能はず

『小しやくなる敵の振舞かな、いで、おれが撃つてやらう』

と、壕を飛び出して、直に輕機關銃を手にし射撃をなさんとする刹那、敵彈來りて君の口中より頸部を貫通した。君は平素から研究心に富み、小銃手たるに拘らず、輕機關銃の操法にも相當心得があり、自信があつたのである。

小銃手たる君の此けなげなる犠牲的勇敢の態度に、いたく感憤した戰友達は、之を見て直に壕内に引入れたが、勇敢なる君は急所の痛手にも拘らず、幾度となく起き上り、ありあふ小銃を手にして、前進を續けんと、最後の努力をしたが、起つことが出来なかつた。

頸動脈を切斷されたので、血は混々として迸出し、鮮血淋漓たるも、負傷の部位がわるいので、繃帯の術なく、百方止血の方法を講じたが、中々止まらない。顔や、からだは、ごこもかも、朱けに染まりて、血達磨の様になる。

もがけば、もがく程、出血が烈しいので、戰友が之を抱きて止めて居るが、中、肯かない。

『これ位の負傷は何だ、銃をくれ、やるんだ。』

と、繰返し／＼せがんだ、しかし出血が夥しいので、段々弱つて來た。之を見たる戰友は、涙を揮つて

『安心しろ、仇はきつと、とつてやる。』

と、叫んだ、君も亦最早死期を覺悟したものか

『天皇陛下萬歳』

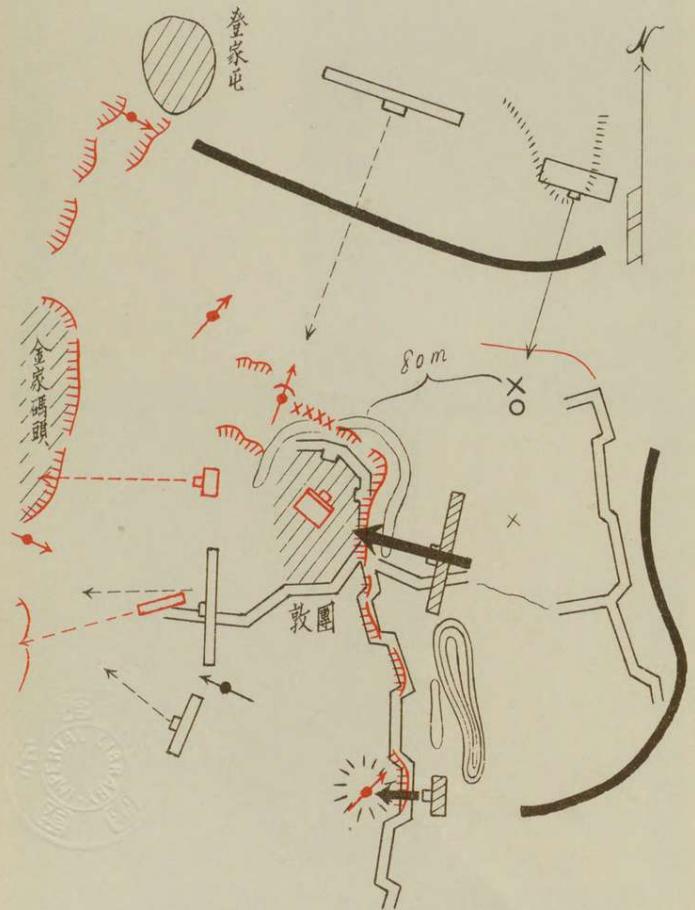
を唱へつゝ、戰友の腕に抱かれて、其の心からなる介抱の下に絶命した。時は方に三月一日午後零時三十分頃、場所は上海西北方約二里團敦東方畑地であつた。

嗚呼、天晴強く、雄々しき、けなげなる若者も、斯くの如くにして不歸の旅に赴いた。實に惜みても餘りある勇者ではないか。

君死するの日を以て、歩兵上等兵に進み、功七級金鷄勳章並年金壹百五拾圓及勳八等白色桐葉章を授け賜ふ。時に年二十四。

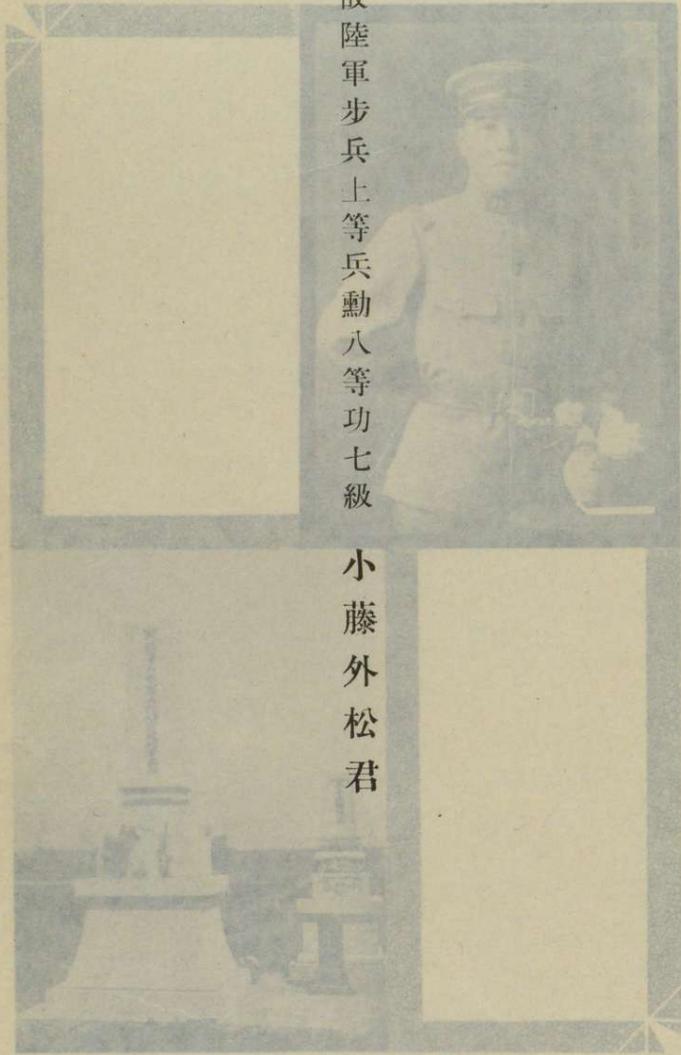
長谷川上等兵戰死位置要圖

(昭和七年三月一日附近)

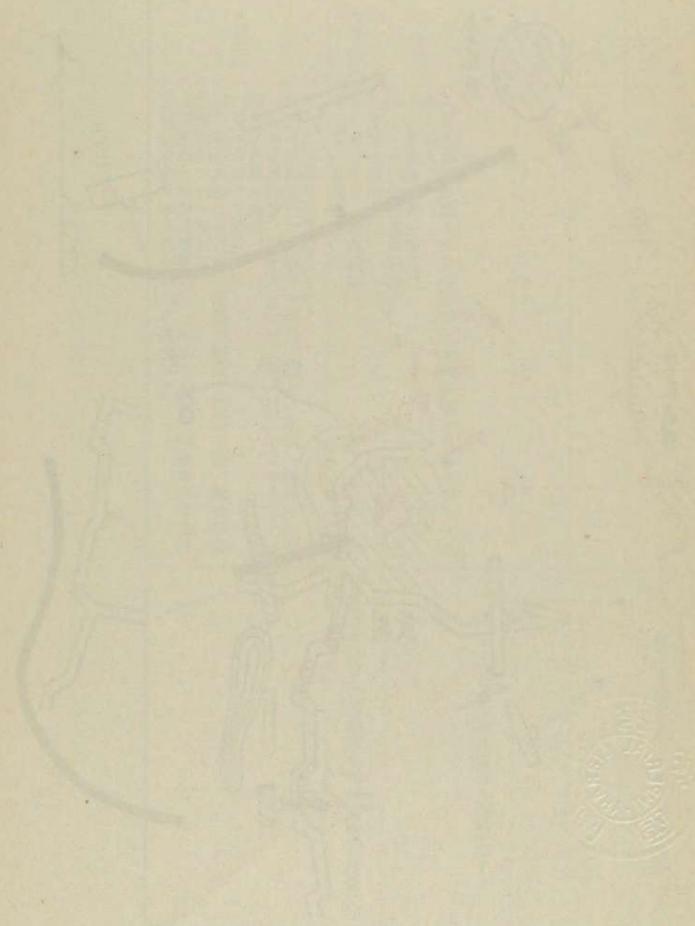


| 同 七 年 | 同 六 年 | 同 五 年 | 同 四 年 | 同 三 年 | 同 二 年 | 昭 和 十 五 年 |
|---|--|----------------------|--------------------|-------------|-------------|-----------------------|
| 二 十 四 | 二 十 三 | 二 十 二 | 二 十 一 | 二 十 | 十 九 | 十 八 |
| 二月二日第九師團動員下令。同日宇品港出發。同十六日上海上陸。同二十日ヨリノ上海附近ノ會戰ニ參加。同二十日ヨリノ上海附近ノ會戰ニ參加。同日中華民國江蘇省寶山縣團附近ノ戰闘ノ際、顔面頰部貫通銃創ヲ受ケ戰死ス。同日昭和七年滿洲事變ノ功ニ依リ功七級金鷲勳章並年金百五十拾圓及勳八等白色桐葉章ヲ授ケ賜フ。 | 十一月十日現役兵トシテ歩兵第三十六聯隊ヘ入隊。第十一中隊ニ編入。十一月五日歩兵一等兵。同十一月九日歸休除隊。同十一月三十日現役滿期。 | 十月三十一日下志比青年訓練所指導員囑託。 | 十二月二十三日下志比青年訓練所修了。 | | | 七月一日下志比村立下志比青年訓練所ヘ入所。 |

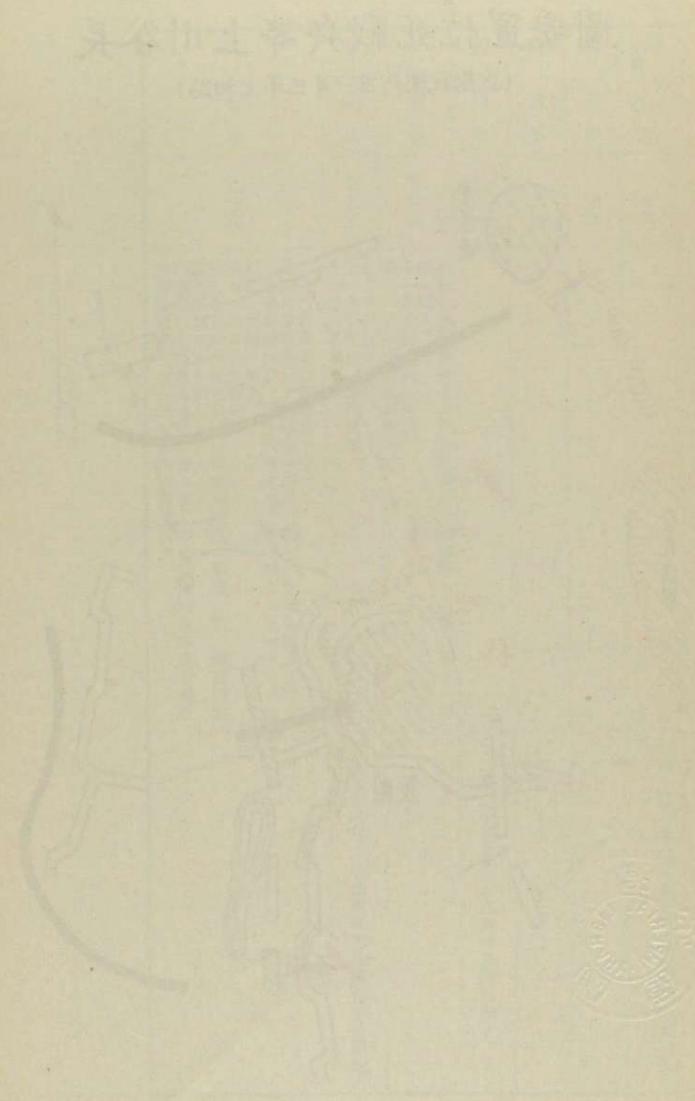
故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 小藤外松君



日本陸軍歩兵上等兵勳八等功七級



故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 小藤外松君



其九 故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 小藤外松君

(イ) 君の出生

君は九頭龍川の北畔、北陸道に沿へる吉田郡森田村上野の人である。今を距る六百年の昔、忠臣新田義貞公が黒丸城攻撃の據點となせる河合石丸城址は、隣區石盛に在つた。往昔此附近一帯は九龍川の北岸では稍々高燥の地であつたから、上野といふ名がつけられたのである。従てまた往時は、大障碍たる九頭龍川を近くに控へて、要害の地であり、且又交通上の要點でもあつたから、古來屢々戦闘が此邊で繰返へされたのである。

住民一般に正義の念強く、態度上品で、自ら持すること高きの風がある、そうして平野の中央にあつて、大自然にはぐまれながら、雌々しく延びて行く此邊の若人には、物事に凝滞せずさつぱりした、實に何とも云ひ得ない長所もあるが、また一面には自我にとらはれ、反省、自制の出来ないやうな短所もないではない。我が小森藤松君は、如上の長所を多分に持つた快活な若者として此地に育つたのである。

明治四十三年四月十日出生、父は重兵衛、母はマツ、君は其の二男である。幼時より頗る快活で元氣な、如何にも末頼母しい兒童であつた。

(ロ) 小學校―補習學校時代

大正六年四月年八歳、學齡に達したので、森田村立第二尋常小學校に入學した。頭腦明晰で、身體各部並に個性に至る迄、萬事良く、つり合ふて發達した優良兒であつたから、在校六年間、學業優秀、品行方正なる優等生で押し通して來た。

大正十二年三月第二尋常小學校を卒業し續て、同村立第一小學校の高等科に入學した。そうして二年の間、終始首席

を以て、同十四年の春卒業し、更に同村立靜脩補習學校へ入った。時に年十六である。

補習學校へ入つてからも大に勉勵した。兎に角、頭が良いのに熱心であつたから、何をやつても成績は優秀であつた。

(ハ) 青年訓練所生徒並青年團員時代

かくて昭和二年一月十八、村立第二青年訓練所へ入所した。明敏にして理解力に富み、熱心にして氣概を有する君は、此處に於ても亦拔群の好成績を現はした。當時君と同年次で現に歩兵第三十六聯隊に居る伍長森川正信もまた訓練生として優秀な成績であつたが、此二人は極めて仲の良い友達であつて、四年次生時代には共に教練の助手を勤めた。従つて諸動作並に態度の優れてゐたことは言ふ迄も無く、號令の如きも亦中々堂に入つたものであつた。其の後同訓練所で美談善行録なるものを作つたが、其の動機は全く君等兩人を今後の模範として、永久に残したい爲であつたと云ふ位、君達の行動が他に優れてゐたのである。

また青年團員としても中々克く活動し、其の幹部となつて畫策大に努めたものであつた。森田村の内第二校下の青年團が今日の隆盛を來したのは、君の力が與つて大なるものがあつたと云はれてゐる。乃ち左程餘裕のある身でもないのに、自ら進んで優勝旗を前後二旗も寄附した一事だけでも、其の熱と力が想像されると思ふ。かく學校、訓練所青年團等の成績や働きが勝れてゐたので、表彰を受けた事も度々あつた。

又君の家は農を業としてゐるが、君は父兄と共に幼少より家業に親しみ、克く働いたところの模範青年であつた。併し次男坊のこともあり、且本人の希望でもあつたから、父兄の同意の下に、昭和四年二十歳の一月より、自動車運轉手の助手として、同區市村自動車運送店に勤めることゝなつた。頭はよいし、力はある、而かも眞面目に働くので市村運送店主は、常に

『外松さんほど働く者はない。あの人以外の者は使はれない』
と云つて賞めてゐた。

君は身長五尺三寸、あまり高い方ではないが、體重は十七貫もあつて、實に立派な體格であつた、兄の小市と共に向加藤の兩青年を加へて、當時上野の四大關と言はれてゐた位、體格膂力共に他に勝れてゐた、鎮守の境内にある三十六貫の力石を苦もなく肩にしたと言はれてゐる。

しかも快活で、色々の趣味を持つた愉快な性格の青年であつて、多くの人に好かれてゐた。

(ニ) 徴兵検査—入營

昭和五年君年二十一、徴兵適齡となつた。體格上からも、人物上からも、申分がないので、検査は立派に合格した。

十二月になると愈々入營も近くなつたので市村運送店を退き、只管入營の準備にと精進した。二十六日には青年訓練所の課程も好成績を以て修了した。

越えて翌昭和六年一月十日、一族知友並に多くの村人に見送られて、現役兵として歩兵第三十六聯隊に入隊した。

(ホ) 現役兵時代

入營後の君は第二中隊に編入された。其の快活無邪氣で表裏なき眞面目な行動と、熱心奮勵、目的を達せずんば止まざる努力とは、頗る優良の成績を現はし、上官の信頼と、先輩や同僚の愛敬とを受けた。

六月選ばれて、千葉陸軍歩兵學校教導隊に分遣を命ぜられ、七月十日歩兵一等兵に進み、翌十一日兵卒精勤章を附與された。

歩兵學校教導隊分遣中は、瓦斯研究中隊(第四中隊)に編入され、熱心諸勤務に盡瘁し、成績優良であつた。そうして當時研究資料を原中隊に送付し來り、また上官や戦友に屢々通信を寄せて、原隊の模様を尋ね自己の行動を報じ、常に連絡を保ちつゝあつた。銃劍術及射撃は君の性格上頗る得意とする所で、技倆亦優秀であつた。

(ヘ) 家 庭

君年齒若く未だ妻帯せず、父重兵衛は昭和四年四月九日君が十九歳のとき五十歳を以て死亡し、兄小市家を繼ぐ、君

より長ずること十歳なり。姉コマは既に出で、他に姪ぎ、家には尙弟藤松、妹君子がある、一家は頗る圓滿で、老母に對し孝行を盡し、兄小市と共に君は村内の褒め者であつた。また兄弟仲も善く就中君は兄及嫂を敬ひ、弟妹をいたはり全く行届いた友悌ぶりであつた。弟藤松は

『こんなこと申上げるのも、どうかと思ひますが、若くて死んだゞけあつて、あんなに何事も行届いたものは、なかつたと思ひます』

と、往事を追懐して、なつかしげに、君の事をよく話すのである。

(ト) 上海出征

昭和七年二月二日第九師團に動員の令下るや、君は直に原隊復歸を命ぜられ、急遽鯖江兵營に歸つた。聯隊は動員の眞最中である。郷里に立寄るなど勿論出来るものでない。そうして七日には兵營出發直に征途に上つたのである。其際親、兄弟、親族知友等が訣別の爲面會に行つたが、君は頗る元氣で

『自分が戰死すれば名譽の花が咲く、こんな嬉しい事はない。萬一にも凱旋すれば、老母は自分の手で養育する積りだ、大に祝つてくれ。』

と話してゐた。

かくて數萬の見送人の熱誠なる萬歳聲裡に鯖江驛を發し、鐵道輸送を以て八日廣島に着き、宿營した。

帝國の軍人として、戰場に向ふことは其の本懐であり、名譽である。しかも敢て生還を期するものは一人もない。我が小藤君の如き熱血漢に於ては尙更であつた。特に歩兵學校教練隊より歸隊するや、動員業務、出發準備等に多忙を極め用意が整ふと、すぐ出發したので、親兄弟にも十分後事を言ひ残すことが出来なかつたから、廣島に着くと其の日早速郷里の兄弟に一書を裁した。

『前略御免、七日前十時十二分鯖江驛發、八日午前六時半廣島市着、道中無事今廣島の街に休養してゐますから御

安心下さい。鯖江から廣島に至る迄道中、どの驛でも又野中の一軒家でも、老いも若きも、戰場の勇士を送る萬歳で、夜は一目もねません。母様、兄様、妹様、僕は今死んでも未練はありません。冬の月の寒い夜中にもかゝはらず、青年團、處女會、在郷軍人幾百萬の人から見送られたでせう、ほんとうにこんな幸福な事は有りません。

八日の朝八時に廣島市にある大きな家に入りました。今晚と明晩と泊つて、十日の朝宇品港を出ます、もう日本に居るのも二晩です。廣島の家でも大變なもてなしです。ほとんど廣島市民も昨夜は一目もねません。今日も明日もやつかいになります。愈々十二日頃上海に着くでせう、僕は二度日本に歸る心はありません。なんで日本にかへれませう、國民のこの誠意をどうして忘れる事が出来ませう、御國の爲に陛下の赤子として彼の地の露と成りませう。

されば母様、兄様、御一同、御體大切に。

支那に着いたら、又お便りします、明後十日の午前七時から八時日本出發元氣でやつて來ます。死んだ父もごんなに喜んで居る事でせう、やがては僕も父のそばに行きます。

皆様さようなら、御一同様。』

と、途中沿道國民の熱誠なる見送及廣島市民の心からなる歡待に對し感激の涙を漣ぎ、益々決死報國の覺悟を固めた。特に

『死んだ父もごんなに喜んで居る事でせう、やがては僕も父のそばに行きます』

と、言ふに至つては、一讀、忠孝兩全の日本精神の琴線に觸れ、異常の衝動を感ずると共に、覺えず熱涙の滂沱たるものがある。

尙右の書翰の裏に

『兄様、姉上様へ

残る母一人に孝行して下さい、之が僕の一生のおねがひです。再生きてかへらば必ず御禮します。どうぞ母を大切

に。

藤松に、此の間俺が言ひきかせた事を一生忘れるなと言つて下さい。」

と記し、兄及嫂に母のことを呉れ、も頼み、弟に將來を訓誡し更に其の終りに「僕ののこした預金全部を總決算する」云々と記して、組合預金、郵便貯金、學校から持つて来た預金、出征の饒別等に分ちて、その金額及總計を示し之が分配方法をも記してある、則ちこれを父の墓に百圓其の他を老母及兄弟姉妹に全部分けたのである。一たい君は青年時代でも刻苦精勵、しかも善く質素儉約を守り、全く心掛けの良い模範青年であつたので、出すべき所へは、をしげもなく、いつも奇麗に金を出したのであるが、それでも尙零碎の貯金がつもりつもつて五百圓ほども残つてあつた。そこで今死を決して故國を出づるに方り、心置なく最後の始末をしたのである。實に見上げた決心である。

かくて十日宇品港出帆、十四日上海上陸該地の警備に服した。

(チ) 上海附近の會戰に於ける勇戰

二月二十日よりの上海附近の會戰に際しては、二十日には君の中隊は豫備隊となり孫家宅に於て陣地の構築作業に従事したが、二十二日よりの金家壙の攻撃に方りては、君は輕機關銃分隊の射手として勇猛果敢に奮闘奮進し、唐家舎の敵陣地を占領し、敵の十字火の爲死傷續出爾後の攻撃が一時頓挫するの止むなきに至りたるに拘らず、勇敢なる君は、更に第一線小隊長の指揮の下に奮迅「クリーク」を涉り、中隊の前方二百米にある突角陣地に前進し、その重火器を沈黙せしめて此地を奪取し、爾後の大隊攻撃の一據點たらしめ、戰鬪を有利に發展せしめたるに與つて大に力があつたので功績極めて顯著であつたと言はれてゐる。

(リ) 壯烈なる其の戰死

二月二十五日よりの第二次總攻撃に際しては、二十四日夜君の中隊は金家壙の敵の主陣地攻撃準備の爲、獨立家屋前方四百米突の地點に進出し、敵前至近の距離に突撃陣地を構築したが、二十五日朝に至る迄、君は不眠不休敵火の下に

ありて奮勵事に従ひ、以て迅速に工事を竣功せしめ、更に豫備陣地築設に最熱心に努力した。此際不幸にも敵彈の爲胸部に貫通銃創を受け、壯烈なる戰死を遂げた。

君の此の前後來奮闘努力せる工事は爾後の總攻撃に方り、中隊の突撃實行の奏效を容易且確實ならしめたものであつて、其の武功實に偉大であつた。

君の性格や平素の行跡よりして、中隊長は次の様に云ふて居られる。

「即ち性格良好、武技ニ秀デ、情味ニ厚ク衆ニ敬愛セララル人物ニシテ初テ戰場ニ於テ豪勇ヲ發揮シ得ト謂フヘキカ」と以て君の人と爲り及戰功の如何を察知することが出来るではないか。

死するの日を以て歩兵上等兵に進み、功七級金鷄勳章並年金壹百五拾圓及勳八等白色桐葉章を授け賜ふ。時に年二十

三。

(又) 逸話

(一) 親孝行

君が親に孝行であつて、一人の老いたる母に對しての心づくしの感すべき數々の行爲は、村の人々の語草となり、村民敬慕の的となつてゐる。又十九歳のとき死別した父に對しても常に追慕の情止み難きものかあつた。前述の廣島から兄に遺つた書翰の中にも「僕の貯金の中壹百圓は父の墓にして下さい」とあり又「僕は頗る元氣に居ます、必ずやつて來ます、死んだ父もごんなに喜んで居る事でしょう。やがては僕も父のそばに行きます」と言ふてゐるが如き以て其一端を察知するに足るではないか。

(二) 多趣味の人

君は中々趣味の多い人であつたが、就中浪花節が得意で全く素人ばなれのした伎倆であつた。村の青年團が君等同年の入營者の送別會を催した時、君が辨じたてた得意の一節は今尙當時の人々に膾炙されてゐる。聯隊に入つてからも娛

樂會には時々やつたさうである、歌もうまかつた、又青年團員時代には雄辯家として知られた。
俳句も時々作つた。草花の栽培も好きだつた。今や君の家に於て見ると生時君が愛育した當時の菊や、さばてんが
寂しく動いて居るのも哀れである。

(ル) 餘 談

之れは後日の談であるが眞宗の盛な當地方の習として各部落の民家では、家業の閑な折に僧侶を聘し、村民を集めて説教を聴聞せしむるを例として居る。昭和八年九月十六日上野區白川瀧之助方にて説教が行はれた。本願寺派特選布教師杉本顯信師(梅莊と稱す。兵)が聘せられたのである。同師は白川氏より、小藤君が出征の際の最後の言葉として「私か今度戦死したら名譽の花が咲く、こんなうれしい事はない。若し私が戦死したと聞いても決して泣くではない。」との話を聞いて頻に落涙して感激し、白川氏を介して小藤家からの依頼に應じて、左の一詩を賦して贈られた。

忠魂花發若君若堅 身ハ散ル王申二月ノ天

欽慕同胞八千萬、蘭林ノ遊戯顯スニ因縁ヲ一

其の後同師は各地の説教に於て、いつも小藤君の右の話を語るとき、萬堂の聽衆皆感激涕泣せざるものはなかつたと云ふ事である。是れ一に君が忠孝の誠意が人の肺腑を突き、心神を動かすの致す所であつて、實に國民の龜鑑と謂はねばならぬ。

(ヲ) 墓 碑

かくて遺骨到着後、昭和七年四月三日君の爲に盛大なる村葬が上森田嚴教寺に於て執行され、其の後間もなく兄小市によつて立派な墓碑が上野區の東端約五十米の地點に建立せられた。碑文は森田村立第一小學校長牧野豊治の撰に成り同校訓導笠松九兵衛の書したものである。今其の碑文を左に掲げる。

碑 文

君ハ明治四十三年四月十日森田村上野小藤重兵衛ノ二男ニ生ル、幼ニシテ鋭敏、父母ニ孝、兄弟ニ友、學志ニ入りテハ品行方正學業優等、常ニ他ノ模範タリキ。昭和六年一月現役兵トシテ歩兵第三十六聯隊ニ入隊スルヤ、軍務ニ勵精成績優秀ナルニ依リ選バレテ千葉教導學校ニ進ミ、益々勉勵ス、偶々上海事變勃發シ、動員下命、急遽原隊歸還ノ命ヲ受ケ、郷里ニ父母ヲ尋ヌル暇モナク勇躍社途ニ上ル、昭和七年二月十四日上海陸附近ノ警備ニ當リ熱誠克ク其ノ任ヲ完クス。二十日聯隊ノ豫備隊トナルヤ軍旗ヲ護衛シ、砲彈炸裂彈丸雨飛ノ中ニテ勇敢ニ陣地構築作業ニ從事シ、超エテ二十二日唐家宅攻撃ニハ砲煙彈雨ノ中ヲ第二中隊板橋輕機銃分隊ノ射手トシテ勇猛果敢ニ突進シ、該陣地占領後尙敵前近ク進出シ、敵ヲ斜射シ重火器ヲ沈黙セシメ、我戰鬪ヲ有利ニ導ク、次テ金家橋攻撃ノタメ據點タル獨立家屋前方四百米ノ地ニ進出、敵火ヲ冒シ率先勇敢突擊中、無念ニモ敵彈ノ爲胸部ヲ貫メカレ、遂ニ斃ル。時ハ二月二十五日ナリ。嗚呼壯絶ナル哉、茲ニ其ノ偉勳ヲ稱ヘ、誌シテ以テ千載ニ傳ヘントス。

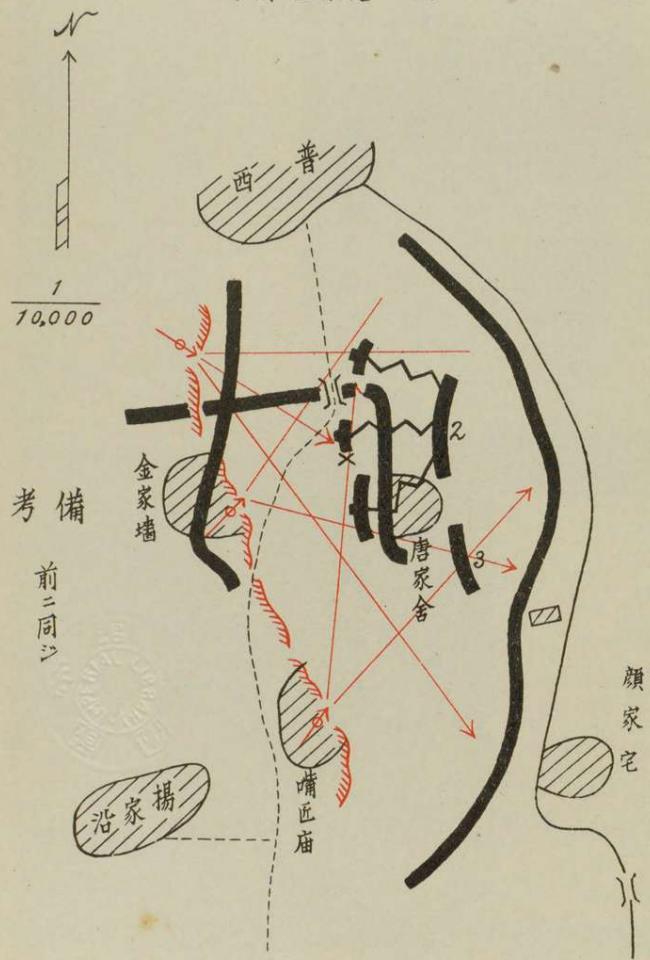
(ワ) 年 譜

| 曆 年 | 年 齡 | 陸 軍 ノ 經 歴 | 學 歴 其 ノ 他 |
|----------------|-----|--------------------------------------|-------------|
| 明治四十三年 | 一歲 | 四月十日吉田郡森田村上野第三十四號三十六番地ハ藤重兵衛ノ二男トシテ出生。 | |
| 同 四十四年 | 二 | | |
| 同 四十五年 大正 元 | 三 | | |
| 同 二年 | 四 | | 四月十五日弟藤松生ル。 |
| 同 三年 | 五 | | |

小藤上等兵死戰位置要圖

(昭和七年二月二十五日金家牆敵陣地攻擊中)

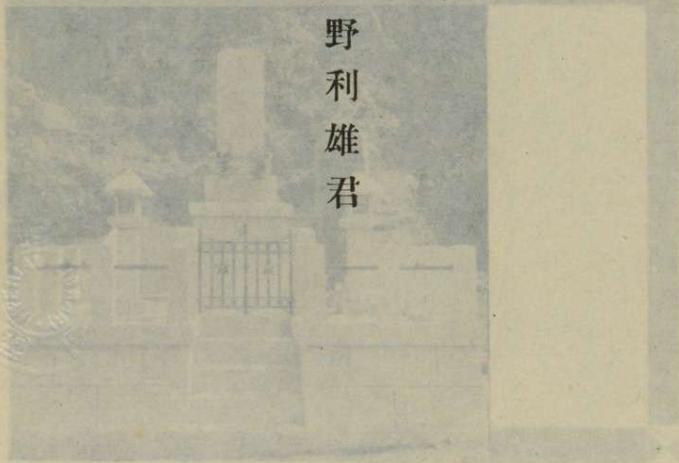
於唐家舍附近



故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級



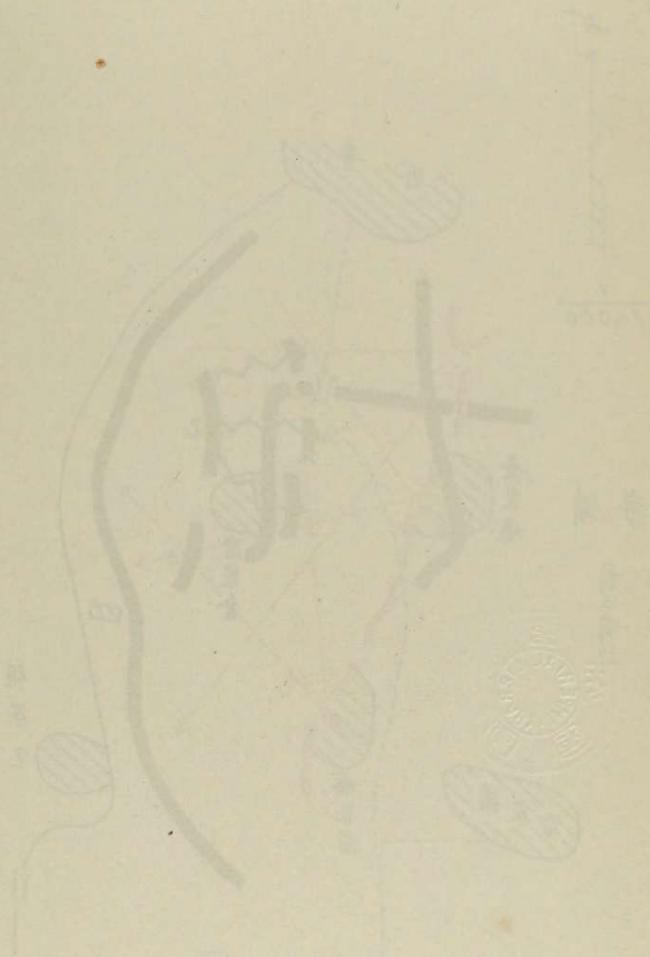
水野利雄君



水野上等兵勳八等功七級

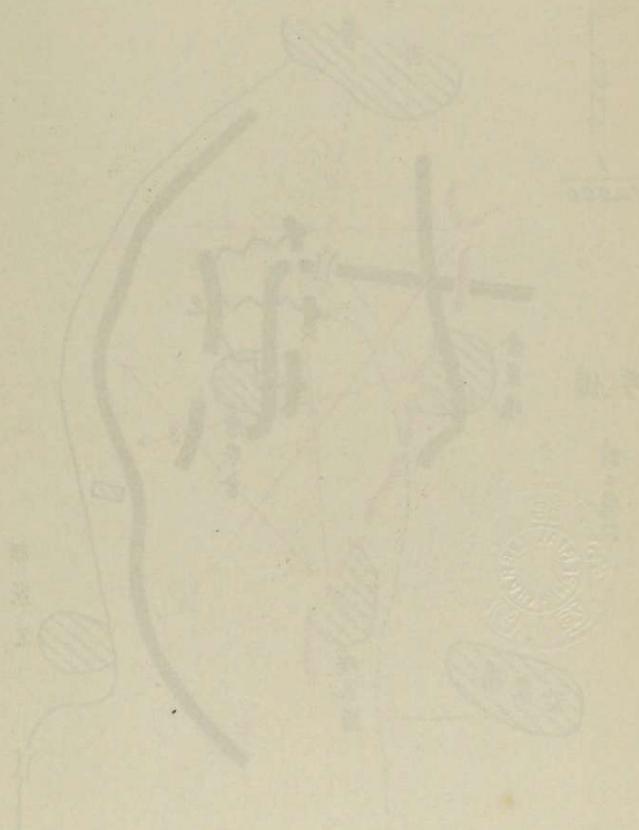
(昭和二十一年二月二十五日勳章授与)

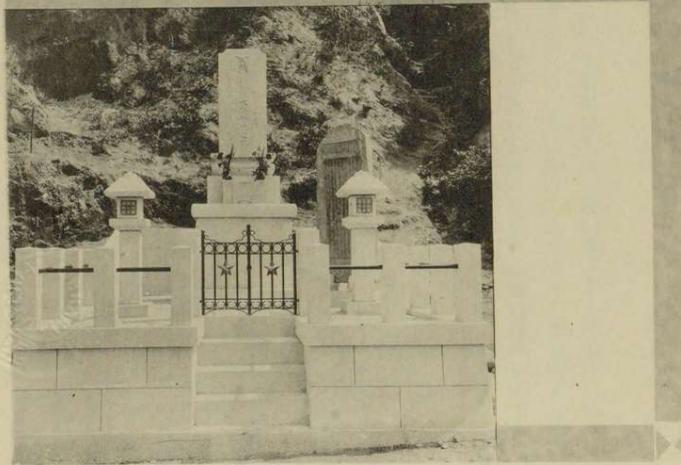
水野利雄君



故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 水野利雄君

水野利雄君
(陸軍歩兵上等兵勳八等功七級)





姑蘇軍忠兵士善兵燹入善也子姪 水裡隊緘昔

其十 故陸軍歩兵上等兵勳八等功七級 水野利雄君

(イ) 君の出生

松岡町は九頭龍川が勝山以西約四里の峽谷を走つて、福井平野に出づる咽喉に當り、勝山地方より福井市に通ずる所謂勝山街道、及越前電氣鐵道上の要衝に位置し、土地高敞、近く九頭龍川の急湍に臨み、遠く福井平野を眼下に瞰め、遙に三國地方より日本海を望む、地勢雄大、眺望壯絶である。地雄にして人傑我が水野利雄君は實に此地の産である、君は大正元年十一月二十五日松岡町室、水野利八(昭和七年五月父林平の名跡を繼ぎ林平と改む)の長男として出生。母をなつこのといふ。君資性淳良にして快活、禮儀正しく家に在つては弟妹を愛撫し、「良き兄さん」としてなつかれてゐた。

(ロ) 小學校時代

大正八年四月八歳にして松岡小學校に入つたが、天性快活で明るい子供であつたから友達から、いつも可愛がられてゐた。父母や先生にも極めて従順で、未だ嘗て其の命に背いた事はなかつたが、高等一年を修了した時には一寸父母を困らせた。

當時は盛に中等學校へ入學することが流行したので、君も是非中等學校へ入りたといふ希望を持つてゐた。両親もまた君のたつての望みであるから入學させてやりたい氣であつたが、祖父の林平がどうしてもきかぬ。

『中學校を卒業しても立派に出世の出来る人は少い、却て墮落したり、思想が悪くなつたりして家の爲にはならぬ。それよりも商業見習に出て、實務を修行し、着實な職業に就てくれ』

といふのが祖父の反對理由であつた。しかし自分等の朋輩が帽子に新しい徽章を付けて居るのを見たり、新調の洋服を着て通學する姿を見れば、向學の心止み難く、兩親から「高等二年へ」と言はれても、どうしても行かうと言はない。さうこうするうち、東京の知りあひから或大きな藥舗につとめないかといつて來たので、それには祖父はもとより両親

も異存なく、本人も夜學に通はせて貰へることを條件として行きませうといふので上京することになった。

(ハ) 在京時代

かくて大正十五年四月十日君年十五、上京して日本橋區馬喰町一丁目さつて屋專、杉村儀兵衛の藥舖に店員となつた。店員としての君は忠實勤勉、克く主命を奉じ陸日向なく眞面目に働き、主人は勿論先輩、同僚に迄愛されてゐた。そうして傍ら夜學に通つて學業に勵み、居ること三年、君が長男であるから將來家業を繼がしめねばならぬと云ふので、本人があまり進まぬのを強て郷里に歸らしめた。

(ニ) 青年訓練所生徒時代

歸郷後の君は専心家業を助け、夜は青年訓練所に出席して訓練に専念し、青年團に入りては體育部員として活躍したが、物事に熱心で快活な性格である君は、總ての方面から愛せられたのみならず、青年訓練所の成績も亦優良であつた。さうして此頃から軍人志望の念がだん／＼君の腦裡に持ち上つて來た。

『是非軍人にならう、軍人となつて一命を君國に捧げやう、おれにはまだ弟妹がいくらかもある、家業は弟達が繼いでくれればよい、さうだ自分は軍人になつて國家に盡さう』

と祖父や両親に熱心に願ひ出た。其の熱烈なる願望に對し両親も祖父も遂に賛成した、かくして君は満十八歳の年少を以て徴兵検査を受けることゝなつたのである。

(ホ) 徴兵検査—入營

昭和五年君十九、現役志願を出願し松岡徴兵署に出頭し検査を受けた。年齒尙若きに拘らず體格、其の他申分なく立派に検査に合格し甲種となつた。君の悦びは勿論であり、両親も安心した。

かくて益々青年訓練所の課程に精進し、入營の準備に力め、昭和六年一月九日父母、親戚、友人並に町の人々に送られて郷關を出て、翌十日朝歩兵第三十六聯隊に入隊した。

(ヘ) 現役兵時代

入隊後の君は第十一中隊に編入された。

『いよ／＼、お前の志望が達せられた上は眞面目に働け』『油断をするではないぞ』『家の名折れになる様な行をするな』と両親から勵まされた君は、専心軍務に勵精して常に積極的に行動し、克く上官の命令に服従し、諸規定の履行も確實で、他の模範と稱せられた。又術科の成績も優良で、殊に銃劍術が得意であつた。其の爲に特別試合には中隊の選手として前後二回大隊及聯隊の代表として各一回出場し、孰も成績優秀の賞状を受けた。

又其の眞面目で快活、無邪氣、毫も城府を設けざる君の性格は上官の氣受も善く、同僚からも愛好せられた。かくして一等兵水野は中隊内の人氣男であつたので、戦死した後も『水野は惜しい』といはないものは無かつたといふことである。班長から君の戦死を水野家へ報じた手紙の中に

『僕も利雄君と同じ戦闘に加はつて負傷したのであるが、利雄君の死骸が收容されたと聞いたので、傷の痛みを押して佛となつた利雄君を見舞つた。(……中略)生前は班長殿々々と言つて、よく懐いてくれたし、どんな仕事でも厭な顔一つせず働いてくれたが、もう今日からは班長殿といつてくれなれと思ふと、何故いつしよに戦死しなかつたかと残念に思ふ』

と認めてあることによつても其一端を知ることが出来る。

(ト) 家庭

君はまた年齒頗る若く、妻帯せず。

家には祖父林平、祖母さく、父利八、母なつ、及弟秀雄、勇、政男、妹君江、利子の五人の弟妹があつた。

君は父母は元より老いたる祖父母の最愛の孫であつた。従つて君の將來につき、何かと祖父母は心配したのであるが、

君が戦死後間もなく五月一日祖父林平は八十歳の高齡を以て君の後を追ふて歸らぬ旅に赴いた。

一家は至極圓滿で家業に勵むで居る。

(チ) 上海 出征

昭和六年の末滿蒙の事態益々險惡となるや、君は飛立つ様な感激に満たされた、男子の本懐を遂ぐるの日が近づいたのを感じたからである。昭和七年二月二日午後六時二十分我が第九師團に動員の令が下つた。北陸男子の腕は鳴りに鳴つた。時は來れりと君は勇躍して繁雜なる動員業務に奔走し、連日連夜不眠不休で働いた。しかも此多忙多端の間に小閑を得て、父母や、親戚知友に對して手紙を書いた。其の兩親宛てた書信には

『七日に出征することに相成りましたから、私は喜び勇んで戦地に向ひ雄々しく戦を交へる覺悟で居ります故、御安心下さい』

と認めてある。兩親は夜をかけて兵營に至り面會を求めた。親切な班長は君が故國での最後の一夜を兩親と共に隊内で語り合ふ事をゆるしてくれた。うす暗い電燈の下に親子三人は思ふ存分話し合つた。

『家の事は決して心配するに及ばぬ、御國の爲にうんと働け』

『お前の祖父も伯父も日清日露の役には出征して何れも勳功を立てゝゐるのだ。女々しい振舞して家名を汚すな。』

『お父さん決して御心配下さるな、しつかりやります。陛下の御爲に捧げた命です、大死は致しません』

君の面上には已に毅然たる決心が現はれてゐた、かうした頼母しい我が子の出征を目前に觀る兩親の眼には感激の涙が光つてゐた。

かくして二月七日兵營出發。萬歲歡呼の聲に送られて鯖江驛を發し、鐵道輸送を以て廣島に向つた。八日廣島着、宿營し、十一日宇品港出帆、十六日上海上陸、十九日に至る間連日警備の任に服した。

十六日郷里に出した最後の手紙は次の如くである。

『是で永い間空想を描いて來たのが實現されました。大に働きます、御安心下さい、決してめづかしい振舞はいたしませんからね。僕等の船より一日前に上陸した十九聯隊の兵隊五名は便衣隊のためにやられました。海軍の陸戦隊とも本日交替致し、鯖江敦賀兩聯隊の第九中隊が第一線に出で、今のところ盛に戦闘を交へて居ります。一日も早く敵の顔を見る事の出来るのを待つてゐます。十六日無事上海につきました。』

君の任務は第一小隊の擲彈筒手兼小隊長傳令であつた。

尙二月二日より同十九日に至るまでの君の日記を左に掲げる。

『二月二日 午後六時二十分應急動員下令 吾等の肉は躍る

二月三日 動員第二日 兵器被服全部返納、林少尉の傳令と決定、分隊長出口伍長

二月四日 動員第三日 豫備役召集 被服戰時用の分全部支給さる、晴れの征衣である。

二月五日 豫備役召集 姓名札支給さる、歩兵三六、十一、五四番

二月六日 鯖江本願寺より守札(本願寺とは誠照寺)を云ひしならん長泉寺より……略ス

二月七日 午前九時五分鯖江驛出發

第一回乗車 第二第三大隊

第二回乗車 第一大隊、聯隊本部

米原驛にて全部集合、以後一車にて出征

二月八日 午前六時十八分、廣島驛着

驛頭にて軍旗奉迎、軍旗中隊、第五中隊、以後行軍にて應匠町一〇一ノ一長田源太郎氏方へ宿營

大隊本部 廣濱館

中隊本部 久保井材木店

中隊長及小隊長 長田材木店

午後三時師團長閣下、閱兵

二月九日 長田材木店

林少尉以下五名、上陸戦闘の教育

二月十日 長田材木店

午前中擲弾筒の教育ありて擲弾筒手を命ぜらる

午後一時半より擲弾筒の復習、以後中隊長、師團長閣下の訓示

夜林少尉と同じに買物に出る

同家より彈除守札二枚頂く

二月十一日 宇品丸、運送船

午前九時半整列、十時大隊長の巡視、同三時四十分宇品港出發、驅逐艦二護衛して同行

二月十二日 宇品丸

午前七時門司港着、午後三時迄に石炭積み終り、午後三時半門司港發

二月十三日 宇品丸

午後機關銃、輕機關銃、拳銃の試験射撃

二月十四日 宇品丸

午前中黃海を前進、午後小銃實包、輕機實包を中隊毎に分配れる、三時頃、前面に島を見る

七時戦闘準備の命令下る

二月十五日 宇品丸

午前零時頃揚子江河口に到着

同二時頃出發、同三時上海着

二月十六日 上海紡績

午前八時半上海に上陸、聯隊本部、上海鐘紡會社、大隊本部、上海紡績會社

旅團司令部、中華民國上海楊樹浦路、上海紡績

出口伍長に金十五圓也、渡し預ける

二月十七日 上海紡績

午前八時半整列、約一時間射撃動作の演習あり

中隊長は第一線見學のため外出

午後一時半整列、擲弾筒手は筒及撃方の研究

二月十八日 上海紡績

午前八時半整列、巡察區内の地形偵察及第一線附近の見學、午後一時整列、小隊長教育の目的を以て小隊教練

の復習。

夜は支那語の學科、林少尉は部隊日直將校

二月十九日 上海紡績

午前中背囊を除き天幕に必要な品物を入れて背負ひ、軍裝検査を受く、午後又變更し背囊を背負ふ事になつた。

小隊長林少尉は斥候として第一分隊をひきいて出發、六時頃歸隊。

第十中隊は師團の警戒として八時出發。

以上

上記の如く君の遺したる手紙及日記によつて、君の立派な決心を看取することが出来る。出發前父母がさとし示した如く、「大に働き。決して女々しい振舞はせぬ」と云ふ牢固たる決心を以て戰場に臨むのである。一死國に殉ずることは既に已に覺悟の上であつた。

(リ) 上海附近の會戰に於ける勇戦と壯烈なる其戦死

二月二十日よりの上海附近の會戰に方りては二十日林將校斥候に屬し、梅園宅方面の地形及敵情の偵察に従事し、克く斥候長を輔佐し又自ら嚮導となりて其の任務達成に多大の力を致した。同夜また連絡將校斥候に屬し孫家宅を出て、梁股宅に在つた隣大隊との連絡の任に當り、熾烈なる彈雨の中を克く斥候長を輔佐して勇敢に行動し、其任務を全ふすことを得せしめたる等、其の功績は實に顯著なるものがあつたと謂はれてゐる。

二月二十一日第十一中隊が普西の敵陣地を攻撃するに際しては、第一線右小隊の擲彈筒手として、敵の銃砲彈雨注の間を猛進し、小隊が突入するに方りては、卒先第一線左翼に邁進して擲彈筒を以て敵を猛射し、中隊の突入を最容易ならしめた。續て中隊が敵陣地に突入するや機を失せず勇敢に前進したが、此際敵彈胸部を貫通し壯烈なる戦死を遂げた。

時に年二十一

其勇敢なる戰場の働きと戦死當時の状況とは第十一中隊長伊藤大尉が君の墓碑に寄せられたる贊に委しきを以て茲には之れで略することにする。

君死するの日を以て歩兵上等兵に進み、功七級金鷄勳章並年金壹百五拾圓及勳八等白色桐葉章を授け賜ふ。

(又) 墓碑

君の遺骨が郷里に到着するや、松岡町は町葬を以て之を禮し、三月二十六日同町室の昌藏寺に於て盛大なる葬儀を執行了。越えて昭和八年、松岡町南側高地の南面景勝の地に、父林平によりて君の墓碑が建てられた、碑陰に中隊長大尉伊藤善光の贊を刻す。一讀以て君の戦功を偲ふに足ると共に、其戦死の如何に勇壯義烈なりしかを知ることが出来る。

贊

滿洲事變ノ餘波ハ上海ノ風雲急ヲ告グルニ至リ、第九師團ノ出動トナルヤ、君ハ歩兵第三十六聯隊第十一中隊第一小隊擲彈筒手兼小隊長傳令トシテ宇品港出帆、勇躍征途ニ就ケルハ實ニ昭和七年二月十一日紀元節ノ佳日ナリキ、而シテ二月二十日暴戾ナル第十九路軍膺懲ノ爲戰鬪開始セララル、ヤ、常ニ進ンテ斥候連絡ノ難務ニ身ヲ挺シ、彈雨ノ下克ク任ヲ全クシ、其ノ赫々タル武勳ハ枚擧ニ遑アラザルモ、就中二十一日普西敵陣地ニ對シ中隊決死ノ突撃ヲ敢行スルヤ、君ガ先頭ヲ競ヒテ中隊長ニ跟随セル勇姿ハ、今尙余ガ眼前ニ彷彿ス。而シテ君ハ中隊突撃ノ結果、敵ノ第一線ヲ奪取セルモ、尙殘存セル敵ノ狙撃ノタメ前進意ヲ如クナラザルヲ見ルヤ、身ノ危險ヲ忘レ直チニ擲彈筒ヲ以テ猛射ヲ開始セリ。之ガ爲メ中隊ハ一舉ニ敵陣内ヲ突破シ、該村端ニ進出スルヲ得タリ。此ノ戦況ヲ眺メ、君ハ莞爾トシテ更ニ第一線ニ追及セントシテ躍進ヲ起スヤ、敵彈飛ビ來リテ君ガ胸部ヲ貫ケリ。然レドモ剛毅ナル君ハ猶倒レズ雙手ヲ舉ゲテロヲ開キ萬歳ヲ叫バントスルカニ見エタルモ遂ニ及バズ、俄然トシテ伏臥シ即チ死セリ。嗚呼壯烈ナル奇翻ツテ君ガ平時年若クシテ現役ヲ志願シ、有爲ノ才ヲ抱キ乍ラ、功ヲ衝ハス、名ヲ求メズ、誠意一貫、只孜々トシテ軍務ニ精進セシ人格ヲ顧ミルノ時、此ノ鬼神ノ如キ戰場ノ活躍、亦決シテ偶然ニアラズシテ、實ニ平素修練ノ結果ト謂フベク、眞ニ軍人ノ龜鑑ト稱スルヲ得ベシ。宜ナル哉、戦死ト共ニ特ニ上等兵ニ進メラレ賜金ヲ賜フ、而シテ今日宛モ一周年ニ當リ軍人最高ノ名譽タル金鷄章ヲ授ケラレ破格ノ恩典ニ浴ス。是固ヨリ當然ナリト雖モ、君恩ノ鴻大只管感泣ニ堪ヘズ。君亦以テ瞑スヘキナリ、聊カ所懐ヲ陳ベテ贊トス

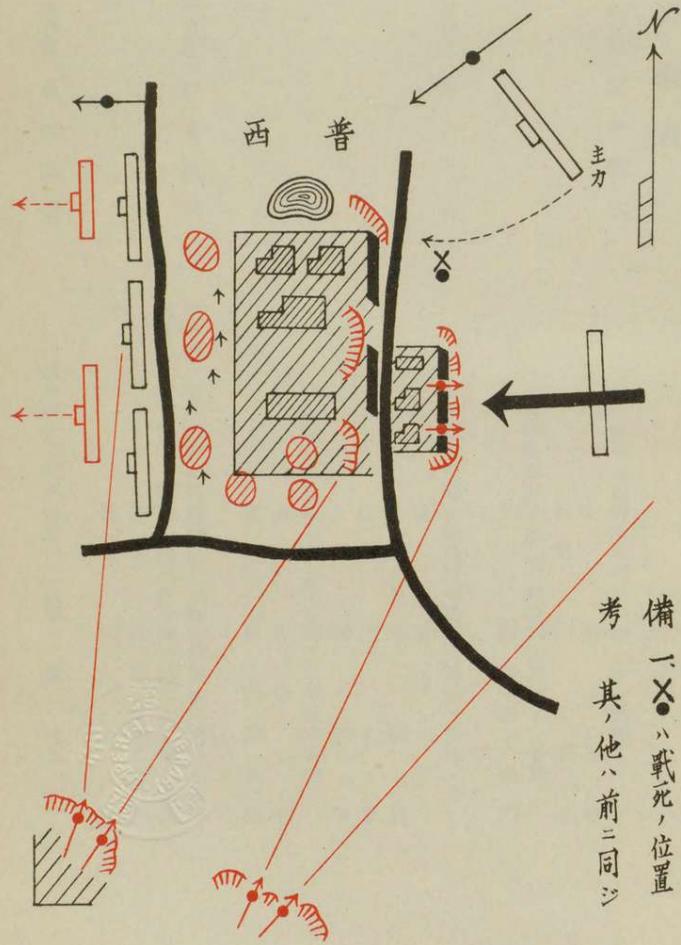
昭和八年三月一日

歩兵第三十六聯隊第十一中隊長 伊藤善光謹書

かくして君は二十一歳を一期として江南の露と消えた。その武勳は、かの江南の華として謳はれた爆彈三勇士のやうな花々しさはないにしても、其戰場に於ける働き、また犠牲的精神に於ては、決して之に劣るものではなく、特に其の

水野上等兵死戰位置要圖

(昭和七年二月十一日於普西附近)



備一Xハ戦死ノ位置考其他ハ前ニ同シ

附 錄

遺 族 概 表

故陸軍歩兵少佐 酒 井 豊 志

石川縣石川郡野々市町ラ二百六十一番地
妻 玉 喜 志

福井縣吉田郡東藤島村林第四十八號十二番地
兄 長 男 同 酒 井 忠 左 衛 門

故陸軍歩兵少尉 野 中 外 吉

福井縣吉田郡中藤島村舟橋第七號四十番地ノ甲
妻 野 中 ス テ ヲ

長 男 同 利 子 男
長 女 同 チ エ 子
次 女 同 幸 子

福井縣吉田郡森田町八重卷第二十七號一番地
母 野 中 し づ

兄 同 野 中 勘 四 郎

故陸軍歩兵曹長 秋 本 武 夫

本籍地 福井縣吉田郡東藤島村大和田第四十六號十二番地ノ一
現住所 同 縣同 郡圓山西村松本地方第三十二縣二番地

養父 秋 本 清 左 衛 門
養母 同 秋 本 清 左 衛 門

故陸軍歩兵軍曹 中 村 清 治

福井縣吉田郡西藤島村上伏第十二號二十番地

故陸軍歩兵伍長 山下 政雄

福井縣吉田郡圓山東村下四ツ居第三十四號三番地
兄 母 同 山下 次右衛門

故陸軍歩兵上等兵 吉村喜代治

福井縣吉田郡西藤島村三郎丸第十八號四十二番地
父 繼母 同 吉村 石太郎

故陸軍歩兵上等兵 中島 覺

福井縣吉田郡森田町上森田第十七號七番地
養父 養母 同 中島 春吉

福井縣坂井郡磯部村定重第十一號二十九番地
父 母 同 定本 新之丞

故陸軍歩兵上等兵 長谷川 智

福井縣吉田郡下志比村東古市第九號四十四番地
父 同 長谷川 彌三兵衛

故陸軍歩兵上等兵 小藤 外松

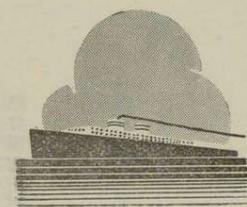
福井縣吉田郡森田町上野第三十四號三十六番地
兄 母 同 小藤 市

故陸軍歩兵上等兵 水野 利雄

福井縣吉田郡松岡町室第五十五號七番地
父 母 同 水野 林平

以上

昭和十年十二月十日印刷
同十二月二十五日發行



【非賣品】

福井市城町二の丸
宇野印刷所 納
電話一〇九番

福井市寶永下町百八番地
著者 小 木 津
福井縣吉田郡岡保村立小學校内
吉田郡教育會代表
發行者 小 木 津
福井市城町二の丸
印刷者 宇 野 義 男

697
39

